
南洋の姫神
カンピオーネ！
Campione XIII
丈月 城
Illustration シコルスキー
スーパーダッシュ

スーパーダッシュ文庫
SUPER DASH

集英社

カンピオーネ！

XIII 南洋の姫神

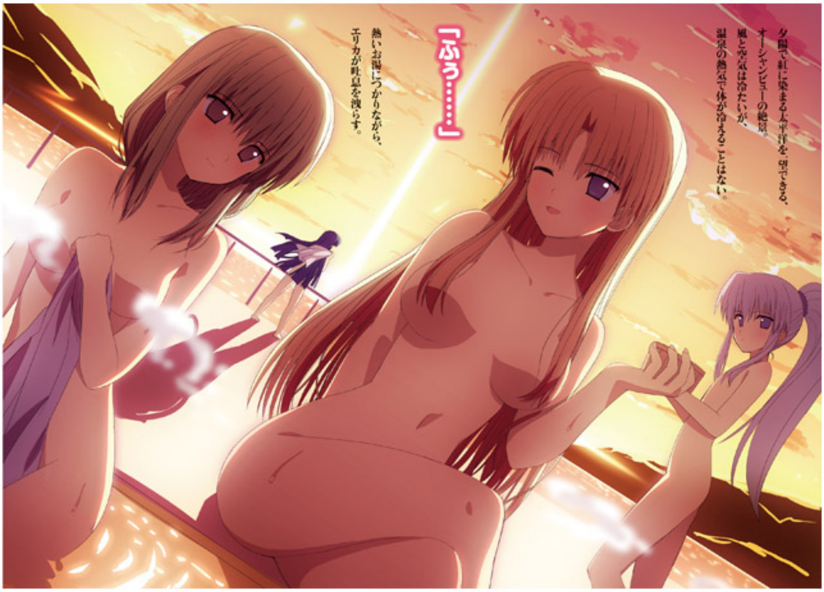
丈月　城

この本は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になる機種により、表示の差が認められることがあります。


丈月城
Illustration
シコルスキー
カンピオーネ!
南洋の姫神
Campione XIII


リリアナ
祐理
恵那
???
護堂
エリカ


夕陽で紅に染まる太平洋を一望できる、
オーシャンビューの絶景。
風と空気は冷たいが、
温泉の熱気で体が冷えることはない。
「ふぅ……」
熱いお湯につかりながら、
エリカが吐息を洩らす。


熱帯のまぶしい太陽。今日はみごとな快晴だった。
白い砂浜。汚す者などいない
魔境のビーチはまさに純白。
とびきりの美しさだ。
そして海。常夏の南洋でのみ向き合える、
底抜けに澄んだエメラルドブルーの海。
ここに集い、のびやかな肢体を露わにする
水着の女の子たち……。
「いや。この状況下で
海水浴するのも、
いかがなものかと思うんだ」
は冷静に指摘した。

主要登場人物

草くさ薙なぎ護ご堂どう

高校１年生。軍神ウルスラグナの権能を有するカンピオーネ。

エリカ・ブランデッリ

《赤銅黒十字》の魔術師。自称、護堂の「愛人」。

万ま里り谷や祐ゆ理り

霊視の力を持つ媛巫女。護堂の「正妻」と称される。

リリアナ・クラニチャール

《青銅黒十字》の魔術師。護堂の「騎士」を自任する。

清せい秋しゅう院いん恵え那な

当代随一とされる「太刀の媛巫女」。護堂の「剣」として侍る。

沙さ耶やの宮みや馨かおる

正史編纂委員会東京分室室長。

甘あま粕かす冬とう馬ま

正史編纂委員会のエージェント。

アレクサンドル・ガスコイン

黒王子の異名を有する魔王。

アリス・ルイーズ・オブ・ナヴァール

グリニッジ賢人議会前議長。白き姫。

ルクレチア・ゾラ

サルデーニャの魔女。護堂の「現地妻」。

Contents

序　章

第１章　媛巫女たちの儀式

第２章　旅のはじまり

第３章　弓と箭と神獣到来

第４章　魔境からの呼び声

第５章　黒の剱、いまだめざめず

第６章　流されてふたり……？

第７章　魔女よさらば

終　章

イラスト / シコルスキー


丈月 城
Illustration
シコルスキー
カンピオーネ!
南洋の姫神
Campione XIII

序章

一二月がはじまって間もない頃。

アレクサンドル・ガスコインは意外な客の訪問を受けた。

このとき彼がいたのは、スペイン有数の大都市にしてカタルーニャの州都、バルセロナであった。芸術・観光・サッカーなどで有名なこの都市は、港街でもある。

アレクは港に程近いバルの奥まった席で、ひとりの夕食をはじめていた。

バル。イタリア風にいえばバールとなる。

要はカフェ・料理屋・バーをいっしょくたにしたような飲食店であった。

小魚と小エビのフリット、そしてトマトとオリーブのサラダと共に、アレクは白ワインをのんびり飲みすすめていたのだが。

旧知の女性ふたりが近づいてくるのを見て、眉まゆをひそめた。

「なかなか珍しい組み合わせ……と言うべきだろうな。そちらの姫はともかく、あなたがわざわざ俺のところにやってくるとは」

「ふふ。私だって、たまにはあの島を出ることもあるさ」

微笑と共に答えたのはルクレチア・ゾラだった。

イタリアはサルデーニャ島に在住の魔女。老齢であるはずなのだが、その容姿は妙みよう齢れいの美を妖あやしく維持している。アレクにとっては『二、三年に一度会いにいく相談相手』だ。

　そして、もうひとり。

「わたし、あなたを追いまわすような不作法、めったにしたことはないはずですよ？　あいかわらず偏へん見けんの色いろ眼鏡めがねごしにしか人を見られないのですね」

　しれっと言ってのけたのは、プリンセス・アリス。

　十年来の仇きゅう敵てきにして腐くされ縁えんの英国美女。波打つプラチナの髪の清らかな美しさ、浮うき世よ離ばなれした聖女めいた雰ふん囲い気きで、ルクレチア以上に人目を惹ひく。

　ただし、見た目ほど中身は清らかではない。

　アレクは鼻で笑って、たわごとを聞き流した。この公こう爵しゃく家け令嬢という肩書きを持つ姫君は、常に細心の注意を持ってアレクの動向を調査させている。英国在住のカンピオーネが次に如い何かなる騒そう擾じようを世にもたらすか、誰より早く察知するために。

「そうする理由が公共の利益のためではなく、自分自身の野や次じ馬うま根性を満足させるためというのが実に嘆なげかわしい話だがな……」

「アレクサンドル、レディに対する失礼な物思いが口に出ていますよ」

「レディを名乗るなら、称号にふさわしい振る舞いをして欲しいものだ。今回だって、配下に指示して俺の居場所を探らせたんだろう？」



　アレクサンドル・ガスコインは神しん出しゆつ鬼き没ぼつのカンピオーネ。

　しかし、本気で消息を絶たつ気がないときは、まわりに妙な輩やからがうろついていても特に気にはしない。どうせ、いつでも振り払えるのだ。

「それで何の用だ？　わざわざこの組み合わせで訪ねてきた以上、ろくな用件じゃないのはわかりきっているが」

　アリスとルクレチアの顔を眺めつつ、アレクは白ワインで口をしめらした。

「なに。王子殿がわれわれ共通の知人と日本で揉もめごとを起こしたと聞いてな。ひさしぶりに話をしたいと思ったのだよ」

　許しも得ずにルクレチアはアレクの向かいにすわり、アリスも隣の席に腰を下ろす。

「われら三名と因いん縁ねん浅からぬグィネヴィア姫への哀あい悼とうとして、まず杯さかずきを干ほそうか」

　ウェイターが運んできたサングリアのグラス。

　それを軽く持ちあげて、ルクレチアはニヤリとした。アリスの前に飲み物はない。姫君の体は幽ゆう体たい分ぶん離りの霊力が生み出した実体ならざるもの。飲食は不可能なのだ。

「そして、かの姫が永遠の生を賭として追いもとめた謎なぞ多き『最後の王』のためにも。それで王子殿、実際のところどうなんだ？」

「どうとは？」

「草くさ薙なぎさまとランスロット卿きようの決闘のあとから気になっていたのですが……。アレクサンドル、あなたは『最後の王』の隠された真ま名なに心当たりがあるのでは？」

「いつのまにか救世の神刀——あれの骸むくろを手に入れていたくらいだしな」

　老魔女の謎解ときを楽しむような視線と、珍しく真剣な姫君の視線。

　双方にさらされて、アレクは肩をすくめた。

「そうかんたんにわかってたまるか。あれは神しん祖そどもが千年かけても解けなかった謎だぞ。たかが数年程度の調査で何が探り出せる？」

「と、われらの王子はのたまうわけだが。どう思う、姫？」

「ひねくれ者の負けず嫌いにしては、殊しゅ勝しようすぎる発言です。きっと頭のなかではいくつか仮説を思いついていて、でも検証が不十分だから口にしたくないのでしょう。いずれ十分に確信が持てたとき、どや顔で講義するつもりに決まってますわ、おばさま」

「…………」

　目の前で老ろう若にやくの魔女ふたりがささやき合う。

　アレクは無言をつらぬくことにした。この女どもはあいかわらず人の性格を見切ったように好き放題言う――。眉み間けんのしわで遺い憾かんの意を表明しながら。

　いや、問題の英雄についての仮説を数パターン考えているのは事実だったが……。

　アレクが黙って白ワインのグラスを飲みほしたとき。

　不意にルクレチアが〝ある名〟をつぶやく。アレクは一瞬だけ瞠どう目もくした。

「ふふ。当たらずとも遠からずというところかな？　王子殿、この英雄が『最後の王』である可能性、いかほどくらいに考える？」

「……三五％、というところだな」

　さすがルクレチア・ゾラ。おそらく彼女がかつてアジアの地で行ったというフィールドワークの成果、そして、ここ数年で出てきた『最後の王』についての新情報から、アレクと似たような仮説のひとつに到達したのだろう。

　賞賛の気持ちから素直に答えたアレクを、プリンセスが怪け訝げんそうに見つめた。

「らしくないですね……。それだけの可能性を見み出いだしているなら、その数字が一五％以下か八五％以上になるまで調べ、考え抜くのがアレクサンドルのやり方でしょう？」

　この女はまた、アレクサンドル・ガスコインの気性を我がことのように語る。

　舌打ちしたい気持ちを抑おさえて、アレクは静かに言った。

「俺も何かといそがしい身だ。そうそう趣味の研究で時間をつぶすわけにもいかん」

　そしてユーロ紙し幣へいを数枚テーブルに置き、席を立つ。

「この問題について、これ以上話しても時間の無駄だろう。何か新事実が明らかになったとき、また討論の場を持つとしよう」

　そっけなく言い残して、アレクはさっさとバルから立ち去るのであった。

　一方、取り残された魔女たちはすぐにうなずき合った。

「女か」

「まちがいなく女性関係で何かあって、探たん索さくが頓とん挫ざしたのでしょう」

「女難の相で、おまけにとことん女運の悪い御ご仁じんだからな」

　今のそっけない物言いと態度、まちがいない。

　見み栄えっぱりの本人は力の限り否定するが、アレクサンドル・ガスコインは貴公子然とした容姿に反して、女性のあつかいがとにかく苦手な青年なのだ。

「いずれにしても、『最後の王』の正体はいまだ定かではないようですね……」

　プリンセス・アリスはため息をついた。

　日本の東京湾に眠っているらしい謎の軍神。魔王の殲せん滅めつ者しやにして、さまざまな危険を地上にもたらすという。近い将来、あるいは遠い未来に爆発するかもしれない災さい厄やくの火種。

　できるかぎり情報をそろえ、万一の事態にそなえておきたいのだが——。

「でも、そういうことでしたら……。あちらにお住まいの女性にめっぽう強い御方なら、何か解き明かせるかもしれませんね」

「いや、あれは女に強いというより」

　アリスの言う人物は、ルクレチアにとっても旧知である。すぐに答えた。

「女難の相ではあるものの、不思議と女運はめっぽういい男と言うべきだぞ。まあ、あの少年も仲間たちもずいぶんレベルを上げているようだから、もしかしたらという期待感はたしかにあるが……」

　遥はるか東方の諸問題を語る、魔女たちの一幕であった。

第１章　媛巫女たちの儀式

1

　ささやかにパーティーなど行った、クリスマスイブの翌日。

　つまりクリスマス当日、草くさ薙なぎ護ご堂どうの仲間たちはふたたび草薙家に集まってくれた。前日のパーティーで散らかした家のかたづけと掃除のためだった。昨夜は遅くにお開きとなったので、そのあたりはまた明日――となったのである。

　この作業のかたわら、ふと万ま里り谷や祐ゆ理りがつぶやいた。

「そういえば昨日、ときどき静しず花かさんがイライラしていたようにも見えたのですが……」

　おっとりと首をかしげながら、大やまと和なでし撫子こが口にした疑問。

　当とう該がい人物の兄である護堂は「たしかになあ」と肩をすくめて答えた。

「鷹よう化かは……ああいうヤツだからそっけなかったけど、ひかりなんかはいつもの感じでニコニコしてて、だいぶ静花に気を遣つかってくれてたのにな」

「そういえば王様の幼なじみだって子も、ときどき変な顔してたねー」

　清せい秋しゅう院いん恵え那なも思い出したように言う。

　護堂の幼なじみ――途中参加した徳とく永なが明あ日す香かのこ

とだろう。

「変な顔？」

「うん。『私、これからどうすればいいんだろ⁉』みたいに考えこんでる感じで」

「何か悩みでもあるのかもな。今度、それとなく訊きいてみるか」

「草薙護堂。悪いことは言いませんから、やめておいた方が得策でしょう」

　重々しく進言したのは、リリアナ・クラニチャールである。

「そこはふれなくてもいいところと言いますか……。すくなくともあなたがそこを問題にしたら、火に油を注そそぐ結果となるでしょうね」

「そ、そうか」

　護堂はとまどいつつもうなずいた。

　ちなみに、この後かたづけと清掃作業でリーダーシップを発揮して、てきぱきと一同に指示を出していたのは、今アドバイスをくれた銀髪の女騎士であった。

　彼女に負けぬ手て際ぎわのよさを見せたのは、やはり祐理。

　リリアナのように指揮をとって目立つことはないが、陰かげ日向ひなたなく甲か斐い甲が斐いしくはたらいて、草薙家に元どおり以上のきれいさと整理整頓をもたらしてくれた。

　また奔ほん放ぽうな恵那も、意外な手際のよさで掃除していた。

　このあたりは『生まれと受けた教育は筋金入りの大和撫子』の面めん目もく躍やく如じよだろう。

　彼女たちばかりに労働させるわけにはいかないので、護堂も持ち前のまじめさを発揮し、掃除に没ぼつ頭とうした。おかげで、ずいぶんと早く終わりそうだった。

　一方、こういう場面ではお姫さまぶりを見せるのがお約束の人物

はといえば。

「ま、明日香さんのことはそのうちなるようになるんじゃないかしら。護堂から離れるにせよ、逆を選ぶにせよ。いずれにしても、あなたが気にしたって仕方ないことよ」

　と告げながら、エリカ・ブランデッリはテーブルを水みず拭ぶきしていた。

　その手つきはリズミカルだが、てきぱきもしてないし甲か斐い甲が斐いしくもない。むしろ鷹おう揚ようともいえる優美さに満ちていた。

　清掃作業としては効率性に欠ける、なんともエリカらしい仕事ぶりであった。

　尚、妹の静花は今日こそ友達と出かけるらしく、朝から外出している。今この家にいるのは護堂・エリカ・祐理・リリアナ・恵那の五人。草薙護堂の仲間たちだけであった。

　かたづけが一段落すると、みんなで居間に集まった。

　ちゃぶ台と人数分の緑茶をかこんですわりこむ。おもむろにエリカが言った。

「じゃあ、みんな。かねてからの懸けん案あんにそろそろ結論を出しましょうか」

「懸案だって？」

　護堂は首をかしげた。そんなもの、あっただろうか？

「ええ、前から言ってたじゃない？　わたしはね、冬休みの旅行はスイスがいいと思うの。スキーもできるし、パオロ叔お父じさまも来てくれるはずだし」

「ダメダメ。ここは日本なんだし、日本式に温泉がいちばんだよ」

　すかさず口をはさんだのは恵那である。

「ほら、うちの家が持ってる山に本物の秘湯があるって話をしたでしょ。みんなで山深くに分け入ってさ、一年の疲れを洗い流そう

よ。きっと楽しいよ？」

「…………」

　エリカと恵那に訴えられて、護堂は思わず瞑めい目もくした。

　それから開眼し、祐理とリリアナの方を見てみる。ひかえめな媛ひめ巫み女こは困ったように微笑ほほえみつつ、護堂にうなずきかけてくれた。銀髪の女騎士は『バカバカしい話です』と言いたげにかぶりを振ってみせた。

　エリカ・恵那以外は護堂と同意見らしい。ならば三対一対一で多数決成立だ。

「その話、まだ生きてたのかよってのが正直な感想ではあるんだが……まあ、まじめに答えさせてもらおうか。エリカ」

「なに？」

「そもそもだな。高校生の分際で冬休みはヨーロッパの雪山へ……なんて豪遊、分不相応にも程がある。身の程知らずのぜいたくだ」

「べつにいいんじゃないかしら？　あなたは神を殺あやめた魔王さまなんだし」

「いいわけあるか。そこを譲ゆずるとしてもだ。サトゥルヌスの事件でバタバタしてたから、飛行機のチケットも取ってない。新幹線に乗るノリでヨーロッパには行けないんだぞ？」

「大丈夫よ。ちょっと工夫すれば、飛行機のキャンセル待ちを一〇〇％成功させることだって可能なんだから……」

「可能でもやるなっ。それはまちがいなく犯罪行為だ！」

　エリカから具体的な計画を聞く前に、決めつける護堂であった。

　そして、次は恵那に向きなおる。

「じゃあ清秋院、その秘湯とやらは奥おく秩ちち父ぶなんかの山奥にあるんだろ？　その山に登るための登山計画書、見せてもらおうか」

「えっ、何それ？」

　あろうことか、太た刀ちの媛巫女はきょとんとしてしまった。

「もしかして知らないのか？　遭そう難なんとか万一の事態にそなえて、登山の前に警察や家族に渡しておくアレのことだぞ」

　基本的に任意提出の書類だが、恵那が『秘湯』とまで言う場所である。

　よほどの深しん山ざんに位置しているのはまちがいない。ならば、不測の事態を想定しておくのは当然の配慮である。しかし。

「大丈夫だよ。恵那はそんなの、一度だって書いたことないから」

　あっけらかんと言ってみせる恵那に、護堂はぼやいた。

「山やま伏ぶしみたいな生活してる清秋院とくらべたら、俺たちはみんな都会暮らしのもやしっ子みたいなもんだぞ。同じノリで冬山登山できるわけないだろ……」

　祐理をのぞいた三人は、いずれも水準以上の体力を持っている。が、それでも、野山を猿さるのごとく飛びまわる清秋院恵那の足についていけるはずはなかった。

　かくして、護堂はまとめ役として然しかるべきダメ出し×二を行ったのだった。

「結局、年末年始はゆっくり休めということですね」

　うんうんとうなずきながら、リリアナが言う。

「そうだな。……我わが家やの場合、年末はともかく年始がかなりバタバタするんだけど」

「新年の集まりでもされるのですか？」

　つぶやく護堂に、祐理が訊たずねてきた。

「ああ。うちの親しん戚せき連中が日本各地から都内に集まってきて、新年会をやるんだ。さんざん飲んだくれるうえに厄やつ介かいな二次会まであるから、今年こそ不参加にしたいんだよなー」

「だったら話はかんたんよ」

すかさずエリカが微笑みながら言った。

「年が明けたら、わたしの部屋に来るといいわ。そして何日か泊まっていくの。その間、ふたりきりの時間をゆっくり楽しんで、じっくり愛もたしかめ合って……。ふふ、新しい年の幕開けとしては、願ってもないイベントじゃない？」

「ば、バカを言うな！」

護堂はすぐさま悪魔の提案を一いつ蹴しゆうした。

「男ならともかく、女子の部屋に泊まれるわけないだろっ。大体、今はアンナさんも休暇中だから、本当にエリカひとりじゃないか!?」

「だからいいのよ。護堂、ふたりで甘い数日間をすごしましょう？」

「え、エリカさん！」

「待て。そういうことなら、わたしの家に来ていただいてもいいはずだぞ！」

「リリアナさんまで!?」

「第一の騎士にして侍じ従じゆう長ちようの家に王が滞在する。自然な成り行きのはずだ」

紅あかと青の騎士たちが申し出る内容に、祐理が遣い憾かんの意を表明しようとしている。

だが、ここでもうひとりの媛巫女まで胡う乱ろんなことを言い出した。

「何言ってんの。だったら王様、清秋院の実家まで来るといいよ。うちなら部屋もたくさんあまってるし、大歓迎だよ」

「恵那さんっ。そういうはしたないことをおっしゃるのは！」

「祐理もさ、いっしょにおいで～。ばあちゃんもひさしぶりに祐理

と会いたがってたし、ちょうどいいよ。なんなら明日から冬休みが終わるまで、みんなでうちに泊まるのもいいんじゃないかな。この際だからエリカさんとリリアナさんも招待しちゃうよー」

　持ち前の明めい朗ろうさで、太刀の媛巫女が新たなプランを提案する。

　これでエリカとリリアナは表情を変えた。まるで『誰かひとりの独走を許すよりも、みんな横一線で……』とか算段していそうな思案顔だ。

　この不穏な雲行きに、祐理はひとり異論をはさもうとする。

「さすがにそれは非常識です……。こんな大勢で、いきなり押しかけるのは」

「いいって。死んだじいちゃんの隠し子とか、そのお母さんが見つかったときだって、次の日には迎えに行って居い候そうろうさせる家とばあちゃんだし」

「そ、そういえばそうでしたね……」

　ディープな家庭事情を語られて、護堂はぎょっとした。

　一方、そのあたりを承知していたらしい祐理は黙りこんでしまった。

　ほかの面メン子ツの横顔をちらちら見て、何事か考えこんでいる。そういえば、素直なのと世間知らずなのが相乗効果を生むせいで、意外と朱に染まって赤くなるお嬢さまなのだ。

　まずい。この流れを断ち切らなくては、また妙なことに⁉

　護堂があわてて発言しようとしたら、その前に祐理が「あっ」とささやいた。

「駄目ですよ、恵那さん。私たちは明後日あさつて、大おお祓はらえの儀ぎがあります」

「へ？」

「それに私は大おお晦日みそかから新年の三が日の間、七なな雄お

のお社やしろに毎日通います。恵那さんだって里にいらっしゃるのでしたら、どこかのお社でお勤めしなくてはいけないでしょうし」

　祐理の申告で、護堂は気づいた。考えてみれば彼女たちは巫女なのだ。

　年末年始は一年で最もいそがしい繁はん忙ぼう期きにあたるはず。しかし、媛巫女筆頭の少女は愕がく然ぜんとして、頭をかかえた。

「え、恵那もそういうこと、しなくちゃダメなの？」

「それはやっぱり、私たち媛巫女の責務ですから……」

「しまった～。この時期は毎年、山に籠こもってたから、すっかり忘れてた！」

　天を仰あおいで恵那が叫ぶ。するとリリアナが訊ねた。

「万里谷祐理。大祓の儀というのは？」

「私たち『東』に属する媛巫女が年の終わりに集まって行う、浄きよめの祭事です。ただ正直に言いますと、私もできれば参加したくない催しなのですが。せめて今年だけでも……」

　憂ゆう鬱うつそうに祐理がため息をついた。

　まじめで律りち儀ぎなお嬢さまらしくないネガティブさに護堂が驚いたとき、携帯電話の着信音がにぎやかに奏かなでられた。音は祐理のバッグからだった。

「失礼いたします」と断ってから、祐理は自分の携帯を取り出し、通話をはじめた。

　話しこむこと数分間。終わると携帯もふたたびしまいこまれる。

　そして、祐理はおもむろに護堂へ訴えた。

「今の電話、馨かおるさんからだったのですが……ちょうど今お話ししていた大祓の儀に、護堂さんも来ていただけないかというお誘いでした」

「俺が？　巫女さんたちの集会に？」

　きょとんとする護堂に、祐理が事情を説明する。

　なるほど、そういうことなら——理由を聞いて、すぐに護堂はうなずいた。

2

　クリスマス翌日の朝、ふと護ご堂どうは妹に告げた。

「そうだ。俺、明日は出かける用事がある。たぶん帰りも遅くなるぞ」

　兄妹ふたりだけでの、朝食の席である。静しず花かは『はぁ～』とため息をついた。

「もしかして、エリカさんたちといっしょ？」

「…………」

「やっぱりか。ほんと、お兄ちゃんってばこの半年でろくでもない成長遂とげちゃって。ご近所でもうわさになってるんだからねっ」

「また、俺がじいちゃんに似てるって話かよ……」

「もうその段階じゃなくなってるよ。十代の若さでこれなら、もしかしたら二〇代で祖父越えを果たすんじゃないかとか、商工会のおじさんたちが面白そうに言ってるもん。おじいちゃんとちがって地元の女の子と変にならないから、素直に野や次じ馬うまできるんだってさ」

「み、みんな何言ってんだよ!?　事実無根もいいところだ！」

「だったら、いつのまにか余よ所そから女の子連れてくるの、いいかげんにしてよね。イブのときだって万ま里り谷やさんの妹さん——小学生まで呼んでるし。あと、妙にモテそうなイケメンの人とナンパ旅行で遠征する話をしたりさ！」

　どうやら静花は沙さ耶やの宮みや馨かおるの性別を『♂』と思っているらしい。

　真実を明かせば、いっそうややこしくなりそうだ。護堂はこの件をスルーしようと決めて、あえてべつの人物を話題にあげた。

「ほかの男だって、ちゃんと呼んでただろ。ほら、ちょっと目つきが悪いけど、将来かっこよくなりそうなヤツ」

「ああ。あの生意気そうな男の子。あの子か……うーん……」

　陸りく鷹よう化かのことを言ったら、なぜか静花は考えこんだ。

「どうかしたのか？」

「実はさ、ちょっと気になってたんだけど。あの子、あんな見た目の割りに何でか子分にしやすそうだよね。舎しゃ弟てい根性が身についてそうというか。頭を下げたり腰を低くするのに慣れてそうっていうか……」

　ぶつぶつと静花が論評したので、護堂はびっくりした。

　この妹、やはり大物になるかもしれない。義理の甥おいが隠している暗黒面（？）にまさか初対面で気づくとは……。この先、何かの拍ひよう子しに静花と再会しても、パシリあつかいされないよう鷹化のために祈る護堂であった。

　会話しながらの朝食が終わりに近づいた頃。

　テーブルに置いてあった静花の携帯電話が震動した。メールを受信したようだ。

「あ、お父さんからだ。へえ……お兄ちゃん、見て」

　メールチェックした妹が携帯を差し出すので、護堂も読んでみた。

『娘よ。この間はすまなかった。ところで、父はしばらくカリブの海で太陽とヨットを満まん喫きつするつもりだ。冬休みだし、おまえも来るか？』

　静花の誕生日は一二月の頭。あのとき父は家に来るといって来な

かった。

　埋め合わせをするつもりらしい。不良中年の父にしては殊しゅ勝しような心がけだった。また、護堂に宛あてた追つい伸しんもある。

『追伸、息子よ。来たいというなら拒こばみはしないが、おまえには父娘おやこ水入らずにしてやろうという気き遣づかいを期待する』

　実に父らしい言いぐさで、むしろ護堂は感心した。

　なにしろ『むさ苦しい息子と可愛かわいい娘を平等にあつかえるほど、僕はできた人間じゃない！』と公言するダメ人間なのだ。あいかわらずのブレのなさだった。

「カリブの海だってさ。お兄ちゃんも行く？」

　そして、平然と父の言い分を無視する妹が目の前にいた。

　こういう動じなさが実に大物らしい。しかし、拗すねた父といっしょにいるのは結構めんどくさいので、護堂はすかさず言った。

「おまえだけ行ってこい。俺は正月、友達の家を泊まり歩くから」

「なんで？　日本にいるならいるで、家を出る必要ないじゃん？」

「正月、家にいたら親戚のおじさんたちに拉ら致ちされて、例の宴会に無理矢理つれていかれるからな……。俺は今年こそ、賭かけ事ごととは縁を切る！」

　草くさ薙なぎ一族が本家から傍ぼう流りゅうまで都内某所に集まる新年会。

　その二次会は狂乱のギャンブル大会である。護堂はここ数年、ディフェンディングチャンピオンとして参加を強制されている。この悪習を断つには、家を出るしかない。

　だが、運悪く今年は祖父がいなかった。

　正月に家をあけると、その間、静花はひとりきりになるわけで——。

（母がいるとはいえ、年末年始は何時間うちにいるか定かではない。度を超した宴会好きなので、この時期はあちこちの宴席を転々としていくのだ。代わりに一族の新年会は、母ひとりにまかせて大丈夫という安心感もあったが）

　しかし、父からの誘いで、妹の心配をする必要はなくなった。

　心おきなく旅立つ決心をした兄に、静花は疑惑のまなざしを向けてきた。

「泊まり歩く家ってさ。まさかエリカさんたちの部屋じゃないよね……？」

「バカ言うなよ。俺はじいちゃんとはちがう。誓ってそんな真ま似ねはしない！」

　実は昨日のエリカ発言から『友達の家に泊まる』案を思いついたのだが。

　女子の家に泊まるつもりなど毛頭ない。力強く護堂は宣誓した。

　そして、媛ひめ巫み女こたちの年末集会が行われる当日。

　護堂は朝の八時に家を出て、リリアナと落ち合った。ふたりでエリカのマンションに向かい、朝に弱い金髪少女をどうにかたたき起こす。

　そして、三人そろってマンションを出て、地下鉄に乗り込んで――。

　向かった先は虎とらノ門もんだった。駅から徒歩一〇分の距離にある二〇階建てのデザイナーズマンション。その一室を訪ねた。ここが今日の集合場所なのだ。

「みなさん、ようこそおいでくださいました！」

　玄関で迎えてくれたのは、この部屋の住人・万ま里り谷やひかりだった。

　ここは万里谷家の別宅なのだ。本宅が埼さい玉たま県にあり、そ

ちらには姉し妹まいの祖父母が住んでいるという。だが、姉妹と両親は通学・通勤に便利な都内でもっぱら生活しているのだとか。

「清せい秋しゆう院いんはもう来てるのか？」

「はい。といいますか、恵え那な姉さまはずっとお姉ちゃんの部屋に泊まってます」

　護堂の確認に、ひかりが答えてくれた。

　秩ちち父ぶから恵那が出てきたのはイブの日だから、もう三日も長なが逗とう留りゆうしている計算だ。

「もしかして、清秋院家と万里谷家は家同士もかなり親密なのか？」

　ふとリリアナが訊たずねた。

「とんでもないです。うちと清秋院家ではずいぶんと家格がちがいますから。家同士のおつきあいと言えるほどのことはありません。でも恵那姉さまはああいう人で、お姉ちゃんとは子供の頃からのなかよしですから……」

　我が家へ帰るように幼なじみの家に上がりこみ、万里谷家の両親・祖父母とも顔なじみになり、報しらせもなしにちょくちょく現れる居い候そうろうとしての地位をあっさり確保したのだという。

「お姉ちゃんがいなくても妹の私と遊んでいったり、うちの母と祖母におやつや晩御飯をおねだりして、いつのまにか家族みたいになってました」

「その光景がかんたんに想像できるわね……」

　恵那の天てん衣い無む縫ほうぶりを思ってか、エリカがうなずいた。

　また、恵那は逆に気やすく祐ゆ理りを実家に連れていったりもしたとか。以来、媛巫女同士である娘たちは家格の差など気にせず、つきあいを続けている……。

　護堂たちをリビングに案内しながら、ひかりが教えてくれた。

「あ。でも、清秋院の御当主である蘭らんおばあさまにも、お姉ちゃんは気に入られているみたいですよ。恵那姉さまがお姉ちゃんを清秋院の養女にしてもいいかって訊きいたら、すぐに『かまわない』とおっしゃったとか」

「……なんで万里谷を清秋院のうちが養女にするんだ？」

　唐とう突とつすぎる話に首をかしげてから、護堂はリビングのソファに腰かけた。

　エリカが右に、リリアナも左に腰を下ろす。万里谷家のリビングは一〇帖じよう以上あり、陽ひ当あたりもよく、とても居心地よさそうな場所だった。

「それはもう、お兄さまとのおつきあいがもとで、お姉ちゃんがいじめられたりしないようにとのお気遣いです」

　護堂は「え!?」と驚いた。なぜ自分が理由になるのか？

「清秋院・沙耶宮・九く法ほう塚づか・連れん城じよう——四家やその分家筋の方々のなかには、ときどきですけど、そうでない家の者を下に見て、えらそうにする人たちもいるんです。特に昔気質かたぎのお年寄りの方々にそういう人が……」

　ひかりはすこし言いづらそうにしながら語ってくれた。

「お姉ちゃんは正式な媛巫女なので、本当はそういう家の格とかを飛び越えて『媛』としてあつかわれなくちゃいけないんですが……なかなかそうはいかないこともありますし」

「なるほど。それで『養女』か」

　リリアナが大きくうなずいた。

「上流の出ではない娘を形式だけでも名門の血縁として、王侯に嫁とつがせる。そうすれば出身の家柄が問題になることもない」

「でも、祐理のうしろだてには正せい史し編へん纂さん委員会と馨さんがいたわけでしょう？」

　全すべて読めたと言わんばかりにエリカも口をはさみ、ウインクしてみせた。

「そういう措置は必要なかったんじゃない？　あの人たちがその手の仕込みで失敗するとも思えないわ」

「あ、はい。おっしゃるとおりです。さすがエリカ姉さま」

　ひかりはにこやかに微笑ほほえみ、明るい声で答えた。

「わたしたち家族もびっくりするくらい、お姉ちゃんはすんなり『草薙護堂さまのお相手』として公認されてて。何もおかしなことにはなりませんでした」

「お、俺のお相手って……」

　祐理のためによろこぶべきか、問題にすべきなのか。悩ましい話を聞いて、護堂は顔をひきつらせた。だが、同時に申し訳ない気持ちも込みあげてくる。

「俺のせいで、そんなややこしいことになってたのか。万里谷のやつ、言ってくれたらよかったのにな……。俺だって、すこしは力になれたかもしれないし」

「あ。大丈夫ですよ、お兄さま」

　ひかりがあっけらかんと笑ってみせた。

「お姉ちゃん、お説教するとき以外はおっとりした人ですから。家柄のあれこれとか、お兄さまとの関係で妬ねたまれたりするんじゃないかとか、全然気にしていませんでした。そのせいで気苦労を感じたこと、一度もなかったと思います」

「祐理らしいわね。よくも悪くも世慣れてない子だから」

　納得顔でエリカがうなずいたとき。

　奥から祐理と恵那——話題のふたりが仲よくやってきた。

　ちなみに、祐理の方は白いブラウスと桜色のカーディガン、ロングスカートと私服姿なのだが、恵那はあいかわらずの制服姿である。この間、草薙家に来たときも同じ格好だった。

　野放図な媛巫女いわく『ほかの服を選ぶの、めんどくさいよ』らしい。

「あー……来年のお正月はみんなで初日の出見たり、祐理の作ったおしることか食べて、のんびりしようと思ってたのになー。凧たこあげとかしてさあ」

「お雑ぞう煮にやおしるこくらい、いつでも作りますよ」

「ほんと？　じゃあ新年のお勤めは、祐理たちといっしょに七なな雄おのお社やしろでさせてもらおうかな。秩ちち父ぶまで帰るのめんどくさいし」

　やる気なさげな恵那を、祐理が苦笑と共になだめている。

「まあ、でもさ。お正月より、まず今日の大おお祓はらえを乗り切らなきゃだよね。祐理だって、こっちはめんどくさいしイヤなんでしょ？」

「め、面倒ではありませんが、できれば欠席したいのはたしかです……」

　精神的共犯者を作ろうとする恵那の問いかけで、祐理が困り顔になった。

　こういう媛巫女たちを見るのは初めてかもしれない。護堂が面白く思ったとき、ポケットのなかで携帯電話がブルブルと震えた。取り出してみる。

　正史編纂委員会のエージェント、甘あま粕かす冬とう馬まからの電話だった。

　どうやら迎えも到着したらしい。

「うわははは。媛巫女筆頭のおふたりがなかよくサボリ志願ですか」

　話を聞いて軽薄に笑うのは、もちろん運転席の甘粕だった。

　大祓の儀とやらに参加する万里谷姉妹と恵那、そして同行する護堂とエリカにリリアナをミニバンで迎えに来たのである。

　みんなを乗せて、車は首都高の環状線を埼玉県方面に北上してい

る。

「筆頭のふたり？　甘粕冬馬、わたしの記憶がたしかなら」

　今の発言を聞きとがめて、リリアナが言った。

「たしか媛巫女筆頭の称号は、清秋院恵那ひとりのものだったはずだが」

「ええ、今まではそうです。ただ祐理さんの力もこの半年で急成長を遂とげましたし、何より草薙さんに最も近しい媛巫女のひとりです。馨さんが『この際だから景気づけに何か肩書きを足しとこう』と、ノリで決めまして」

「し、知らない間にそういうことになっていたんです……」

　甘粕が種明かしすると、祐理は恥ずかしげにうつむいてしまった。

「そんな晴れがましい呼び名、私などには分不相応だとさんざん申し上げたのですが……」

「いいじゃないですか。これも馨さんなりの洒落しやれですよ」

「だ、大体、筆頭がふたりもいるなんて、日本語としておかしいですっ」

「ははは、まあまあ」

　へらへら笑う甘粕へ苦情を言いたてる祐理。その隣のエリカが訊ねる。

「祐理が催しに参加したくない理由、もしかしてそれ？　新しい肩書きが恥ずかしいとか？」

「それもあります……」

　さらに祐理がうつむくので、護堂は「も？」と首をかしげた。

　すると、運転手の甘粕はにやにやしながら、

「祭場でひととおり見てたら、たぶんおわかりになると思いますよ。ま、お気持ちはわからなくもないです。正直、祐理さんたちと

同じ立場に立たされたら、私だっていろいろめんどくさく思うに決まってますからね！」

　意味深なことを口にするのであった。

3

　祭場となる神社は、埼さい玉たま県さいたま市緑みどり区にあった。

　このあたりは都心にも近い。だが、千ヘクタール以上の緑地帯が広がり、田畑や雑ぞう木き林ばやし、湿地帯に草地、大きな沼に用水路など、驚くほどゆたかな自然が残されていた。

　そして、その自然のなかにたたずむ武む蔵さし野のの古こ社しゃ。

　森にかこまれ、遺い跡せきや公園とも隣接している。派手さはないが緑の多い、なかなかに心休まる場所だった。

　この神社が祭神とするのはスサノオの妻、クシナダヒメだと甘あま粕かすが教えてくれた。

　広い境けい内だいには巫み女こ装しよう束ぞくの女子たちが五〇名ほど集まり、何やら賑にぎ々にぎしく、かしましく、おしゃべりに興きようじている。

　ひかりもこの集団に交じっていたが、祐ゆ理りと恵え那な、そして沙さ耶やの宮みや馨かおるの姿は見えない。

　尚、巫女たちのまわりには背広姿の男たちも十数人ほどいた。いずれも甘粕の仲間、正せい史し編へん纂さん委員会のスタッフらしい。

　その様子を、護ご堂どうたちは離れたところから見物している。

　途中、こちらに気づいたひかりが笑顔になり、ぺこりと会え釈しやくしてくれた。

「あの子たちが祐理や恵那さんの仲間……みんな媛ひめ巫み女こなのね？」

　訊たずねたのはエリカだった。もちろん甘粕に、である。

「ええ。ただ、半分はひかりさんのように見習いの媛たちです。真に媛巫女と呼ぶに足る力を持つ方々は……二十数名というところですか。みなさん、東日本の霊的要地で巫女として奉ほう職しよくされています」

「そういえば、万ま里り谷や祐理が『東に属する巫女の祭事』と言っていたな」

　リリアナのつぶやきに、甘粕はうなずいた。

「そのとおりです。『西』……静しず岡おかから先の方々はまたべつに集まって、あちらで似たような祭事をやってるんですがね。で、祐理さんは『東』のなかでも徳とく川がわ家いえ康やす公が江え戸どに入府して以来の要地、武蔵野の媛巫女であられると」

　ざっくり東京と埼玉、そして神か奈な川がわと千ち葉ばの一部くらい。

　ここでいう武蔵野はそのあたりを指すと、甘粕は補足してくれた。

「国くに木き田だ独どつ歩ぽ先生が聞いたら激怒しそうな区分ですけどね。正史編纂委員会では、なんとなくそういう定義になってます。見習いの方々を除いた武蔵野の媛巫女は……七、八人くらいでしたかねェ」

　今、名指しされた文豪の先生、たしか『いわゆる武蔵野は多た摩ま川がわまで。八はち王おう子じは武蔵野じゃない！』とか主張したのだったか。

　護堂が思い出していると、リリアナが媛巫女たちを眺めながら言った。

「欧州では巫女の資質イコール魔女の資質でもある。それは媛巫女も同じだろう？」

「ええ。たとえば祐理さんや恵那さんも本気になって修行して、上

う手まいこと成果が出れば、リリアナさんのような魔女になれるかもしれません。ただ、われわれ委員会はそういうスキルアップを媛たちに望みませんので……」

「なぜ？」

「餅もちは餅屋ですよ。魔女術を学ぶなら本場の南なん欧おうや東とう欧おうあたりに十年以上は留学しないと、大成できないでしょうし。媛の方々にはもっとべつの資質もありますしね。ほら、祐理さんの霊視とか恵那さんの神がかりとか」

「神しん祖その血に由来する霊能の力か……」

　リリアナがつぶやくと、甘粕はわざとらしく目をぱちくりさせた。

「あれ？　私、そんなこと前に言いましたっけ？」

「言ってない。こちらで勝手に察しただけだ。確信を持てたのはプリンセス・アリスやグィネヴィアさまにお会いして、あの方々と媛巫女の力が似てると気づいてからだが」

「つまり、こう？　日本にはかつて神祖がいて、その血を後世に遺のこした……」

　リリアナの推測を聞いて、エリカも口をはさんできた。

「それを当時の人間はなんらかの形で知り、稀き少しような神祖の血を注意深く保護し、媛として遇することで婚こん姻いんにも干かん渉しようして、上う手まいこと現代まで血統を維い持じさせた——それが媛巫女というところかしら？」

「神祖のお嬢さまたちと出会ってる以上、いつか気づくことではありましたかね」

　苦笑と共に甘粕は認める。そういえばと、護堂は思い出した。

　幽かく世りよにいた玻は璃りの媛も、たしかに似たようなことを言っていた……。

「ま、そのように稀まれなる血の後継者である媛たちです。彼女たちには血に宿る霊能こそを最大限に高めて欲しいと、われわれ委員

会は期待します。その点でいえば、やはり恵那さんと祐理さんは筆頭にふさわしい方々ですよ。——お、いらしたようです」

　かつて『武む蔵さしの国くに一いちの宮みや』と呼ばれた古社。

　その拝殿から出てきたのは、三人の媛巫女。祐理と恵那、そして沙耶宮馨だった。

　巫女たちの装しよう束ぞくが常とはちがう。白衣と袴はかまに加えて、うすい上衣——千ち早はやをまとい、頭には華やかな冠かんむりとかんざしを付けていた。

　他の媛巫女がふつうの白衣・緋ひ袴ばかまスタイルなので、ことのほか目立つ。

　そして、男の神職姿——ん？　護堂は目をみはった。

　拝はい殿でんから出てきたのは、三人の媛巫女。筆頭の号を授かった恵那と祐理。そして、正史編纂委員会の次期総そう帥すいでもある沙耶宮馨のはずだが。

　最後のひとりが巫女装束ではなかった。馨は男物、神かん主ぬしの衣装を着ていた。

「こんなときでも男の格好ですか……」

「まあ本人の希望ですし、誰もあの人の女装を見たくないってのもありますし……。媛巫女の方々もよろこびますしねェ」

　護堂のつぶやきに甘粕が答える。

　たしかに馨は人気者らしい。境内に出てくるなり、たむろしていた媛巫女たちがわっと彼女の前に集まった。アイドルに群がるファンの群れを彷ほう彿ふつとさせる。

　歳とし若わかい女子たちにかこまれ、ひっきりなしに声をかけられながらも、にこやかに応じる姿は堂に入っている。今すぐ頭文字Ｊの芸能事務所に入っても大丈夫では——とか思ったら。

　人気者は馨だけではなかった。

　恵那も媛巫女たちにかこまれている。そして、おとなしい祐理ま

でが。

　かしましい女子の一団に取りまかれて、恵那は珍しく『めんどくさ～い』という感じで言葉を返したりしている。ただその姿、見ようによっては『クールな振る舞いをする黒髪ロングの神秘的な美少女』と受け取れなくもない。

　祐理はといえば、こういう状況に慣れてないのが一目でわかる。

　声をかけられるたび律りち儀ぎにあいさつしようとしたり、いちいち返事を考えこんだり、間に合わなくてオロオロしたり、しまいには所在なさげに立ち尽くしてしまったり……。

　わいわいとにぎやかな媛巫女たちを眺めて、甘粕は言った。

「さしずめ黄薔薇さまロサ・フエテイダ、白薔薇さまロサ・ギガンテイア、紅薔薇のつぼみさまロサ・キネンシス・アン・ブウトンというところですか……」

「そ、その呪じゆ文もんは何だ、一体？」

　リリアナがあやしい言葉を口にしたエージェントに訊ねた。

「それに万里谷祐理が気の毒なことになっているぞ。助けてやった方が——」

「私ごときじゃ無理ですって。これでも、もうすぐ三み十そ路じなんです。一〇代から二〇代前半の女子軍団に突入できるパワー、さすがにありません。——あ、ちなみに媛の方々は一定の年齢に達すると、巫女の職分を退しりぞいてですね、委員会の相談役として活躍していただくんですよ♪」

　要いらぬ豆知識の披ひ露ろうで逃げを打つ甘粕へ、護堂は言った。

「万里谷が来たがらなかった理由、これですか」

「ええ。馨さんはああいう人だから、女子校みたいな場所ではどこでも大人気です。恵那さんも筆頭に選ばれる実力と清せい秋しゆう院いんの家名が効いて、やっぱり媛の間では昔から人気者で。祐理さんについては……いろんな成り行きの結果といいますか」

「何があったんですか？」

「いえね。前に東京在住の媛巫女・万里谷祐理さんはカンピオーネである草くさ薙なぎ護堂氏のお相手だから、くれぐれも粗そ相そうのないようにと各方面へ念入りに通達したんですよ。わからず屋さんには個別連絡を取ったり、あれこれ関係者に宣伝もしたり」

　自分も関係があるらしい。護堂は「え？」と驚いた。

「そしたら草薙さん、わずか数カ月の間に予想を上まわる早さで大活躍です。東京タワー炎上、日につ光こうにはクレーター、横浜ベイブリッジは粉砕……。うちらの業界じゃ今年ナンバーワンの有名人、うわさの人ですよ。祐理さんはそんな方の『女』であると広く知られた次第です」

「ってことは、じゃあ——」

「業界関係者は祐理さんのこと、大国のファーストレディ並にあつかうわけですよ。媛巫女の間でも『東京にすごい媛がいる』とうわさになりまして。気づいたら、あんなふうに人気者になってました」

　甘粕はニヤニヤしながら語った。

「とんでもない魔王さまがバックにいるだけじゃなくて、祐理さん自身もおきれいな方ですしね。力の方も筆頭の座にふさわしいほど成長しましたから。そういうあれこれが影響して、ああなった模様です」

「つ、つまり、俺のせい……」

「んー。九割方そうだと言えるかもしれませんねー」

　にこやかに追い打ちをかけられて、護堂はガクッとよろめいた。

「まあ……いろいろ経験しておくのも悪くはないでしょうけど、祐理にはすこし似合わない役どころよね。舞踏会の女主人役として、来る客みんなに笑顔を振りまくのは」

　エリカが苦笑まじりに言った。

　たしかにそうだと護堂も思う。それにもしかしたら——。

　祐理だけではないのかもしれない。隣にいるエリカやリリアナも、能天気な恵那も、草薙護堂のせいで何らかの要いらぬ苦労を背負いこんでいるのではないだろうか？

　そう考えると、なんとも不ふ甲が斐いない気分になる護堂だった。

　やがて、大おお祓はらえの儀ぎとやらがはじまった。

　祭場となる古社とその周辺は正史編纂委員会の手で封鎖され、今日だけは一般人が出入りできないようになっていた。

　緑の雑木林にかこまれた広い境内を、冬の風が吹き抜ける。

　晴れてはいたが一二月下旬。風の冷たさが容よう赦しやなく人肌から体温を奪っていく。だが、うすい巫女装束だけで寒風にさらされても、媛巫女たちは顔色ひとつ変えない。

　粛しゆく々しゆくと祝詞のりとを奏そう上じようし、また、流麗に神楽かぐらの舞を奉ほう納のうする。

　剣術の心得があるとおぼしき巫女たちが木刀を振るって組くみ太た刀ちを演じ、また、べつの巫女たちは和わ弓きゆうで的まとを射い止とめ、武技の冴さえを演武で示す。

　それらの儀式を中心となって進行させるのは、やはり例の三人だった。

　沙耶宮馨。そして、ふたりの媛巫女筆頭、祐理と恵那。

　まず最初に白しら木きの木刀を振るって組太刀を演じたのは恵那であったし、巫女たちの中心で神楽を舞ったのは祐理であった。率先して祝詞を詠よみあげ、全体の統括役を果たしていたのは馨であった。

　護堂にとって意外だったのは、馨がみごとな弓の技を披ひ露ろうしたことだった。

　次々と的の中心近くを射止めて、皆かい中ちゆうの妙技を見せる。そういえば、前にどこかで『馨は文武両道の才人』と聞いたの

を、護堂は今さら思い出した。

　また、三人以外の媛巫女たちも厳げん粛しゆくかつ真しん摯しに大祓の儀をすすめていく。

　さっきのかしましい騒ぎっぷりがウソのようだった。やはり彼女たちも選ばれし媛たち、この道については第一人者の集まりなのだ。



　結局、二時間ほどで大祓の儀はつつがなく終了した。

「つまり、集まって魔術の儀式を行うとかではなくて、純粋に祭礼の神事だったわけか」

　ひととおり見終えてリリアナが言うと、甘粕が苦笑した。

「魔女の集会といっしょにしないでくださいよ。これはまあ、一年の穢けがれをみんなで集まって祓いましょうくらいの定例行事です。あと年に一回、媛巫女の方々に集合をかけて、親しん睦ぼくを深めましょうってのも趣しゅ旨しのひとつですか。このあと、園遊会もありますしね」

「園遊会って、あの、どこかのお屋敷でやるような？」

　思いがけない単語を聞いて、護堂はびっくりした。

「今どき本当かよ、とお思いでしょうがあるんですねー。早い話が打ち上げです。会場の感じはあれですけど。要は忘年会代わりのパーティーなんですよ」

「でも、その前に……わたしたちにはやるべきことがあるのよね？」

　解説する甘粕へエリカが言う。そうだった。

　このためにわざわざ媛巫女の集会に顔を出したのだ。大祓のあと、速ハヤ須ス佐サ之ノ男オノ命ミコト——恵那の守護神にして、日本呪術界を陰から操あやつる御ご老ろう公こうと対面するために。

　護堂はその立会人として、今日ここに呼ばれたのである。

4

「ぼくら東の媛ひめ巫み女こが総出で神事を行った結果、このお社やしろの周辺はいつも以上に穢けがれと邪じゃ気きが祓はらわれた

状態です。今なら幽かく世りよの御み霊たまを呼び降ろすこともどうにか可能でしょう」

　先頭に立って歩きながら、沙さ耶やの宮みや馨かおるは護堂に説明してくれた。

「たまに恵え那なが携帯電話で幽世とやりとりしていますがね。あれだと、御老公が無視を決めこんだら終わりです。そこであちらから御霊の一部だけでもお呼び奉たてまつって、直じかにお話しをさせてもらおうかなと」

「交渉役に護ご堂どうを使えば、向こうも無む下げにできないでしょうしね」

「うん。そういうことだね」

　あいづちを打ったエリカとうなずいた馨は、同時にくすりと微笑ほほえんだ。

　それを見て、護堂はしみじみと思う。切れ者の彼女たちがこんな顔をすると、悪だくみしているようにしか見えないなと……。

　大おお祓はらえのあと、護堂たちは祭場の神社に隣接していた草地へ移動中だった。

　馨を先頭にして護堂、エリカ・祐ゆ理り・リリアナ・恵那が続く。甘あま粕かすはさっき「園遊会の準備がありますので」と神社から出ていった。

「このあたりでいいかな。じゃあ恵那、それに祐理も……はじめようか」

　開けたところまで来ると、馨は巫女仲間に呼びかけた。

　ふたりがうなずいて、進み出る。そして、三人の媛による奏そう上じようがはじまった。

「かけまくも畏かしこき須す佐さの大おお神かみの御み前まえに奏上いたします……」

「此この度たび、武む蔵さしの社を斎ゆ庭にわと祓い浄め、装よそい奉まつり……」

「御おん身みの尊とうとき御ご神しん徳とくを賜たまわりたく仰あおぎ奉り、讃たたえ奉ります……」

　スサノオの招来を請こいつつ、三人は呪力を高めていく。

　また、途中で恵那が目くばせしてきた。意味を察して、護堂は力を抜いた。右腕に宿る天あまの叢むら雲くもの劍つるぎ——かつてスサノオの愛刀だった鋼はがねが恵那の手に顕あらわれる。

「天叢雲の御み劔つるぎよ。願わくば旧主たる須佐の御老公をお呼び奉たてまつり、この地への示じ現げんを請こい、願い給たまえ！」

　神刀・天叢雲劍の力も借りて、恵那は守護神の招しよう聘へいを願った。

　その直後だった。いきなり野風が吹いた。

　草が揺れ、木の枝が揺れ、轟ごう々ごうと大気が震える。そして、吹き荒れる野風は容よう赦しやなく護堂たちの体を冷やし、体温を奪っていく。

　やがて、なつかしい老人の声が風の間から降ってきた。

『やいのやいのとかしましいなァ、おい』

　嵐吹きすさぶ幽世の山中で幾度か対たい峙じした神、スサノオの声だった。

　護堂の体にも戦うための力がみなぎる。神——の一部が降こう臨りんしたせいで、カンピオーネの体が戦闘態勢をととのえたのだ。

『あんまりうるさく隠いん居きよじじいを呼ぶもんじゃねえぜ。こっちにも都合があらあ』

　護堂は前に一歩踏み出し、空に向かって声をかけた。

「悪いな。あんたに訊ききたいことがあったんだ」

『だろうな。ま、こっちはおまえらの右う往おう左さ往おうっぷりを高みの見物と洒落しやれこめたわけだが、現うつし世よのおまえらはそうもいくまいからなァ』

　スサノオの声がくつくつと含み笑いをこぼす。護堂は眉まゆをひそめた。

「やっぱり、確信犯ですっとぼけてたのかよ」

　アテナの再襲撃以来、恵那は何度か〝おじいちゃま〟に連絡を試こころみたという。『最後の王』や天あま之の逆さか鉾ほこについて問いかけるために。

　だが、全て無視されたのだとか。

『怒るなよ。あのガキについては、オレもたいして吹ふい聴ちょうできねえのさ。隠居の身でも神は神だからな。不死の領域にしかねえ知識を現世に伝えることは許されねえ。オレらがまず尊とうとぶべきは、この世とあの世の均きん衡こうなのさ』

　なんとも曖あい昧まいな逃げ口上をスサノオは言う。

　不死の領域。今までも何度か耳にした言葉。神話の神々が住まうところらしいと、護堂もなんとなく理解するようになっていた。

　そして、死すべき人間たちが暮らす地上こそが生の領域……。

　双方の中間に位置する世界が『生と不死の境界』なのだ。これを人間の魔術師たちは、幽世とかアストラル界と呼ぶ――。

「でも、千年前だかにその『最後の王』ってヤツをあんたたちが封じたんだろう？」

『封じちゃいねえ。野郎が力尽きて眠ったところに行って、ヤツの寝床を変えただけよ。まあでも、そろそろこういう小こ細ざい工くとは縁を切る潮しお時どきかもしれねえな』

　スサノオの声から、超然たる神の気配が増した。

『事がここまで来た以上、オレら定じよう命みようならざる者が地上のもろもろに干かん渉しようするのもお節せつ介かいがすぎるというもんさ。いろいろめんどくせえし。それもあって、恵那を無視していたのよ』

「だろうとは思ったよ。いかにもおじいちゃまが考えそうなことだしね！」

　守護神の言いぐさに太た刀ちの媛巫女が肩をすくめた。

『うるせえ。だからよ、恵那。おまえも二度とこのことは訊くな。俺たちが隠した、あの迷惑なガキ——野郎の始末はおまえらにまかす。……ま、前回の騒ぎで、やつがどこまでも〝ものぐさ太郎〟をつらぬくつもりだとハッキリしたしな』

　スサノオの声は重々しく命じたあとで、いきなりまた軽くなった。

『外から物好きが来て野郎をたたき起こさなけりゃ、めったなことにはなるまいよ。とはいえ、そういう輩やからはこれからもポツポツ出てくるだろうがな！』

　外から——たしかに神しん祖そたちにはまだ仲間がいそうだ。

　思い出して、護堂はため息をついた。

『それに、もう千年も眠らせてきたわけだしよ。めざめるならめざめるで、潮時かもしれんて。ほれ、運命というやつよ』

「おいおい……」

　無責任な言葉に護堂がぼやくと、不意に馨が前へ進み出た。

　今まで護堂と恵那以外の人間は神の威いをはばかって、誰もスサノオに言ごん上じようしようとしなかったのだが、ここに来て彼女が動いた。

　スサノオ以外の全員に注目されるなか、馨は跪ひざまずき、頭こうべをたれた。

「であれば、御老公。ひとつおうかがいしたき儀が」

『おう』

「御老公のご存念がかような次第である以上、今後われわれは草薙護堂さまを庇ひ護ご者しやにして盟めい主しゆと仰あおぎ、まず彼の麾き下かに帰属する者として振る舞うべし——とも愚ぐ考こういたします。これについて、御老公はいかに？」

　正史編纂委員会の次期総そう帥すいで、肩書きは東京分室の室

長。

　しかし、実際は関東地方を総そう轄かつする委員会の幹部だという中性的な媛巫女は、ここに来て大きな爆弾を放りこんできた。

　エリカとリリアナが鋭く目くばせし合い、祐理と恵那は唖あ然ぜんとする。

　護堂はといえば目をぱちくりさせて、首をかしげた。馨はどういうつもりなのだ？

　そして、野風と共に降こう臨りんした老神は――

『べつにいいんじゃねえの』

　あっさりと答えた。

『地上の連中がどんなふうに徒党を組もうと、オレの知ったことじゃねえ。その気になればオレは勝手に言いたいことを言うだけよ。地上のおまえらがそれに服従するのも、神殺しどもを楯たてに無視するのも、それはおまえらと――そこの草薙護堂が決めることよ』

　なんとも無造作だが、馨の要請を認める言葉だった。

　言げん質ちを得た馨は跪いたまま、さらに深々と頭を沈めて敬意を示す。

　そして、急に野風が弱まった。護堂の体からも戦うためにみなぎった力が抜けていく。スサノオの御霊はここから去ったらしい。

「いや、だってさ。この半年間、すでに護堂さんがぼくらの王様状態だったじゃないか」

　スサノオの退去後、恵那に「さっきのはどういうこと？」と訊かれて。

　馨はあっけらかんと言った。

「護堂さんのご気性を考えたら、今後この状況が大きく変わること

もないだろうし。だったら緊急事態にそなえて、玉ぎよく座ざにすわっているのが誰かをはっきりさせとこうと思ってね」

「ぎ、玉座？」

　胡う乱ろんな単語にぎょっとする護堂へ、馨はウインクした。

「まさに今、護堂さんがいるポジションのことですよ。心のおもむくままに戦い、仲間を助け、この国と世界に災さい厄やくをもたらしたり、逆に守ったりする——王者のみに許される場所です」

「おじいちゃまより、王様の方がえらいんだ？」

　にやりと笑って恵那が言うと、馨も人の悪い微笑で応こたえた。

「大霊界のご隠居より、地上の王が権けん威いを持つのは必然にして当然だろう？　まあ、これは決めといた方がいいことだよ。今後にそなえてね」

「たしかに……」

　リリアナも深くうなずいた。

「救世の英雄とやらが東京のすぐ近くで眠っているなら、それが呼び水になって『まつろわぬ神』やカンピオーネがいつ乗り込んできても不思議じゃないからな」

「でも、馨さん」

　心配そうに祐理が訴えた。

「御老公のご威光をないがしろにするような真似をされたら、私たちの世代はともかく、お年を召した方々がなんとおっしゃるか……」

「言わせとけばいいよ。どうせ文句だけだから」

「こちらには絶対の切り札、神殺しの魔王さまがいるのですものね。死すべき人の子がカンピオーネに反旗をひるがえすだなんて、自殺行為もいいところだわ」

　まとめるようにエリカが言った。

「馨さんのことだから、うるさそうなところには根まわしを怠おこたらないでしょうし」

「まあ、そりゃあね。……ただ、いっそ一気に新規事業を開拓って形にして、昔からのしがらみを放り投げてみるのも面白いな」

　新規事業。また物騒な言葉の登場だった。

　困惑が顔に出たのだろう。とまどう護堂の方に馨が向きなおった。

「いえね。そのうち東京あたりを本拠地にして、草薙護堂の王国を築く事業に参加させていただけたら、かなり楽しい仕事になると思うんですよ。護堂さん、もしその気になったら、ぼくをＧ　Ｍゼネラルマネージヤーとして呼んでくださいませんか？」

　いい仕事してみせますよ、と馨は微笑んだ。

「お、王国って……」

「護堂のそばにいる人材を取りまとめて、新しい結社を作ってしまうのよ。わたしやリリィの移籍交渉はどうにかできると思うわ。いろいろ準備もしてるしね」

「ぼくとか祐理や恵那は……ちょっと面倒だから、組織ぐるみで抱きかかえてもらうのが楽かな。正史編纂委員会まるごとでもいいし、沙耶宮と清秋院だけ傘下とする感じでも。この二家さえ抑えれば、あとはどうとでもできるし」

　物騒なプランを知的遊ゆう戯ぎのようにエリカと馨が語っている。

　リリアナは『また腹黒いことを……』と言いたげな顔をしていた。

　恵那は新しい悪戯いたずらの計画を聞くように目を輝かせ、祐理は心配そうな憂うれい顔だ。

　そして護堂はといえば、祐理とリリアナにうなずきかけ、過激な仲間たちへの遺い憾かんの意を良識派ふたりと共有するのであった。

第２章　旅のはじまり

１

　ともかく、スサノオ召しよう霊れいの儀式も終わり、お開き——と思いきや。

「じゃ、ぼくらは園遊会があるから、その準備だね。祐ゆ理り、恵え那な、うちの別邸によって着がえていこう」

　にこやかに沙さ耶やの宮みや馨かおるは巫み女こ仲間へ告げた。

　途端に祐理はびくっと逃げ腰になり、恵那はしかめ面つらをした。

「わ、私、今年はご遠慮させていただきますっ」

「恵那もっ。さっきみたいになるのはやだよ。窮きゆう屈くつだし、めんどくさい！」

「何を言うんだ。せっかく媛ひめ巫み女このみんなも集まってくれたんだし、親しん睦ぼくを深めておくべきだよ。こういうとき主役になるのも、君ら筆頭の仕事さ」

　人の悪い笑顔で馨は通達した。

　対して恵那は、護ご堂どうが見守る前で必死に抗あらがおうとする。

「でもさ、恵那は今までずっと不参加だったんだよ？　今年一回くらい顔を出したって意味ないよ。このまま帰るってことでいいじゃん！」

「だからだよ。今年は珍しく下界にいるんだし、めったにない機会を活いかさなきゃ」

　反論を受け流してから、馨は祐理に微笑ほほえみかけた。

「祐理も護堂さんのお相手として知られるようになって以来、君とお近づきになりたいって人は多いんだ。媛巫女だけじゃなくて、委員会の関係者のなかにも。今日の園遊会、いろんな人間と会えるだろうから、きっと楽しいよ？」

「と、とんでもありません。たくさんの方々にかこまれるのはちょっと……」

「そう言わないで。これもファーストレディの役目と割り切ってさ」

「待ってくれ。万ま里り谷や祐理が草くさ薙なぎ護堂の正せい妃ひであるかは、今だけ脇わきに置くとして――」

　静観していたリリアナが、断りを入れながら口をはさんだ。

「いやがる人間を無理につれていくのもどうかと思うぞ？　それにそういう無理強じい、あなたらしくない気もするな」

「そこを突かれるのは、ちょっと痛いな」

　リリアナらしい騎士道精神からの助け船に、馨は苦笑する。

　護堂も同感だった。たしかに伊だ達てと酔すい狂きようが身上の洒しやれ落者ものらしくない。

「実はね、媛のみんなが祐理と恵那から聞きたがっているんだよ」

「何をだ？」

「ふたりの旦だん那な様、草薙護堂氏とはいかなる御ご仁じんなのか。あと、うわさの王様がどんな華麗なる生活を送っているのか、その詳細を」

　リリアナと馨のやりとりを聞いて、護堂は仰ぎよう天てんした。なぜ俺なんかの話を!?

「でも、大おお祓はらえの前にそんな話ししてたら、儀式がはじまらないだろ？　さすがにみんな媛巫女だからね。そういう不作法は自じ重ちようしてくれたんだ。でも、代わりにぼくの方へ山のような問い合わせが殺到していてね……」

「万里谷祐理と清せい秋しゆう院いん恵那は今夜の園遊会に出るのか、と？」

「おっしゃるとおりだよ、リリアナさん。ふたりを連れていかないと、ぼくの身も結構危ないかもね。あと、媛巫女たちが地元へ帰る前に七なな雄お神社や万里谷家を訪ねて、祐理や恵那と茶飲み話をしたがるかもしれない。それくらいなら、今夜のうちにねえ」

「そ、そういえば、たしかにさきほど儀式の前に」

　話を聞いて、祐理が愕がく然ぜんとしていた。

「このあとの園遊会には出るのかと、何度も質問されました……。あ、あれにはそういうわけがあったんですね！」

「みんな情報に飢うえてるからね、護堂さんや君たちの」

　予想外の話に護堂が絶句したとき、ずっと無言だった少女が口を開いた。

「ねえ馨さん。その集まりだけど、媛巫女じゃないと参加は不可なの？」

　質問者はもちろんエリカだった。馨はすぐに答えた。

「いいや。正せい史し編へん纂さん委員会のスタッフも結構来るし、ぼくら四家の関係者、それに近い筋の氏族連中も来るから、そこはだいぶ適当かな」

「だったら、こういうのはどう？　全てが丸く収まる、いいアイデアだと思うわよ」

　エリカの語る内容に護堂は驚き、そしてあきらめた。

　自分のせいで祐理たちに要いらぬ迷惑をかけているのだ。それくらいやらなければ、たしかに申し訳が立たないと──。

かくして、その日の午後六時。

草薙護堂と仲間たちは送迎車に乗せられて、園遊会とやらの会場を訪れた。

場所は東京都内の文ぶん京きよう区。草薙家と意外にもご近所だった。緑の多い閑かん静せいな区画に立つ洋館で、あからさまに旧○○邸という風ふ情ぜいだった。

建てられたのは、おそらく明めい治じ時代であろう。レトロかつモダンな様式の建物である。

広い庭園も付設している。一応、園遊会だけあって、そちらも会場とされているらしい。だが冬のこの時期、外はだいぶ冷え込む。

今日のメイン会場は、窓から庭園を望める一階パーティーホールなのだとか。

「まあ……万里谷と清秋院を目立たせたくないなら、俺が出ていくのがいちばんだもんな」

割り切ることにして、護堂はつぶやいた。

こんなところへ、しかも『魔王』などというバカバカしい肩書きと共に乗り込むのは、もちろん本意ではない。だが、ここは自分が矢や面おもてに立つべき場面だろう、やはり。

数時間前、エリカが言ったとおりなのだ。

『結局、草薙護堂がずっと謎なぞの人物だから、みんなうわさを聞きたがるのよ。話をしやすそうな祐理たちのまわりに集まったりね。護堂が堂々と顔を出せば、みんな魔王の威い名めいをはばかっておとなしくなるはずよ。園遊会の間、ふたりのそばにいてあげなさい』

というわけで、仲間を連れて会場に乗り込んだのである。

護堂が着ているスーツは、馨のワードローブから借りたものだ。慣れないネクタイの感触がどうにも窮屈だった。

エリカは一度自宅に寄って、みごとな真しん紅くのドレスと黒のショール姿に着がえた。

リリアナも青のドレスに黒いコサージュをあしらい、旧友兼ライバルに負けない艶あで姿すがたを見せてくれる。一方、日本の媛巫女たちは和服だった。

祐理は薄紫の地色に小さな桜の柄がらが細かく入った小紋の着物。

華やかさのなかにも落ち着きのある色合いと柄で、そこが祐理によく似合っていた。

恵那の方は格こう子し柄がらの入った白の大おお島しま紬つむぎ。尚、着道楽とは縁のない太た刀ちの媛巫女だが、まったく違和感なく和服を着こなしている。

がんばってお洒落した感じはなく、普段着の自然さで身につけていた。

「俺はどうしたらいいんだろうな……？」

「どっしりかまえていればいいわ。わたしたちを連れて大きな顔をしていれば、あなたが何者か、みんな自おのずと察するわよ」

こういう席にも慣れた、エリカのアドバイスだった。

そんなものだろうか。釈しやく然ぜんとしないまま、護堂はホールに入った。すでに立食形式のパーティーは始まっており、おそらく一〇〇名近い出席者がいる。

目立つのは、やはり若い女子。

巫女装しよう束ぞくからドレスや和服に着がえた数十人の媛巫女たちであった。

彼女たちは数人ずつで集まったりして、たわいないおしゃべりに興きようじていたようだった。しかし、護堂らの登場で雰ふん囲い気きが一変した。

こちらへ強い視線を投げかけてくる。そして、近くにいる仲間とひそひそ話をはじめる。

　また、出席者には男も多かった。こちらは若者・中年・老人とさまざまな年齢層がそろっている。衣装もスーツ姿が多いものの、和服や普段着の者もおり、多種多様だ。

　彼らも護堂と仲間たちに注目して、ひそひそはじめたりする。

　だが、今のところ声をかけてきたりはしない。遠慮しているようだ。

「媛巫女筆頭のふたりに、わたしとリリィまで連れた人ですもの。たとえ顔は知らなくても、ここに来るような人間なら、すぐに名前を思い浮かべるわよ」

　エリカに言われて、護堂は気づいた。

　金髪と銀髪の白人美少女ふたりと、媛巫女のなかでも有名人のふたり。このメンバーが草薙護堂の仲間であることは関係者に広く知られているのだろう。

　さっきエリカが言ったように、この四人が何よりもわかりやすい名刺代わりなのだ。

　落ち着かない気分を持てあましながら、護堂は会場を見まわした。

　ちょっと離れたところにたくさんの料理をならべたテーブルがある。自由に取っていけるビュッフェ形式だ。アルコールやソフトドリンクを渡してくれるカウンターもあった。

「何か飲み物をもらってきましょう」

　リリアナが申し出てくれたとき、いきなりエリカが言った。

「リリィはこっちよ。わたしについてらっしゃい」

「なに？」

「今さら草薙護堂の名と顔を売る必要はないけど、わたしたちはべつだもの。いい機会だから、カンピオーネのそばにミラノの騎士ありという事実を広く知ってもらいましょう」

「そういうのは、わたしの好きなやり方じゃない」

　む、と眉まゆをひそめて、リリアナは紅あかいドレスの旧友に答えた。

「リリアナ・クラニチャールの名前は日々の働きを重ねるうちに自然と広まれば十分だ。自分から宣伝するのは騎士として謙けん虚きょさに欠けるし、人としてもだな……」

「今日くらいはいいじゃない。こういう席に護堂がはじめて顔を出した日なんだし」

　断られても、エリカはしれっと言ってのけた。

「馨さんや甘あま粕かすさん以外にも関係者の知り合いを増やしておいた方が、何かと仕事をしやすくなるでしょうし。それにわたしたちふたりで注目を集める方が、祐理や恵那さんはもっと居心地よくなると思うわよ。もちろん護堂自身もね」

「……なるほど」

　青のドレス姿でいつもよりあでやかな女騎士は、さりげなく周囲を見まわした。

　現在、会場で最も視線を集めているのは、まちがいなくこの集団だった。なかでもいちばんの注目の的まとは、やはり草薙護堂。

　護堂はアドバイスどおり〝どっしり〟を心がけてはいた。

　しかし、落ち着かないのも事実だった。割と空腹ではあったが、料理を取りにいくのもなんとなくためらわれる。何しろ衆しゆう人じん環かん視しのもとである。

　みんなにチラ見されながらの食事というのも、やはり消化に悪そうで――。

「これも騎士の務めのひとつと割り切るか……。では草薙護堂。エリカといっしょにすこし行ってまいります」

「いいのか？」

　護堂が問うと、リリアナはくすりと微笑ほほえんだ。

「はい。あまり好みじゃないだけで、こういう席の経験はそれなり

にありますし。それに考えてみれば、エリカばかりが名を売って置き去りにされる状況は、リリアナ・クラニチャールの名折れかもしれません」

　というわけで、紅と青の少女たちは護堂からはなれていった。

　戦いくさ装しよう束ぞくである例のケープではなく、華やかなドレスをひるがえしながらの行軍である。

　おそろしく目立っていた。何しろ紅と青、金髪と銀髪の白人美少女ふたり。単独でも人目を惹ひくのに、好対照の一対がいっしょにいるのだ。

　印象の強さが大いに高まるのは、もはや必然であった。

　彼女たちの動きに合わせて、来場者の視線と注意がいっせいに動いていく。

　エリカはこれを狙ねらって、リリアナを同行させたがったのかも——。

　勘かんぐりながら、護堂はふと気づいた。祐理と恵那がそばにいない。見れば、ビュッフェのテーブルのところにふたりはいた。

　連れ立って料理をいろいろ皿に取り分けている。

　が、そこに近づく媛巫女が数人。何事か祐理と恵那に話しかける。ふたりは巫女仲間たちと軽く談笑して、料理の皿を手にこちらへもどってきた。護堂はすぐに訊たずねた。

「今、なんて話しかけられたんだ？」

「ふふっ。あちらにいらっしゃる殿との方がたはどこのどなたですか、と」

「とりあえずさ、大っぴらに名前を言えない人だって答えといたよ」

　祐理が珍しく悪戯いたずらっぽく微笑めば、隣で恵那が悪童の顔で笑う。

　にわかに遊び心を起こして、あえて草薙護堂の名を明言しなかっ

たようだ。

「いろいろすこしずつ取ってきましたから、いただきましょう」

　祐理が近くの丸テーブルに料理の皿を置いた。

　彼女は一皿、恵那が両手を使って二皿取ってきたのだが、ローストビーフや小振りのサンドイッチ、カルパッチョ、海の苔り巻まき、可愛かわいらしいサイズの点てん心しんなどがならんでいる。和洋中と節操ないのが立食パーティーらしい。

　来るのを渋っていたふたりだが、今はのびのびとした様子だ。

　これだけでもここに来た価値はあるかもしれない。ひそかにうれしく思っていると、顔見知りが近づいてきた。ひかりだった。

「お兄さま。ほんの数時間ぶりですが、おひさしぶりです！」

　ひかりは冗談めかして、あいさつしてくれた。

　可愛らしい薄桃色のドレスを着ている。数時間前、大祓の儀が終わったあと、ひかりは他の媛巫女たちといっしょに祭場を離れていたのだ。この園遊会に参加するために。

「よかった。お姉ちゃんたち、来てくれたんだ。さっきの様子だと、ふたりとも欠席しちゃうかもって心配してたんだ」

「本当はそういうことも考えたのだけど……」

「なんだかんだあって、連れてこられちゃったよ」

　祐理が淡く苦笑しながら、恵那がぼやくようにひかりへ答えた。

「でも恵那姉さま、お兄さまとごいっしょにいらしたのはすごくよかったと思いますよ」

「そうなの？」

「はい。実は大祓のあと、私、みなさんから訊かれて困ってたんです。『ちょっと離れたところで儀式を見ていた男の方、もしかして!?』って。みなさん、お兄さまの正体にうすうす気づいてたみたいで……」

　護堂はたじろいだ。そういえば、あそこでもエリカとリリアナがそばにいたのだ。

　顔を知らずともカンピオーネ・草薙護堂の情報を知る者なら、あの状況だけで正体に見当を付けても不思議ではない。

「お姉ちゃんたちからあれこれ聞き出そうって、みんな盛りあがっていたんです。でも、会場にお兄さまご自身がいらしたものだから、みんなすごくびっくりしてます」

　にっこり笑いながら、ひかりは教えてくれた。

2

　そして、一時間ほどが過ぎ――。

　護ご堂どうはカクテルパーティー効果を現在進行形で実体験していた。

　みんなで着飾って集まる園遊会という場所にも慣れてきて、会場の壁かべ際ぎわに退いていたら、自分に関係する話し声がなんとなく耳に飛び込んでくるのだ。

　突然の魔王登場で落ちつきを失っていた出席者――特に若い媛ひめ巫み女こたち。

　彼女らが気を取りなおし、すこし大きな声でおしゃべりをはじめたからだろう。

「じゃあ、やっぱりあの方が……」「草くさ薙なぎ護堂さま……」「まだお若いのに、それはそれはご立派な魔王ぶりなのですって！」「まあ」「ローマのコロッセオも横よこ浜はまのベイブリッジも、あの方の前では粘ねん土ど細ざい工くのようだったとうかがいましたわ」「まあ素敵」「やっぱり神を殺あやめられるような方は、ふつうではいらっしゃらないのね」「で、でも、世界を股またにかける色好みでもあられるのでしょう……？」「あのイタリアの

方たちも、草薙さまのお相手なんですって」「もしかして私も……と思うと不安だわ。でも、もし望まれたなら……ぽっ」「ふふ。あなたじゃきっと見向きもされませんわ」「祐ゆ理りさんと恵え那なさんがずっとお仕つかえしてらっしゃるのでしょう」「神との戦いにまで付き添われるのよね」「ご立派だわ」「草薙さま、見た目はとても温厚そうですのに……」「きっと、心の奥底に全すべてを破滅へ導みちびく魔王の本性がマグマのように煮えたぎっているのに、巧妙に隠していらっしゃるんだわ！」「まあ素敵！」

　園遊会という非日常のおハイソなシチュエーション。

　そして、媛巫女は生きつ粋すいのお嬢さまばかりらしいという前情報。

（なにしろ旧きゅう華か族ぞくの万里谷家ですら〝凡ぼん庸よう〟とされる、異様な世界だ）

　それらのせいなのか。護堂には媛たちのひそひそ話、このように過か剰じようなお嬢さま言葉で聞こえる気がした。しかしまあ、おおむね内容はこんなものであった。

　直じかに話しかけてくる媛がいないのは、やはり神殺しの威い名めいをはばかってのことか。

　とはいえ、うわさ話はいい感じで盛りあがっているようだった。

「こういうのって結構、居心地悪いもんだな……」

「ほ、本当に申し訳ありません……」

　隣であやまってくれたのは祐理である。一〇分ほど前、恵那が『知り合いがいた！』とフラフラ離れていったため、ふたりして壁の花をやっていたのだ。

「でも、みんな俺なんかのことを何であんなにくわしく知ってるんだ？」

「それはもちろん、お立場がお立場ですし。あと、やっぱり日頃の行いでしょうか」

　護堂の問いに、祐理はすこし切なげな憂うれいと共に答えてくれた。

「こう申し上げるのも何ですが……。うわさ話がどんどん広まっていく最大の理由は、護堂さん御自身にあると思います」

「そ、そうか？」

　媛巫女の口ぶりに微量のため息が交ざるのを感じて、護堂はあせった。

「はい。人のうわさも七五日と申しますのに、護堂さんは三〇日もすると必ず何か新しい事件にかかわっていて、問題をいろいろと起こされますから……」

　うわさが風化する前に、自分自身で新たなうわさの種を蒔まいている。

　その指摘に「う……」と護堂は胸をつかれた。ここ最近、たしかに平穏無事な暮らしを一カ月以上続けていない。うすうす自覚していたのだ。

「しかも、おそばにいる私たちまで、そういう護堂さんを止めるどころか、いつも全力でお手伝いしていますし……」

　祐理はしょんぼりとうつむいてしまった。己おのれの不品行を嘆なげく口調だ。

　草薙護堂の『一味』として数々の悪行に荷か担たんしている現状が、まじめな彼女を悩ませているのかもしれない。あわてて声をかけた。

「ま、万里谷は悪くないから気にしないでくれよっ。うわさになるようなことは全部、俺がやってるんだから。全ての責任は俺にあるというか」

「いいえ。あなたと道を同じくする者として、その言いのがれは許されません」

　祐理は凛りんと表情をひきしめ、かぶりを振った。

「私たちはいわば運命共同体です。護堂さんのやりすぎが原因で起

きる事故や問題についても、いっしょに罪を分かち合いたいと思います」

「……申し訳ない」

　運命共同体。たしかにそのとおりだった。

　仲間の協力がなければ自分がどんなありさまになるのか、つい最近も経験ずみなのだ。こちらとしては、悄しよう然ぜんと謝罪するしかない。

　そんな護堂を見て、祐理は表情と口調をやわらげた。

「だから、私に責任はない——なんて、おっしゃらないでくださいね？　頼りにされてない、護堂さんのそばにいなくてもいい人間だと思われている気がして……いやですから」

　まっすぐ護堂の目を見つめながらの、静かな訴えだった。

「私、いろいろな方たちにご迷惑をおかけすることになっても、護堂さんの御力になりたいです。こんなお願い、本当はすごくよくないことだと、わかってはいますけど……」

「万里谷……」

　エリカや恵那などとはちがう、まじめで責任感の強いお嬢さま。

　それなのにここまで言ってくれる。祐理への感謝と感動に突き動かされて、護堂も彼女を熱っぽく見つめた。そして、なんとなく笑ってしまう。

　祐理との間にある絆きずなめいたものを実感して、うれしくなったからだ。

　見れば、媛巫女の方もしっとりと微笑んでいた。たぶん、自分と同じことを感じてくれているのだろう。理由もなく護堂が確信し、祐理とふたりでうなずき合ったとき——

（まあ、見て。祐理さんと草薙さまったら、あんなに熱く見つめ合われて！）

（うふふ。完全にふたりだけの世界にいらっしゃるのね！）

（さすが世界を股にかける色好みの魔王様ですわっ。私たちの目なんて気にせず、愛の言葉を情熱的にささやきかけてらっしゃるんだわ！）

　近くにいた媛たちのひそひそ話が耳に飛び込んできた。

　そういえば、今は園遊会の最中だった。護堂も祐理もいつのまにか忘れていたのだが。急に恥ずかしさを感じて、ふたりは見つめ合う視線を微妙にそらす。

　そのまま互いを見ないようにしつつ、ささやき合った。

「……み、みなさん、私たちをよく見ていらっしゃるのですねっ」

「……そ、そうだなっ。俺なんかを女たらしみたいに語らないで欲しいけど」

「……あ、あの、それも日頃の行いが理由だと思います。た、たしかに場の勢いに私たちが流されることも問題でしょうけどっ。やっぱり護堂さんが女性関係でも非常識さを発揮されることが、いちばんの原因なんですから！」

「……ほ、ほかの連中はどこに行ったんだろうな⁉」

　話題がまずい方向に行きかけたため、護堂はあわてて言った。

　エリカとリリアナはまだ戻ってこない。見れば、騎士たちはいつのまにかスーツ姿の馨をつかまえていた。委員会や四家の関係者を紹介してもらい、自分たちの名と顔を広めている最中のようだった。

　軽やかに談笑するエリカ、その隣で凛と立つリリアナの姿は遠目にも目立つ。

　一方、清せい秋しゆう院いん恵那はといえば——

「あ。恵那さん、あちらでお話をされてますよ」

　教えられた方を見てみる。意外にも、恵那は男性ばかりの集団に交じっていた。

　歳としは青年から初老まで、さまざま。髪の短い者が多く、みん

な姿勢がいい。武道でもやっていそうな雰ふん囲い気きを護堂は感じた。

　恵那は彼ら全員と知り合いのようだった。にこやかに話している。

　ここで恵那がこちらの視線に気づいた。にかっと護堂に笑いかけて、男ばかりの集団に『じゃあまた！』という感じであいさつする。

　最後に恵那は、いちばん年かさの男性へ頭をきちんと下げた。

　この初老の男性、小太りで達磨だるまのような顔と体型だが、不思議なほど気品があった。ほかが全員スーツ姿のなか、ひとりだけ和服を着ている。

　彼と視線が合ったので、護堂は会え釈しやくした。

　すると、向こうもお辞じ儀ぎしてくれた。それも深々と頭を九〇度も下げて。

　神殺しや魔王の悪名をおもんぱかったというより、身についた礼儀正しさゆえの丁てい寧ねいさ、律りち儀ぎさに見える。やはり武道関係の人なのか。

「ただいま～。知り合いを見つけたから、ちょっとあいさつしてきた」

「みたいだな。どんな人たちなんだ？」

　戻ってきた恵那に訊きくと、彼女はニヤリとした。

「剣術の先生たち。恵那や甘粕さんはあの人たちにいろいろ教わってるんだ。ふだんは正せい史し編へん纂さん委員会とか警察に勤めていたり、道場で師し範はん代だいやってたり、いろいろだけど」

「ああ、やっぱり。そういう人たちも来てるんだな……」

「特にあの達磨みたいな先生はすごい人だよ。剣術だけに限るならって断りはつくけど、たぶん中国の教主さまに近い腕前のはずだからね」

「姐ねえさんに!?　そりゃ本当にすごいな」

　太刀の媛巫女の見立てである。よもやメガネちがいはあるまい。

　護堂が感心していると、恵那は「それよりさ」と言った。

「先生たちに聞いたんだ。上の階にちょっと休める場所があるんだって。それもあんまり人が来ない。……そろそろ抜け出してもいい頃だと思わない？」

　イタズラを提案するように、恵那から持ちかけられて。

　護堂は隣にいた祐理と顔を見合わせる。すぐにこくりとうなずき合った。

　そして十数分後。

　護堂・祐理・恵那は洋館の三階にある奥まったスペースでくつろいでいた。

　ここにはソファだけでなく、細長いテーブルもあった。退避する際、みんなで適当にピックアップしてきた料理の皿をならべて、一息。

　ようやく落ち着いて食べられる。護堂と恵那は遠慮なく箸はしやフォークを皿にのばした。

　ほかのふたりほど食欲旺おう盛せいではないが、祐理もときどき料理をつまむ。

「やっぱり、いつもの面メン子ツがいちばん落ちつくなあ……」

　護堂がしみじみ言うと、祐理も恵那もはじけるように笑った。

「あ、そうだ。王様、あのことだけどさ」

　不意に言われて、護堂は首をかしげた。あのこと。心当たりはない。

　すると、恵那は頬ほおをふくらませて不服の意を表した。

「やっぱり……。どうせ、いろいろありすぎて忘れてたんでしょ？　ほら、恵那が実家での療養から帰ってきたらって話でさ。——してって頼んでたの」

　護堂は「！」と思い出した。電撃に打たれた気分だった。

　ランスロットと戦う前に病院で迫られた約束。あのとき護堂は断りきれず、うやむやにしたまま恵那と別れてしまった。

　そして槍やりの軍神およびアレクの騒動となり、指摘されたとおり——

「せ、清秋院、あれはその、なんというか」

「恵那はさ、前に言ったからね。いつまでも待つよって。だから、今度もなるべく自分から言わないで、王様からしてくれるのを待ってたのにさ」

　むーっと怒った子供のような顔で、太刀の媛巫女は言う。

　すると、横で聞いていた祐理が小首をかしげた。

「護堂さんと恵那さん、どんなお約束をされていたんですか？」

「あ、祐理聞いてよ。王様、ひどいんだよ。ええとね……」

　言いわけする間もなく、恵那が幼なじみの耳元にごにょごにょとささやく。

　効果はてきめんで、きまじめな祐理はいきなり狼ろう狽ばいしてしまった。

「きき、キス!?　護堂さん、なんて約束をされてるんですか!?」

「い、一応したわけじゃないんだぞっ。角の立たない断り方を考えてるうちに、ロンドンへ行く日が来て……そのまま忘れてたんだ」

「それはそれで大問題ですっ。うかつすぎて弁解の余地がありません！」

　まあ、そんな一幕もありはしたが。

　三人がおおむね楽しく、のんびりやっていると——

「やあ、こちらにいましたか。無事に避難場所を確保できたみたいですな」

　近づいてきたのは甘粕だった。

　華やかな場には不似合いな、くたびれた背広姿。いつもどおりの格好だ。

「あ、はい。こちらにはどうしてか誰もいらっしゃらないので、私たちだけでゆっくり落ちつけています。ふふ、ちょっと不思議ですね」

　すこし前の剣幕も鎮しずまっていた祐理が微笑むと、甘粕は苦笑した。

「そりゃ大魔王さまが綺麗どころをふたりも連れて、おくつろぎなんです。そうそう近づけませんよ。みんな、草薙さんたちがいると知ってて来ないんです」

「え、そうだったんですか⁉」

　祐理がびっくりした。予想外だったのは護堂と恵那も同じである。三人で目を丸くしていると、甘粕の苦笑はさらに大きくなった。

「そうですとも。でも、ま、みなさんが目立たなくても、下ではエリカさんとリリアナさんが今夜の主役になりつつあります。いいんじゃないですかね」

　と、甘粕も空あいていたソファにすわりこむ。

　彼の手にはタブレット端末があった。パーティーには不似合いな持ち物だろう。護堂の視線に気づいて、祐理と恵那もそちらに目を向ける。

　すると、甘粕はタッチパネル液晶を操作しはじめた。

「お察しのようだから、単刀直入にいきましょうか。――祐理さん。例によって、視ていただきたいものが出てきまして。ご協力いただけると助かります」

「もちろんかまいませんが……何も視みえないかもしれませんよ」

驚異的な霊視成功率を誇る祐理だが、自身の能力についてはどこまでもひかえめだ。

しかし、常に謙虚な心でいることこそが、この千せん里り眼がんじみた霊力を最大限に高めるのだという。逆をいうと、今の断りこそが力量の証明なのかもしれない。

「ええ、それで十分ですとも。あと、草薙さんにもお誘いが……」

俺にも？　護堂が目をみはると、甘粕はにんまり笑ってみせた。

「年末の犬いぬ吠ぼう埼ざきで、冬の名物アンコウ鍋なべをつついてみませんか？　もちろん祐理さんはじめ、ほかのみなさんもごいっしょに」

と言いながら、甘粕はタブレットの液晶を護堂たちに見せる。

ワンセグテレビのニュース番組がはじまっていた。映っているのは——東京タワー。数カ月前、護堂とヴォバン侯こう爵しやくが炎上させた赤と白の鉄塔である……。

これが護堂たちを海へと導みちびく、旅のはじまり。

年末年始にふさわしからぬ波は瀾らん万ばん丈じようの幕開けにほかならなかった。

3

園遊会の翌日。護ご堂どうは朝から旅行の準備をした。

静しず花かは昨日のうちに父の家へ行っている。新年をカリブの海ですごすためだ。完全にひとりだけの朝。旅行カバン代わりのスポーツバッグを肩から下げ、九時頃に家を出る。

今日の集合場所は虎とらノ門もんの七なな雄お神社。

しかし、護堂はそちらに直行しなかった。地下鉄に乗り、芝しば公こう園えんにある東京タワーへとまず向かう。今年の六月、カン

ピオーネ同士の決闘場となった地だ。

　あの戦いで焔ほのおにつつまれた東京のランドマーク。

　おなじみの赤と白の塗装はあちこち黒く焼け焦こげ、戦火をくぐり抜けた建築物さながらの雰ふん囲い気きをかもし出している。

　護堂にとっては、過去の悪行を悔くやまずにはいられない因いん縁ねんの場所。

　今日の東京タワー近辺は人出が多かった。ちょっとした縁日があるかのように、よくにぎわっていた。護堂と同じく、わざわざ見物に来た人間が多いのだろう。

　みんな、上を見あげている。

　東京タワーは高さ三三三メートルのはず。しかし今、明らかにそれよりも縮んでいた。

　高さ二五〇メートルの特別展望台。そこから上にあるはずの鉄塔およびアンテナ部分が消滅し、無惨な姿になっていた。

　護堂もふくめて、集まった人々はこの惨状に注目しているのだ。

「あのじいさんと俺のせいでえらいことになっても、原形は保ってたのになあ……」

　まわりの人たちは唖あ然ぜんとしていたり、携帯やデジカメで撮影したり、おびえていたり怒ったりという反応を見せている。

　そのなかでひとり護堂はため息をつき、東京タワーから離れていった。

　今度こそ七雄神社に向かう。タワー最上部の鉄塔およびアンテナ部分が消滅したのは、昨日の正午。大おお祓はらえの儀ぎが行われていた頃だという。

『何の前ぶれもなく、手品のように突然消えうせたんですよ。ご覧のとおり、マスコミ関係には「いきなりの崩落事故か⁉」なんて報道をさせてますし』

　タブレットで夜のニュースを流しながら、甘あま粕かすが教えて

くれたのだ。

『爆破テロの可能性まで疑う声もありますが。崩落や爆破にともなう爆発・爆音の類たぐいは確認されていません。それどころか、東京タワー近辺には一グラムの破片さえも落ちてはいない。まさに〝消滅〟したわけです』

『実はわれわれ委員会の手で調査した結果、原因は特定できています』

『狙撃です』

　事件の瞬間を撮影した動画が運よく入手できたのだという。

　東の方角から飛んできた〝何か〟が東京タワー最上部に突き刺さり、直後、鉄塔とアンテナを忽こつ然ぜんと消滅させた瞬間の――。

　甘粕の話を思い出しながら、護堂は七雄神社の境けい内だいにやってきた。

　すでに全員が集まっていた。巫女装しよう束ぞくをまとう祐ゆ理りと恵え那な。エリカとリリアナ。甘粕は昨夜のうちに〝出張先〟へ出向いたので、ここにはいない。

「お待ちしておりました、護堂さん。こちらへどうぞ」

　社やしろを守る媛ひめ巫み女ことして、珍しく祐理が仕切り役となった。

　彼女にうながされて、みんなで境内の奥まったところへ移動する。そこに敷かれたブルーシートの上に、奇妙な『矢』が置かれていた。

　長さ二メートルはあろう鋼鉄製の矢――。鉄てつ箭せんである。

「これは……。やはり、何らかの神性を宿しているようだな」

　長大な鉄箭を見て、リリアナがつぶやいた。霊視の力と魔女の見識を持つ彼女、こういうときの鑑かん定てい眼がんは並の魔術師よりも遥はるかに上なのだ。

「この箭やが東京タワーに突き刺さってたのか？」

「はい。調査員の方が強い呪力の残り香がを追いかけて、発見したそうです。どこまで上う手まくいくかはわかりませんが、私も〝視みて〟みようと思います」

　護堂の問いに、祐理はおごそかに答えてくれた。

　一方、エリカと恵那も鉄箭を眺めつつ、意見を口にする。

「神性……予想どおりではあるけど、今回も厄やつ介かいな事件になりそうだわ」

「まあ、甘粕さんの言ってた場所から『狙そ撃げき』なんて、どんな術を使っても人間には不可能だろうしねー。今度は弓の神様が出てきたのかな？」

　縁起でもない話に、なぜか護堂はハッとした。

　不意に旧きゆう敵てき——なつかしいペルセウスの名を思い出したのだ。あの男も弓使いだったからだろうか？　一方、そんな追憶も知らぬ祐理は白い手を鉄箭にかざす。

　たぐいまれな霊眼の持ち主は目をつむり、ぽつりぽつりと言葉を口にしはじめた。

「鋼はがね造づくりの箭やと弓……この弓を引くことがかなうのは勇士のみ……膂りよ力りよく無む双そう、不ふ撓とう不ふ屈くつ……流る浪ろうのさだめを背負う者……」

　さすがというべきか。祐理はみごとに霊視を得たようだ。

「大海を越え、幾百の島を通りすぎて、ついに故郷へ帰りつく……仇敵をその箭で射い貫ぬき、麗うるわしき妻を取りもどす彼……その名は——彼の名は……」

　まさかペルセウス？　護堂はどきりとした。

　あの目立ちたがりがリベンジのため日本へやってきた、とか？　しかし、彼ならもっとわかりやすく登場しそうなものだが——。

　考えながら託たく宣せんを待つ護堂の前で、祐理は目を開けた。

「これで精一杯のようです。この箭にかかわる神の御名、視みることはかないませんでした」

「上出来だよ。それだけ視てくれたら、いろいろ想像できるし」

　うなだれる媛巫女仲間を恵那がねぎらう。

「そうだなあ……恵那は『百ゆ合り若わか大臣』とかありそうに思うけど。祐理は？」

「私の口からはなんとも言いかねます。そう思えるところはたしかにいくつもありますが、やはりこの目で〝視えた〟わけではありませんので……」

　知識と推理ではなく、どこまでも感覚で神を捉とらえようとする。

　霊感にすぐれた巫女らしい祐理の答えに感心しつつ、護堂は口をはさんだ。

「悪い。そのなんとか大臣って、どんな神様なんだ？」

「ふつうの人は知らなくても不思議じゃないかな。もとは昔話の主人公でさ、昔は結構有名だったんだよ。歌か舞ぶ伎きにもなったくらいだし」

　恵那が答えると、祐理もすぐに言い添えてくれた。

「百合若大臣の説話は日本各地に広まり、さまざまな形で信仰にも結びつきました。彼に仕つかえた鷹たかを祀まつったり、彼の弓と箭を神宝とするお社もあるほどです」

「神話の英雄と同じくくりで考えていい殿様だよ。ほら、前の孫そん悟ご空くうと同じ」

　そして、媛巫女たちは百合若大臣の物語をざっくりと語ってくれた。

『武勇の誉ほまれ高い弓の名人で九州筑つく紫しの国司、百合若大臣。

彼は海を越えて異国に遠征した折、帰りの道中で部下に裏切られ、絶海の孤島に置き去りにされる。一方、百合若の領地に戻った部下は我わが物顔でやりたい放題。

百合若の妻・春かすが日姫ひめまで無理矢理めとろうと迫る始末。

しかし、苦難の末に島を脱出した百合若は、数年以上もの長い旅路を乗り越え、ついに帰郷する。彼は裏切った部下を弓で射殺し、妻と領地を取りもどす……』

結構、波は瀾らん万ばん丈じようの長編らしい。

そして、さっき祐理が語った霊視の内容とたしかに符合する。

「この殿様の言い伝えは九州に多いんだけどね。群ぐん馬まにも昔、百合若が遠くから箭やを撃って、妙みよう義ぎ山さんに大穴を開けたって伝承があるんだ。今回の事件と似てるかもね」

もうひとつ恵那が付け足す。知らなかった護堂は素直に感心した。

だが、微妙な顔で考えこむ者もふたりいる。エリカとリリアナだった。

「待って。祐理の霊視、日本の神を示したものと考えていいのかしら？　今の啓示に符合する英雄の名前、心当たりがあるわよ」

「エリカもか？　やはり、あれに似ていると？」

欧州の騎士たちは目くばせし合う。そして、いきなりエリカが暗唱した。

「ムーサよ、かの男の物語を謡うたい給たまえ。トロヤを陥かん落らくせしめたあと、流浪の旅に明けくれた機き略りやく縦じゆう横おうなる男の長き旅路を」

何かの物語の一節だろうか？　すぐにリリアナがあとを続ける。

「その知略ゆえ世にあまねく知られ、天にも届く彼の名は——」

「「オデュッセウス」」

　騎士たちの声がきれいにハモる。突然の共演に、日本人三名は目を丸くした。

「木馬の計略でトロヤを陥落させた武将で、イタケの領主。不撓不屈の勇士。『イリアス』とならぶギリシア神話の叙じょ事じ詩し『オデュッセイア』の主人公です」

　リリアナの告げた名に、護堂も聞き覚えはあった。もしかしたら、草薙家の蔵書に埋もれていたかもしれない。さらにエリカが言う。

「そっくりなのよ。その日本の英雄が流浪の末に帰郷して、弓矢で武勇を示すという話……オデュッセウスの物語に」

「えっ？」

　只ただの偶然じゃないかと言うには、さんざん神話や伝承が大陸各地へ伝でん播ぱしていくカラクリを聞かされてきた護堂である。

　もしかして百合若とやらも、ギリシア神話と関かかわりのある神様なのか――。

　媛巫女ふたりも驚いて、顔を見合わせている。とにかく、鉄箭から得た霊視だけでは犯人の名は解き明かせないようだ。こうなると犯行現場に行くしかない。

「ひとまず、甘粕さんと合流してみるか……」

　昨夜、正せい史し編へん纂さん委員が口にした地名、千葉県銚ちよう子しの犬いぬ吠ぼう埼さき。

　房ぼう総そう半島の端っこ、関東の最東端。この地から放たれた鉄箭が東京タワーの最上部をみごとに狙撃してみせた……。そう甘粕は語った。

　呪術まで駆使した委員会の調査が、狙撃場所を特定したのだ。

　犬吠埼から東京タワーまで、一〇〇キロ以上も隔へだたっているにもかかわらず。いかなる神技の使い手がこれを成したのか――。

厄やつ介かいな情報の数々に、眉まゆをひそめる護堂だった。

4

いつも運転手をしてくれる甘あま粕かすは、現地へ先乗りしている。

べつの誰かにその役を頼んでもよかったのだが。

恵え那なの口から「たまには駅弁とか食べたいかなー」発言が出た。さらにこの携行食を『日本の旅の風物詩』と説明されて、エリカとリリアナも興味を持つ。

最後に祐ゆ理りが、

「そういうお弁当があると、以前から聞きおよんではいました」

と、決意の表情で語るのを受けて、今回の移動方法は決定された。

七なな雄お神社を出て東京駅へ向かい、みんなで銚ちよう子し行きの特急列車に乗車したのである。

やはり年末の帰省シーズン。東京駅発の車内はそこそこ混こんでいた。

だが、幸いにもボックス席を確保できた。

「となると、どうやってすわるかが問題だよねー」

「護ご堂どうがどこにすわり、隣にいるのは誰か……そういうことよね」

「え、恵那さんもエリカさんも、そんなお話を立ったままされたら、ほかの方の迷惑になってしまいますよっ」

「でもさ。どうせだったら、恵那と祐理で王様の隣がいいでしょ？」

「あら恵那さん。すくなくとも護堂の右を譲ゆずるつもりは、わたしには——」

「……草くさ薙なぎ護堂。僭せん越えつながら、配置はわたしに決めさせていただきたいのですが」

　まずエリカ・護堂・恵那がすわり、その向かい側に祐理・リリアナという席順。

　銀髪の執事役がため息と共に指示した配列で、旅のはじまりとなった。

　途中、東京駅で買っておいたお弁当でランチもすませる。

　ちなみに、発案者の恵那は昨今珍しい冷凍ミカンまで買いこんでいて、にんまりと満足顔だった。駅弁は初めてという祐理は、あれこれ真剣に比較・吟ぎん味みした末に選んだ釜かま飯めし弁当を幸せそうに食べていた。

　護堂は幕ノ内系の駅弁を適当に選んだのだが、リリアナも同じ品だった。

「王の身辺を取りしきる者にとっては、主あるじが口にするものを自みずから確認するのも仕事のひとつです。……それに〝おそろい〟というのも悪くない気がしますし」

　と、リリアナは語っていた。

　はじめはキリッと生き真ま面じ目めに、途中から微妙に口元をゆるませつつ……。

　尚、食の冒険家となるチャンスを常に見逃さないエリカはといえば、『沖おき縄なわの幸さち・海ぶどうとゴーヤのサンドイッチ弁当』という異色の取り合わせを微妙な顔で味わっていた。

　やがて二時間程度の旅も終わり、五人は終点の銚子駅までやってきた。

　この駅から犬いぬ吠ぼう埼ざきまではすこし距離がある。

　現地の委員会スタッフに、車で迎えに来てもらう予定だった。

　護堂たちは待ち合わせ場所をめざして、銚子の駅前を歩いていった。

　歳末の漁港、そして漁師町である。もうすぐ正月休みで流通もストップする。漁業にたずさわる人々はまったりモードで就業中のはずだ。

　だが、やはり冬休みの観光シーズン。街はしっかりと活気づいていた。

　観光客も多く、地元のおみやげ屋や鮮魚店、海の幸を売りにする食べ物屋なども結構にぎわっていた。店先の呼び込みも景気がいい。

「――!?」

　リリアナがいきなりびくっとした。鮮魚店の前を通りがかったときだ。

　カジキの切り身、寒かんサバ、寒ブリ、金きん目め鯛だいなど。冬の銚子沖で捕れたのであろう地じの魚が店先にならんでいた。

「あれ？　リリアナさんって、魚とかダメな人だっけ？」

「まさか。わたしは海の幸なら、たいていのものはいける口だ」

　不ふ審しんに思ったらしい恵那に問われて、リリアナは即答した。

　イタリアをはじめとする南欧の国々では、地ち中ちゆう海かいの豊かな恵みを常食する。シーフードに慣れ親しんでいるのは当たり前の話だ。

　しかし、リリアナはやや怯おびえの入った視線で店先を探るように見つめていた。

　そこには巨大な深海魚がつり下げられていた。

　アンコウだった。体長は一メートル半近い。そばに店主らしきおじさんがいて、大声をはりあげている。これから切りさばいて小売りするという。

　漁師町の鮮魚店らしい、豪快な実演販売だった。

「あれがどうかしたのか？」

　護堂が訊たずねると、リリアナは思いつめた感じの困り顔になった。

「い、いえ……今、店の主が叫んでいるのはおそらくあれの名前。昨日、甘粕冬とう馬まがごちそうすると言った魚の名と同じに思えたので……」

「ああアンコウ鍋なべ。そういや言ってたな」

　昨夜、甘粕は護堂らと話したあと、騎士たちにも同じ誘いをしにいったのだ。

　すると、横でいきなりエリカが微笑ほほえんだ。

「勘かんちがいじゃないわよ。甘粕さん、たしかに昨夜言ったわ。あれの鍋料理をみんなで楽しまないかって。ふふ、なかなか刺激的な体験になりそうね、リリィ」

　当然のことながら、エリカの笑顔は魔女の邪じや悪あくさに満ちていた。

「あのぶよぶよと波打つゼラチン質の名めい状じようしがたい肉体……だらしなくネバネバと弛し緩かんして、それでいて恐るべき形を保ち、窖あなぐらのように大きく口が裂けた生き物——あれを今夜わたしたちは味わうのよ。おたがい、覚悟を決めておきましょう？」

　エリカが妙に凝こった言いまわしで深海魚の外見を語る。

　まるで宇宙的恐怖コズミックホラーを体現する邪神の落とし子のような描写だ。リリアナはそんな旧友から目をそむけ、凛り々りしく言った。

「な、何を言う。覚悟などしなくても、わたしはこの程度のことで怯ひるんだりはしない。どんな食材も、口にしてみなくては好みかどうかもわからないしなっ」

　と、リリアナは足を速め、一行の先頭に躍おどり出た。さっさと

歩いていく。その背中を追いかけながら、護堂たち四人はこっそりつぶやいた。

「リリアナはキワモノっぽい食べ物が結構苦手みたいだな……」

「でも、まじめだから一回は必ず食べてみようとがんばるのよ♪」

「エリカさん。それをご存じなら、今みたいなイタズラは自じ重ちようなさるべきです」

「まあ、でも、海の食べ物って最初に誰が食べたんだってやつ、たまにあるよねえ。クチコとかを見つけた人はちょっと変だと思うなー」

「たしかナマコの卵巣だっけか……」

その後、待ち合わせ場所の交差点で委員会のスタッフと落ち合うことができた。

てっきり甘粕かと思えば、初対面の男性だった。沙さ耶やの宮みや家け直じき参さんである旧知の正せい史し編へん纂さん委員は、昨夜から徹夜であちこち駆けまわっているという。

甘粕の苦労に同情しつつ、護堂たちは車に乗せてもらい、目的地にやってきた。

——君きみヶが浜はまである。

美しい砂浜だった。関東最東端となる犬吠埼の灯台にも近い。みごとな松林でかこまれ、公園にもなっている。

ここは現在、正史編纂委員会と地元警察によって封鎖されていた。

黄色いテープによって立ち入り禁止の区切りをされた場所の奥深くへと、護堂と四人の女子たちは案内される。

君ヶ浜から眺める冬の太平洋はかなり荒れていた。

波が高い。このあたりは夏でも遊泳禁止なのだという。

そして、問題の物品は白い砂浜の一角に突き刺さっていた。鋼鉄

製の弓である。長さ五メートルはあり、人間が使うには規格外のサイズだといえた。

　剣でも刺すようにして、この長大な鉄てつ弓きゅうが砂に突き立てられていた。

　この君ヶ浜こそ、正史編纂委員会が割り出した『狙そ撃げき地点』。ここから東京タワーに向けて、あの鉄てつ箭せんは射出された。

　そして、緊急調査に訪れた委員会スタッフがこの弓を発見したのだ。

「あの箭やと対ついになる神性をたしかに感じるが……」

　リリアナが思案顔でつぶやいた。霊視で何かを感じ取ったようだ。

「神具というほどの力はなさそうだし、なんらかの軍神が使ったものにしては、神の気配があまりに弱い気もするな」

「弓を使う神獣か半神でも、ここに降こう臨りんしたのかしらね？」

　旧友兼ライバルのコメントにエリカがあいづちを打つ。一方、もうひとりの霊視力者は長大な鉄弓を眺めてから、怪け訝げんそうに太平洋を眺めていた。

「どうしたの、祐理？」

「あ、はい。さきほど視みえた、流る浪ろうする勇士の御姿――あれと同じものをこの弓からも感じます。ですが、それとはべつに気になる感じが……」

　媛巫女仲間に問われて、祐理はおずおずと言った。

「光り輝くもの――とでも言えばよいのでしょうか？　わずかにですが、光に属する神性を感じるんです」

「もしかして東方より来きたる光……太陽の神性かもしれないと？」

　めざとくエリカが言った。そういえば、祐理が見つめる太平洋は『東』の方角だ。

「考えてみたら、今回の件には太陽を連想させる要素がいくつもあるわね。東京タワーが狙撃されたのは〝正午〟、太陽が最も高く昇るとき。そして、この浜は関東で最も〝東〟に位置する場所……」

「あとは百ゆ合り若わかの殿様とオデュッセウスのことだね」

　恵那も指摘して、金髪の女騎士とうなずき合う。

　日本の民話と酷こく似じしているらしいギリシアの英えい雄ゆう譚たん。列車の旅の途中、エリカとリリアナが暇ひまつぶしに語ってくれた内容を護堂は思い出した。

『トロヤの都を陥かん落らくさせたアカイア軍の武将、オデュッセウス。

　彼は海神の怒りを受けて、絶海の孤島に足止めされる。その頃、彼の領地だったイタケではかつての部下たちがやりたい放題。財産を奪い、オデュッセウスの妻ペネロペにまで夫は死んだから自分たちの誰かと再婚せよと迫る始末。

　オデュッセウスは神々の加護によって、ようやく島を抜け出す。

　長い流浪の末に故郷へ戻った彼は、狼ろう藉ぜき三ざん昧まいの元部下たちを弓で皆殺しにして、領地と妻を取りもどす——』

　たしかによく似た話だった。

　長さ五メートルの鉄弓。規格外の武器を眺めながら、エリカがつぶやく。

「そういえばオデュッセウスの弓——。あれも、剛ごう力りき無む双そうの彼しか引くことのできない強弓だったわね。何人もの戦士が必死に試ためしても、誰も使いこなせなかった……」

　このとき、ポケットで護堂の携帯電話が震えた。

甘粕からの電話だった。どうやら体が空いたらしい。このまま海辺で話していても埒らちがあかないので、彼も交えて今後の方針を考えよう……。

と考えて、電話に出ようとしたとき。

護堂はいやな気配を感じた。まるで誰かに見られているような――。

周囲を見まわす。仲間の女子たちが不思議そうにこちらを眺めているだけだった。委員会や警察関係者は遠くにおり、こちらを見ている人間など皆無。気のせいか？

護堂は頭を振り、あらためて電話へ出ることにした。

5

甘あま粕かすが待つという今夜の宿へ、護ご堂どうたちは送ってもらったのだが。

旅館のロビーで再会した待ち人は、まず開口一番に告げた。

ここは関東の最東端・犬いぬ吠ぼう埼ざきのシーサイド。みごとなオーシャンビューの景観を誇る温泉スパリゾートが近くにあるのだと。

「年の瀬でもありますし、ちょっと寄っていきましょうよ。私、そちらのタイ式・韓国式・グァム式・チュニジア式マッサージの全てを満まん喫きつできるという魅み惑わくのリラクゼーションコーナーにひどく惹ひかれているんです」

と、言い添えるおまけつきで。

園遊会があった日の夜、強行軍でここ犬吠埼に出張し、今まで調査や情報操作の指揮をとっていた昼ひる行あん灯どんのエージェント。ふだんよりもさらに覇は気きがない。

甘粕に気を遣つかい、護堂は「いいですよ」と即答した。

そして、しばらくのち。

太平洋を望む温泉スパの大浴場。西日で大おお海うな原ばらが紅くれないに染まっている。

ちょうど夕暮れ時なのだ。そして「ふぃぃぃぃ」と幸せそうな吐息もはきだされ――

「これだけ舞台をととのえておいて、おまえらかよって言われそうですねー」

「どうかしましたか、甘粕さん？」

そろって湯につかりながら、護堂は同伴者のつぶやきに首をかしげた。

当然にして必然な状況ではあるが、ふたりとも裸であった。

「いえ、なんとなく温泉回の定型美を踏とう襲しゅうしないとまずい気がしたもので……。それはともかく『百ゆ合り若わか大だい臣じんはオデュッセウス也なり』ですか。ははあ、坪つぼ内うち逍しよう遙ようですな」

昼間、女子たちがしていた話。

護堂が湯のなかで伝えたら、甘粕はなぜか人名を口にした。

「坪内……明めい治じ時代の文豪でしたっけ、その人？」

「ええ。実はですね、百合若説話とオデュッセウス譚たんの類るい似じを最初に指摘したの、この人なんですよ。で、『近世日本にホメロスの叙じよ事じ詩しが伝わり、それを翻ほん案あんした結果、百合若物語は生まれたのだ！』と発表したわけです」

やや熱めの湯につかり、のんびりくつろぎながら、甘粕はうんちくを語る。

さすがにメガネはかけてない。意外と切れ長の澄んだ瞳ひとみであった。また、裸になるとよくわかるのだが、甘粕はかなり鍛きたえられている。

体脂肪率おそらく一ひと桁けた台。訓練されたボクサーを彷ほう

彿ふつさせる体つき。

　このあたり、さすが『マスターニンジャ』というべき一面かもしれない。

「当時は学会でも持てはやされたそうですねェ。多くの賛同者も生まれたとか」

「……当時は？」

　甘粕の微妙な言いまわしを、護堂は聞きとがめた。

「ええ。この説、検証の末に否定されまして。さすがに『オデュッセイア』が近世以前の日本に来ていたと証明するのは無理ですよ。そりゃ宣せん教きよう師しの誰かとか、中国や海のシルクロード経由で船乗りが持ってきたとか、妄もう想そうはいくらでも広げられますけど」

　博識なエージェントは苦笑しつつ語ってくれた。

「それに、もっと無理のない伝でん播ぱルートがありますから。たぶん、私たちや草くさ薙なぎさんにはおなじみのやつがね。でも祐ゆ理りさんから、そんな情報が出てきましたか……」

　甘粕が渋い顔をしたので、護堂は不安になった。

「これって、まずい話なんですか？」

「まずくなっても不思議じゃないです。ま、夕食のときにくわしくお話ししましょう」

「わかりました。ところで今夜のことですけど……当てにしていいんですよね？」

　実は護堂と甘粕、同じ部屋に泊まる予定である。

　この件へ協力する条件として要請したのだ。あの、うかつにもロンドン行きで犯したミスを繰りかえさないために。心安らかな旅の夜を迎えるために。わけのわからない理由に押し切られて、女子たちとの相部屋を受けいれないために。

　念願かなって、今夜の部屋割りはまったく妥だ当とうなもので

あった。

　女子たちはエリカとリリアナ、祐理と恵那の組み合わせだ。

「ええ、まあ。でも草薙さん」

　甘粕は曖あい昧まいにうなずいてから、不思議そうに首をかしげた。

「その辺のこと、今さら気にしなくてもいいんじゃないですかね？　とっととなるようになった方がいろいろ潔いさぎよい気もしますよ？」

「あ、甘粕さんは唯ゆい一いつの大人なんだから、そういう問題にも気を遣つかってくださいよ！」

　大浴場でくつろぐ男ふたりの模様であった。

　さて、ところは移り――。

　温泉スパリゾート内の露天風呂。夕陽で紅に染まる太平洋を一望できる、オーシャンビューの絶景。風と空気は冷たいが、温泉の熱気で体が冷えることはない。

「ふぅ……」

　熱いお湯につかりながら、エリカが吐と息いきを洩もらす。

　こちらでくつろぐのは、今度こそ四人の女子たちであった。

「海辺の野外浴場というのもなかなかいいものね」

　みごとな脚線美の長い両足を湯のなかで組み替える。

　エリカは今、身も心も力を抜いて、ゆったりと癒いやしの時を過ごしていた。

　岸壁を打つ潮しお騒さいの響き、空気に交じる潮の匂におい、あざやかな夕焼けで紅に染まる海原――どれも日常の入浴では味わえないものばかりだ。

「冬でもこうしていると十分あたたかいし、開放感があっていいわ」

「前にみんなで入った日につ光こうの温泉は中ちゆう禅ぜん寺じ湖こ……あれは山の湖のそばだったから、だいぶ雰囲気がちがうよねー」

　エリカの評に恵え那ながあいづちを打つ。

　イタリアと日本。南なん欧おうと極きよく東とう。生まれた国はおそろしく離れている同士。

　だが、彼女たちのみごとに発育した肢し体たいのボリューム感はほぼ互角であった。まあ、ややエリカの方がところどころで勝っているかもしれない。

　だが、それは厳密に測定して、はじめてわかる数値上の問題。

　ぱっと見た人間が得る印象はまさに『互角』であろう。豊かな胸の盛り上がりといい、きゅっとくびれたウェストといい、腰つきの線が描く丸みとなまめかしさといい、エリカ・ブランデッリと清せい秋しゆう院いん恵那はまさしく互角の逸いつ材ざい同士であった。

「日光の温泉では……本当に大変でした」

　祐理が湯のなかで赤面していた。

　湯の熱さよりも、あのときの顛てん末まつを思い出したことが原因だった。

「や、やっぱりああいう行為はよくないことだと思いますっ。明らかにやりすぎだったといいますか。恵那さんもエリカさんも、あんまり変なふうに張り合わないでくださいね……」

　差しゆう恥ちと共に注意をうながす祐理。

　その対象である二名よりも、ボリューム感では印象のうすい体つきだ。

　しかし、だからといって貧相なのではない。むしろ逆。胸も腰のあたりも十分に発育し、女性として申し分のない丸みとやわらかさ

に恵まれている。

　メリハリのある体つき。だが同時に華きや奢しやでもあった。

　祐理の肢体は十分以上に肉感的でありながら、華奢なほど線の細い印象なのだ。

　同じ女性が見た場合、エリカや恵那の蠱こ惑わく的てきなボリューム感よりも、祐理の起き伏ふくに富とみながらもすらりとした印象が強い絶妙な体つきにため息をつくかもしれない。

「まあ、このふたりに自じ粛しゆくをうながすより……」

　しみじみとつぶやいたのは、リリアナだった。

　東欧の血にふさわしい白はく磁じの肌は、湯の熱さでわずかに紅こう潮ちようしている。

「わたしと万ま里り谷や祐理で目を光らせて、同じあやまちが繰りかえされないよう、注意する方が建設的かもしれないがな」

　ここにいる四人のなかでは、リリアナは最も肉付きがうすかった。

　しかし、その代わりにどこかあやうい妖精めいた魅力がある。女性というよりも『少女』と呼ぶべき華奢で繊せん細さいな体つき。透すきとおるように肌は白く、人形めいてさえいる。

　その未成熟さ、儚はかなさゆえに人を惹ひきつけ、蠱惑する。

　だが、本人はその事実にまったく無自覚で、そして、それゆえにいっそう求心力が増しているという無意識の美と妖あやしさであった――。

　ともあれ、各おの々おのがそれぞれの美点を持つ四人の女子。

　彼女たちは冬の海の温泉というシチュエーションを満まん喫きつし、この一年――特に口だけは良識派のくせにすさまじく傍はた迷めい惑わくな男とのつきあいで疲れた体を憩いこわせていたのだが。

　いきなり恵那が言った。

「そうだ、祐理。もしよかったら……今夜でもいいんだけど、そのうち王様の寝てるところにふたりでお邪じゃ魔ましてさ。試ためしに――あれをしてみない？」

「あれ？　といいますと？」

　肝心のところをぼかされて、祐理は首をかしげた。

「ほら、あれ。ちょっと言いにくいんだけどさ。すこし耳貸して」

「あ、はい――え!?」

　ごにょごにょと恵那にささやかれ、祐理の表情が凍りつく。

「よ、よば――!?」

「うん。まあ、そんな感じのやつ。前に言ったでしょ、王様に一度断られたって」

「あれか。わたしと万里谷祐理が石にされていたとき、草薙護堂に迫ったという……」

　リリアナが苦い顔をすると、エリカも眉まゆをひそめた。

「……恵那さん、いつのまにそこまで。ほんと、こういうことには意外と消極的なくせに、ときどきびっくりするほど大胆になるわね……」

　いつもより優雅さが若じゃっ干かん足りない口調であった。

　エリカ・ブランデッリと好対照のライバルという点では、やはり紅あかと青の一対であるリリアナこそが第一人者だ。しかし最近、清秋院恵那という新たな強敵がなんとも直感的なアプローチでエリカの才気をたびたび脅おびやかす。

　リリアナとはまた異なるベクトルでの、エリカとは対照的な強敵。

　その存在にほんのすこしだけ心をかき乱されて、ときどきこんな物言いになるのだ。

「でもさ、あのあと考えたんだけどね」

　一方、競争相手の心の機き微びにも気づかず、恵那は残念そうに言う。

「たしかに一度は断られたけど……いつまでも待つよって言ったけど。王様のことだし」

　しみじみとした語り口は、当とう該がい人物への情愛と理解ゆえであった。

「何かの拍ひよう子しにもっとべつの形で盛りあがって、そこに恵那とか祐理が上う手まくはまり込むことができたら——。意外とあっさり、なるようになるんじゃないかなーって」

「「「…………」」」

　恵那の述じゆつ懐かいを聞いて、残りの三人はしばし沈ちん思し黙もつ考こうした。

「そこはやはり、草薙護堂だからな」

「護堂さんのことですし」

「ああいう人だもの。前に言ったことをその場の勢いで棚上げして、心の昂たかぶりにまかせて行動する……。十分ありうる話ね」

「まあ、ほかのよくわからない女が相手なら大丈夫だろうけどさ」

「このなかの誰かが相手なら、決して低くはない確率に思えるな……」

「思えますね……。自制心がないとかでは全然ないのに、びっくりするくらい走り出したら止まらない人ですし……」

「ほんと、王様って変な人だよねえ。そこが面白いんだけど」

　四人の見解はつつがなく一致し、全員同時にうなずき合った。

　尚、このとき男湯の大浴場にいた草薙護堂が教科書どおりにくしゃみのひとつでもしたかは、まったく定かではない——。

　そして、ふたたびところは移る。

　まず、夕焼けで赤々と染められた君きみヶが浜はま。

　砂浜に突き立てられた鉄てつ弓きゆうには、微妙な変化が生じていた。鋼はがねを素材とする長大な弓、その弦がかすかに燦きらめいていたのである。

　それは西日の明るさにまぎれると、まったく目立たない程度の輝きだった。

　だから周囲にいる正史編纂委員会のスタッフも、地元警察や消防の人間も気づいてはいなかった。また、陸地をはなれところでも異変は起きていた。

　日本列島の太平洋側を流れる海流・黒くろ潮しお。

　この流れに乗って、珊さん瑚ご礁しように似た巨大な何かが沖縄方面から北上しつつあったのだ。

　北へ。北へ。まだ見ぬ標的を求めて――。

　これはもちろん、護堂たちが知るよしもない情報であった。

第３章　弓と箭と神獣到来

1

　温泉スパに寄ったあと、護ご堂どうたちは旅館にもどってきた。

　一時間ほどして、夕食がはじまる。夜の食事は部屋まで持ってきてくれるというので、護堂と甘あま粕かすの男部屋にみんなで集まっていた。

　この旅館は全て和室だった。全員、宿の浴衣ゆかたに着替えている。

　長テーブルにならぶ夕ゆう餉げの品々は、やはり海の幸が多い。

　刺身の盛り合わせ、寒かんサバの塩焼き、金きん目め鯛だいの煮付け――そうした魚料理が食卓を彩いろどり、脇わきには炊きたてごはんのおひつがひかえている。

　だが、主役として最もスペースを取る品がほかにあった。

　ガスコンロの上でぐつぐつ煮こまれている、大きめの土ど鍋なべである。

　甘粕が予約しておいたというアンコウ鍋だった。この魚の漁場としては茨いばら城き県の大おお洗あらいが有名だが、ここ銚ちよう子しでもいいアンコウが捕れるらしい。

「冬の鍋といえばフグやタラですけど、私、こっちも好きなんですよ」

　と、甘粕がのんきに申告する。

「そろそろよさそうですね」

　いい塩あん梅ばいと見たか、祐ゆ理りが鍋のフタを取った。

　大量の湯気がふわっと立ちのぼり、食欲を刺激する味み噌その匂においも漂ってきた。祐理と恵え那な、そして護ご堂どうの日本組は自然と笑顔になった。

　やはり、大勢で鍋をかこむのには独特の楽しさがある。

　一方、ふたりの海外組はバラバラだった。リリアナは今から命がけの試練に臨のぞむところという感じの、思いつめた顔である。

　エリカはといえば、貴婦人らしく澄まし顔を保とうとしているようだった。

　だが期待を抑おさえきれないのか、彼女の目は爛らん々らんと輝いていた。

「昼間、実物を見たときから、好奇心を刺激されて仕方がなかったわ。あんな見た目の魚がどれだけすさまじい味なのか、確認してあげないとね……」

　胡う乱ろんなことをつぶやいている。

　舌も肥こえているし、ふだんの食事には結構うるさく注文もつける。だが、エリカは非日常の食には、美味よりもインプレッションを要求する女なのだ。

　しかし、そういう方面で紅き悪魔デイアヴオロ・ロツソを満足させる料理が『名物』になるだろうか？



　護堂は疑問に思ったが、あえて口にしなかった。

　食べればすぐにわかることだ。代わりにリリアナを見る。本来なら、こういうとき鍋なべ奉ぶ行ぎようでもしそうな彼女だが、今回は鍋を見つめるばかりだった。

「ほかのお料理もあることですし、無理に食べなくても……」

　気を利かせて祐理が声をかける。だが、リリアナは凛り々りしい声で答えた。

「い、いや。口もつけないで料理を避けるような真ま似ね、やはり騎士にはふさわしくない。万ま里り谷や祐理、適当に盛りつけてくれ」

　自分の手では取らず、祐理に頼むあたりがやや往おう生じよう際ぎわ悪くはあった。

　だが、媛ひめ巫み女こが甲か斐い甲が斐いしくよそってくれた取り皿をリリアナは毅き然ぜんとして受け取り、そのなかでぷるぷる震えるゼラチン質を覚悟の表情で見つめ、箸はしでつまんで口に運び——

「あ、なんだ。ふつうに美お味いしいじゃないか」

　あっさり言って、あとはパクパクとふつうに食べはじめた。

「そうそう。肝きもが人気だっていうけど、恵那は頬ほおの肉が好きかな。刺身も焼いたのも美味しいよ。この時期、熱あつ燗かんくいっとやりながら一度は食べたいよねー」

「言っとくけどな、清せい秋しゆう院いん。この面メン子ツで酒飲んでいいのは甘粕さんだけだぞ……」

　不届きな好みをお気楽に語る恵那へ、護堂は念のため釘くぎを刺す。

　このふたりの前にも、祐理が鍋から具をよそって、取り皿を置いてくれた。七つ道具と呼ばれる部位——肝・身肉・胃袋・皮・卵巣・えら・ひれが各員になるべく均等に行きわたるよう配慮しているのが、見ていて察せられた。

祐理らしいといえる、さりげない気き遣づかいだった。

一方、甘粕はマイペースでゼラチン質の身を口に運んでいる。

瓶びんビールも空けて晩ばん酌しやく状態であるところを見ると、今夜はもう仕事をする気はないのかもしれない。そして、もうひとり。

エリカがむずかしい顔で、銚子沖の海底ではぐくまれた美味を味わっていた。

「結構わたし好みの味だわ。ただ、期待していたのとはすこしちがうけど」

美味しい料理にケチをつける。ある意味、食通らしい言いぐさだった。

そのまま夕食は進む。途中から気を取りなおしたリリアナは、鍋の締しめとなる雑ぞう炊すいを祐理といっしょに作り、それをみんなで味わって——

一段落したところで護堂は言った。

「そういえば甘粕さん、さっきの話ですけど」

「ええ、百ゆ合り若わか説話やオデュッセウスの四よ方も山やま話ですね」

千ち葉ばの地酒を飲んでいたエージェントは、手て酌じやくで杯さかずきを満たしながらつぶやいた。

酒が入っている割に、まったくいつもどおりの声と表情だ。

「結局、オデュッセウスの冒険譚たんに類似した物語は大陸中にあるんですよ」

うんちくを語る口調もいつもどおり。

どうやら、瓶ビール一本と日本酒二合くらいではまったく酔わないらしい。

「ヨーロッパの各地にオデュッセウスの叙じよ事じ詩しと似た物語

があるのは知っていたけど……もしかして、アジアの方でもそうなの？」

　エリカが訊たずねると、甘粕は「ええ」と答えた。

「日本の百合若大臣、中国の薛せつ平へい貴き。仏教説話にも似たような境遇の王子さまが出てきますし、あと韓国や東南アジア、インドにも類似の英雄はいます」

　ちびちび酒杯をかたむけながら、甘粕はスケールの大きな話を語る。

「オデュッセウス——彼の原型となった英雄の物語は、おそらく民族移動や文化交流によって大陸各地に広まっていったのでしょう。いわば、汎はんユーラシア的な物語なんですよ」

　汎ユーラシア。ヨーロッパからアジアまで、あまねく駆け抜けた存在。

　この解説に、エリカは眉まゆをひそめた。

「つまり、洋の東西にまたがる英雄というわけね」

「黒王子殿がおっしゃった『最後の王』の特徴ですね。ええ、祐理さんの啓けい示じで私もそれを思い出しました。もしかしたら、あるいはってね」

　魔王殲せん滅めつの英雄がついに再臨したのでは？

　物騒な可能性を語った甘粕。だが、直後に肩をすくめて苦笑した。

「とはいえ、言ってしまえばこれは憶測です。杞き憂ゆうに終わる可能性も高い。今の時点であれこれ悩んでも仕方ないともいえますねえ。叙事詩を見るかぎり、オデュッセウスはあまり《鋼はがね》らしい特徴を持ちませんし」

「たしかに。まだ『最後の王』をどうこう言う段階でもないか……」

　リリアナが腕組みしながら、つぶやく。

「ええ。ひとまず今夜はのんびりやって、明日から本格的な調査と洒落しやれこみましょうか」

「じゃあ甘粕さん。いきなりだけど、これからの話をしてもいいかしら？」

　ふふっとあやしく微笑ほほえんで、エリカが持ちかけた。

「たとえば夜遅くに部屋からいなくなるような配慮、期待してもいいのか、とか」

　この相談に護堂はぎょっとして、甘粕は「ほう」とつぶやいた。

「つまり、あれですか。修学旅行で彼氏彼女に気を利きかす感じで」

「察しがよくて助かるわ」

「ですが、今回は特に草くさ薙なぎさんから頼まれて、同室となるわけです。天下の魔王さま直じき々じきの要請、反ほ故ごにするのはなかなか度胸がいりますねえ」

「そこはほら。日本の伝統で報むくいることもできるわよ。たしかお歳せい暮ぼ？」

「ほうほう、それはそれは」

「もしくはヨーロッパのどこかに招待して、一週間ほどくつろいでもらうとか」

「ちょうど有給休暇がたまりにたまっているところです」

　雌め狐ぎつねと古ふる狸だぬきばりにやりとりする、エリカと甘粕。

　ふたりが妙に会話をはずませていると、そこに割りこむ者も現れた。

「あ。じゃあさ、甘粕さんは海のものと山のもの、どっちが好き？　その話、恵那も一枚噛かませてよ。実家に来てたお歳暮から、いろいろ見つくろうからさ」

「ほほう。清秋院本家宛あての品ですか。かなり期待できそうですな」

　なんと恵那まで。この流れはすこし都合が悪そうな……。

　護堂があわてて口をはさもうとしたとき、先にリリアナが苦言を呈した。

「甘粕冬とう馬ま。変な悪ノリをして、その気にさせるな。このふたりの場合、本気であなたに便べん宜ぎをはかりかねないぞ」

「いや、それはそれでウェルカムなんですが」

　甘粕は苦笑して、まだ発言していない女子に目を向けた。

「そろそろやめないと、祐理さんからもお小言をいただきかねませんかね。……って、どうかしましたか、祐理さん？」

　見れば、祐理は窓の方をぼうっとした顔で眺めている。護堂も声をかけた。

「万里谷？」

「……あ。申し訳ありません。何の話でしょう？」

　ハッと我われに返って、祐理があやまる。すると恵那が訊たずねた。

「もしかして、何か視みえたりした？」

「は、はい。つい今しがた、海の方から不吉な気配を感じたもので」

　護堂も窓の方を見た。暖房と鍋であたたまった室内と、真冬の外気の温度差。そのせいで窓ガラスには水滴がびっしり結けつ露ろしていた。

　この旅館はさっきの温泉スパと同じで、海に面している。

　各部屋から太平洋を一望できるのが売りらしい。窓の外はすぐ海であった。

「不吉……具体的に何か視えたりしましたか？」

「そうですね……なんとなくですが。南の方から海の流れに乗って、とてつもなく危険な存在がこのあたりに流れてくるような気がして——」

　やや真剣さの増した顔で確認する甘粕に、媛巫女は自信なさげに言う。

　しかし、護堂は身が引きしまるのを感じた。このメンバーで祐理の『なんとなく』を無視できる者などいはしないのだ。

2

「だとしたら万一にそなえて、例の現場に詰めていた方がいいのかな……」

　折からの託たく宣せんに、甘あま粕かすが思案顔でつぶやいた。

「その方が情報も早いですしね。じゃ、草くさ薙なぎさん。帰りは遅くなると思いますから、どうぞ遠慮なく先におやすみください」

　唐とう突とつな報しらせに護ご堂どうは「えっ？」と驚いた。

「お、遅いって、どれくらい？」

「まあ、可能であれば明け方頃には。無理であれば、そのまま現場に泊まりこみで」

　それでは男部屋計画が台なしだ。今の発言でエリカが優雅に微笑ほほえんでいる。

　愕がく然ぜんとする護堂へ、昼ひる行あん灯どんが売りのエージェントは勇気づけるように微笑みかけた。

「むずかしく考える必要ありませんよ。案ずるより産むが易やすしです」

「ど、どういう意味でしょう……？」

「今夜のあれこれがきっかけでジュニア誕生、しかも四人まとめて

——とかになっても、われわれ委員会は全力で子育てをサポートしますから。気にせずやっちゃってください！」

「何バカなこと言ってんですかっ。俺もいっしょに行きますよ！」

　というわけで、一時間後。

　身支度をととのえて、護堂たちはふたたび君きみヶが浜はまを再訪した。

　今度は甘粕もいっしょにいる。ちなみに、唯ゆい一いつの運転免許所持者が飲酒していたので、委員会のスタッフに車で迎えに来てもらった。

　時刻は午後九時すぎ。夜もとっぷり更ふけている。

　封ふう鎖さされた海岸に入りこむと、甘粕はすぐに同僚の委員会関係者がたむろしている方へ歩いていく。一方、護堂のそばでは祐ゆ理りが「あ——」とつぶやいた。

「どうした、万ま里り谷や？」

「昼間よりも強くなっています……。ええ、まちがいありません」

　断言するなり、媛ひめ巫み女こは駆け出す。

　護堂は仲間たちに目くばせした。エリカ・恵え那な・リリアナといっしょに追いかける。祐理がめざしているのは、例の鉄てつ弓きゅうが刺さっているはずの場所だった。

　——砂浜に突き立てられた、鋼鉄造りの弓。

　息を荒らげる祐理と追いついた四人は、この鉄弓をじっくりと見つめた。

「神の気配が強くなっている……？」

　リリアナがささやいた瞬間、護堂はいやな気配を感じた。見られている？

　そういえば、昼間も同じ感覚を味わった。

あのときよりもはっきりと視線——否いな、『敵』の存在を確信できる。危険と戦いには動物的に鋭えい敏びんなカンピオーネの勘かんにまかせて、護堂は長大な鉄弓をにらみつけた。

まちがいない。弓のうしろに〝何か〟がいる！

「この弓を引くことがかなうのは、流る浪ろうのさだめを背負う英雄のみ……」

不意に祐理がささやいた。彼女にも『敵』が視みえているのだ。

「箭やが放たれるのは、その膂りょ力りょくと武勇を世に示すとき——護堂さん！」

直後、弓の背後に人の形をした影が忽こつ然ぜんと顕あらわれた。

輪りん郭かくのはっきりしない、もやもやとした青い人影——。背せ丈たけは五メートルほどで、この鉄弓に負けないほど大きい。あからさまに只ただ者ものではない。

だが、カンピオーネの心身は戦闘態勢に移らなかった。

神にゆかりの弓と箭を使う者であっても、『まつろわぬ神』ではないようだ。

人影の左手らしき部位が鉄弓を無造作につかむ。

そして、右手の方には箭やが出現する。長さ約二メートル。東京タワーで発見されたのと同じ、槍やりのように長大な鉄てつ箭せんだった。

人影は鉄箭をゆっくりと鉄弓につがえ、引きしぼっていく。草くさ薙なぎ護堂に向けて！

距離は一〇メートルもない。一〇〇キロの狙そ撃げきを成功させる射手にとっては、まちいがいなく必殺必中の間合いだろう。

その瞬間、エリカとリリアナが動いた。

「祐理、さがっていなさい！」

「草薙護堂、あなたも気をつけて！」

　エリカは獅し子しの魔剣を呼んで祐理に指示。リリアナもイル・マエストロを呼びつつ叫ぶ。

　この声にうなずき、護堂は走りはじめた。

　謎なぞの人影めがけて猛然と。警告を無視するような行動。しかし、これでいいのだ。

　東京タワーの最上部を消滅させたほどの鉄箭。そばにいる仲間たちまで威力に巻きこまれるかもしれない。それくらいなら、彼女たちから離れるべきだ。

　実際、護堂ひとりなら箭で撃たれても『鳳おおとり』の化け身しんで対応できる――。

　人影はついに鉄弓の弦つるを限界まで引きしぼった。

　槍やりの穂先のごとき鉄箭の鏃やじりが、護堂の額ひたいにぴたりと狙ねらいを定めている。

「天あまの叢むら雲くも、王様をおねがい！」

　このとき、うしろから恵那が叫んだ。

　直後、護堂の右腕に神刀・天あまの叢むら雲くもの劍つるぎが忽然と顕れた。恵那がとっさに相棒を緊急出動させてくれたのだ。

　同時に人影は指から箭を放し、ついに撃つ。

　ヒュンと飛んでくる鉄箭。これを護堂――ではなく、右腕と天叢雲劍が勝手に動き、払いのけてくれた。『キン！』と甲かん高だかい金属音が響く。

　剣術など知らない護堂には、できるはずのない防御。

　だが、恵那が天叢雲劍を遠隔操作してくれるなら、話はべつだ。

　仲間の助けで命を拾った護堂は、右手の力をゆるめた。そして「頼む！」と天叢雲劍に攻撃の意思を伝える。

　すると〝相棒〟は護堂の手から踊り出て、弓持つ人影に飛んで

いった。

　敵のお株を奪う、神刀を『矢』とする反撃。これが意外なほどあっさりと決まった。天叢雲劍の切っ先は人影の胸あたりをみごと貫つらぬく。

　この一ひと太た刀ちで、輪りん郭かくのはっきりしない人影は消滅してしまった。

　霧が朝日を浴びて晴れるように、すーっと雲うん散さん霧む消しようしたのである。『どさっ』という音がする。使い手を失い、巨大な鉄弓が砂の上に落ちたのだ。

「何だったんだ、あいつは……」

　無造作に転がる鉄弓を見て、護堂はつぶやいた。

　強さとしては、神獣あたりと同程度だった気がする。しかし、ずいぶんと脆もろかった……。護堂はちらりと祐理を見た。

「今のは神ではなく、神の影——そのような存在だったと思えます。偉大な神格のごく一部分だけが地上に顕れたとでもいうような……」

　だから、神名も視えなかったのかもしれません。祐理はそう結んだ。

「いきなり不可解なことが起きたわね。どう解釈すべきかしら？」

　エリカが眉まゆをひそめてつぶやいたとき。

　携帯電話を片手に、甘粕がこちらへ近づいてきた。

「やっぱりカンピオーネが自みずから出陣されると、事件は一気に進展していきますねェ……。みなさん、御無事で何よりです。こんなときに恐縮なお知らせなんですが——」

　どうやら今の一幕に気づいて、静観していたようだ。

「実は現在、巨大な未確認生命体が本州沿いに太平洋を北上中だそうです」

「……は？」

　あまりに唐突すぎる報告。護堂は思わず聞きかえした。

「祐理さんのお告げがあったので、念のため確認させてみたらですね。海上保安庁が怪獣映画のノリで大騒ぎしていたそうで……。われわれの関係者が偵察に出たところ『どうやら神獣ではないか』と報告もありました」

「…………」

「まもなく銚ちよう子し沖おきに到達するそうです。やっぱり目的地はここですかねェ」

「こ、こういうときに『やっぱり』とか言わないでくださいよっ」

　自分も同じ予測をしたのだが、それでもあえて護堂は反はん駁ばくする。

　その直後だった。いきなり背筋がぞくりとした。

　体に戦うための力がわきあがり、心にも闘志が込みあげてくる。顕れたのだ。神殺しの宿敵である存在、『まつろわぬ神』が！

　護堂は周囲を見まわして、気づいた。

　今まで冬晴れの夜空だったのに、いつのまにか暗雲が立ちこめている。黒々とした雲の合間から、ゴロゴロと雷らい鳴めいの兆きざしまで響いてきた。

　そして海——太平洋上にとんでもないものがいる！

　それは『女』のシルエットであった。

　たおやかで、糸杉のようにすらりとした女の人影。かなり髪は長そうだ。彼女の頭は雲を突いている。それほど巨大なシルエットだった。

『見つけました、我わが新たなる勇士どの……』

　天より少女のささやき声が降ってくる。

　麗うるわしくも可か憐れんな美声だが、護堂は警戒した。相手の

狙いは何だ!?

『うふふふ。そう力りきまないで。今こ宵よいはわたくしたちが出会った記念の夜でしてよ』

　ふたたび天からのささやきと笑い声。

　宮殿で蝶よ花よと育てられた姫君めいた気品を感じる。この美声だけでも、女神の位くらいにふさわしい優ゆう婉えんさであった。

「神様がわざわざ何の用だよ？　言っとくけど、あんたたちと戦うつもりはないからな」

　護堂はまず断りを入れた。

　多くの神々が神殺しへの敵てき愾がい心しんを共有する。望んで事を荒立てようとする彼らに、平和主義者としてはつきあうわけにいかないのだ。

　これに対して、姫のごとき女神は春しゅん風ぷう駘たい蕩とうと言った。

『まあ、あなたさまは神殺しの君でいらしたのですね。ふふ、きっと名のある勇士が見つかるものと思っていたら、なんという奇縁でしょう！』

「……見つかる、だって？」

『ええ。すこし前から、この島が気になっていたのです。だって、わずか数カ月の間に幾度も闘争の卦けが顕れ、英雄方の気が荒れ狂うのですもの！』

　この島。おそらく日本列島のことだろう。

　そして闘争云うん々ぬん——アテナ、斉せい天てん大たい聖せい、ランスロットとの連戦か。女神を呼びこんだ原因のひとつが自分と悟って、護堂は軽く落ちこんだ。

　それにしても今の物言い。日本国外から来た女神なのか……？

『試しに〝弓の御霊〟を送りこんでみれば、やっぱり。ついにあの者も認める勇士を見み出いだすことがかないましたわ。わたくし、

うれしく思います』

　姫君らしく女神は告げて、さらに言う。

『勇士殿。まずはわたくしの心づくしをお受け取りくださいませ。積もる話はそのあとにいたしましょう！』

　直後、女神のシルエットは忽こつ然ぜんと消え失せた。

　しかも、さっき砂浜に転がった鉄弓までいっしょに消えている。だが、空にはいまだ暗雲が立ちこめていた。

　護堂の戦闘態勢も解けない。まだ女神が近くにいる証あかしだった。

「甘粕さん！　わたしたちだけ残して、ほかの人たちは全員退避。急いで。ここにもうすぐ神獣と『まつろわぬ神』が降臨するわよ！」

　真っ先に指示を出すのは、やはりエリカだった。

　彼女は『心づくし』の意味をそう受けとったようだ。護堂も同感だった。ほかの可能性、今の状況では考えにくい。

　甘粕が「御ご武ぶ運うんをお祈りします」と足早に離れていく。

　もうまもなく、君ヶ浜近辺にいる人間は護堂たちだけとなるはずだ。

　人的被害を心配しなくていい、広い戦場。理想的なシチュエーションを得て、護堂は仲間たちに目くばせした。

　エリカ、祐理、リリアナ、恵那。みんな、すぐにうなずいてくれる。

　まもなく『敵』が現れるはずの太平洋を五人は見やった。遊泳禁止の君ヶ浜、やはり波はだいぶ荒れている。

「たしかに何かが陸をめざして近づいてきますね。珊さん瑚ご礁しように似てるか……？」

「恵那には手足を引っこめた、でっかい亀の甲こう羅らに見えるか

な？」

　水平線をにらんで、視力のいいリリアナと恵那が言う。

　敵の姿を確認できたらしい。護堂の目には位置さえも判然としなかったが。

「どっちにしても、神獣なのはまちがいないね」

　恵那がきっぱりと言った。もう相棒・天あまの叢むら雲くもの劍つるぎを抜き放っている。

　リリアナも青地に黒い縦たて縞じまの入ったケープをまとい、いくさ装束に。エリカも紅と黒のケープと魔剣クオレ・ディ・レオーネで武装を完了。

　しかし、ここで誰よりも霊感鋭い祐理が警告の声を発した。

「みなさん、上を！　空もご覧ください！」

　空を見あげて、護堂は驚いた。

　さっき女神と共に現れた暗雲の合間から、三日月の光が差しこんでいる。

　その輝きを、滑空する巨鳥の影が一瞬さえぎったのだ。翼長一五メートル近い。サイズを不問にすれば、姿形はオオワシによく似ていた。

　神に仕つかえる聖なる巨鳥——神獣ならぬ神しん鵰ちようの出現だった。

　きゅああああああああっ！

　神鵰の啼なき声が夜空にこだまする。

　さらに、海から来る正体不明の生命体。こちらもかなりの速さで君ヶ浜に到達しようとしており、その形状がようやく護堂にも視認できるようになっていた。

　たしかに、珊瑚礁や亀の甲羅に見えなくもない。

　だが、ちがった。あれは『とぐろを巻いた大蛇』だった。これが

独こ楽まのように回転しながら海面上をすべるように突き進んでいるのだ！

「あんなこと、蛇にできると思ってなかったよ……」

「さすがは神に仕つかえる眷けん属ぞくですね……」

　ふたりの媛巫女がささやく。もっとも、ぼやき節の恵那に対して、本当に感心した面おも持もちなのがお嬢さまの祐理らしい。

　この大蛇がとぐろをほどいた。あと一息で上陸というところだった。

　シャアアアアアアアッ！

　体長五〇メートルはあろう巨大な海蛇シーサーペントが咆ほう哮こうした。

　海面を独楽のようにすべる動きから一転、今度はまっすぐ犬いぬ吠ぼう埼ざきの浜辺めがけて突っこんでくる。この海岸にかぶりつこうとしているようにも見えた。

　空に神鵰、海からは大海蛇——。

　そして、どこかにひそんでいるはずの『まつろわぬ神』。年の瀬にふさわしからぬ激戦のはじまりだった。

3

　只ただでさえ厄やつ介かいな神獣が二体も出たうえに、片割れは自在に飛ひ翔しようする。横綱相撲ずもうで応戦する余裕はない。護ご堂どうはとっさに呼びかけた。

「海はこっちでなんとかする。みんなは空をどうにか抑おさえてくれ！」

　エリカ・恵え那な・リリアナがうなずいて散開していく。

　祐ゆ理りにも退がっているよう目くばせし、護堂はおもむろに言

こと霊だまを唱となえた。

「主しゆは仰おおせられた。咎とが人びとに裁さばきを下せと」

　目の前に、焔ほのおをまとう黒い影が忽こつ然ぜんと顕あらわれた。

「鋭く近寄り難がたき者よ、契約を破りし罪科に鉄てつ槌ついを下せ！」

　焔と影は護堂の言霊を受けて、体長二〇メートルの神獣へと変へん貌ぼうしていく。

　ウルスラグナ第五の化身『猪いのしし』の顕けん現げんである。今回の標的は大おお海うみ蛇へびと神しん鵰ちようの両方。怪獣の力で怪獣を打ち砕くつもりだった。

　オオオオオオオオオオォォォォォォォォォンンンンンンンッ！

　おなじみの咆ほう哮こうが轟とどろく。漆しつ黒こくの毛皮、怪異なほど逞たくましい巨体の『猪』はその太い四し肢しで地を踏みしめ、海をにらみながら踏んばる。

　その視線の先には、犬いぬ吠ぼう埼ざきの陸地めがけて突進中の大海蛇がいた。

　直後、海から箭やのように飛び込んできた蛇の顎あごと牙きばが『猪』の鼻はな面づらと正面衝突する。

　シャアアアアアアァァァァァァアーッ！

　大海蛇が苦く悶もんの叫びを吐き散らした。『猪』の鼻面に真正面からぶつかって、一方的にダメージを受けたのだ。ウルスラグナの黒き聖獣は小揺るぎもしていない。人間のケンカでいえば、殴なぐった方が拳こぶしを痛めたようなものか。

　そのまま『猪』は鋭く長い牙で、大海蛇の巨体を抉えぐる。鱗うろこを引き裂く。

　黒き殺さつ戮りく者しやから逃れるべく、うねうねと蛇体がのたうち、砂浜を這はいまわる。だが『猪』は蛇の長い胴を前まえ肢あしで踏みつけにして、押さえこんだ。

魁かい偉いな容貌に似合わぬ器用さだった。そして『猪』はまた牙で突き刺す。

シャアアアアアアァァァァァァアーッ！

大海蛇がふたたび咆哮し、苦しみと痛みで巨体をびくびくと波打たせる。

やはり、神獣あたりとカンピオーネの権けん能のうでは格がちがう。

こちらは大丈夫そうなので、護堂は神鵰と仲間たちの方へ視線を向けた。神鵰はゆっくりと君きみヶが浜はまの上空を旋回している。

そうしながら超常の猛もう禽きん類るいは、地上を見おろしているようだった。

直後だった。護堂の背筋がゾッと総毛立った。今、殺気を向けられている。あの神鵰は鋭い鳥類の目で、眼下のカンピオーネを獲え物ものと見定めたらしい。

「って、鳥のくせに夜でも見えるのかよ」

相手の不条理さに文句を言った瞬間、神鵰は急降下を開始した。

その進路の先にいるのは、もちろん草くさ薙なぎ護堂。だが、避難しようとはしなかった。どのみち間に合わないし、救援の当てもある——！

「ダヴィデの哀あい悼とうを聞け、民たみよ！　ああ勇士らは倒れたる哉かな、戦いの器うつわは砕けたる哉！」

期待どおり、切り札を詠えい唱しようする声がひびいた。

「ヨナタンの弓よ、鷲わしより速く獅し子しより強き勇士の器よ。今こそ我が手に！」

さっき散開したリリアナがヨナタンの弓を呼び出したのだ。

神すら貫つらぬき、射抜く青き光の弓と矢。かつて英雄ペルセウスをも縫ぬい止めた飛び道具。これでリリアナは護堂めがけて急降

下する神鵰を狙ねらい撃つ。

　地上を急襲する猛禽めがけて、青き光の矢が一直線に飛んでいった。

　リリアナの弓術とヨナタンの弓は、風の速さと完かん璧ぺきな精度で神鵰の頸くびへと致死の矢を送り届ける——はずだった。

　しかし、命中寸前。神鵰はとっさに急上昇。ぎりぎりで必殺の矢を避けた。

　さすがと讃たたえるべきか。あの神鵰、飛ぶのがおそろしく上う手まい。今の急上昇で『Ｕ』の字が空に描かれたのを見て、護堂は舌を巻いた。

　カンピオーネにとっては、神獣はじめ神々のしもべはたしかに弱敵。

　だが、リリアナたちには死力を尽くして戦って、ぎりぎり勝てるかどうかの大敵。やはり一ひと筋すじ縄なわではいかない。おまけに今度の敵は自在に天翔ける。

　攻撃をゆるめるわけにはいかないはず。案あんの定じよう、恵那が叫んだ。

「神風よ。祓はらい給たまえ、吹きすさび給え！」

　風を操るための言霊だった。しかも、そこに神の力まで加わる。

　恵那を守護する〝おじいちゃま〟速ハヤ須ス佐サ之ノ男オノ命ミコト。嵐の神でもある彼かの御み霊たまを呼びこんで、太た刀ちの媛ひめ巫み女こは風神まがいの力を振るう。

　まず、横なぐりの突風を飛翔する神鵰にたたきつけた。

　風に乗って飛ぶ猛禽だけあって、さすがにこれはたまらない。さらに恵那は空中に風の渦巻きを作り出し、神鵰を呑のみこませる。

　風の渦に巻きこまれ、オオワシに似た神鵰の巨体がよじれていく。しかし。

　きゅああああああぁぁぁぁああっ！

神鵰が甲かん高だかく啼ないた。その体から強い呪力と共に暴風がまき散らされ、恵那の作り出した風の渦をかき消してしまう。風を司つさかどる神力、神鵰も所持していたのだ。

きゅああああああぁぁぁぁああっ！

ふたたび啼き声。神鵰の力による暴風は勢いを増し、空を吹き荒れる。

台風の日さながらに、海も一気に荒れはじめた。スサノオの秘蔵っ子である媛巫女も、風比べでは神鵰にかなわないか——。

それでも恵那は力を振りしぼり、風と大気を操ろうとする。

だが、もう限界かというとき。動いたのはもちろん金髪の紅あかき騎士だった。

「エリ、エリ、レマ・サバクタニ！　主よ、なにゆえ我を見捨て給たもう！」

神への絶望と賛辞を謡うたう『ゴルゴタの言霊』。エリカの切り札のひとつである。

「我は主の御み名なを告げ、世界の中心にて御おん身みを讃え、帰き依えし奉たてまつる！」

神をも切り裂く力が託されるのはクオレ・ディ・レオーネ。

その形は細身の長剣。これがエリカの手のなかで投とう擲てき用ようの短槍に変わる。主が変形の魔術をかけたのだ。槍の柄つかは長さ一メートルほどだった。

この短槍をエリカはすぐ隣に放って渡す。

受け取ったのは青きヨナタンの弓を持つリリアナ。

短槍状態のクオレ・ディ・レオーネを矢の代わりに右手で持ち、青き弓の弦につがえ、神鵰めがけて撃ち出す。

ゴルゴタの言霊とヨナタンの弓を重ねた射撃——。

矢は彗すい星せいのごとく夜空を駆け、神鵰が広げる左の翼をつ

いに射抜いた。

　きゅおおおおぉぉぉぉんんんっ！

　神鵰が啼いた。苦痛を訴える声だった。

　片翼を傷つけられて、空中で『ぐらっ』と大きくバランスを崩す。だが、神鵰はどうにか持ち堪こたえた。しかも、甲高い声でふたたび啼く。

　きゅあああああああんっ！

　風を操ったらしい。いきなり上昇気流が生まれ、神鵰の巨体を下から支える。

　超自然の猛禽はそのまま悠々と高度を上げていく。エリカとリリアナの合わせ技も、翼を奪うにはいたらなかったのだ。

「空を逃げ場にされると、効果的な追撃もむずかしいわね……」

　エリカが眉み間けんにしわを寄せる。

　さすがの彼女も、今は優雅さを保ちつづけるのがむずかしいのだろう。

　やはり神獣相手の戦い。しかも敵に翼があるため、三対一の優位も活いかしにくい。護堂は鋭く大海蛇の方をにらんだ。

　現在、波打ち際ぎわで『猪』と交戦中。

　ウルスラグナ第五の化身は大海蛇を牙で突き刺し、体当たりでふっとばし、太い四し肢しで踏みつけてと、さんざんに蹂じゆう躙りん中ちゆうだった。

　こちらをすこしでも早く倒して、エリカたちに加勢したい。できるか!?

　――だが。護堂の気合いはいきなり足をすくわれた。

　太平洋の海原に女神のシルエットがふたたび顕れたのだ。そして、手を振るような仕草を見せる。すると、天より火の粉が降ってきて、大海蛇の胴体に当たった。

　その直後だった。

　大海蛇の全身が白く輝き、いきなり身をくねらせる。

　ガッ！　さながら鞭むちがしなるような動き。

　この蛇体の鞭でしたたかに打たれて、『猪』は大きくふっとばされた。

　女神から力を分けてもらい、パワーアップを遂とげたようだ。さらに、予想外の追撃まで待っていた。やにわに大海蛇は伸長したのだ。

　鱗うろこにおおわれた蛇の胴。今まで体長五〇メートル程度だったが、いきなりゴムのようにぐいんと数倍の長さにまでのびた。

　その蛇体に柔軟さとしなり、そして弾力が加わる。

　そして、まさにゴム製のロープのごとく、大海蛇のおそろしく長い胴は『猪』の巨体にぐるぐる巻きついていった。

　文字どおりの猪い首くび、太い胴、四肢などの各部位を何重にも拘束してしまう。

　しかも、この蛇形ゴムは電撃までバチバチと放つ。

　オオオオオオォォォォォォォンンンンンンンンンンッ！

　今度は『猪』が苦く悶もんの咆哮をあげる番だった。大海蛇の体を引きちぎろうと、必死に体を振ったり揺らしたりする。しかし、できない。ゆるみもしない。

　オオオオオォォォォォンンンンンッ！

　また咆哮。今度は怒りの叫びだ。

　しかし、ゴム化した大海蛇の肉体は外れない。代わりにまた電撃を放たれた。『猪』は苦しみ、のたうちまわる。完全に無力化された格好だ。

「あいつにも壊せないものがあったのか……」

『ふふふふ。なかなかの戦いぶりですわ、神殺し殿！』

愕がく然ぜんとする護堂の頭上に、女神の声が降ってきた。

あいかわらず余裕に満ちた姫君言葉だ。女主人の出現に合わせて、空の神鵰も海の方へ飛んでいく。洋上に顕れた女神のシルエットのまわりで滑空をはじめた。

躍やつ起きになって護堂たちを倒す気はない、とでもいうように。

『火の女神とその下僕相手に、実に堂々と……。やはり、わたくしの目にかなうだけの器量をお持ちでいらしたのですね！』

声の可か憐れんさがかえって小憎らしい。護堂は女神のシルエットをにらんだ。

夜の太平洋上に顕れた巨大な人影である。

犬吠埼は関東最東端の地で、初日の出を見るスポットとして人気らしい。そこに今、太陽ならざる女神の影が顕れている。

このサイズが原寸大ということは、もちろんないだろうが……。

「あんた、なんて名前なんだ？」

『今、申し上げましてよ。火の女神と。ふふ、これがわたくしの名と思おぼし召めせ』

護堂の誰すい何かにとぼけた答えが返ってくる。

名前も真の姿も明かすつもりはないようだ。今まで出会った『まつろわぬ神』は、いずれも自己主張の激しい目立ちたがりが多かったが——。

眉まゆをひそめる護堂のそばに、仲間たちが集まってきた。

エリカ、祐理、リリアナ、恵那。彼女らにうなずきかけてから、護堂はちらっと祐理に目くばせした。すると媛巫女は悲しげにかぶりを振る。

どうやら『火の女神』の正体、祐理にも視みえてないようだ。参った。

　これでは『剣』で神格を切り裂くこともできない！

『ひさかたぶりに見出した勇士が神殺しであったとは、これも星の導き……。ふふ、わたくしはあなたとの出逢いに運命を感じます。勇士よ、御名を教えてくださいませ！』

「虫がいいぞ。自分は名乗らないやつに教える気はない」

　妙にお嬢さまっぽく『運命』を語られて、護堂はすこしうんざりした。

　恋に恋する乙女おとめのような物言い。つきあうのも面倒なので、突き放したのだが。

『まあ、つれない御方……。でも、かまいませんわ。わたくしがその気になれば、すぐに視えますから。——そう、草薙護堂さまとおっしゃるのね』

　なに⁉　護堂は仰ぎよう天てんした。まさか、勝手に名前を読み取られるとは！

『ふふっ。天と地の狭はざ間まに在ありし全ての物と命……それらの名を知ることは女のたしなみでしてよ。わたくしをみくびらないでくださいませ！』

「そ、そうなのかっ？」

「バカね護堂。そんな無茶、できるのは女といっても女神くらいよ！」

「ええ。わたしたち魔女や巫女にも霊視の力があります。それよりも遥はるかに強力な〝目〟を彼女は持っているのでしょう！」

　驚く護堂にエリカとリリアナが口々に言う。

　なんとデタラメな。あきれていると、祐理がおごそかに告げた。

「あの女神は魔術の神……。さまざまな術で奇跡と神秘を起こす、変幻自在の神でいらっしゃいます。気をつけてください、斉せい天てん大たい聖せいさまと同じです！」

　そういえば、あのサルもさまざまに術を使いこなした。

護堂はあらためて女神のシルエットを見あげた。《鋼》でもあった斉天大聖とくらべれば、武勇では大きく劣っていそうだ。だが楽観はできない。

どんな隠し芸を持っているか不明であるし、何より軍神ランスロットの例がある。

持てる権能がすくなくとも、それを研とぎすまして一〇〇の権能を凌りよう駕がする——。

そういう強つわ者ものもいるのだ。護堂は今まで以上に気を引きしめた。

『ふふふふ。ご安心ください。わたくしの方に草薙さまを害するつもりはございません。ただ、ご招待して差しあげて、楽しく語らいたいだけで』

「し、招待したいだけで怪物に襲わせるのかよ」

『だって、草薙さまは無双の勇士であらせられますもの。招待を拒まれたら大変です。前もって手足を一、二本もいでおかなくては、安心できませんわ！』

なんという理屈。護堂は絶句した。今まで出会ったことがないタイプの神様だ。

話が通じるようで、微妙に噛み合わない。なんともやりづらい。

「手足をもぐなら、十分危害を加えるつもりだよね……？」

「不死の神々からすれば、その程度は傷に入らないのかしら……？」

恵那とエリカがあきれ顔でささやくのも無理はあるまい。

だが、火の女神は下しも々じもの人間がつぶやく声など気にも留めず、朗ろう々ろうと謡うたった。

『焔ほのおを愉たのしむ者よ。その享きよう楽らくをあたえてあげましょう』

また天より火の粉が降ってきた。

　今回これを受けるのは、洋上を悠々と舞う神鵰。すると、翼長一五メートルの巨体がいきなり焔につつまれた。

　雄おゝおしく、力強く羽ばたく。そして一直線に飛んでくる。護堂たちがいる陸地の方へ。

　まさに『火の鳥』の飛翔。リリアナがとっさにヨナタンの弓を撃った。

「く――！」

　青き光の矢は火の鳥めがけて飛びながら、五つに分かれる。

　聖なる矢は五筋の弾道を空に描いて、燃える神鵰の体に吸いこまれたのだが――。

　全て焔に灼かれ、消滅した。あの火が加護したらしい。

　燃える神鵰はそのまま、護堂たちのいる砂浜へと飛んでくる。このままでは火で灼やかれるか、神鵰の嘴くちばしか爪で切り刻まれるのみ。

『猪』を封じ込まれている以上、あれを迎え撃つ術すべが草薙護堂にはない！

　八方ふさがりであることを悟って愕がく然ぜんとした瞬間、いきなり恵那が動いた。天あまの叢むら雲くもの劍つるぎを天にかざし、言霊を叫んだのだ。

「長く日ひの本もとを守護せし神刀よ！　今このときは我の手をはなれ、異い邦ほうの呪言をその刃に宿し給え。われらに加護をお授け給え。――エリカさん、使って！」

　そして、神刀を目の前の砂浜に突き立てた。

　なんとも性急すぎる許可の言葉。だが、誰よりも才気に富む紅き騎士は、その美貌に理解の色を広げた。即座にうなずく。

「ありがたくそうさせてもらうわ。――元老院セナトウス・最終コンスルトウム勧告・ウルテイムム！」

　最も堅けん牢ろうな防御を築くための魔術、エリカはつむぎはじ

めた。

　その隣で、リリアナもすばやく言い放つ。

「エリカ、わたしも手伝う！　ローマの秩ちつ序じよを維持するため、元老院は全軍指揮権インペリウムの剥はく奪だつを勧告する！」

　青き騎士の呪じゆ文もんは、紅き旧友の術を補ほ佐さし強化するためのもの。

　ふたりの騎士たちが言霊と呪力を注ぎこむのは、恵那が『触しよく媒ばい』とさせるため手放した天あまの叢むら雲くもの劍つるぎだった。

　かつて数分とはいえ、天空神メルカルトの神しん使しをしのいだ防御魔術。

　その守護の力を、漆しつ黒こくの神刀は冷たい刃に宿した。

　黒い光の障しよう壁へきが天叢雲劍から放たれ、天てん蓋がいのように護堂たちの頭上をおおう。その直後に飛来してきた『火の鳥』の突撃を、ギリギリのところで阻はばむ！

　きゅああああああぁぁぁぁぁぁんっ！

　神鵰が悔くやしげに啼ないた。

　轟ごう々ごうと燃える巨鳥は雄々しく両翼を広げ、空中から嘴くちばしを突き込んで、黒き天てん蓋がいを破ろうとする。だが、『元老院セナトウス・最終コンスルトウム勧告・ウルテイムム』の防御障壁はどうにかはじく。

　女神の術で強化された火の鳥。その力は並の神獣などおよびもつかないというのに。

　天あまの叢むら雲くもの劍つるぎの神威、リリアナの補佐、エリカ自身の成長。

　そして、あと二秒遅れるだけで間に合わなかった当意即妙のコンビネーション。それらが結実した成果の結界だった。

　これを成しえたのは、やはりチームとしての連携が深まっていたおかげか。

　しかし——。

『ふふふ。その子の火種、まだ尽きてはいませんわよ。今一度、燃えあがりなさい！』

　女神の言霊と火の粉がまた神しん鵰ちようの背中に降ってきた。

　これが文字どおり〝火〟をつける。巨鳥の両翼から勢いよく爆炎が放たれ、黒い天蓋のまわりに轟々と燃え広がり、とぐろを巻いた。

　護堂たちを守護する天蓋のなかは、一気に温度が上がった。

　真冬の海辺だというのに、サウナのごとき猛烈な暑さ。聖なる焔の熱気がついに結界内部へ侵入してきたのだ！

「須す佐さの御神よ、野分けの風を遣つかわし給たまえ！」

「ローマに仇あだなす叛はん逆ぎやくの徒に、厳正なる法の裁きを！」

　恵那が神がかりの力で旋風を呼び、頭上の神鵰を吹き飛ばそうとする。リリアナが結界を強化するため、さらに呪力を注ぎこむ。だというのに。

　神鵰はわずかに巨体を揺らした程度。温度もじりじりと上がっていく。

「く……っ！　護堂、もう限界に近いわよ！」

　このままでは蒸し焼きになるという熱気のなか。

　汗に濡れた顔でエリカが叫ぶ。今、最も負担がかかっているのは結界をつむぐ彼女。だが、それでも薔ば薇らのごとき華麗さを失わない。

　エリカ・ブランデッリの真しん骨こつ頂ちようともいうべき美質を前に、護堂は歯噛みした。

　仲間たちが結界を作ってくれた直後から、〝あること〟をはじめていたのだ。そのために呪力を最大限に高めようと、必死に力を振りしぼって。

　だが、まだ足りない――。

　あとすこしでヤツを限界まで昂たかぶらせることができるのに！

　このまま蒸し焼きになるか、黒き天蓋ごと燃える神鵰に押しつぶされるか――。ろくでもない二択の未来が目の前で具現化しようとしたとき。

　エリカのそばへ、祐理が歩みよった。

　戦うための力を持たず、攻防の局面ではいつも後方にひかえていた媛巫女が。

「万里谷!?」

　愕然として護堂が呼び止めた瞬間、祐理は両手を胸の前で組み、目をつぶる。

　まるで祈りを捧ささげるかのような仕草。その直後、たおやかな媛巫女の全身から白い光が滾こん々こんとあふれ出た。

「神産霊かみむすび、高御産霊たかみむすび、生産霊いくむすび、足産霊たるむすび、玉積産霊たまつめむすび、大おお宮みや乃の売め、大おお御み膳け都つ神のかみ、事こと代しろ主ぬしの神々に祈り奉ります。巫かんなぎの鎮しずめに応えて御霊を和し、静せい謐ひつを顕し給え……！」

　きゅあああああっ！

　祐理が放つ白い光を浴びて、火の鳥が不快そうに啼なく。また、一陣の涼風が吹き抜けたように感じた。ほんのすこしだが、熱気が鎮まったのだ。

「護堂さんっ。あとすこしだけ、保たせてみせます！　だから――！」

　媛巫女が必死の面おも持もちで訴える。

あの白い光、どうやら媛巫女の新たな霊力らしい。あれを浴びて、神鵰はすこしおとなしくなったようにも見える。

神の眷けん属ぞくを抑える恩おん寵ちよう、もしかしたら精神感応の応用だろうか？

とはいえ、詮せん索さくしている余裕はない。代わりに護堂は強く念じた。今は〝仕上げ〟に集中すべき局面なのだ。

みんなが稼かせいでくれた貴重な時間、無駄にするわけにはいかない！

「まさか、コケにされたまま終わるつもりじゃないよな……」

さっきから心のなかで続けてきた挑発。

それを口に出す。ずっとマグマのように怒りをたぎらせていた『獣けもの』に向けて。

「おまえがそのつもりなら、もう二度と呼ぶつもりはないぞ。ここで根性見せてみろ！」

品のない言いまわしだが、これは言霊だった。

今まで高めに高めてきた呪力を黒き獣――『猪』に注ぎこむためのの。

ゴム化した大海蛇に拘束され、無ぶ様ざまに力を封じ込められたウルスラグナ第五の化身。ヤツをさらなる高みへ昇らせるための起爆剤なのだ。

そして、手応えはあった。

囚とらわれの『猪』は大海蛇にまといつかれたまま、喉のどの奥から声を発した。

ォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォ……。

低いうなり声。いつもの力強い、パワーを爆発させるための咆哮ではない。

ォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォ……。

　まだしぼり出す。我が身をしばる大海蛇への怒りをこの嘯しよう声せいに込めている。

　ォォォォォォォォォォォォォォォ……。

　ついに『猪』はうなりを止めた。前奏が終わったのだ。ここから一気にクライマックスへ盛りあげる。黒き神獣はグワッと大きく口を開けた。

「みんな伏せろ！　耳もふさげ！」

　護堂はとっさに叫んだ。リリアナ、恵那、エリカがすばやく言うとおりにする。

　最後に祐理があたふたしつつも砂浜に身を伏せる。両手で耳もふさいでいるのを確認してから、護堂は「やれ！」と指示を出した。

　オオオンンンンンンンンンンンンンンンンンンッ！

　激烈なる咆哮と衝撃が『猪』より放たれた。

　もともと吠え声といっしょに衝撃波ソニツクウエーブを発するのはヤツの芸のひとつ。今回は身動きできない状況に業ごうを煮やし、その威力を最大限にまで昇しよう華かさせたのだ。

　まず黒き巨体を拘束していた、大海蛇の胴体。

　これがバラバラに引き裂かれ、一気に吹き飛んでいった。

　そして、怪獣が放射火炎の類たぐいを吐くように、『猪』はかつてない威力の超音波と衝撃波を口から吐き出したのである。

　直撃を喰くらった火の鳥は、空高くへとふっとばされた。

　全身をおおう焔も消し飛んだ。この一発でかなり傷つき、戦意も喪そう失しつしたらしい。墜つい落らく寸前のジェット機さながらに、ふらふら南の空へ飛んでいく。

　さらに『猪』はイヤイヤするように身をよじり、四方八方へ衝撃

波を浴びせかける。

　これを喰らって、女神のシルエットも消えてしまう。

　意外（？）にも聖獣である『猪』の声。どこまで御ご利り益やくがあるかはわからないが、神力を吹き飛ばす効果まで宿したようだった。

『まあ、なんと猛たけ々だけしい！　それでこそ、わたくしの草薙さまですわ！』

　影は消えたものの、女神の声がふざけたコメントをする。

　どうやらダメージはないようだ。その一方で、『オオオオオオ！』という吠ほえ声は夜空に立ちこめる暗雲まで吹き飛ばしていく。

　そして、特大の咆哮が余よ韻いんまでふくめて消えたとき――。

　君きみヶが浜はまと犬吠埼にようやく静寂が戻ってきた。

『おみごとですわ、草薙さま。御力、とくと見せていただきました。ふふっ、あなたは輝ける勝利の英雄を殺あやめて、権能を簒さん奪だつされたのですね。そうであれば、こちらにも相応のそなえがあるというもの。またの再会を楽しみにいたします！』

　しかし、浜辺を吹く潮風にささやき声も交ざる。

　実に面倒そうな再会宣言。護堂は仲間たちと顔を見合わせ、ため息をついた。

4

　君きみヶが浜はまの遭そう遇ぐう戦せんから一夜明けた、朝の八時頃。

　あのあと、護ご堂どうは女子たちといっしょに旅館へもどり、体を休めた。女神の再襲撃はさすがにないだろうと判断したのだ。

　もちろん、事態が急変すれば、すぐに現場へ向かうつもりではいたが。

　幸いにもそうはならず、一晩ぐっすり眠ることができた。

　今は宿の食堂に護堂・リリアナ・祐ゆ理りの三人で集まり、朝食をとっている。

　味あじ海の苔りや納豆などがならぶ、正しい日本旅館の朝あさ餉げ。エリカがいないのは例によって寝坊しているから。恵え那なの不在は神がかりの疲労があるためだった。

　同室の祐理は気を遣つかい、熟じゆく睡すいする幼なじみを起こさないよう静かに出てきたという。

「そうだ、万ま里り谷や祐理。あなたの方は大丈夫なのか？」

「あ、はい。たくさん力を使って疲れましたが、一晩寝たら、どうにか」

　確認するリリアナに、祐理はしっとりと微笑ほほえんで答える。

　昨夜、白い光の霊力で貴重な時間稼ぎをしてくれた媛ひめ巫み女こ。戦闘後、あの力は『御み霊たま鎮しずめ』だと教えてもらった。

　精神感応力を最大限に高めて、媛ひめ巫み女この和にぎ魂みたまを放射する術――。

　そう説明された。呪力の昂たかぶりを和わ合ごうの心で鎮め、さまざまな神秘と怪異を沈静化させるのだとか。あの『火の鳥』にも通用するのだから、リリアナたちの『聖絶』に匹敵する切り札なのだろう。

　しかし、かなり消しよう耗もうするらしい。戦闘後、祐理はずっとぐったりしていた。

　今朝、ふつうに起きてきたのを見て、護堂は安心したものだ。リリアナもそうだったのだろう。三人はそのまま、のんびりと朝食を食べ終えた。

「勇士を探していた……。そう女神は言ってましたね」

食後の緑茶を口に運びつつ、リリアナが言う。

ちなみに浴衣ゆかた姿である。東欧系の白人少女にも意外と似合っていた。

「こうなると、あの箭やを東京に撃ち込ませた理由も明白です。自分の眷けん属ぞくに弓の技を誇こ示じさせて『力ある者』を挑発し、おびき寄せたかったのでしょう」

「実際、護堂さんがいらしたわけですしね」

やはり浴衣姿で、その上に袢はん纏てんも着た祐理がうなずく。

ふたつの湯飲みに緑茶を注いでいた彼女は、そのひとつを護堂に渡してくれる。ありがたく口をつけると、なかなかの味だった。

おそらく、茶葉よりも祐理の技ぎ倆りようと気配りのおかげだろう。

「東京タワーが的まとになった理由もたいしたことなさそうだよな……。高い建物だから、たまたま目についただけじゃないか？」

自分が来なければ、関東地方の高層建築が次々と狙ねらい撃うたれたのではないか？

新しん宿じゆく都庁。六ろつ本ぽん木ぎや池いけ袋ぶくろ、渋しぶ谷やなどの超高層ビル……。想像しながら護堂はつぶやいた。

「まったく。傍はた迷めい惑わくな神様が出てきたもんだよなあ」

「ええ、本当に」「恐ろしい話ですね……」

護堂の感想に無難なあいづちを打つリリアナと祐理。しかし、彼女たちは何か言いたげな目をこちらへ向けていた。

「ええと。どうかしたのか、ふたりとも？」

「いえ。よりにもよって、そんな女神と出会う『力ある者』があなただったことに、偶然以上の要素を感じまして。こういうのを〝引き〟の強さというのでしょうね……」

「本当に次から次と、ご縁があるのですね……」

　何を引くのか、何と縁があるのか。リリアナも祐理も明言しない。

　だが、ふたりの目にはどこか冷ややかな批判精神が隠いん然ぜんと宿っていた。なぜか居心地悪くなって、護堂は身をすくませた。

　そこに救い主が現れた。甘あま粕かすがやってきたのである。

　浴衣ではなく背広姿なのは、旅館に帰ることなく事後処理に従事していたからだ。

「や、おはようございます。昨日はおつかれさまでした」

　自分たちの比ではない労働量の人物に言われて、護堂は恐きよう縮しゆくした。また、いきなり祐理が立ちあがり、甘粕に深々と頭を下げる。

「昨晩は本当に申し訳ございませんでした。私たち、またあんなことをしでかしてしまって……。ご面倒をおかけしていると思いますが、よろしくお願いいたします」

　昨夜の不始末。思い出して、護堂はうなだれた。

　あのとき『猪いのしし』に撃たせた特大衝撃波。実は、その一部が流れ弾だまのように岬みさきの方へ飛んでいき、犬いぬ吠ぼう埼さきの灯台を粉々に破壊していたのだ。

　関東で最も早く陽ひが昇る、人気の初日の出スポット。もうすぐ大おお晦日みそかなのに……。

　あの暴挙に気づいたとき、護堂は頭をかかえたものだ。

　エリカは『まあ』と感心し、リリアナは黙って瞑めい目もく。祐理は切なげに『護堂さん……』とつぶやき、恵那は『おおー』と感嘆した——。

「いやいや、これも仕事のうちですし」

　一方、心から頭を下げる媛巫女へ甘粕はへらへらと言った。

「ここまで来ると、その程度の被害は折り込みずみといいますか。性能は高いけど洒落しやれにならない不具合もある機械のトラブル

を、製品仕様と割り切る境地です。とにかく、こちらも承知のうえで草くさ薙なぎさんに頼っています。気にしないでください」

　身もフタもなく護堂の行いを茶化してから、甘粕はニヤリとした。

「だけど今の謝罪っぷり、ダメ亭主の不始末を必死にあやまる奥さんみたいですねェ。いや、状況はまさに同じかもしれませんが」

「奥さ——へ、変なことをおっしゃらないでください！」

「そのとおりだぞ、甘粕冬とう馬まっ。そ、そういう不用意な発言はひかえてもらおう！」

　祐理があせり、リリアナも微妙に怒っている。

　主犯格である護堂は気まずさをごまかすため、話題を変えた。

「と、ところで、あの怪物たちは海を渡ってきたんですよね？」

「ええ。黒潮に乗ってはるばると」

　そのあたりの情報を昨夜から収集していたはずのエージェント。

　さすがの有能さで即答してくれた。

「神獣さまの大遠征ですからね、私たち委員会の関係者、呪術方面の業界人なんかも感知していました。あと『謎なぞの大怪獣襲来！』ってことで海自や海上保安庁なんかも。おかげで、あちらの進行ルートはおおむね把は握あくできています」

「昨日の女神、日本の外から来たようなことを言ってたんですが」

「草薙さんに目をつけた、ストーカー気質の『まつろわぬ神』ですね。ええ、その辺もばっちり符合します。いえね、あの連中には本拠地っぽい場所があるんですよ」

　思わぬ言葉を聞いて、護堂は目をみはった。

　祐理とリリアナもそうしている。本拠地。放浪してばかりの『まつろわぬ神』には似つかわしくない言葉だった。

「蛇型の神獣は黒潮に乗って、鳥の神獣は空を飛んで、問題の拠点

から犬吠埼までやってきたわけです。今、その近辺の情報を集めています」

「本拠地ですか……」

　護堂は考えこんだ。敵の狙ねらいは自分なのだ。このまま東京で暮らしていたら、次こそ本当に怪獣映画の再現となるかもしれない。

　ここは一時、平和主義を返上して行動すべきなのか——。

「草薙護堂。もしかして、そちらへ行かれるつもりなのですか？」

　リリアナに訊きかれた。護堂の思案に気づいたらしい。

「あいつらが東京にまで押しかけてきたら、とんでもない被害が出そうだからなあ。だったら、おとなしく待たない方がいいのかなって」

「たしかに、そうすべきかもしれませんね……」

　思案顔で祐理がささやいた。

「あの女神は真の姿を見せないよう、ひどく気を遣ってらっしゃるように感じました。御名も来歴も視みえなかったのは、そのせいだと思います」

「だとしたら、敵陣に乗り込んででも手がかりを探すべき、か……」

　リリアナもうなずく。甲かつ冑ちゆうで真の姿を隠したランスロットと同じらしい。

　肚はらを固めた護堂は、単刀直入に訊いた。

「甘粕さん。やつらの拠点って、どこなんですか？」

「そうですねェ。いわゆる南の海といいますか」

　甘粕が口にした地名に、護堂はうなずいた。

　リリアナと祐理も目をみはっているが、驚いてはいない。相手が神である以上、十分想定の範囲内だったのだ。まあ、さすがに予測

はできなかったが。

　もういくつか寝れば、年が明けるという時期。

　だが、新年はどうやら国外ですごすことになりそうだった。

第４章　魔境からの呼び声

1

　一二月三一日、大おお晦日みそか。

　日本国民がそろって年越しという一大イベントを迎える日。

　しかし、このメモリアルな記念日に、草くさ薙なぎ護ご堂どうはやたらと熱い日差しの下にいた。冬の日本列島では決して浴びることのない、激烈な陽光の下に。

　じりじりと照りつける太陽。空気にこもる熱気。なつかしい真夏の匂におい。

　東京都はおおむね北緯三五度。しかし、ここから一気に三〇度ほど南下した、赤道直下に近い場所が護堂の現在位置である。

　地名でいうならボルネオ島の北岸、マレーシア領の都市コタキナバルであった。

「年の瀬をこんなところですごすなんて、考えもしなかったよ……」

　しみじみと護堂はつぶやいた。

　コタキナバルはこの近辺では最大規模の都市である。

　海に面した市内には美しいビーチがあり、あちこちにリゾートホテルもあった。

　護堂が今いるあたりは市の中心街。大きなショッピングセンター

にいくつもの市場、フードコートなどが集まっている。人の多い、にぎやかな界かい隈わいだ。

「なんか全然、大晦日とか正月って気がしないなー」

「私も変な気分です。この時期、巫み女このお勤めをしていないのは子供の頃以来なので……」

　隣にいた祐ゆ理りがやや気まずそうに言う。

　午後二時すぎ。オープンカフェで一休みしているところだった。

　護堂が注文したのはアイスコーヒー、祐理はアイスミルクティーである。ここは常夏の熱帯圏。やはり冷たい飲み物が欲しくなる。

　そして、もう一品。フレッシュアボカドジュース・コンデンスミルク入り。

　差したストローがグラスのなかで立つほど濃厚なドリンクは、エリカの注文だった。

「まあ、それだけ護堂が厄やつ介かい事ごとに愛されているということよね」

　犬いぬ吠ぼう埼ざきの旅館で甘あま粕かすと会議した朝は二日前。

　相手の本拠地へ乗り込むつもりだと護堂が明かした直後から、正せい史し編へん纂さん委員会による情報収集などがさっそくはじまった。

　その間、護堂と仲間たちは東京に帰り、出国の準備。

　状況がととのい、飛行機で旅立ったのは一二月三〇日の深夜であった。

　夜は機内で眠り、早朝にシンガポールへ到着。そこで飛行機を乗りつぎ、今日——一二月三一日の昼前に、このコタキナバルに到着したのだ。

　同行者の顔ぶれはエリカ・祐理・リリアナ・恵え那なの四名。

　この旅をコーディネートしたのは、意外にも『紅き悪魔デイアヴオロ・ロツソ』と呼ばれる少女だった。

「正史編纂委員会はあくまで日本一国を統制する組織よ。国外に支部や影響力を持っているわけでもないし……今回は『バックアップはするけど口は出さない』、現場に都合のいいスポンサー役に徹してもらいましょう」

　薄い緑色のジュースというかシェイクを飲みつつ、エリカは言った。

「けどさ、おまえのところだって支部があるわけじゃないんだろ？」

「ええ。でも《赤しやく銅どう黒くろ十じゆう字じ》の駐在員がいるわ。そのつてで信用できる顔役を紹介してもらったの。彼らも『まつろわぬ神』がらみのトラブルで困っていたから、魔王・草薙護堂の来臨を心待ちにしてるそうよ」

「ま、魔王とか来臨ってのはないだろ……」

　エリカの言いぐさに護堂は顔をひきつらせた。

「ところでエリカさん。顔役というのは、どのような方なのでしょう？」

　ミルクティーを一口飲んでから、祐理が訊きく。

　大晦日の午後、現地の顔役を訪ねるにあたって、エリカは護堂と彼女を同行者に選んだのである。『祐理の力が必要になりそうだから』と言って。

「こちらの国には日本のような委員会も、ヨーロッパほど規模の大きな結社もないと聞いていたのですが……。占いや呪術を生なり業わいとする方々が民間にいるだけだと」

「たしかにそうね」

　エリカはうなずいてから言った。

「東南アジア方面にはそういう情報機関や飛びぬけて有力な結社は皆無だわ。でも、ほら。昔ながらのヤクザとかマフィアって地域社

会で顔が利きくものでしょう？」

「や、やく――!?」

「そういや、鷹よう化かの一家がそんな感じなんだっけか……」

「ええ。香ホン港コン陸りく家けは東南アジア的カルト経営のまさに典型だわ。腕自慢も術の使い手もそうでない者もいて、寄せあつめの人材が合法・非合法ひっくるめた事業を営むのよ」

　こんな話をしながら喉のどをうるおし、三人はカフェを離れた。

　護堂はひさしぶりに半はん袖そでのシャツを着て、麻あさのカーゴパンツをはいていた。

　エリカは紅あかいキャミソールに丈たけがくるぶしまでの黒いパンツ。祐理は涼しげな白いワンピースといういでたちだった。

　真冬の日本から、いきなり夏仕様にチェンジ。

　あわただしいが、数カ月ぶりの蒸し暑さが結構なつかしく、意外と新鮮に楽しめるのも事実ではあった。

　尚、リリアナと恵那は『遠征』のため買い出しに行っている。

　そう、コタキナバルの街は目的地ではない。まだ通過地点にすぎないのだ。

　エリカの先導にしたがって、護堂と祐理は歩いていく。途中、いきなり土砂降りの豪雨が降りはじめた。スコールである。

　やはり熱帯の地。午後になるとゲリラ豪雨の可能性が高まるようだ。

　三人はあわてて屋根付きのフードコートに駆け込んだ。

　軒のきを連ねる食べ物屋で好きなものを買い、空あいているテーブルで飲食できる。この手の屋根付きフードコートは、コタキナバル市内のあちこちにあるらしい。

「やっぱり、この辺の雨はすごいなー」

　屋根や道路をたたくバシャバシャという雨音がとにかく激しい。

　護堂の服も結構濡れてしまった。だが、このトラブルも微妙に楽しい。日本とはまったくちがう気候と風土にふれている。そう実感できるからだ。

「どうせ暑いから、服もすぐ乾くし……」

　すこし浮き浮きしながら連れの少女たちを見て、護堂は絶句した。

　夏らしい薄手の服を着たエリカと祐理。ふたりの衣服がスコールのせいで濡れてしまい、体にぴったり貼はりついていたのだ。

　おかげで、彼女たちの体の線がくっきり露あらわになっていた。

　しかも、祐理のワンピースは白い。濡れて下着が透けて見えるような――。

「ご、護堂さんっ。そんなにじろじろ見ないでください！」



「あら、珍しく積極的なのね。やっぱり海外に来た解放感のおかげ？」

　女子たちに言われて、護堂はあわてて目をそむける。

　以降、服が乾くまで目のやりどころに注意しながらであったが、雨宿りをかねて三人でフードコートを歩きまわった。

　屋台めいたスタンドで売られる品々を見て、エリカが目を細める。

「やっぱり混こん沌とんとした食体験を望むなら、こういうアジア的な空間がいちばんよね。日本は快適で住みやすい国だけど、その点ではあまり期待に応こたえてくれないから……」

　胡う乱ろんなつぶやきであった。

　しかし護堂は納得した。一目でわかる。たしかにエリカが好きそうな場所だと。

　マレー料理の代表であるスパイシーで辛からい炒飯チヤーハン・ナシゴレン、見た目は焼き鳥だがピーナッツとココナッツミルクのソースで甘い味つけのサテなど、基本編。さらにハンバーガーのパテをうすいオムレツでくるむマレー式バーガーなど応用編。

　ここに中国系の人々が作る中華料理が彩いろどりを加える。

　さらにインド系のカレー店、世界的なファストフードチェーンあれこれ。

　また水槽から魚介を選んでバーベキューにするシーフード店。そして果実の女王にして悪臭すさまじいドリアン等、南国のフルーツ類。

　イスラム教圏なので豚肉を見ない以外は、なんともカオスな食空間だった。

「何かわたし好みの食べ物を探して、腹ごしらえするのもいいわね……」

「これから人と会うんだし、やめとけ。晩飯まで待てばいいだ

ろ？」

　エリカを制してから、同意を求めて祐理に顔を向ける。

　すると意外にも、深しん窓そうの大やまと和撫子なでしこは興味深げにスタンドを見つめていた。

「万ま里り谷や……もしかして、腹へってるのか？」

「あ、いえ。そういうわけではないのですが。ただ気になったもので」

　はにかみながら、祐理が言う。

「以前ベトナムを家族で旅行したとき、ああいうお店で一度だけ麺めん料理をいただいて……とても美お味いしかったのを思い出しました。ふふ、旅の間に行ってみたいものですね」

「だったら祐理。エリカ・ブランデッリを当てにしてもいいわよ」

　おっとりと微笑むお嬢さまに、金髪の女悪魔がウインクする。

「これでも香港にいた頃は、毎日のようにどこかしらの屋台を訪ねていたんだから」

「本当ですか⁉　でしたら是非ごいっしょしましょう！」

「まあ、たしかにそういうのも悪くなさそうだけど」

　妙な企たくらみを共有しそうなエリカと祐理の勢いに、護堂は苦笑した。

　ふたりとも育ちのいい女子なのに、店の衛生面に不安を感じていないようだ。

「エリカはともかく、万里谷も結構逞たくましいところがあるんだなあ」

「わ、私、逞しく見えますか？」

　ふとつぶやいたら、祐理はすこしうれしそうに微笑んだ。

　今のうかつな発言。逆におしとやかな大和撫子をよろこばせたら

しい。何でだと首をかしげる護堂へ、エリカが皮肉っぽく言う。

「バカね。護堂みたいな人とつきあえるんだから、祐理だって心の奥底に筋金入りの逞しさがあるに決まっているわ。それか、あなたといっしょにいることで鍛きたえられたのよ」

「そ、そうか……」

　自みずからの不品行をかえりみて護堂は納得し、祐理は困り顔で苦笑した。

　そうこう話すうちに雨もやみ、青空がもどってきた。

　今の一雨で気温もすこし下がり、ぐっとすごしやすくなった。ふたたびエリカの先導で先へ進み、ある市場にやってきた。

　実はさっきカフェで休憩する前、一度ここを訪ねていた。

　そのときはまだ、只ただの空き地だった。しかし、ここ一時間ほどの間にあちこちテントが設営され、ところせましと露店が軒のきを連ねるようになったのだ。

　日用雑貨、野菜やフルーツなどの食料品、さまざまなものを売っている。

　だが、ひときわ目立つのがシーフード。アジにサワラ、カマスにイカなど東京でもおなじみの品々に、ウメイロなど南洋特有のカラフルな魚類もならぶ。

　そうした店を尻しり目めに進み、ついにエリカはあるテントの前で足を止めた。

　日用雑貨を売る店だった。奥に小柄な老婆がいる。白シャツに黒のスカートという地味な格好。肌はマレー系の浅黒さ。折りたたみのイスにちょこんとすわっていた。

　実にやさしそうな〝おばあちゃん〟であった。

　だが、彼女がさっきエリカの言った『顔役』なのだという。この界隈で仕事をするスリや泥棒、海賊などの元締め的なこともする占い師兼呪術師だとか。

「王様、遠いところをよく来てくださいました……」

　顔役の老婦人がブロークンな英語であいさつする。

　それから仏像にでもするように護堂をゆっくりと拝おがみ、合がつ掌しようしてみせた。

2

　二日前、甘あま粕かすが犬いぬ吠ぼう埼ざきで口にした神獣たちの本拠地。

『南シナ海にね、大小さまざまな島が一〇〇以上も集まる海域がありまして。フィリピンよりも西、ボルネオの北西というあたりですか。無人島だったり、リゾートホテルが建っていたり、周辺各国の海軍施設があったりと、島の中身はいろいろなんですが』

　と、甘粕はため息まじりに語ったものだ。

『そのなかの割と大きな無人島に数日前、謎なぞの巨大生物がいきなり出現したそうで……。ええ、あの蛇型と怪鳥型の神獣です。昨夜はこいつらが日本に移動してきて、騒動を引きおこした次第です』

『草くさ薙なぎさんに撃退されたあと、怪鳥は南シナ海の島に帰還したと確認されています。昭しよう和わの怪獣映画よろしく、東南アジアの海に怪獣アイランドが誕生した模様ですねェ……』

　軽口というには冗談の成分がすくない、甘粕の報告だった。

　かくして、護ご堂どうたちは問題の島に近いコタキナバルへ来たのである。ここを拠点に、まず島の内情を調べてみようと——。

　そして今、コタキナバルの市場で現地の呪術関係者と対面している。

「わざわざ王様がおいでくださるとは、ありがたい話ですわあ……」

「と、とんでもないです。とりあえず島のこと、いろいろ調べてみます」

　顔役の老婆がありがたそうに合がつ掌しようを続けるので、護堂は恐縮した。

　王様というより、仏様としてあつかわれているようだ。今まで出会った業界人とは一風異なる対応だといえた。

「さっそく船を用意させましょ。申し訳ありませんなあ……。あの島、もう三年も浮かんでいる割に、あたしらはたいしたこと知らなくて……」

　ゆっくり話す老婆の言葉に、護堂は「三年？」と首をかしげた。

「いえねェ。あれは三年前のある日、気づいたら海に浮いてた島なんですわ……。それまで海の水しかなかったところへ、唐とう突とつに。山もあれば森もある、結構ちゃんとした島が降ってわいたもんだから、漁師も海賊も海軍もみんなびっくりして……」

　護堂はちらりと相棒を見た。エリカはこくりとうなずく。

　この情報、知っていたようだ。何か理由があって語らなかったのか。

「しかも上陸したら最後、めったなことじゃ出られないわけですわ……」

「出られない？」

「上がった連中によると、島をうろついてたら勝手に迷っちまうって話です。あとは何日も迷いながら浜をめざして……。運よく船に戻れたもんだけが島を出られるそうで……」

　護堂はある知人を思い出した。

　なんか、あいつがからんでそうな事件だなと――。ふたたびエリカを見たら、物言いたげな表情が雄弁に語っていた。そういうことよ、と。

「そんなだから、この辺の国では『ない』ことになっとる島なんですわ……。ここらの船乗りはだあれも近づきません。あたしらのよ

うな者だけがこっそり知っとるだけで……」

　海図にも地図にも載らない島ということか。

　うなずく護堂へ老婆はふたたび合掌し、平へい伏ふくしながら言う。

「王様が島を見てくださるっちゅうことで、感謝しとります。どうぞよしなに……」

「おばさま。例の品を見せていただけますか？」

　脇わきから口をはさんだのは、エリカだった。

「例の……ああ。三年前、あの島が出た直後、近くの浜に流れついたもんですわ。あたしらはどこかの神様にゆかりの品だと思っております……」

　よっこらしょと老婆は立ちあがり、うしろの木箱をごそごそ探る。

　取り出したのは、細長い棒状の石だった。長さ一メートルほどで、どうにか片手で握れる太さ。表面はごつごつしていて、黒こく曜よう石せきのように黒い。

　黒い石が放つほのかな呪力に護堂は気づいた。某なにがしかの力を秘めていそうだ。

　これを見た途端、祐理がハッとする。

「何か視みえた、祐理？　この神具かもしれない品、是非あなたに鑑定して欲しかったのよ。決定的な手がかりになりそうでしょう？」

「は、はい。これは——」

　エリカに訊かれて、媛ひめ巫み女こはおごそかに託たく宣せんした。

「母なる原げん初しよの海より土を練りあげ、真水を起こし、緑の草木をはぐくむ創世の神具。……私たちは以前、これとよく似た品を見たことがあります」

後半の言葉をわざわざ足すのだから、祐理も同じ疑惑を感じていたようだ。

そう。あのときも謎めいた島が海に突然現れ、入りこむ者を迷宮の魔力が眩げん惑わくし、しかも国産みの神具とやらが小道具で登場——。

うなずく護堂、腕組みするエリカ、心配そうな祐理。

三人が同じイメージを共有しているのは、まちがいなさそうだった。

二時間後、護堂たちの姿は洋上にあった。

夕焼けであざやかなオレンジ色に染まる南国の海。大型の遊漁船がその海原を軽快に突っ切っていく。まさにサンセットクルーズであった。

市場の老婦人が、護堂たちのために手配してくれた船だった。

シャワーにエアコン、一軒家の居間のように広いキャビン、さらに簡易ベッドがふたつずつある寝室までいくつもそなえている。

何日も泊まりこみで海釣りやマリンレジャーを楽しむための大型船なのだ。

——謎めいた島がある海域は、コタキナバルからさほど遠くない。

夜になる前に到着できると聞いて、今日のうちに遠くからでも島の様子を見てみようとなったのだ。神様がらみの事件、大規模化する前に解決できるなら、それに越したことはない。というわけでリリアナ・恵え那なと合流し、船に乗り込んだのである。

あの老婦人の子分だというクルー数名に、操船はおまかせしている。

護堂たちは現在、キャビンで会議中だった。

その席でリリアナ・クラニチャールは憂ゆう鬱うつそうに言っ

た。

「これは只の憶測です。『そう思える節がある』というだけで、特定人物に罪をかぶせようとする問題行為だとも思います。それでも言わせていただくなら——」

　青いレースのブラウスと黒のショートパンツというラフな私服姿。しかし、リリアナは騎士らしく謹きん厳げんに決めつけた。

「英国の黒王子さまブラックプリンスが事件に関与している可能性、すくなからずありそうな気がしますね」

　迷宮の権能を持つアレクサンドル・ガスコインと天あま之の逆さか鉾ほこ、浮島事件。

　やはり、あの騒ぎを思い出した。無理もない。全員そうなのだ。何しろ能天気な恵那でさえ、しみじみ言うくらいだ。

「あれだね。李すももがなってる木の下で、冠かんむりを正すくらいの怪あやしさっていうか」

　いわく、とにかく疑わしいと。まさにそうだと護堂もうなずく。

　尚、国外へ出るにあたり、清せい秋しゆう院いん恵那もついに例の制服を脱いでいた。半袖のパーカにカーゴパンツと夏休みの男の子めいた格好である。

　昼間、恵那とリリアナが市場で仕入れてきた品々はキャビンの端にある。

　ダンボール箱に詰めた装備や衣類、食料品。南海の無人島探索で必要そうなものを見つくろってもらったのだ。

「考えてみれば、あいつ。東京湾の騒ぎのとき、妙に手て際ぎわよかったよな。天之逆鉾って神具の使い方をちゃんと知ってたり……」

「似たような計画をどこかで試こころみる機会があったから……。ありえそうな話よね」

　護堂がつぶやけば、エリカもあいづちを打つ。

　一歩まちがえば誹ひ謗ぼう中ちゅう傷しようの会話。参加しないのは祐理だけだった。みんなの発言を困り顔で聞いている。ただし、それは生来のつつましさゆえだろう。

　たまに『やっぱり……』と言いたげにうなずいている。異論を唱える気はないのだ。

「ガスコインのやつ、今どの辺にいるんだろうな？」

「例によって消息不明よ。すこし前までスペインにいらしたそうだけど」

　考えこむ護堂にエリカが即答する。さすがに準備がいい。

「ま、本人にお訊ききしたところで素直に答えてくださるはずもないし、おいおい調べていきましょうか……」

　こんな閑かん話わの間にも、船は問題の島へ順調に近づいていた。

　そろそろ目的地だとインド系の船員が報しらせにきたので、護堂たちはおしゃべりをやめ、船の甲かん板ぱんに出た。沈む西日で夕焼け色に染まる南シナ海が見わたせる。

　観光で来たなら、このうえなく感動的な光景だったろう。

　だが、十数キロ前方に見える『島』はあやしい神獣の住みかだという。しかも、入りこんだ者を迷宮めいた力で虜とりこにする。まさに魔境というべき場所だった。

　決して小島ではない。それなりに面積もありそうだ。

　海から遠くに見るかぎり、島のまんなかあたりはかなり高く隆起している。そこそこ標高もある山なのだろう。多くの木々が島中に生いしげり、緑もゆたかそうだ。

　まっすぐ船を進めれば、玄関口のような入り江に上陸できる。

「思ってたよりでかいな……」

　つぶやいてから、護堂はふと気づいた。

「そういやさ。ガスコインが造る迷宮って、どのくらい保つんだ？　三年も放置して、維持できるもんなのかな？」

「アレク王子がそばにいない場合、三、四カ月で魔力を失うというわね」

「その時期から迷宮のさまざまな魔力は徐々にうすれていくと、賢人議会のレポートに記録されていました」

　疑問への答え、エリカとリリアナはしっかり心得ていた。

「じゃあ、やっぱりあいつじゃないのか……？　あの忙しそうなやつが定期的にここへ来てるとは考えにくいしなあ」

「逆に、そこまでするほど重要な場所なのかもしれないわよ？」

「あるいは、何かの術や神具で、権能の効果を長びかせているのかもしれません」

　すぐに反対意見が出るあたり、当該人物の人徳のなさを物語っている。

　まあ、全て日頃の行いが悪いからなのだが……。

　ともあれ、今夜から島の調査と偵察をはじめる予定だった。こういうとき護堂はただの役立たずだが、仲間の女子はちがう。魔女のリリアナと霊視力の高い祐理は、特に活躍してくれるはずだった。

　そこでメンバーそれぞれ、船内で準備をはじめた。

　……決して油断していたわけではない。何しろ、この面メン子ツである。

　護堂も恵那も動物的に勘がよいし、危険にも敏感だ。エリカとリリアナも十分に警戒していた。また、誰より霊感の鋭い祐理がいた。

　だが、しかし。その襲撃を誰も察知できなかった。

　――船の甲板をいきなりすさまじい突風が駆け抜けたのだ。

　船のクルー、さらにはエリカとリリアナまで虚きよを突かれ、吹

き飛ばされた。陽ひが沈んだあとの夜の海へ、ぼしゃんぼしゃんと水音を立てて、みんな落ちていく。

　なんともなかったのは護堂のみ。

　だから、ひとりだけポツンと甲板で立ち尽くす格好になった。

　今のは自然の風ではないのだろう。魔術や神力によって発生した、超常の風。だからカンピオーネの肉体は影響を受けなかった——。

「護堂！」「草薙護堂！」

　船の外、海の方からエリカとリリアナの声が聞こえる。

　クルーたちの悲鳴も聞こえるから、みんな無事だったようだ。

　むしろ無事でないのは、船上にいる護堂の方。大型遊漁船のキャビン。その屋根の上に見覚えのある怪鳥が悠々と止まっていた。

　数日ぶりに会う神しん鵰ちようだった。今の突風、こいつが巻き起こしたのだ！

　すぐに護堂は確信した。なんの前兆もなく瞬間移動してくる反則技、いくら神鵰でも使いこなせるものだろうか。おそらくちがう。

　まちがいなく火の女神——正体不明の神が魔術をかけたのだ。

3

　翼長一五メートルという巨大な神鵰は、両の翼を勢いよく広げた。

　力強く羽ばたく。その爪つめは大型艇のキャビンごと船体をつかんだままだった。船の重量など苦にもせず神鵰は浮かび上がり——。

　気づけば、この船ごと草くさ薙なぎ護ご堂どうは空を飛んでいた。

　すっかり夜である。夜空の黒い天幕にはおびただしい数の星が燦きらめいていた。

　日本の冬とは見える星座もちがう。みごとな南国の星空だった。半月も白い輝きを冴さえ冴ざえと放っている。

「って、雲がめちゃくちゃ近いぞ!?」

　いつのまにか高度がだいぶ上がっていたらしい。あわてて船ふな縁べりに行き、下を見る。

　海面は遥はるか眼下。サトゥルヌスの事件でリリアナに運んでもらったときと同じほどの高度だった。急上昇の気配など、すこしも感じなかったのに。

　この鳥、やはり飛ぶのが上う手まいらしい。

　今や護堂は固定されてない荷物の身だが、船から空へ転がり落ちるという不安はなかった。

　神鵰が船の甲かん板ぱんを水平にするよう注意でもしているのか、すばらしい安定飛行なのだ。おかげで、護堂は一度もよろめいていない。

　いまいましさと賞賛を込めて、護堂は悠々と羽ばたく神鵰を眺めた。

　聖なる鳥と呼ぶにふさわしい精せい悍かんな面つらがまえで、鳥王の威い厳げんすら感じる。しかも護堂は甲板にいるから、キャビンに取りついた神鵰を見あげる格好だ。

　無防備な腹や喉のどをさらす体勢なのだが、実に落ちついた飛びっぷり。

　勇敢でもあるらしい。まあ、この高度で護堂が攻撃に出てもいっしょに墜つい落らくするだけ。警戒の必要を感じてないのかもしれないが……。

「王様！」「護堂さん!?」

　不意に呼びかけられて、護堂は驚いた。

見ればキャビンのドアを開けて、恵え那なと祐ゆ理りが甲板に出てくるところだった。そういえば、さっきみんなが海に落とされたとき姿を見なかった。船内にいたからなのだ！

ふたりはこちらに駆けよってきた。

「天あまの叢むら雲くもを呼んで一ひと太た刀ちは——まだ、我が慢まんした方がいいか」

護堂と同じ考えにいたったのだろう。恵那がつぶやいて、肩をすくめた。

三人を乗せた遊漁船が連れていかれるのは、明らかに前方の島。どんどん景色が近づいてくる。高度もすこしずつ落ちてきた。頃合いを見て、仕掛けなければ——。

敵が手ぐすね引いて待つ場所まで行くことはない。なんとしても途中下車すべし。

護堂、恵那、祐理はこくりとうなずき合う。

三人を乗せて、神鵰に運ばれる船は島の入り江上空を通過した。

月が明るいのと夜目が利きくおかげで、夜ではあったが島の地形はかなり把は握あくできた。

海辺のマングローブ林。ついでオランウータンでもいそうな熱帯の森。

そして、標高七、八〇〇メートルはありそうな中央部の山。この山の頂いただきめざして、神鵰は飛んでいるようだった。

山のふもとから急に木々の植生が変わったので、護堂は「ん？」と眉まゆをひそめた。妙に高原めいた広葉樹ばかり。いきなり熱帯雨林の雰ふん囲い気きが消えた。

もちろん熱帯にも高地はあり、そういうところはかなり涼しい。

しかし、このあたりはまだ植生が変わるほどの標高ではないはずだが——。

「さすが神様たちの住む島だねー。感じるよ。この御山、神様の気

が半はん端ぱじゃない。かなりの聖域のはずだよ」

「山頂から特に強い霊気を感じます。あの女神がいらっしゃるのかもしれません」

　霊山のスペシャリスト・恵那が語り、いつもの鋭えい敏びんさで祐理が警告する。

　護堂は眼下を見おろした。山の斜面まで七、八〇メートルというところか。

　もっと高度が落ちるのを待ちたいが、それでは遅いのかもしれない。どうする——護堂が悩んだとき、媛ひめ巫み女こふたりがうなずき合った。

「護堂さん。ここは私たちにおまかせください」

「大丈夫、なんとかしてみせるよ。天あまの叢むら雲くもをお願い！」

　言われて護堂も決心した。うなずいて、右腕の力を抜く。

　直後、恵那の手中に神刀・天あまの叢むら雲くもの劍つるぎが忽こつ然ぜんと顕あらわれる。刃渡り三尺三寸五分。日本刀の拵こしらえを持つ、反そり身みの彎わん刀とう。その刀身は漆しつ黒こくであった。

「天叢雲の御劔よ、我に弓矢の誉ほまれを取らせ給たまえ！」

　言こと霊だまと共に神刀の御霊を神がかりし、恵那が甲板を蹴けった。

　そして、ましらのごとき跳躍。空の旅の安全を確保してくれていた神鵰、その腹を袈け裟さ懸がけの一刀で存分に斬きる。

　くあああああああああっ！　神鵰が大きく啼ないて、苦く悶もんを訴えた。

　そこに恵那がもう一跳び。右の爪に神刀の切っ先を突き刺す。すると、船のキャビンをつかんでいた右爪が船体を取り落とした。ガクン！

衝撃が来て、空中で船の平へい衡こうは失われる。高度もだいぶ落ちて、山の斜面が近くなった。

さすがの神鵰も堪こらえ切れなくなり、左爪も船体を放してしまう。かくして、護堂たちを乗せる大型艇は地上に自由落下していった！

下には山林の木々がたっぷりと生いしげっている。

多少はクッションになるかもしれないが、このまま墜落すれば無傷ではすむまい。

護堂たちを待つのは、飛行機墜落事故と同じ結末。だが、しかし。

「天あめの鳥とり舟ふねの御霊、鳥とり之の石いは楠くす舟ぶね神のかみに願い奉たてまつる！」

「我らの渡りをつつがなく成じよう就じゆさせ給え！」

媛巫女ふたりが言霊をそろって唱となえる。

すると船体の落下速度が急激に落ちた。まるで羽毛が舞い降りるように、ふわりと空をただようようにゆっくりと降下し、なだらかな山の斜面と広葉樹の森にすべりこんでいく。

落下速度が下がったとはいえ、それでも衝撃が来た。

甲板上の三人はつんのめり、全員さすがに転んでしまった。そのまま船はずるずるとすべっていく。落下の勢いが止まらないらしい。

がんがんっ。がつんっ。がんっ。がんっ。物騒な音をたくさん聞いた。

船体のあちこちがさまざまに接触事故を起こしているようだ。

そして、地上に墜おちた船がようやく停止する。媛巫女ふたりと護堂はふぅと大きく息を吐き出した。三人ともどうにか無傷だった。

このなかでいちばん頑丈なのは草薙護堂。そしてリーダー格でも

ある。

　責任感からすぐに立ちあがり、夜空を仰あおいだ。

　きゅああああああぁぁぁぁああっ。

　甲かん高だかく啼ないて、神鵰がどこかに飛び去っていった。恵那のあたえた傷が痛むのか、主あるじの女神に帰還を指示されたのか。いずれにしても、当座の危機は去ったようだ。

　しかし、まったく安心できない。

　祐理が不安そうな顔で、恵那が引きしまった顔で近づいてくる。

　ここは魔境というべき島のまっただなか。十分に調査してから乗り込むつもりだった地に、思わぬなりゆきで連れこまれた。

　本格的な厄やっ介かい事ごとは、これからはじまるにちがいないのだ。

　護堂たちは暗い夜間に動く愚ぐを避けた。

　ぼこぼこになった大型艇のそばで一晩すごし、朝になったら行動を起こすべし。

　それが現状ではベストだと、護堂・恵那・祐理の意見が一致したのである。

　幸いミネラルウォーターやその他の飲料、食糧も十分あったし、島での探索にそなえて準備した装備もある。懐中電灯で明かりにも不自由しない。

　ライターでたき火を起こし、お湯も沸かす。

　インスタントコーヒーとマレーシアのカップ麺、ビスケットと夕食は質素だった。

「そういや俺と会うまで、エリカのやつはインスタントラーメンも食べたことなかったらしいんだけど、万ま里り谷やはどうなんだ？」

恵那とは木き更さら津づの事件で、今夜と似たような食事を共にしている。

では、生きつ粋すいのお嬢さまである祐理はどうなのか。好奇心からの問いだった。

「私はふつうにありますよ。母はこういう食事をきらっていましたが、昔から恵那さんといっしょにときどきこっそりと……ふふ」

「ま、いけないと言われたら、やってみたくなるもんねー」

悪戯いたずらっぽく微笑む祐理と、共犯者の顔でにやりとする恵那。

昔から仲がよかったということなのだろう。護堂は微笑ましく思った。

ふたりともカップを持つ手つき、麺をたぐる割わり箸ばしの使い方がひどくきれいで、育ちのよさを感じさせてくれる。

また、この山の空気はひどく冷たいので、あたたかい食べ物が美味だった。

夜になって気温が下がったというより、季節が夏から秋になった感じだ。

護堂は長袖のパーカを着ている。祐理と恵那もやはりトレーナーにウインドブレーカー、スウェットなど長袖の服装である。コタキナバルで買ったものだ。

山や熱帯雨林に入ることを想定して、長袖の衣類も準備してもらったのだ。

「どうにかして、外と連絡取れるといいんだけどなー」

のびをしつつ星空を見あげて、護堂はつぶやいた。

すでに祐理と恵那がいくつかの呪術で、エリカたちへの連絡を試みている。しかし、それらの術が島の外部へ届くことはなかった。

「魔女のリリアナさんは水にも強いだろうから、海に落とされたくらいじゃ全然ピンチじゃないはずだけど。安あん否ぴを確認できな

いのはちょっと心配だよねえ」

「私の精神感応でも上う手まくいきません」

　恵那が言えば、祐理も報告する。

「この山のなかで感応の触手をのばしていると、途中ですごく重たくなります。それ以上はのばせなくなって、もうダメなんです」

　呪術での連絡・探索はどうもできないらしかった。

　夜が更ふけてくると船内に入り、全員キャビンで寝ることにした。緊急時にすこしでも集団行動しやすいよう、一箇所に集まっておく。

　そして、交代で見張りに立つことにした。

　なにしろ、予兆もなく瞬間移動してきた神鵬の例がある。

　この三人が警戒心を高めた以上、そう万一の事態にはならないかもしれない。が、用心するに越したことはないだろう。祐理・護堂・恵那の順番で見張りは三交代とし、ほか二名は毛布にくるまって眠る。

　こうして魔境の島での一夜は何事もなく明け、朝が来た。

　また非常食でかんたんに朝食をすませ、三人は支度をはじめた。

　ただの遭難なら、じっと救助を待つ手もあるだろう。だが、この山、この島の情報を集めるには、とにかく動くしかないのだ。

　必要そうな持ち物を吟ぎん味みして選び、登山用のリュックにつめていく。

　その途中、護堂はふと思いついて訊たずねてみた。

「エリカとかリリアナが剣を呼ぶやつで、かんたんに運べたりはできないのか？」

「あの術は剣一本程度の長さと重さまでしかダメだから、こういうときはあんまり役に立たないんだよねー」

「日につ光こうでも使った荷物をひきよせる術は、探索の術と同じ

で使えないようですね……」

　結局、楽はできないと判明しただけだったが。

　ともかく準備がととのったので、三人は山歩きをはじめた。

「あっ。考えてみたらさ、今日って一月一日だよ」

「そういえば！　七なな雄おのお社やしろでひかりがちゃんとやれてるか、すこし心配です。しっかりした子ですけど、巫み女ことしてはまだ見習いですし……」

「一年の計が元旦にあるなら、今年はどんだけ騒動が待ってんだろうなあ」

　今日の日付を確認しつつ、先へ進む。

　先頭に立つのは山歩きに慣れた恵那。次いで祐理。しんがりは護堂が守る。

　明るい日中。あらためて周囲の木々を見まわす。

　広葉樹の森。木こ洩もれ日びが輝き、はじけ、風が黄金色に光る世界。木々の間をそよ風が吹き抜け、実に涼しい。まるで秋のヨーロッパの森を散策しているようだ。

「つっても、ここは赤道直下に近い熱帯だけどな……」

「今がどの季節か、わからなくなりそうで困ります……」

「あからさまにふつうの島じゃないって証拠だよねえ……」

　あやしさを再確認しながら森を歩いていると、祐理が「あ」とささやいた。

　もしや、霊視のお告げか？　身がまえた護堂だが、すぐに理由がわかった。まわりの景色がいつのまにか変わっている！

　道なき森。下生えをかき分けつつ、ここまで三〇分ほど同じ森のなかを歩いてきた。

　だというのに。いつのまにか、まわりに立ちならぶ木の位置や形、並びなどが大きく変わっていた。護堂はとまどった。自分たち

は迷ったのか？

「んー……今までと太陽の見え方がちがう」

　恵那が顔をしかめて、空を見あげた。

　広葉樹の森。木洩れ日が輝き、はじけ、風が黄金色に光る世界——ではなかった。

　ここはさっきよりも木々の枝と葉がより鬱うつ蒼そうと生いしげっていて、昼だというのに暗い。あまりさわやかな印象はなかった。

「私たち、さきほどまでとちがう場所に入りこんでいるようですね」

　祐理がつぶやいてから、ハッとなってリュックを探る。

　取り出したのはコンパスだった。北の方角を指していなかった。針はゆっくりくるくると回転していた。どの方角が北か、選びあぐねているように。

「迷いの森ってことか……」

「森どころか、島全部がこんな感じかもしれないよ、王様」

　恵那の予想はどうも〝当たり〟くさかった。

　数十分も歩いていると、いつのまにか居場所が今までと変化するのだ。

　森から、より深い森の奥へ。深き森から切り立った断だん崖がいのそばへ。崖の近くから谷底へ。谷底から、また森の一角へ。

「……今度は結構きれいな場所に迷いこんだな」

　二時間ほど歩きまわったところで、護堂はつぶやいた。

　森のなかを進んでいたら、ちょうど小さな滝のそばを通りがかったのだ。滝たき壺つぼには清せい冽れつな水がたまり、小川となって流れていく。

　あちこち歩きまわって、体力のない祐理はぐったりとしていた。

　彼女をこの辺で休ませたい。見れば、恵那がこちらに目くばせしている。山歩きの達人も同じ考えのようだ。護堂はうなずいた。

「すこし休憩しようか。ちょうど水もあることだし」

　護堂が言うと、恵那は小川へ寄っていった。水面に顔を近づけ、くんと匂においをかぐ。

　それから指先を水につけ、ちろりと舐なめてから、太た刀ちの媛ひめ巫み女こは宣言した。

「うん。この水なら飲んでも大丈夫だよ」

「そんなことまでわかるのかよ」

　護堂は苦笑したが、ありがたい情報だった。

　この先、水がどこまで保つかも不明。補給できるのは大きい。一方、恵那はアルミのマグカップをリュックから出した。水をくみ、祐理のところへ持っていく。

　ここまでの行軍、太刀の媛巫女には散歩と同じ程度らしい。軽快な足取りだった。

「あ……ありがとうございます」

　礼を言って、祐理はごくごくと水を飲みほした。そして笑顔になる。

　自分よりもまわりを安心させるために、多少無理して作った類たぐいの笑みだった。やはり、ここでしばらくのんびりするのがよさそうだった。

「どっちみち、歩きまわるだけじゃ埒らちがあかなそうだもんなあ……」

　護堂はつぶやいて、小川に手を差し入れた。水の冷たさが気持ちいい。

　今の状況、かなり八方ふさがりに近い。神様との戦いは毎度のことだが、こんな形で危険が降りかかってくるとは……。

　護堂がぼんやり滝壺を眺めていると、祐理が身を乗り出した。

　小川の流れが下っていく先をじっと見つめている。媛巫女仲間に恵那が訊ねた。

「何が視みえたの、祐理？　よかったら言ってみて」

「あ、はい。私たちが助かるための路みちは、この先にあるような気がしたもので」

「そういえば、海まで戻れた人たちは島から脱出できたんだっけか。川の行きつく先は海だし、なんか筋が通ってるな」

　護堂がうなずくと、祐理は不意にハッとした。

　彼女の体から白い霊気が立ちのぼる。精神感応のオーラだ。これが小川の流れに沿って進んでいく。先へ、どんどん先へ。祐理は大きくうなずいた。

「やっぱりそうです。川に——流れる水に沿う形で感応力をのばしていけば、ふつうに力を使えます！」

　この報告に護堂は目をみはった。すぐに恵那が叫ぶ。

「でかした祐理！　今どんな感じ？」

「はい。この川はもうすこし大きな渓けい流りゅうに合わさって、山をどんどん下って……海に流れ込みます。海まで行けば、もう完全に力も自由に——」

　目をつぶって精神集中しつつ、祐理は語る。

　海、川——どうやら『水』がこの魔境を突破するための鍵かぎだったようだ。

　うなずきつつ、護堂は思い出した。この島の主ぬしは火の女神と名乗っていた。火は水に弱いもの。それも関係あるのかもしれない。

「!?　エリカさんとリリアナさんがいます！　海でボートに乗って！」

　祐理がうれしそうに叫ぶ。最重要情報の到来に、護堂は物思いを中断した。

4

　エリカとリリアナはふたりでエンジン付きのボートに乗っていたのだという。

　ひとりで一本釣り漁をする漁師が使うような小舟。これのエンジンを止めて、島の沖をただよっていたのだそうだ。

　そこに祐ゆ理りは精神感応の念波を送りこみ、ふたりに語りかけた……。

　かくして、海上のボートと魔境の一隅を祐理の感応力が結びつけたのである。

　目をつぶったまま、祐理は小川のなかに華きや奢しやな両手を差しいれた。すると、流れる水面にエリカとリリアナの姿が映し出される。

　媛ひめ巫み女こが送りこんだ感応力が視認している映像なのだという。

　金髪と銀髪の白人少女はふたりとも、Ｔシャツの上に薄手のジャケットを着た姿。南洋のまぶしい太陽の下、青く澄んだ海にかこまれている。

　護ご堂どうたちのいる山中と打って変わった、海の景色が川かわ面もに映っていた。

『海に落とされたあと、クルーのみんなに泳いで集まってもらって、リリィの飛ひ翔しよう術じゆつでコタキナバルへもどったのよ。全員無事だったわ』

　エリカが神しん鳫ちよう出現のあとを語る。たいして危険はなかったようだ。

『今朝、大きめの漁船であらためて出航してもらい、島の近くにもどってきました。ただ、船員たちが島に近づくのを怖がったので……』

『あちらの船には、離れたところで母船として待機してもらうことにしたのよ』

『わたしとエリカのふたりでボートを借りて、ここまで来たわけです。今はいろいろと島の調査を行っていました』

　リリアナも加わっての状況報告。ちなみに、ふたりともいかなる船舶免許も所持していないが、エリカの『たぶん、どうとでもあつかえるわよ。かんたんそうじゃない？』で、このボートを借りたのだとか。

　エンジン付きの割に単純な乗り物とはいえ、見よう見まねで操ってしまう。

　エリカらしい器用さだった。まあ、飛翔術も使えるリリアナがいれば、遭難の危険もないと踏んだのだろう。

『みんなのことだし絶対に生きていると思ってたけど、予想どおりだったわね』

「お、俺はともかく、万ま里り谷やや清せい秋しゆう院いんのことは心配しろよ……」

　自みずからのデタラメな生命力に自覚があるため、護堂は連れの少女たちのために訴えたが、エリカは『それより』と島組の現状を訊きいてきた。

　ひととおり簡潔に語る。するとリリアナが言った。

『昨晩のことですが。コタキナバルにもどったあと、過去にこの島から生還できた人間を運よくつかまえられたので、そのときの体験談を聞いてみました』

　昨夜から今日にかけての時間、騎士たちは無駄にしなかったらしい。

　さすがの抜け目なさ。感心する護堂へエリカが語る。

『彼が言っていたわ。さんざん島内をさまよったあげくヤケになって、たまたま持参していたゴムボートで命がけの川下りラフティングをしたんだって。死ぬ思いをしたけど、なんとか海にたどりつけたそうよ』

　ラフティング。急流をボートで下る川遊びでありスポーツ。

　この島でやるのは、たしかに相当の危険がありそうだ。護堂は感心した。

「よく生きて海に出られたもんだな……」

『趣味でカヤックをやっていたおかげらしいわ。とにかく、水の導みちびきにまかせるのがいちばんいいみたいね』

『あの女神が火を操るなら、水こそがそれを封じるものですからね』

　エリカとリリアナの忠告に、護堂はうなずいた。

『さっき確認しましたが、島の浜辺までなら飛翔術でも飛んでいけます。そこまで来ていただければ、わたしたちもすぐに合流できるはずです』

『まず全員集まることを優先しましょう。可能なら戦闘は避けた方がいいわ』

　以上が、遠く離れた騎士たちとの会議内容だった。

　ひととおり話し終え、川面の映像も消える。ずっと精神集中していた祐理が目を開き、そばで聞き役に徹していた恵那がうなずきかけてきた。

　いよいよ再スタートの時間であった。

　川に沿って下山する。これは遭難したときのタブーだという。

　山地を流れる渓けい流りゅうは荒れやすい。雨が降れば水量はすぐに増し、近くにいる者を呑のみこみかねない。足場も不安定なので、足をすべらせて川に落ちることもありうる。

しかも、あやしい魔境内部とはいえ、ここは熱帯。

スコール――局地的豪雨の不安がある。今の時期、ボルネオ近辺は雨期なのだ。午後から夜にかけて、一度どかっと降る日が多い。

しかし今回、護堂たちには自然児の恵那という味方がいた。

雨が近づくと匂においでわかるという彼女を信じて、あえてタブーを犯すことにした。

祐理が精神感応でたどったルートを、そのまま自分たちの足で踏破していく。

媛巫女の霊力が立証したように、流れる水に沿って進めば、どこともも知れぬ場所にさまよいこむことはなかった。

細かい玉たま砂じや利りを踏みしめつつ、渓流のほとりを歩いていく。

大きな岩も小さな石もまんべんなく転がっていて、ときどき大岩を乗り越える必要が出てきたりもした。あるいは渓流に足を踏み入れ、膝ひざまで水につかりながら進んだりもした。

こうなると、パーティー各員の体力差が表面化してくる。

恵那はまさに水を得た魚。猿さるのごとき身ごなしで軽快に前へ前へと進んでいく。

彼女ひとりなら、この難路もあっさり踏破できるのだろう。だが、もちろんそうはせず、もっぱら体力のない幼なじみのバックアップにまわっている。

ふぅふぅと息を切らせながら、大岩をよじのぼる祐理。その背を恵那が支えたり。

急流のなかを歩いて進むときは祐理が足をすべらせ、流されてはいけないと、たがいの腰をロープで結んで恵那が先導したり。

「あ、足手まといになってすいません……」

苦労して進みながら、祐理は悄しよう然ぜんとあやまったりもした。

だが、そんなふうに思う人間は彼女以外にいない。何しろ、祐理こそがこのパーティーの導き手、替えのきかない羅ら針しん盤ばんなのだから。

実際、渓流の両脇が切り立った断だん崖がいになっていたときなど。

どうしても川沿いを行けないので、しばらく川を離れて、水音を頼りに歩いていたら、あの迷宮の効果でどことも知れぬ森のなかに迷いこんでしまった。

これはまずいと護堂があせったときも、

「あちらに進みましょう」

決然と祐理が指さし、その方向に進むと川のほとりにもどってこられた。

護堂は細かく小休止をはさみ、祐理を休ませるよう配慮していた。自分自身の体力はそれほど問題ない。疲れはあるがもともとタフな方だ。アウトドアの経験もそこそこはある。

かくして、再スタートから約三時間がすぎた。

時計を見たら、午後二時近くだった。

祐理の体力も限界が近いように思える。目がうつろで、足取りも力ない。話しかければハッとして答えようとするが、がんばって作る笑顔がむしろ痛々しい。

「この辺で一、二時間くらい休むことにしようか」

小休止を細かく入れつつの行軍だったが、そろそろ長く休んだ方がよさそうだ。

護堂が告げると、祐理はすぐに安あん堵どの表情を見せた。

「わ、わかりました……。私、あちらですこし腰を下ろしていますね……」

ふらふらと祐理が木陰に向かって歩いていく。

　しかし、途中でつまずき、その場にへたりこんでしまった。それに護堂と恵那は駆けより、あわてて支え、木の幹にもたれかけさせた。

　よほど疲れていたのだろう。祐理はそのまますぅすぅと寝息を立てはじめた。

「俺のせいで苦労をかけさせて、申し訳ないなあ……」

「まあまあ。祐理が王様のために望んでしてる苦労だよ」

　お嬢さまの安らかな寝顔を見守りつつ言ったら、恵那に笑顔でコメントされた。

　こういう答えを口にするあたりに、清秋院家長女の本質がかいま見える。現代の女子高生である前に、武家の血をひく名家の大やまと和撫子なでしこなのだ。

「ただ、このペースだと海までたどり着くのに三日くらいかかりそうなのが心配かな。恵那と王様はなんとかなるけど、祐理はたぶん最後まで保もたないよ」

「だよなあ。だと、やっぱりアレしかないんだけど……」

　歩きながら考えていた腹案を、護堂はもてあそぶ。

　そして、ここまでガイドラインになってくれた渓流をあらためて眺めた。

　このアイデア、カロリー消費という点では今までの行軍よりも体にやさしいはずだが、危険度はおそらく二〇倍以上だ。そして、必要な道具がない。

「王様すごいっ。考えがあるんだ。どういうの？」

「ほら、エリカたちが言ってたろ。ラフティングで海まで行った人がいるって。まあ、未経験者の俺たちがやったら、途中で絶対に転てん覆ぷくするけどな。ついでにいうとゴムボートもオールもないから、そもそもチャレンジできないわけだ」

　尚、木材でボートを造るにはかなりの熟練と工具が必要である。

　というわけで、実現性ゼロのプランとして切り捨てていたのだが。しかし、恵那は真剣に考えはじめた。

「清秋院？　さすがにこれは無理だろ。まじめに考えなくても」

「いやさ。たしかに細かいところで問題はたくさんありそうなんだけど……やってやれないことはないかなって。恵那と祐理が術を使いまくって、どうにかすればね」

　なに!?　予想外の答えに護堂は驚いた。

「ただ危険なのはどうしようもないから、なるべく試さない方がいい手ではあるよね。——でも、さすが王様。恵那にはその発想なかったよ！」

　完かん爾じと笑顔になって、太刀の媛巫女は朗ほがらかに言った。

「悪いけど、今のアイデアのどこに誉ほめられる要素があるのか全然わからないぞ……」

「いやいや。自分よりもデタラメなこと思いつく人、恵那はいつだって尊敬しちゃうよ。それに王様は思いつくだけじゃなくて、実際にやっちゃう人だし」

「今度は誉められてる気がしない……」

　微妙な気分になりつつも護堂はリュックをおろし、荷物を探る。

　祐理が目をさましたとき、軽い食事と甘いものでも出してやりたい。道具を用意して、その準備をはじめた。

　一方、恵那はイタズラを思いついた子供の顔になっていた。

　おもむろに短刀を取り出し、川岸に生えていた木の枝を切る。そこらに落ちている枝を拾い集める。リュックから道具をあれこれ出す。

「〜〜〜〜〜♪」

　恵那は鼻歌を口ずさみながら、何やら工作に没頭中。

　先にアウトドア料理（というほどではないが）の準備を終わらせた護堂は、祐理のめざめと恵那の作業終了をのんびり休みながら待つことにした。

　そして約四〇分後。恵那はできた品を満足そうにポケットへしまいこんだ。

　しばらくすると祐理も目を開け、寝ぼけまなこで川原かわらを見わたすようになった。

　護堂は準備をはじめた。

　恵那が『結構おいしい』とお墨付きを出した川の天然水。これを携帯用のステンレス鍋なべにくんで、火にかける。小サイズのガス缶で燃やすタイプのコンロを持ってきていたのだ。

　鍋の水が沸騰したら、アルミのマグカップ三つにお湯を注ぐ。

　あとはスティック袋の砂糖とインスタントコーヒーを投入。かきまぜる。砂糖の方は特に多めにしておいた。

　それから、鍋のお湯にインスタントの袋ラーメンをイン。

　護堂は麺がゆであがるのを待つ間に、恵那と祐理を呼びよせた。

「ふふ。甘くて、とてもおいしいですよ」

　アルミの飲み口の熱さに苦労しながらも、祐理は大切そうにコーヒーを飲む。

　満面の笑顔だった。実際、作った当人も長く歩いたあとなので、過か剰じよう気味の糖分をやけにおいしく感じる。体がエネルギーを欲しているのだ。

「ところで清秋院。さっき何やってたんだ？」

「んっ。万一の事態にそなえてってやつ。あとで言うよ」

　恵那が麺めんをすするのにいそがしそうなので、詮せん索さくはあとまわしにした。

　こちらも空腹だったのだ。護堂もずるずる麺と塩味のスープを勢いよくすする。祐理も満足そうな顔つきで、しかし上品な所作でラーメンを口に運んでいた。

　栄養補給を終えて、三人は手早くかたづけをすませる。

　このとき、護堂はまだ出発するつもりではなかった。先を急ぎたい気持ちはあるが、それで祐理がダウンしたら本ほん末まつ転てん倒とう。まだしばらく休んでいこう——と考えていたのだが。

　そうも言えない状況が近づきつつあるのに気づいた。

　大きな音がする。木々を薙なぎ倒しながら、巨大な何かが近づいてくる物音だった。

　恵那が立ちあがり、目をすがめて、音のする方向に視線を投げる。

祐理もハッとして巫女仲間にならう。

そして、護堂の視界にもその姿が入ってきた。

それは巨人だった。身の丈は一四、五メートルくらい。筋肉質の逞たくましい体。身につけた衣類は腰布だけなので、異様な筋肉の発達具合がよくわかる。

そして、独眼だった。ふたつあるべき眼球がひとつきりしかない。

ひとつ目巨人。ギリシア神話風にいえばキュクロプス。護堂たちの前に顕あらわれた、新たな神のしもべであった。

5

キュクロプスは高みから護ご堂どうたち三人を見おろし、フンと鼻息を荒くした。

興奮気味のようだ。いきなり襲ってきても違和感はない。恵え那なのせがむような視線に応こたえて、護堂は天あまの叢むら雲くもの劍つるぎの使用権をゆだねた。

すると、太た刀ちの媛ひめ巫み女この手に忽こつ然ぜんと黒き神刀が顕あらわれ、鋼はがねの威いを示す。

恵那がそのままキュクロプスへ歩みよろうとしたので、護堂は手で制した。

ここで神獣クラスの敵と小こ競ぜり合あいしても、あまり意味はない。黒幕はほかにきちんといるのだ。護堂はキュクロプスの背後に広がる空をにらんだ。

「どうせ見てるんだろ!?　手下なんかよこさずに、あんたが自分で降りてこいよ！」

しもべの背後にいるはずの女神へ呼びかける。

　反応はすぐにあった。天より燦きらめく光が降ってきた。まるで太陽の輝きを反射する水面の燦めき。無数の光の集まりだった。

　この燦めきは星雲のように渦うずを形作り、キュクロプスの隣に降こう臨りんしてきた。

『ふふふふ。あなたからのお呼びとあらば、応えぬわけにはいきませんわね。おひさしぶりです、草くさ薙なぎさま。わたくしの愛いとしい神殺しどの！』

　宙をただよう光の渦から、女神の声が発せられた。

　護堂の心身に戦うための力と昂たかぶりがみなぎる。姿は隠しているが、本体もきちんと降りてきているらしい。さらに聞き覚えのある啼なき声がひびく。

　きゅあああああぁぁぁぁああっ！

　神しん鵰ちようが彼方かなたの空から飛んできた。恵那があたえた傷は完治しているようだ。

　キュクロプスと合わせて、向こうも万全の体勢をととのえてきた。

「愛しいって何だよ……。あんた、俺とまともに話したこともないだろうに」

『そのようなこと、これからじっくり愉たのしめばよいのです』

　ぼやく護堂に、女神は妙にかわいらしい調子で語る。

『うふふ。わたくしにとっては、その殿方がまず偉い丈じよう夫ふか否いなか、英えい傑けつの器うつわを持つか否かが大切なのですわ。あなたさまは女神の目から見ても好いたらしい殿との御ごでございます。どうか、この愛を受けいれて、我が招待に応じあそばしませ！』

「招待って。あの手足をもいでから……ってやつじゃないか」

　護堂はうんざりしつつ、それでも言った。

「無理矢理つれていくつもりなら、こっちも抵抗するだけだ。で

も、あまり荒っぽい真ま似ねをしたくないんだ。いいかげん俺のことはあきらめて、静かに暮らしてくれないか？」

　平和主義の信しん奉ぽう者しやらしく、なるべくおだやかに訴えたのだが。

　しかし、女神の化け身しんである光の渦は返答しない。代わりに「ふふふふ……」と微笑の気配をまとうのみ。護堂はため息をついた。

　甘あま粕かすが言ったとおり、あの女神にはストーカー気質があるらしい。

　ならば、ここからは相応の態度で接していくしかない。まず護堂は訊たずねた。

「この島を造ったのは誰だ？　あんたか、それともアレクサンドル・ガスコインか？」

『まあ、なつかしいお名前。そういえば、あの方も当代の神殺し。ふふふふ、おふたりは知ち己きでいらしたのね！』

　当たった。試ためしにアレクの名を出したら、いきなり当たりを引けた。

　手がかりを得て護堂はうなずいたが、続く女神の言葉に「え？」とびっくりした。

『おっしゃるとおり、この島は神話の世を偲しのび、わたくしが創造したもの。あの方——アレクサンドル殿が愛の証あかしとして贈ってくださった神具をもって。神の領地たる我わが孤島、此こ度たびは草薙さまとの愛の巣に変えてみせましょう！』

「あ、愛の証としてっ？」

「アレク王子が贈られたのですか!?」

　仰ぎよう天てん情報に、恵那と祐ゆ理りがそろって唖あ然ぜんとしていた。

　しかし、それ以上の言葉を女神は語らない。代わりに、女神の燦めきが今までよりも明るさを増す。その輝きに呼応して、いきなり

神しん鵰ちようが啼ないた。

　きゅあああぁぁぁぁぁああああああっ！

　さらにキュクロプスまでも、高らかに雄お叫たけびをあげる。

　うおおおおぉぉぉぉおおおおぉぉおおおっ！

　荒ぶる神のしもべがそろい踏み。本腰を入れて護堂の『手足をもぐ』つもりらしい。こうなると迎え撃つしか手はない。だったら、選ぶべきは——

「我が元に来たれ、勝利のために。不死の太陽よ、輝ける駿しゅん馬めを遣つかわし給たまえ！」

　いきなりの切り札。最大火力である『白馬』の行使だった。

　もう数年来、さまざまに騒ぎを起こしているらしい火の女神。『民衆を苦しめる大罪人』という条件を満たしていたのだ。

　これで倒せればよし。倒せずとも、あることをたしかめたい——。

　その思いから、護堂は東の空に第二の太陽を呼んだ。そこから白き光の槍やりが放たれ、地上に降りかかる。女神の化身たる光の渦を呑のみこもうとする。

『曙あけぼのの光よ、わたくしに黄金の楯たてを捧ささげるのです！』

　だが、予定調和のごとく女神は言こと霊だまを謡うたった。

　仮の姿である光の渦が天幕のように広がり、『白馬』を受けとめる。

　かつて、ヴォバン侯こう爵しやくが光の神アポロンの権能をもって吸収した焔ほのお、今回は女神の燦めきによって吸収されていく！

「光を呑のむものは光を内に秘めてなくてはいけない、だったな……」

かつて祐ゆ理りが語ってくれた託たく宣せんを思い出す。

やはり、火の女神は太陽神であったのだ。護堂は傍かたわらの媛巫女を見やった。しかし、祐理は悲しげにかぶりを振る。

あの姫君めいた女神の正体、やはり、彼女にも視みえないのだ。

こうなると『剣』を頼ることはできない。さまざまな神通力を持つ敵が相手だと、この武器がないのは正直苦しいが……。

「王様。ここはエリカさんが言ってたとおり、機会があったら逃げ出すくらいのつもりでいた方がいいよ」

恵那が忠告してくれる。護堂はうなずいた。

すでに東天の太陽は焔の射出を終え、消え去っている。代わりに空からは神鵰が襲来、地上ではキュクロプスが拳こぶしを振りあげ、護堂の上に振りおろそうとする！

とっさに恵那が動いた。鋼の相棒を横よこ薙なぎに一振りし、叫ぶ。

「ぬばたまの夜さり来れば巻まき向むくの……川かわ音と高しも嵐かも疾とき！」

嵐の言こと霊だまだった。

スサノオの霊気が媛巫女の体に宿り、神がかりを成じよう就じゅさせる。

一瞬にして風の申し子となった恵那が天あまの叢むら雲くもの劍つるぎを一振りすると、黒い刀身からカマイタチの刃やいばが放たれる。狙ねらうのは、やはり飛来する神鵰。

さんざん飛行技術の巧たくみさを見せてきた標的は、みごとな急上昇で真空の刃をかわす。

しかし、恵那はもう一度、天叢雲劍を軽く一振り。即座にカマイタチは軌道を変えて、逃げた神鵰を追いかけていく。

恵那は敵の翼を折りこんで、遠隔操作できる飛び道具を使ったのだ。

　一方、キュクロプスが鉄てつ槌ついのごとく落としてきた拳は――。

　護堂が両手で受けとめた。もちろん『雄牛』の化身を使って。ひとつ目巨人が相手であれば、こちらも剛ごう力りき無む双そうの化身を使えるのだ。

「だあああああっ！」

　つかんだままのキュクロプスの拳を、護堂は大きく振りまわした。

　陸上のハンマー投げの選手がハンマーを振りまわす要領だ。このアクションで身長一八〇センチの護堂は身の丈一五メートルのキュクロプスをブンと放り投げてしまう。

　まさにデタラメもきわまれり。

　ひとつ目巨人も呆ぼう然ぜんとした表情で、森の木々の間に落ちていく。もちろん、これで致ち命めい傷しようにはならない。しかし、次の戦力を呼ぶ時間は作れる。

「鋭く近寄り難き者よ！　契約を破りし罪ざい科かに鉄槌を下せ！」

　数日ぶりに『猪いのしし』を呼んだ。

　忽然と空中に顕れた黒い焔はたちまち獣けものの姿に化身し、地上に降り立つ。

　今回も標的はふたつ。キュクロプスと神鵰の双方。面倒なミッションのはずだが、『猪』は逆にうれしいらしい。嬉き々きとしてうなり声を出す。

　ォォォォォォォォォォォォォォォォォォォ…………。

　この間、開眼したばかりの新たな力。超衝撃波を放つ仕込み。

　この低いうなりがやにわに最大威力の砲撃と変わるのだ。そして、この直後。

　オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

オオオオオオオオオオオオオオオオンンンンンンンンンンンンンンンンッ！

　前例どおり、いきなり『猪』の口から衝撃の波動ソニツクウエーブが放たれた。

　これが吹き飛ばすのは、凛り々りしき神鵰の雄姿。

　前回の教訓だった。天あま翔かける鳥王は『火の鳥』に化身する厄やつ介かいな敵。こちらを全力でつぶしてから、地上の敵と戦うべきなのだ。

　そのために『猪』が放った豪放なる音と衝撃波。

　さすがの神鵰も回避できず、直撃を受けて吹き飛び、塵ちりとなって消滅した。

　しかし、この間にキュクロプスが立ちあがっていた。

　ひとつ目の巨人は天に右手をかざす。すると、やにわに黒雲が空をおおい、そこから雷が放たれた。折からの雷らい霆ていが『猪』の巨体を撃つ。

　オオオオォォォォォンンンンンッ！

『猪』の苦く悶もんが咆ほう哮こうとなってほとばしる。しかし、この隙すきに恵那が駆けた。

　狼おおかみのごとく走り、キュクロプスに近寄り、右足の脛すねに斬きりつけたのだ。天あまの叢むら雲くもの劍つるぎによる渾こん身しんの一ひと太た刀ち。さすがの巨人もこれにはたまらず、のけぞる。

　そこに恵那はもう一刀。今度は左脛を斬る。

　両足を薙ながれてフットワークが鈍にぶった敵へ、『猪』は容よう赦しやなく突撃開始。

　オオオオオオオオオオオオォォォォォォォンンンンンンンンンンンンッ！

　頭から全力で突っ込み、剣のごとき二本の牙きばで腹を深々と刺

す。これを引き抜いて、もう一回さらに体当たり。

　ボロ雑ぞう巾きんのように、キュクロプスは吹っ飛んでいった。

　巨人はそのまま虫の息で横たわる。とどめを刺すのもむずかしくないだろう。

　しかし、護堂はここでいぶかしんだ。君きみヶが浜はまでの戦いにくらべると、神鵰も巨人もずいぶんと脆もろい。前は火の女神が力を注ぎこみ、しもべを強化したというのに。

　今回そうしない理由は何だ？

　たとえば、ほかの切り札を繰りだすため、力をたくわえているとか——？

『さすがの勇ゆう猛もう果か敢かんさ……それでこそ、わたくしが見込んだ勇士ですわ、草薙さま』

　宙をただよいながら、光の渦がささやく。

　姫神の声には自信で裏打ちされた冷静さがある。護堂はわけもなく戦せん慄りつした。カンピオーネの勘かんが危険を察知し、警告しているのだ！

『ならば、わたくしも出し惜しみはしますすまい。さあ風の魔よ、娘たちよ。恐るべき魔王方にも聞こえぬ、取っておきの歌を口ずさむのです』

　言霊の歌。護堂はとっさに呪力を高めた。

　敵が魔術をかけてくるなら、こちらは最大限に呪力を高こう揚ようさせて、それをはじく。神と神殺しの間では常じよう套とう手しゆ段だんとされる応手だ。

　体内でカンピオーネの呪力が一気に高まっていく。

　これで万全の備え——だったはずなのに。護堂は異状を感じた。体のなかに何か〝異物〟が入った……？

『ふふふふ。戦い慣れた神殺しには、なかなか術は効かぬもの。そこで風にまじないを乗せ、あなたの内側に送りこんでみました。上

う手まくいったようですわね』

　いつも経けい口こう摂せつ取しゅでやられていることを、女神は近づきもせずに成功させたのか！

　護堂は愕がく然ぜんとした。そうと知っていれば、堪こらえる方法はきっとあっただろう。だが、今回はもう遅い。間に合わない。

　自分はどんな魔術をかけられたのか——？

　戦慄する護堂の前で、変化は起きた。天に複雑な幾き何か学がく模様と図形がいくつも顕れて、輝く魔方陣を描いたのだ。そして、女神が唱える。

『さあ。麗うるわしき女神の前で、鋭き剣は不要なものでしてよ？　無ぶ骨こつな槍やりも、獲え物ものを撃つ矢もふさわしくありませんわ。鎧よろいを脱ぎ、楯たてを捨て、わたくしのもとへいらして頂ちよう戴だい！』

　直後、『猪』の姿が護堂の目の前から消えた。

　代わりに、天に描かれた魔方陣のなかに猪を図章化した紋章が顕れる。

「……奪われた、のか？」

　護堂は呆ぼう然ぜんとつぶやきながら、理解した。

　今の魔術、ウルスラグナの化身を奪うものだったのだ。『猪』に指示を念じてみる。が、反応はない。神獣の存在をまったく感じない！

『雄お々おしき英雄方よ、いざこちらへ！』

　しかも、さらに女神は唱える。

　護堂は己の内側から何かがひきはがされるのを感じた。直後、天の魔方陣に馬の紋章と牛の紋章が顕れる。『白馬』と『雄牛』を奪われたようだ。

「護堂さん！　このままでは全ての化身が奪われてしまいます！」

　そばで心配そうにしていた祐理がいきなり叫んだ。

「女神の術に全力で抗あらがってください！　早く！」

　たおやかな大やまと和なで撫子しこにはふさわしくない、性急な指示。

　だが、それだけまずい状況なのだ。護堂はあらためて呪力を高めた。

　心のなかでウルスラグナの聖句を強く念じる。我は最強にして、全ての勝利を掴つかむ者。人と悪魔、全ての敵を挫くじく者なり！

　体の内側に入りこんだ異物を倒せ、女神の魔術を打ち破れと一心に念じる。

　だが、その間にも――。

　天の魔方陣に次々と紋章が顕れていく。

　波打つ風のような紋様。次いで山や羊ぎ、雄お羊ひつじ、鳳おおとり――このままでは負ける！

「くそっ。全部持っていかれてたまるか！」

　腹の底から叫び、目に見えない敵を駆く逐ちくしようと呪力を振りしぼる。

　そして、自分の内側で猛威を振るっていた魔術がついに消えていくのを護堂は感じた。

「残った化身は……三つか」

　天の魔方陣には紋章が七つ輝いている。

　そして、護堂のなかに残った化身は『駱らく駝だ』『少年』『戦士』の三つ。ほかは全て奪われてしまった。

「彼女には英雄を捕らえ、虜とりこにする権けん能のうがあるのです。輝く英雄神であるウルスラグナは、その偉大さゆえに彼女の魔性に捕らえられたのでしょう……」

「厄やつ介かいな力を持っててくれたよね……」

祐理の託たく宣せんを聞いて、恵那が呆然とつぶやいている。

無理もない。完全に予想外の攻撃を受けて、護堂も愕がく然ぜんとしているのだ。

『ふふふふ。草薙さま、もうお諦あきらめになって。わたくしの虜となる……それは女神の愛人になるという意味でしてよ？　ふたりで睦むつみ合い、永遠の恋を愉たのしみましょう？　神と神殺しの間に愛をはぐくむのも一興ではございませんか！』

残された武器は天あまの叢むら雲くもの劍つるぎと三つの化身のみ。

だが、今の局面では『少年』も『戦士』も役に立たない。魔術使いの神に『駱駝』がどこまで有効かも疑わしい。

自分が追いつめられたことを護堂は自覚した。

『さ、草薙さま。こちらへいらしてくださいな』

今まで女神の化身だった、光の渦。

この燦めきが形を変え、人の姿をかたどった。糸杉のようにほっそりした、女性のシルエットだ。そして、身長五メートルほどにふくれあがる。

護堂の方へかぼそい腕をのばしてきた。掴み取るつもりなのだ。

くそ！　このままやられてたまるか。護堂が無意識のうちに獰どう猛もうな笑みを浮かべ、窮きゆう鼠その必死さで迎え撃とうとしたとき。

「王様は渡さないよっ。いやあああああああ！」

太た刀ちの媛ひめ巫み女こが気合い声と共に割りこんで、天叢雲劍を一いつ閃せんさせた。

これが決まった。スサノオの神気と共に打ち込まれた神刀は、女神がのばした手の肘ひじあたりをざっくりと斬り裂いた！

『きゃあああああああっ！』

女神の悲鳴がこだまする。護堂は驚いた。

しかも、女神の化身は人のシルエットをほどいた。ふたたび光の渦となって、雷雲ひしめく灰色の空へと上昇していく。恵那と天叢雲劍を避けるように。

今の一太刀が『まつろわぬ神』にここまで威力を発揮するとは——。

意外に思う護堂の頭上で、光の渦は雷雲のなかに入っていく。

直後、天をおおう雲から次々と雷がほとばしり、地上を襲いはじめた。

轟ごう！　轟！　轟！　轟！

雷鳴がとどろくたび地面に稲妻が落ち、衝撃が走る。

どうやら、女神はこちらに接近するのを避けたいようだ。代わりにこの間かん断だんなき雷撃。休みなく次々と雷が降ってくる。

まだ護堂にも、祐理にも恵那にも当たっていない。だが時間の問題だ。

ここに居続ければ、数分以内に稲妻で打ちのめされるだろう。そのときだった。

「王様……例のあれ、準備してあるよ。恵那はいつでも大丈夫」

ぼそっと太刀の媛巫女がつぶやいた。

例のあれ。まさか。護堂は目の前の渓けい流りゅうを見てから、恵那に視線を転じる。にやりという不敵な笑みが返ってきた。本当にやる気か！

驚いた。しかし同時に、大きくうなずいた。

たしかに活路を求めるなら、もうここしかない。即決する。恵那ができるというなら、信じて下げ駄たをあずけよう。だが——。

草薙護堂が連れていくべき仲間はもうひとりいる。彼女は？

「……万ま里り谷や。今、すごくバカげたことを考えてて、こんな

のにつきあえっていうのもバカバカしすぎて心苦しいんだけど……つきあってくれるか？」

　渓流をにらみながら呼びかける。

　祐理は「え？」と驚いて、護堂の視線を追った。それから幼なじみである恵那の表情を見、川の流れも凝ぎよう視しする。どうやら意味を諒りよう解かいしたらしい。表情がこわばる。

　しかし、祐理はすぐに顔つきをあらためた。

　媛の名にふさわしい凜り々りしさでうなずき、護堂にそっと寄りそいながら言う。

「参ります。護堂さん、私も連れていってください！」

「祐理。ふたりでお供して、王様を必ず安全なところまで送り届けるよ。もちろん恵那たちもいっしょに最後までね。覚悟はいい？」

　恵那もそばにやってきた。持っていた天あまの叢むら雲くもの剣つるぎが消える。護堂のなかに戻ったのだ。

　幼なじみの問いかけに、祐理が決然とうなずく。

「いよしっ。恵那が《式》を出すから、それに乗っていこう。あとは御ご利り益やくがありそうな護身・厄やく除よけ・水難除けの術を片っぱしから使ってけばいいよ！」

　叫ぶ媛巫女の頭上で雷鳴がとどろく。

　それがはからずも合図となり、護堂・祐理・恵那の三人はそろって渓流のなかへと踏み込んでいくのであった――。

第５章　黒の剱、いまだめざめず

1

　女神の導みちびきで稲妻を降らす雷雲の下。

　護ご堂どう・祐ゆ理り・恵え那なの三人は渓けい流りゆうに足を踏み入れた。脛すねまで水につかるが気にしない。どうせ、もっと濡れるのだ。

「祐理はこっちを。あとでみんなをくくりつけて！」

　恵那が媛ひめ巫み女こ仲間に放ってよこしたのは、赤い糸玉だった。

　針仕事に使うような糸。祐理は使い方を承知しているらしい。「はい！」とだけ返事して、糸玉を受けとめた。

　次に恵那が出したのは小さな木のおもちゃだった。

　簡潔にいえばミニチュアの『筏いかだ』である。木の枝を十数本も細く削り、太さと長さをそろえ、紐ひもでゆわえて固定している。

　この『筏』を額ひたいに押し当て、恵那は言こと霊だまを唱となえた。

「妙たえにして変へん化げに通ずる者、霊れい験げんかくあるべし」

　そして「鋭えい！」というかけ声と共に『筏』を川に投げ入れた。

手のひらサイズだったミニチュアは、川面にぶつかると同時に巨大化し、なんと本物の筏に変化してしまった。護堂は気づいた。

エリカが愛剣を変形させて動かす魔術。あれの日本版なのだ。

「こいつには恵那がとっておきの『式』を打っておいたから、かなり当てにしていいよ。ふつうに作る筏よりも頑丈なはずだしね！」

呪術で造った即席筏は、一辺が三メートルほどの正方形だった。その上に率先して乗り込みながら、製作者が語る。護堂と祐理もそのすぐあとに続いた。

途端に即席の木造筏は流れに乗って、動き出す。

未経験の素人しろうとだけで、この急流をラフティング。ゾッとする挑戦のはじまりだった。

——うおおおおぉぉぉぉおおおおぉぉおおおっ！

このとき護堂たちの筏に手をのばし、咆ほう哮こうするものがいた。

ひとつ目の巨人、キュクロプス。さっき『猪いのしし』にふっとばされた怪物が四つん這ばいで渓流に近づき、巨大な腕をのばしていたのである。

しかし、すでに虫の息だった巨人。そこで力尽き、塵ちりとなって崩れていく。

だがホッとする間もなく、女神の声が天よりひびいた。

『あなたも逃げるのですか、草くさ薙なぎさま！　まったく当代の神殺しの方々ときたら、いずれも雄お々おしく不ふ撓とう不ふ屈くつ、翼ある言葉並みに逃げ足の軽い殿方たちですこと！』

皮肉に満ちた嘲あざけりの言葉だった。しかも、

『でも、わたくしは草薙さまを見限ったりしませんわ。ふふ、斃たおれた下げ僕ぼくどもに代わる新たな刺し客かくを用意しましょう。好きなだけお逃げあそばしませ。わたくしが健在であるかぎり、あなたが島から出られる日は永久に来ませんことよ！』

　警告を投げつけられた。だが、女神には自みずから追っ手となる意思はないようだ。

　天あまの叢むら雲くもの劍つるぎで斬きられたせいで、警戒しているのか？

　ともあれ、女神との距離が急速に離れていくのはよろこばしい。

　気づけば雷鳴も遠ざかっていた。渓流の流れに乗ったおかげで、火の女神がもぐりこんだ雷雲を置き去りにできたのだ。

　だが、その一方で即席筏の上はまったく快適な場所ではなかった。

　荒れた急流に乗っていくわけだから、当然ロデオにも等しい乗り心地となる。筏はひっきりなしに跳ね上がったり、逆に水中に沈み込んだり、アップダウンがすさまじい。

「そういや〝しき〟がどうとか言ってたよな。何だ、それ⁉」

　大いに揺さぶられながら、護堂は大声を張りあげた。

　この筏、恵那の手作り模型が元にしては、材料の丸太から年季の入った古木の雰ふん囲い気きを感じる。なぜだろう？

「ええと、あれだ。甘あま粕かすさんがいつか言ってたな。流は行やりの言葉でいうと式神になるとか。清せい秋しゆう院いんの家で代々使ってきた《式》だから、結構いいのだよ！」

「ああ。映画とかドラマになったやつか！」

　陰おん陽みよう道どうだか陰陽師だったか。適当な知識を護堂は思い出した。

　意外に上等な品だったらしい。しかし座席もシートベルトもない以上、いつ振り落とされるかもわからない。三人とも筏の上に腰をおろし、両手で必死に体を支えている。だが、このままでは全員、遠からぬうちに――。

「菊くく理りの媛ひめ神がみよ。紡つむぎ、括くくりの糸技をお見守りくださいませ！」

ここで祐理が言こと霊だまを唱となえた。

さっきの糸玉を、念でも込めるように強くにぎりしめていた。

「みなさん、うつぶせになってください！」

恵那と護堂が言うとおりにしたのを見て、祐理自身も筏の上でうつぶせになる。

すると、にぎっていた糸がひとりでに動きだした。媛巫女の手から、蜘く蛛もが糸を吐はくように先端がヒュンと飛び出していく！

糸はこの筏にぐるぐると巻きついていった。

うつぶせになった護堂・恵那・祐理を結わえつけるように。要は筏という荷台に、三人の体をひもでくくりつけた状態になったのである。

糸は数十回も巻きを重ね、護堂たちをしっかり固定してくれた。

護堂はこの糸から呪力を感じた。ただの裁さい縫ほう道具ではなく、きちんとした呪術の用具なのだろう。隣でうつぶせになる祐理を見たら、うなずかれた。

「この糸は刃物も受けつけないほど丈夫です。よほどのことがなければ切れません！」

金属製のワイヤー並に頑丈そうで、頼もしい話だった。

だが、この川下りが決死のイベントである事実はまだまだ変わらない。

筏はあいかわらず、流されるまま水面でのアップダウンを激しく繰りかえす。

護堂たちは何度も水をかぶり、また筏ごと何度も水中に沈み込んだ。水面に浮かんでくるまで、生きた心地がしない。みんなまとめて溺でき死しする未来が頭をよぎる。

この勢いと速さで流されながら、何かに激突したら――。

恵那いわく『ふつうより頑丈』らしいが、どこまで保もつもの

か？　岩にぶつかることもあるだろうし、流木だって流れてくるはず。

　危険のタネを数えあげていけば切りがない。そういう状況だった。

　この危難に際して、護堂の両隣ではふたりの媛巫女が懸けん命めいに呪術を使っていた。

「南な無む八はち幡まん大だい菩ぼ薩さつ！　我らを日ひの本もとへ迎え入れんと思おぼし召めせ！」

「塞さいの神よ。我らが行く手に幸多かれと、どうかご慈じ悲ひを！」

　恵那が武家の守護神に祈れば、祐理も旅の守護神に御加護を願う。

　媛巫女たちによるご祈き祷とう、さっきから途切れることなく延々と続いている。恵那の言っていた『護身・厄やく除よけ・水難除けの術を片っぱしから使おう』がこれなのだろう。

　事ここまで来れば、草薙護堂にできるのは彼女たちを信じることのみ。

　ではあったが、自力ではどうにもできない危険を前に、護堂はひたすら肝きもを冷やした。神様たちと戦う方が遥はるかにマシだと心のなかで愚ぐ痴ちりつつ――。

「さ、さすがに死ぬかと思ったぞ……」

「わ、私もです。正直、もう生きて日本の土は踏めないものと……」

「いやあ……強烈だったねェ……いろいろと……」

　護堂・祐理・恵那の三人は放心の体ていでつぶやいた。

　決死の川下りをはじめてから、もう一時間近くが経過していた。

　三人が乗る即席筏はどうにか無事である。途中、行く手に何度も何度もごつごつした岩が見えたりもして、そのたび天に祈った。何か固いものに筏が乗り上げる『ガツッ』という衝撃を数え切れないほど味わった。

　あげく、三回ほど転覆もした（そのたび奇跡的にリカバリーしたが）。

　それでも、この舟というには粗雑すぎる筏は持ちこたえ、三人を運びつづけたのだ。

　途中に滝がなかったのも幸いだった。現在、即席筏を運ぶ川の流れはずいぶんとゆるやかになっていた。山を抜け、ついに平地へと下りてきたのだ。

　もう安全と見て、呪術の糸もすこし前にほどかれた。

　ずぶ濡れではあったが、三人はひさしぶりに即席筏の上でのびのびとしていた。

「それにしても、万ま里り谷やと清せい秋しゆう院いんの水難除けは効くんだなあ」

　護堂はふたりへの感謝をこめて言った。

　あのご祈祷、何か目に見える効果があったわけではない。しかし、無謀すぎる川下りをどうにか無事に乗り切れた理由、ほかにちょっと考えられなかった。

「うん。思ったより御ご利り益やくがあったみたい。ほっとしたよ」

「みたいって……。おまえがいけるって保証してくれたんじゃないか」

　恵那がしみじみ言うので、護堂は苦笑した。

　だが、祐理が物言いたげな顔をしているのに気づいた。

「いやさ。ああいう術は『使えば効き目がこれだけある』ってものじゃないんだよね。ご祈祷する人の徳とか日頃の行いに応じて、見えない加護が守ってくれる感じで」

「は、はい。ですから、無事にここまで来られて、本当にほっとしています」

「たぶん、恵那だけだとダメだったろうな。でも、祐理はいい子だから、きっとなんとか乗り切れると信じてたよ！」

「恵那さん。こういうときにあまり当てにされても困ります……」

　そうか。この脱出法、それで恵那は想定外としていたのか。

　護堂は天を仰あおいだ。今回の川下り、結構ぎりぎりの賭かけだったのかもしれない。とはいえ、あれで助かったのは事実。何より、このまま流れに身をまかせれば、二本の足で歩いていく必要がない。祐理の負担はだいぶ軽減されるだろう。

「結果オーライってことで不問にするか……」

　ため息と共に護堂は言った。まあ、とにかく無事だったのだ。

　リーダーが生来の大おお雑ざつ把ぱさを発揮する間も、船旅はつつがなく続いていく。

　操船するのは恵那。どこからともなく取り出した棹さおで、悠々と進路を定めている。ラフティングの経験はなくとも、この手の筏をあつかうのには慣れているようだ。

　今、筏から見える川岸の景色は、熱帯雨林のものだった。妙に高原めいていた山の景色とはだいぶちがう。気温もだいぶ上がっていた。護堂たちは上着をぬいだ。

　ふたたび熱帯、常夏の国の暑さ。

　川下りでずぶ濡れになった衣服の乾きも速そうだ。

　やがて、川面から潮しおの匂においがただようになってきた。海が近いのだ。

　三人は顔を見合わせた。あの警告もある。女神が健在であるかぎり、草薙護堂は決して島から出られないという。さて、どうしたものか――。

　この筏に乗る前、三人とも余計な荷物になるリュックを放り出し

てきた。

　今は水筒など、最低限の持ち物しか携けい行こうしていない。また、ここまでのドタバタでみんな疲れているはず。特に祐理を休ませたい。

　このあたりで休憩をいれつつ、体勢の立て直しをはかるのがよさそうだった。

　陽ひが沈み、魔境の島で二日目の夜を迎えることになった。

　護堂と祐理、恵那の三人は海岸沿いの砂浜にいた。みんなで夜の海を見ている。すると島の玄関口めいた入り江に、沖の方から一艘そうのボートが入りこんできた。

　エンジン付きのボートは軽快に進み、護堂たちの待つ砂浜に到着した。

「みんな、待たせたわね」

「全員が無事で何よりだった！」

　砂浜に降り立ったのはエリカ・ブランデッリとリリアナ・クラニチャール。

　海まで来れば、祐理の精神感応も自由に使える。そこで騎士たちと連絡を取り、今夜ここでの合流を決めたのである。飛翔術ではなくボートを使ったのは、水や食糧なども持ってきてもらうためだった。

　しかし、護堂たちは再会をよろこぶのもそこそこに、車座になって会議をはじめた。

　懐中電灯などはつけてない。月と星が明るいので、必要なかったのだ。

「海まで来たのはいいけど、まちがいなく俺はすんなり退場できないだろうな」

　諦てい念ねんをこめて護堂は言った。

「ただ、みんなはそうじゃないだろうから——」

「草薙護堂をひとり残して、わたしたち四人は島から去る、ですか？」

「バカバカしすぎて、逆にそこがちょっとだけ新鮮だわ。でも、まさか本気で言ってないでしょうね、護堂？」

　リリアナとエリカにとがめるような目でにらまれてしまった。

　まあ、こう言われるとは思っていた。護堂は肩をすくめて発言をやめた。

　すると、代わって口を開いたのは祐理だった。

「この島に満ちる迷宮の魔力……やはりアレク王子の権けん能のうだと思います。あの方のお名前を女神から聞いて以来、浮島で視みたのと同じ神の御名が視えるようになりました」

「クレタ文明の神王ミノスか。ポセイドンともゆかりのある大地の神だな」

　リリアナがうなずいて言う。

「はい。かつてアレク王子が使った権能……おそらく、あの女神が何らかの魔術で維持させているように思えます」

「参ったねー。どこまで神通力を持ってる神様なんだろ？」

　敵の多彩な力に恵那がぼやくと、エリカが言った。

「英雄を虜とりこにする魔女で太陽神……。いくつか思いつく名前はあるけど、今の時点で断定するのは危険そうね。例の『汎はんユーラシア的英雄』の問題があるし」

「どの国の英雄とかかわりのある魔女か、わからないもんね」

「ええ。決定的な手がかりが出てくるのを待つか、祐理たちに霊視が降りるのを待つか。今のところ、どちらかしか手はないわ」

　恵那とエリカがうなずき合う。その横でリリアナが悔しそうに言った。

「それにしても、ウルスラグナの化身を奪われてしまうとは……。草薙護堂、お気をつけください。戦うための力が減ったというのも大問題ですが——」

「うん？」

「今のあなたには『雄羊』がない。つまり、致ち命めい傷しようを受けたら最後。いつものように復活できない状態です」

「まあなァ。ただ、だからって慎しん重ちようになりすぎるのもまずいだろうし」

　青き騎士の進言にうなずきつつ、しかし、護堂は言った。

「神様相手に腰がひけてたら、もともとすくない勝ち目がさらにすくなくなりそうだ。まあ、できるかぎりやってみるよ。それに」

　ふと思い出して、自分の右腕を眺める。ここにはまだ健在の〝相棒〟もいるのだ。

「天あまの叢むら雲くもはあるしな。武器としてはそんなに使いやすいやつじゃないけど」

　これはぼやきでも愚ぐ痴ちでもなく、純粋な感想だった。

　天あまの叢むら雲くもの劍つるぎを武器として有効活用したいとはあまり思わないからだ。剣なんて物騒なものは、むしろこれくらいがちょうどいい。

　まあ、暴れたがりの神刀は憮ぶ然ぜんとしていそうだが。

「王様。そっちは恵那もがんばるよ。なんたって、ふたりの相棒だしね」

　天叢雲劍の正当な使い手が言ってくれる。

　もしかしたら、恵那はひそかに相棒の愚痴でも聞いているのかもしれない。

　そんなことを想像しながら、護堂は「悪いな」と礼を言った。

　状況はあまり——否いな、かなり明るくない。だが、それでもで

きるかぎりの人じん事じを尽くして、活路を見み出いださなくては……。決意をかためる護堂だった。

2

　再会と会議のあと、一行はテントを張って夜営した。

　テントはエリカとリリアナがボートで運んでくれた品物のひとつである。昨夜と同様、ひとりずつ交代で見張りとなって就寝。何事もないまま朝を迎えることができた。

　朝食もすませ、護ご堂どうは今日こそ女神と対決かと気をひきしめたのだが——。

　目の前の状況は、あまり緊きん迫ぱくしていない。むしろ逆だ。

　熱帯のまぶしい太陽。今日はみごとな快晴だった。

　白い砂浜。汚す者などいない魔境のビーチはまさに純白。とびきりの美しさだ。

　そして海。常夏の南洋でのみ向き合える、底抜けに澄んだエメラルドブルーの海。

　ここに集つどい、のびやかな肢し体たいを露あらわにする水着の女の子たち……。

「いや。この状況下で海水浴するのも、いかがなものかと思うんだ」

　護堂は冷静に指摘した。

　目の前にはちょっと直視するのが恥ずかしいほど、魅惑的な女子たちの姿がある。

　しかし今回、状況が状況である。常識と平常心と批判精神を持って、少女たちの艶あで姿すがたに淡々と視線を投げかけた。

　まずエリカ。いつもどおり紅くれないの水着と思いきや、ちがっ

た。

　白地のビキニ。ただし、彼女の帰属を表す二色——紅と黒の細いラインがワンポイントとして脇わきに入っている。これをまとうのが自己主張の激しすぎるプロポーションであるのは、いつものとおりであった。

　そしてリリアナ。こちらはいつものカラーを遵じゆん守しゆして、青いビキニである。

　腰のまわりを黒いパレオがおおっている。これをほどくと、スレンダーなスタイルおよび騎士の凛り々りしさ、のびやかな手足ゆえか、本格的にビーチバレーなどをやっていそうなアスリートめいた魅力が振りまかれた。

　なんと、祐ゆ理りの水着までビキニスタイルであった。

　うすいピンク色の生地がたおやかな彼女にはよく似合う。護堂の記憶にあるかぎり、祐理の水着はいつもワンピース型だった。実際、着なれてないのだろう。もじもじと恥ずかしそうにして、ほかの女子たちの陰に隠れようとしていた。

　しかし、隠れきれるわけがない。祐理の華きや奢しやでありながら胸のあたりも腰の方も十二分に丸みを帯びた体の線が、ビキニのおかげで明めい瞭りように見てとれる。

　最後は恵え那な。彼女が身につける水着も、予定調和のようにビキニだった。

　しかも、やけに大人っぽい黒の上下。

　明朗にして天てん真しん爛らん漫まんな恵那だが、スタイルはエリカと同等のみごとさである。そして、腰まで届く黒髪のつややかさ。そんな彼女が黒のビキニで浜辺に立つと、いつもとはちがう大人っぽさ、ミステリアスな美少女めいた魅力が出てくるから不思議だ。

　いずれ菖蒲あやめか杜かき若つばた。百ひやつ花か繚りよう乱らんの情景ではあるのだが。

「神様との対決も近いわけだしさ。みんな、着がえてきたらどうだ？」

「護堂、それは考えが浅いわよ」

　常識的なコメントにやりかえすのは、やはりエリカであった。

「たしかにもうすぐ戦いになるはずだわ。でも、いつはじまるか不明でしょう？」

　この指摘に護堂は眉まゆをひそめた。

　そうなのだ。あれだけ神通広大な女神である。昨日から標的が海辺にいるのは、どうせ把は握あくずみだろう。だが、なかなか現れない。

　海に出たところで立ちふさがり、絶望感でもあたえるつもりなのか？

　あるいは、いつでも襲えるという余裕にまかせて、狩られる側の護堂をあせらせ、不安に陥おちいらせようとしているのか？

「いつ来るかもわからない敵を緊張しながら待ってもいいことないわ。無駄に疲れるだけよ。それより、気を緩めない程度にリラックスして待ちかまえるべきじゃない？　そのために仕込みもしているわけだし」

「その理屈はわからないでもない……。けど、なんで海水浴？」

「島をあちこち歩きまわるから、必要になるかと思って人数分用意したのよね。せっかく持ってきたのを無駄にするのもあれだし。あと、単純に楽しそうじゃない？」

　なるほど、この論法でエリカはみんなを丸めこんだのか。

　見れば、祐理は『エリカさんったら、また……』という困り顔ながら、優等生的反対意見を唱える気はないようだ。

　リリアナも『まあ、これも戦場の心得』ぐらいの仏ぶつ頂ちよう面づらでひかえている。さりげなく浮き輪を持っている準備のよさがツッコミどころではあったが。

　そして恵那はといえば、いつもどおりの自然体でにやっと笑っていた。

「そうそう。城に攻め込まれるのを寝ないで律りち儀ぎに待っても、いいことないしね」

　まあ、そうかもしれない。

　うなずいた護堂に、エリカがにっこり笑って男物の水着を渡す。

　岩陰で着がえてもどってくると、すでに四人の女子たちは波打ち際ぎわで水遊びをはじめ、にぎやかな笑い声で浜辺を華やかに彩っていた。

　やはり、疲労を避けるため本格的に泳ぐつもりはないのだろう。

「あ、王様ーっ。ちょっとこっちに来てよ！」

　その辺をすこしだけ泳ぐかと海に入ろうとしたら、恵那に呼ばれた。

「いやさ。王様はここを陣地に敵を待つ立場なんだから、どっしり威い厳げんを持ってひかえててもらおうと思って。ほら、王の位くらいってやつにふさわしい感じで」

「あのな清せい秋しゆう院いん。海水浴に身分も何もないと思うぞ……」

「いいからいいから。はい、ちょっと腰おろして」

　波打ち際でひんやりした砂の上にすわるよう要求されて、護堂は一応したがった。

　恵那の意図がわからずに首をかしげていると、太た刀ちの媛ひめ巫み女こもすっと護堂の左隣に腰をおろしてしまう。しかも、ぴったり体をくっつけ、体重をあずけてくる！

　そのやわらかでなめらかな感触に、護堂はびくっと身をのけぞらせた。

　ただエリカとちがい、密着する以上の体勢と行為に発展しそうな気配がないのは天てん衣い無む縫ほうな恵那なればこそ、か。

「な、なにするんだよ⁉」

「前に海外のドラマで見たんだよねー。マフィアのボスみたいなおじさんがプールサイドで女の人をふたりもそばにはべらせて、カクテルとか飲んでるの。王様もやるといいよ。祐理ーっ、ちょっとこっちにおいで～！」

　すこし離れたところにいる幼なじみへ、恵那が声をかける。

　そちらでは船の備品であろう救命用の浮き輪に乗って、リリアナがぷかぷか海面に浮かんでいた。その浮き輪につかまる祐理もいて、ふたりで何やら楽しげにやっていたのだが。

　恵那に呼ばれて祐理は振り向き、こちらのありさまに気づいた。



「な、何をされているんですか、おふたりとも⁉」

「ふふ。祐理もおいで。ふたりで王様の愛人役をやろうよ～」

「そういうことをこんな明るいところ、しかも外でおっしゃらないでくださいっ」

「く……なんて退廃的なシチュエーション。草くさ薙なぎ護堂もまんざらでもなさそうにして！」

「ちがう万ま里り谷や、リリアナ！　これは清秋院が勝手に！」

「で、でしたら、護堂さんは早くおはなれになるべきですっ」

「そ、そうか」

　エリカに力ずくで押さえつけられたときのノリでつい忘れていたが、あのバカ力は恵那にはないものだ。とっさに立ちあがり、のびやかな媛巫女の肢し体たいから強制離脱する。

　しかし、すぐにうしろから誰かに飛びつかれた。

　背に当たる感触のやわらかさ、弾力、そしてボリューム。

　何より護堂をうしろから抱きしめつつ、羽は交がい締じめにもしている腕の剛力——。

「護堂。恵那さんとばかり仲よくして、わたしを放っておくつもり？」

　耳元でささやきかけるのは、もちろんいつもの声だった。

「あ、なんだ。祐理より先にエリカさんが来たんだ。でも、この際いいか。ふたりで王様の愛人ごっこ、やる？」

「ごっこは余計よ。わたしこそが草薙護堂の愛人なのですもの。でも」

　あっけらかんとした恵那に、エリカはちょっとツンとして言った。しかし、すぐに不敵な雌めす獅じ子しの微笑を浮かべ、太刀の媛巫女とうなずき合う。

「いいかもしれないわね。いつまでも開き直れないこの人に、自分のしてきたことがどれだけ破は天てん荒こうで人倫に反することか、きちんと知らしめるいい機会だわ」

「え、エリカさんっ。戦いにそなえてリラックスするだけだと、さきほどおっしゃったじゃありませんか！」

「そうだエリカっ。大体そういう差配は侍じ従じゅう長ちよう、つまりわたしの仕事だぞ。く、草薙護堂もふたりにはさまれて鼻の下をのばさないでくださいっ！」

「のばしてないっ。がんばって抵抗してるところに注目してくれ！」

　まぶしい太陽。白い砂浜。そして海。

　ともかく護堂たちはそれらを軽く楽しみつつ、あまり気負いすぎないようにして、『待ち』の態勢を続けていた。体はともかく心は疲れる類たぐいの騒ぎがありはしたが。

　そして、二時間ほど経たち——。

　まずハッと顔を上げたのは、祐理だった。

　彼女には昨日も今日も精神感応の触しよく手しゆをこの浜一帯に広げてもらっていた。何か異変が起きたら、すぐ察知できるようにと。

　リリアナもまた目を凝こらし、空の彼方かなたに視線を向けていた。

　強い呪力の接近を感知し、警告してくれる魔術をこちらも昨夜から使用中なのだ。

　神しん鵰ちように不意打ちされたときの失敗を繰りかえさないため、そして、いつ何時でも女神を迎え撃つため、準備したのである。

　仲間の様子に気づいてエリカは不敵に微笑み、恵那も大きくうなずく。

　この頃にはみんな海から上がり、水着の上に薄手のパーカやＴ

シャツを着て、体を冷やさないようにしていた。護堂も上着をはおっていた。

　遊びながらも皆、警戒心をゆるめてはいなかったのだ。そして、ついに来た。

『草薙さまときたら、そのような下女どもとお戯たわむれになられて！』

　女神の声がとどろくのと同時に、晴天だった空はやにわに曇った。

　おそろしい速さで暗雲が満ちていく。この暗い天幕に巨大な〝女〟のシルエットが浮かび上がった。糸杉のごとくほっそりした、謎なぞめいた女神の影だ。

　頭頂部はもうすこしで雲に届きそうだった。それほど大きな影なのだ。

『ふふ、卑いやしき女どもの相手など、そのあたりの下げ劣れつな輩やからがすべきこと。あなたさまのごとき勇士には、愛するにふさわしき相手がおりますことよ！』

「俺にふさわしい相手って、すくなくともあんたじゃないと思うけどな……」

　これは訴えても無駄に思えたので、護堂は小声でぼやいた。

　しかし、気を取りなおして顔を上げる。今度は大声で呼びかけた。

「今日はこっちに降りてこないのかよ!?」

　女神の姿は空にかかる虹のごとく巨大に見えるものの、決して近くはない。

　遥はるかな高みから草薙護堂を見おろしているのだ。

　神と至近距離で遭遇したら、カンピオーネの力は大いに昂たかぶる。それがないため、すぐわかった。恵那に斬きられて、やはり警戒心を高めているのか。

『ええ。どうやら草薙さまは配下を呼びよせられたようですので。此こ度たびはわたくしも女王として手勢を差しむけ、王たる御身に挑いどませていただこうかと』

「……今回どころか、あんたはいつも手下を送りこんでばかりじゃないか」

　火の女神と名乗る敵。名前以外にも、何か隠していそうな気がする。

　こうして問答を繰りかえし、その一端を探り当てたいところだが——

『ふふ。かよわき乙女おとめと勇壮なるいくさ人では流儀も異なるもの。草薙さま、女の身で雄お々おしき神殺しに挑む勇気に免じ、どうかご容よう赦しやくださいませ』

　上う手まくいかない。火の女神にはことごとく思惑をはずされる。

　意図してか無意識かは知らない。だが、ここに至り、護堂はある疑惑を抱きはじめた。もしかして彼女、今までで最も〝むずかしい〟敵ではないか？

　かつての強敵たちは、よくも悪くも剛直だった。

　王者であり武人だったメルカルトやアテナ。英雄気質のペルセウス。目立ちたがりで単純だった斉せい天てん大たい聖せい。ランスロットの涼やかな突撃精神。

　あの武辺者たちと一線を画す、やたらと『女』を誇こ示じする言動の数々。

「そういや、魔女の神とか言ってたもんな……」

『さあ、では此度こそ草薙さまをわたくしの客人とさせていただきましょう』

　思わずつぶやいた瞬間、女神の声が天にひびいた。

『ふふふ。わたくし、とっておきの刺し客かくを用意しましてよ。神獣ごときの力では、あなたさまを虜とりこにすることはかな

わぬようですから！』

　空に満ちる黒雲より、輝く獣けものが降こう臨りんしてくる。

　それは全身が黄金の焔ほのおでつつまれた、白い悍かん馬ばだった。今までの神獣と異なり、異常な巨体ではない。すばらしく大柄ではあったが、馬としては常識的なサイズだろう。

　だが、その蹄ひづめは中空を蹴り、軽やかに天空を駆けている。

　黄金の焔をまとう、白き天馬。その聖なる雄姿を見るなり、護堂は気づいた。

「護堂さん！　あれはウルスラグナ——女神に奪われた『白馬』の化け身しんです！」

　霊視によって祐理も知ったのだろう。護堂の直感を裏づけてくれた。

　奪うだけでなく、利用することもできたとは……。

『時間がなくて、まだ全ての子をしもべとできていないのですが……。草薙さま、ご自身の眷けん属ぞくを相手に是非ご一戦あそばしませ！』

　火の女神に通告されて、護堂は眉まゆをひそめた。

　女子たちも厳しいまなざしで『白馬』を見あげている。

　みんな気づいたのだろう。天あま翔かける悍馬が宿す強大な神しん力りきに。女神の加護を得た『火の鳥』すら越える、厄やつ介かいな強敵の出現だった。

3

「ヨシュアは告げたり。主しゅはこのジェリコを汝なんじらに賜たまわれりと。兵どもは生者の悉ことごとくを刃やいばにかけ、牛うし羊ひつじ驢ろ馬ばに至るまで殺あやめけり！」

　エリカが聖せい絶ぜつの言こと霊だまを唱となえ、『聖なる殲せん滅めつ者しやの特権』を行使する。

　それに応じて細身の長剣だったクオレ・ディ・レオーネは逆さか棘とげ状のランスに変形し、紅あかき騎士の左手には楕だ円えん形けいの楯たても顕あらわれた。

「彼かの者らミデアンの邑むらを攻め撃ち、男子も王も悉く剣にかけて殺めけり。其そは主のモーセに命じ給たまえるがごとくなり！」

　これはもちろんリリアナの聖絶である。

　サーベルだった魔剣イル・マエストロは銀製の弓に形を変え、聖なる殲せん滅めつの矢を撃ち放つための凶器となる。

　欧州の騎士たちが切り札とする戦闘魔術の奥おう義ぎ。

　しかし、これを向けられるのは、草くさ薙なぎ護ご堂どうが愛用してきた『白馬』。太陽の申し子としてのウルスラグナを象徴する獣けものだった。

『さあ、草薙さま。太陽を運ぶ聖なる天馬——その力をご覧ろうじあれ。ふふ、その燃える蹄ひづめであなたが灼やき尽くされても、わたくしの秘薬で灰より甦よみがえらせてみせますわ！』

「もう手足をもぐどころの話じゃなくなってるぞ！」

　女神のシルエットが言い放つ内容に、護堂は地上から怒鳴りかえした。

　灰より——というのはハッタリにも思えるが、不死の神々がいるくらいだ。もしかしたら死者を蘇そ生せいさせる神もいるのかもしれない。

　それを証明するためではないだろうが、『白馬』が上空から一直線に突っこんでくる。

「みんな、決めておいたとおりに頼む。離れろ！」

　護堂はとっさに叫んだ。

使える化け身しんは実質的にひとつだけという状況。この条件下でも『できるかぎり』を尽くすため、今日の戦い方はすでに打ち合わせずみなのだ。

予想に反して、遣つかわされた神のしもべは神獣以上の存在だったが――。

その戦術が唯ゆい一いつ最良の戦い方であることは変わっていない。ただ『囮おとり』の危険度が格段に跳ねあがっただけで……。

エリカ・祐理・リリアナ・恵那。みんな、予定どおりに散開していく。

護堂から距離を取るためだ。去り際ぎわにエリカが何か叫んでいたが、聞こえなかった。

天から襲来した『白馬』の前まえ肢あしで蹴けられていたからだった。

印象としては、巨大なダンプカーにひかれたのと同程度の衝撃に思えた。

全身がバラバラに砕けそうな感触と痛み。天高く吹っ飛ぶ自分の体。しかも、『白馬』がまとっていた火がこちらに燃え移っていた。

護堂は火だるまになりながら、宙を舞った。

今の一撃で死ななかったのは蹴けられる寸前、交こう叉さささせた両腕で頭をかばった恩恵かもしれない。ならばよし。

これで、残された手札を切ることができる――！

「全ての悪あしき者よ、我が力を畏おそれよ……」

重傷とひきかえに使用できる格闘と耐久の力。護堂のなかでめざめた。

「雄強なる我われがかかげしは、猛たける駱らく駝だの印なり！」

砂にたたきつけられた護堂は全身の痛みに悶もん絶ぜつしたが、『駱駝』は苦痛に強く、獰どう猛もうかつ剽ひよう悍かんな化け身

しん。その恩恵を受けて堪こらえ、すぐに立った。

　同時に呪力も高め、『白馬』の焔ほのおを消しにかかる。

　さっき喰くらった黄金の焔が、今も護堂の体を灼やきつづけていたのだ。

　並の人間なら、とっくに骨まで残さず灼き尽くされただろう。だが、カンピオーネの呪術への耐性を破る威力はなく、すぐに消えていった。

　あちこち火ぶくれしていたが、その痛みにも今は耐えられる。

　しかし、天から不吉な声が降ってきた。

『ふふふ。まだこれからでしてよ、草薙さま。——義なる者の守護者を我は招き奉たてまつる。勝利をあたえる者よ、義なる我に正しき路みちと光明を示し給たまえ！』

　護堂はハッとした。この言霊を使うということは⁉

　こちらの驚きよう愕がくをよそに、『白馬』はふたたび空へ駆けあがる。次の瞬間、白き悍馬は空中で変身と巨大化を遂とげた。

　体長一〇メートルはあろう巨獣に化身したのである！

　それは漆しつ黒こくの毛皮を持つ山や羊ぎだった。水面を泳ぐように悠々と空を舞っている。

「姿を変えた……⁉」

　驚愕する護堂の頭上で、黒山羊——『山羊』の化身は啼ないた。

　くえええぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ‼

　その瞬間、黒山羊の巨体から特大の稲妻が放たれ、地上の護堂とその周囲を容よう赦しゃなく打ちのめす。だが、幸いにもさっき呪力を高めたばかりだった。

　神の雷といえども、そうかんたんにカンピオーネを打倒できない、はずなのに。

「く——はっ⁉」

すさまじい衝撃を受けて、護堂はいつのまにか砂浜に倒れ伏していた。

痛いのはもちろんだが、全身がしびれている。冬、静電気で指先に感じる痛み。あれを一〇〇〇倍強烈にして、全身で味わった気分だった。

よほど激烈な電流を浴びたようだ。ずきずきという疼とう痛つうが心臓を襲っている。

カンピオーネの魔力への耐性、『駱駝』の耐久力。それらを突き破り、こうまで護堂の体を蹂じゆう躙りんする。とんでもない威力の稲妻だった。

だが、空を舞う『山羊』は呪力をほとんど失っていた。

今の稲妻に持てる力のほとんどをつぎこんだのだろう。あれなら二射目はない——と判断したとき、また変わった。

黒山羊から、また『白馬』の姿に。

黄金の焔をまとい、天あま翔かける白き悍馬——。力強く大気を蹴って飛翔し、ぐんぐんと高度を上げていく。その姿が空に満ちる暗雲のなかへと消えた。

直後だった。

黄金の爆炎につつまれながら、『白馬』が燃える隕いん石せきのごとく墜つい落らくしてきた。

もちろん、地上の草薙護堂めがけて。かわす余力はない。いまだ砂浜に倒れたままなのだ。そして、幾度も瀕ひん死しの命を救ってくれた『雄羊』の化身も奪われている！

かつてないピンチ。そこに割りこんでくれたのは、聖騎士ふたりだった。

「ミデアンの殲せん滅めつ、ここに成れり！」

滅びの言霊と共にリリアナが光の矢を撃つ。

隕石のごとく地表へ墜おちてくる『白馬』を狙ねらって。聖なる

銀の弓から放たれた矢はすぐ八本に分かれ、それぞれ異なる軌道を描きながら獲え物ものをめざす。

　ただ護堂へと一直線に駆ける『白馬』に、この矢をかわす術すべはなかった。

　八本の矢はことごとく命中した。

　逞たくましくも美しい純白の馬体。その額ひたい・頸くび・胸・胴に二本ずつ矢は突き刺さり、八つの穴を無惨に穿うがつ。だが、それでも『白馬』の降下は止まらない。

　深く傷つきながらも、護堂めがけて焔と共に駆けてくる！

　その前肢の燃える蹄があと数メートルで護堂の頭部を蹴り砕くというとき、焔の馬へ横合いからぶつかったのはエリカだった。

「角つの笛ぶえよ、ジェリコの城壁を突き崩せ！」

　聖なる殲滅者は短時間なら空を駆けることができる。

　その力を使って一直線に飛翔し、突撃を敢かん行こうしたのだ。空中の『白馬』に横合いから体ごとぶつかり、ランスの穂先を突き立てる。

　全身全霊をかけた槍突撃ランスチャージ。さすがの『白馬』もふっとばされた。

　ヒュアアアアアアアァァァァァァアアアッ！

　白き悍馬はエリカともつれるように砂浜を転がっていき、甲かん高だかくいななく。苦痛の叫びであった。聖なる殲滅の刃は『白馬』の胴を深々と抉えぐり、深傷ふかでをあたえていたのだ。

　エリカはすばやく立ちあがり、ランスを振りあげる。

　とどめを刺すつもりなのだ。しかし、ここでまたも変身が起きた。

　まず、焔をまとう純白の馬体が黒く変色する。

　そして、細い馬うま面づらは太く重厚な牛の頭部へと形を変え

た。だが、その体は人——おそろしく筋骨隆々とした人間のものへ。サイズも膨ぼう張ちようしていく。

　直後、『白馬』は身長五メートルもの巨人に変身を遂とげた。

　その頭部はしかし、猛たけ々だけしい牛である。牛ぎゅう頭とう人じん身しんの巨人なのだ。そして、全身が黒く短い毛でびっしりおおわれていた。

「——！　『雄牛』の化身ということ⁉」

　エリカは振りあげたランスを牛頭の巨人めがけて突き込んだ。

　だが、同時に。巨人も黒い長大な右腕を『ぶん！』と豪快に振って、突き込まれたランスごとエリカの華きや奢しやな体を無造作にはたいた。

「きゃあああああああっ！」

　怪力を誇る『雄牛』の一撃で、エリカは一〇〇メートル近くも吹っ飛んでいった。

　そのままエメラルドブルーの海へ落ちてしまう。それでも黒い剛ごう腕わんを楯たてで受けとめて致命傷を防ぎ、武器であるランスを落とさなかったのはさすがというべきか。

「エリカ！」

　旧友兼ライバルが薙なぎ倒されたのを見て、リリアナが光の矢を射放つ。

　その先にいるのは『雄牛』の化身たる巨人。銀の閃せん光こうが黒き牛頭へと飛んでいく。だが、この一いつ矢しを巨人はひらりと避けた。

　そう、ひらりと。巨体からは想像もつかない身軽さで、高々とジャンプして。

　そして、『雄牛』は護堂の目の前に着地する。

　さっきの電撃で悶もん絶ぜつし、いまだ倒れ伏したままの草薙護堂の前に！

フオオオオオオオオオオオッ！　『雄牛』は猛々しく咆哮して、右足を高々と上げる。

その巨大な足裏で、護堂の体を踏み砕くつもりなのだ。

「……俺の体、もうすこし保ってくれよ！」

これは絶体絶命の窮きゆう地ち。しかし、千せん載ざい一いち遇ぐうの好機でもある。

倒れたまま痛んだ体を叱しつ咤たし、ごろごろと砂の上を転がった。二秒後、今まで護堂の背中があった場所を『雄牛』の足が踏みつぶす！

「我は最強にして、全ての敵を打ち砕く者なり――！」

その間にウルスラグナの聖句を唱え、『駱駝』の力を高めた。

全身の痛みがすこしだけ収まる。体のしびれもわずかだが取れた。あとは気力と根性。護堂は歯を食いしばって叫んだ。

「だああっ！」

気合いで立ちあがりざま、護堂は跳躍――。

身の丈五メートル、牛頭人身の巨人。黒い体毛の生えた猛牛の顔が、このジャンプのおかげで今、目の前にあった。

あとは『駱駝』の脚力で、飛びまわし蹴りを牛頭の横っ面つらにたたきこむ。

フオオオオォォォォォォォオオッ！

『雄牛』は絶叫し、大きく巨体をのけぞらせた。

手て応ごたえあり。かなりの痛打を浴びせた。だが致命傷ではない――。『雄牛』の目がぎろりと光り、その長大な腕が護堂へのびる。つかまれた！

「ぐああああああああああっ！」

黒い巨人の腕で握りつぶされることになり、護堂は絶叫した。

骨という骨がめきめきと軋きしんでいる。まもなく折れ、砕け、バラバラになるだろう。

非常識に頑強なカンピオーネの肉体をさらに打たれ強くするのが『駱駝』の化身。だが、そのタフネスをもってしても、あと数十秒これが続けば確実に限界が来る！

しかし、それでも護堂はにやりと笑った。

遊撃手としてひかえているはずの少女が、この機を見逃すはずないからだった。

「天あまの叢むら雲くもの御み劔つるぎよ。我が背せの君きみのため、我に力を取らせ給え！」

やはり来た。〝相棒〟と共に清せい秋しゆう院いん恵え那なが遠間から駆けこんでくる！

その体には神刀の御霊がみなぎり、神がかりを完了させていた。

「いやあああああああ！」

恵那は高々と跳躍し、八はつ双そうの構えから天あまの叢むら雲くもの劍つるぎを振りおろした。

神がかりの威力も乗せた、火を噴くような渾こん身しんの一ひと太た刀ち。これが牛頭人身の背中をざっくりと切り裂いた。たまらず『雄牛』は膝ひざをつく。護堂の体も手放してしまう。

「く……っ」

砂の上に投げ出されて、護堂はうめく。さすがにダメージがきつい。

くはっと血も吐いた。だが、深傷ふかでを負ったのは『雄牛』の方も同じ。しかも、この直後に光の矢が十数本、飛んできた。リリアナの射た殲滅の矢である。

フオオオォォォォォォォンッ!?

これに射抜かれ、『雄牛』の巨人は苦しげに咆哮する。

　そのままがっくりと倒れ、地面に突っ伏してしまう。力尽きたようだ。

「王様、大丈夫!?」

　大将首をあげた恵那が心配そうに声をかけてきた。

　ハァハァ息を荒らげつつ護堂はうなずく。当てにできる化身が『駱駝』だけという状況で最善を尽くすための戦法、とりあえずは上う手まくいった。

　まあ、戦法といっても単純なものだ。

　誰よりもしぶとく頑丈な護堂が敵の神獣らを惹ひきつける。囮おとりにかまけて隙すきができた敵には恵那が天叢雲劍で遊撃。このふたりをエリカとリリアナは適てき宜ぎサポート。

　それだけなのだから。

　とはいえ、現有戦力ではほかの戦い方を選ぶ余裕がない。

　実際、敵が神獣クラスなら、『駱駝』の化身は意外としぶとく持ち堪こたえるはず。この頭の悪い戦法でなんとか切り抜けられた公算、決してすくなくないのだが。

　まさか、女神がウルスラグナの化身を手駒として利用してくるとは——。

「な——!?」

「今度のは……『強風』の化身!?」

　愕がく然ぜんとする護堂、ハッとする恵那。

　ふたりはいきなり巻きおこった旋せん風ぷうに呑のみこまれたのである。牛頭人身の巨人、倒れたばかりの『雄牛』が形を失い、変化した旋風に。

　戦うための力を多彩に切りかえてきたのは、いつも草薙護堂だった。

　だが今回、護堂の方がその変化に苦しまされる側であった。

4

　風の勢いは一気に増して、気づけば竜巻になっていた。

　直径としては十数メートル程度と小規模だ。だが、あらゆるものを空へと巻きあげる暴力的な風の渦うずと化し、護ご堂どうと恵え那なに牙きばをむこうとする。

　おそらく、さっき『山や羊ぎ』が放った電撃と同じだったのだろう。

　一瞬で呪力の大半を消耗させる代わりに、威力を最大限に高める――。おかげでカンピオーネと神がかりした神刀の使い手もこの竜巻に呑のみこまれ、空へ運ばれてしまった。

　……巨大な洗濯機に放りこまれた気分であった。

　竜巻のなかで恵那とふたり、十数回も高速回転させられた。

「くっ……王様！　恵那といっしょに天あまの叢むら雲くもを――お願い！」

　暴風の渦にかきまわされながら、恵那が叫んだ。

　轟ごう々ごうと吹きすさぶ風の音が邪じや魔まして、聞こえるはずのない声。

　だが、護堂は明めい瞭りように聞きとった。ふたりが共有する天あまの叢むら雲くもの剣つるぎが彼女の意思を中継してくれたのだ。おかげで太た刀ちの媛ひめ巫み女こが何を望んでいるのか、訊きかずともわかる。

「いいぞ、清せい秋しゆう院いん！　やれ！」

　ふたりでいっしょに天叢雲剣を振るうイメージ。

　この神刀を真に掌しよう握あくした木き更さら津づの夜、護堂と恵那が共有したものだ。天叢雲剣が意思を仲介してくれる今なら、

呪術を使わなくとも同じことができる。

　天叢雲剣には敵の魔力・神力を吸いとる性質があった。

　恵那は今、これを使って『強風』の威力を吸収するつもりなのだ。

　もちろん、神がかりの使い手といえども、まつろわぬ女神が遣つかわした暴風を全て吸い尽くすことはできないはず。

　だが、カンピオーネである護堂が同じタイミングで神刀に呪力を吹きこむなら。

　護堂が力をあたえ、恵那が制御する形であれば。

「丈夫ますらおは名をし立つべし後のちの代よに――聞き継ぐ人も語り継ぐがね！」

　恵那の言こと霊だまに合わせて、護堂は天叢雲剣に呪力を送りこんだ。

　この手になくとも、呪術の絆きずながそれを可能にしてくれる。そして、恵那が持つ神刀は漆しつ黒こくの輝きを放ち、うずまく『強風』を吸いこみにかかった！

　――ふたりをかきまわす竜巻はどんどん弱まっていった。

　もう何十回もみくちゃにされたか覚えてないが、風の勢いは一気に鎮しずまり、護堂と恵那を空に巻きあげていた力はついに失われた。

　ふたりの体は七、八メートルほどの高さから砂浜に落ちる。

　恵那は猿さるの身ごなしで着地した。軽かる業わざの心得などない護堂も同じことをする。『駱らく駝だ』の使用中は身軽になるおかげだ。

　しかし、さんざんかきまわされたおかげで平へい衡こう感かん覚かくを失い、気持ちが悪い。

　体力もかなり失っており、ふたりはがっくりと腰を落とす。とはいえ、これでようやく『強風』から解放された……。

「護堂、恵那さん！」

「ふたりとも、体の方は!?」

　エリカが海の方から、リリアナも逆方向から駆けてくる。

　紅あかき騎士は無傷。さっき『雄牛』に吹っ飛ばされたダメージはないようだった。水着にパーカという超軽装でも、聖なる殲せん滅めつ者しやの特権に守護されているからだろう。

　逆さか棘とげ状のランスと楯たてをたずさえ、表情も凛り々りしく力強い。

　リリアナも聖なる銀の弓をたずさえている。

　護堂はふたりにうなずきかけた。口で返事をしなかったのは吐き気を堪こらえていたからだ。恵那もかなりぐったりとしている。

「今の『強風』、完全に消滅する前にあちらへ逃れたように感じましたが……」

　リリアナは霊視の力で視みえざるものを見とおすことができる。

　彼女が海の方を見ていた。つられて、みんなで同じ方向を眺め——そろって厳しい表情になった。新たな化身が顕あらわれつつあったからだ。

　エメラルドブルーの海。島の玄関口めいた入り江。

　その洋上で黒い焔ほのおが燃えている。護堂も何度となく呼び出してきた焔だった。

『主しゆは仰おおせられた。咎とが人びとに裁きを下せと……』

　天より女神の声がひびく。

　いつも護堂が唱えていた言霊、今は彼女がささやく番だった。

『鋭く近寄り難がたき者よ、契約を破りし罪科に鉄てつ槌ついを下せ——！』

　洋上の黒い焔が黒き神獣に変化をはじめた。

推定体長二〇メートル。容よう貌ぼう魁かい偉いな漆しつ黒こくの巨獣たる『猪いのしし』に。だが、まだ実体化しているのはいかめしい頭部だけだった。首から下は黒い焔のままだった。

護堂自身が使うときほど、迅じん速そくな召しよう喚かんと顕けん現げんはできないようだった。

『ふふふふ。草薙さまの眷けん属ぞくでも最も力強い子です。我がしもべとして、特に念入りに手入れをしてあげましたわ！　その分、呼び出すのにすこし手間取っておりますが……待っていただくだけの価値、この子にはありましてよ！』

まだ召喚の途中だというのに、火の女神が勝ち誇るように言う。

しかし、それもうなずける話だった。今まで彼女が繰りだしてきた化身たち、いずれも強力ではあった。が、護堂が使う力の簡易アレンジ版という趣おもむきでもあった。

だが今、海上で誕生しつつある神獣はちがう。

あのまま顕現を果たせば、護堂がウルスラグナ第五の化身として呼び出すときと寸分たがわぬサイズ・姿・パワーで獰どう猛もうに突っこんできそうだ。

顔しかない今の状態でも、やつが猛たけりくるっているのがわかる。

洋上に浮かぶ黒き焔と巨大な猪の頭部。その鼻息はふーっと荒く、双そう眸ぼうはふてぶてしく砂浜を見つめ、獰どう猛もうな口はうなり声を発していた。

ォォォォォォォォォォォォォォ……。

まもなく地上に解きはなたれ、破壊のかぎりを尽くす。それをよろこぶように。

「向こうにとっても取っておきというわけね。厄やつ介かいな切り札だわ」

「草薙護堂が操るときより弱体化している——と期待したいが、これればかりは戦ってみないとわからないからな……」

エリカとリリアナがうなずき合い、戦意で顔をひきしめた。

一方、護堂と恵那は万全とはいえない状態であった。

すでにダメージ甚じん大だいな護堂。全身が重く、動きもかなり鈍にぶい。異様に打たれ強い『駱駝』でなければ、とっくに昏こん倒とうしていたはずだ。

そして恵那。この三日で三回も神がかりを繰りかえしている。

さらに今、カンピオーネの呪力を預かって、天あまの叢むら雲くもの剣つるぎの能力を人間の限界以上に引き出したばかり。タフな自然児も限界に近いらしく、体がふらついている。

「無理するな、清秋院。すこし休んでろ！」

「バカ言わないでよ、王様。こんなときにのんびりできるわけないじゃん……」

強がる恵那。珍しく快活さのすくない声だった。

天叢雲剣を杖つえにして、立つのがやっとという風ふ情ぜいなのだ。

「いけません、恵那さん！」

太刀の媛巫女を叱しつ責せきしたのは、後方に下がっていたはずの祐理だった。

「これ以上は本当に命にかかわりますよ！　そんな無茶、絶対に許しませんっ」

と、怖いくらいの剣幕だった。

だが弱った恵那に寄りそい、母親のようにやさしい手つきで背を撫なですさる。

手当ての術――痛んだ体を癒いやすため、呪術の治療を施ほどこしているのだ。

恵那の切り札・神がかり。一度使ったら、一週間は間を空けるべきだという。それを越えるペースは彼女の心身を容よう赦しやなく

消耗させていくから——。

　そうか。護堂はうなずいた。

　幼なじみの限界を悟って、祐理は治療と制止のためにここまで駆けつけたのだ。

「でもさ。みんなやられちゃうかもしれないんだから、恵那だけ休んでも意味ないよ。ここは背水の陣ってことで割り切ろう。大丈夫、もうすこしなら無理も利きくし……」

「本当に無茶で感覚的な人なのね、恵那さんって。護堂と気が合う理由、よくわかるわ」

　エリカが眉まゆをひそめてコメントした。

　尚、あきれたというより『感じ入った』という雰ふん囲い気きの声音である。

「でもダメよ。おとなしくしてなさい。ウルスラグナの『猪』、騎士の相手として不足なしだもの。ここはわたしたちにまかせて頂ちよう戴だい」

「まあ、そういうことになるな」

　これはリリアナの発言だった。

「この島に来て以来、草薙護堂を守ってきたのはあなただ。そろそろ、わたしたちに出番を譲ゆずってもらおうか」

　護堂も大きくうなずいて、賛同の意思をあらわにした。

　だが、銀髪の騎士は眉まゆをひそめて、こちらにも遺い憾かんの意を示してきた。

「付け加えるなら、草薙護堂。あなたもすこし休まれるべきでは？」

「えっ？」

　聞きかえした瞬間、予想外の攻撃を受けた。

　リリアナに足払いされたのである。避けようとした護堂だが、足

が動かなかった。きれいに足を払われ、尻しり餅もちをついてしまう。

　このざまを見て、リリアナとエリカはそろってため息をついた。

「やっぱり……。痛みが麻ま痺ひしているだけで、体は限界まで来ていたのですね」

「さっきから尋じん常じようじゃない量のダメージをためこんでいたものね。不死身になる化身でもないんだから、こんなことだろうと思ってたわ」

「だ、大丈夫だよ。俺の方は傷の治りもバカみたいに早いしっ」

「まあ、治ち癒ゆの術をかけておけば、あとは『駱駝』の恢かい復ふく力りよくもあるから、たしかに体はなんとかなるかもしれないけど……」

　護堂の訴えに、エリカは思慮深げに答えた。

「正直、あの『猪』相手に丸腰で戦うのは無茶がすぎないかしら」

　全員の視線が入り江の方に向いた。

　洋上では黒い焔が燃焼を続けている。さっきまで猪の頭部だけだったのが、今は胸まで実体化していた。あの焔が全て巨獣の肉体となったとき、漆黒の破壊者がすさまじい勢いで浜辺に到来するのだろう……。

　たしかに、蹴り以外の攻撃手段を持たない『駱駝』には厳しい相手だが。

「丸腰じゃない。一応、武器ならあるぞ」

　護堂はちらりと〝相棒〟を見た。

　さっき恵那が杖つえとするため、砂に突き刺した天あまの叢むら雲くもの剣つるぎだ。

　ふらつく足取りで歩みよって、柄つかをつかむ。剣だの刀だの物騒な道具に親しむつもりは微み塵じんもない護堂だが、今は主義主張を棚上げすべき非常時だった。

「清秋院恵那なしで、使いこなせますか？」

「大丈夫だろ。木更津でランスロットとやったときもなんとかなったし……」

　我ながら大おお雑ざっ把ぱだなと思いつつ、リリアナの確認に回答した。

　そう、あのときも護堂はぶっつけ本番で天叢雲剣を使い、軍神ランスロットの振るう救世の神刀と撃ち合ったのだ。

「大体リリアナとエリカだけで『猪』と戦うなんて、そっちの方が無茶だ。あいつにはそれこそ『白馬』でもぶつけるくらいしなきゃ、勝ち目はなさそうだぞ……」

　まあ、そこまでの破壊力が天あまの叢むら雲くもの剣つるぎにあるかという問題はあったが。

　相棒が最大級の威力を発揮したのは、やはり木更津の戦い。『最後の王』が使うという救世の神刀に対抗するため、銀髪の女神が天叢雲剣を強化したのだ。

　銀の髪と夜の瞳を持つ、少女の姿をした仇きゅう敵てき。

　奇妙な縁で結ばれた女神。なつかしく、思い出すとすこしだけさびしく、勝ち逃げされたことがかすかに腹立たしい相手。まつろわぬアテナ——。

『別れは告げぬ。あなたの方から雪せつ辱じょくを晴らしに来るがよい。それがいつであれ、草薙護堂を倒すのは妾わらわなのだから！』

　あの猛たけ々だけしい去り際の言葉。

　今、戦っている女神が見せる『女っぽさ』とは真ま逆ぎゃくの闘志。むしろ雄々しいと呼びたくなるほどの気け高だかさだった。そして彼女は言っていた。

　ひとつだけ餞別をくれてやると……。

　——わずかに『扉』が開いたのは、この瞬間だった。

天てん地ち開かい闢びやく。星の終しゆう焉えんとはじまり。女の叡えい智ちにもとづき、鍛きたえられる刃やいば。

そうだった。あのときの依より代しろも天叢雲劍。仇敵の力をも貪どん欲よくに呑み込み、我がものとする鋼はがね。その属性がなくてはかなわぬ荒技なのだ。

今、力が要いるのなら。我が神刀に最強の叡えい智ちを注ぎこまなくてどうする――？

「護堂、どうしたの？」「草薙護堂⁉」「王様……？」

遠くから仲間たちの声が聞こえる。

しかし、護堂の視界を満たすのは彼女たちの水着姿でも、エメラルドブルーの海でもなかった。ふたつの目。闇やみに輝くフクロウの双そう眸ぼうだった。

そして感じ取る。己おのれの内側に〝あの秘法〟が眠っていることを。

「護堂さん……しっかりしてください！」

いきなり誰かに手をさわられた。その感触で我われに返る。

気づけば、すぐそばに祐理が寄りそっていた。天叢雲劍の柄を持つ護堂の手に、彼女が手を添えてくれたのだ。

エリカ、恵那、リリアナ。ほかの三人も不思議そうにしている。

朦もう朧ろうとしつつ、護堂は頭を振った。今、自分はかいま見たようだ。天地開闢を為なし、破壊と創造を具現する法。地と闇の女神が遺のこした宇宙的叡智を――。

「……って。何なんだ、これは……」

頭と心の奥底に刻まれた、深しん淵えんにして強壮なる秘術。

逝ゆきて帰りし強敵が遺のこした忘れ形見。その扉が開きかかっている。しかし、この叡智はあまりに巨大すぎる。女神ならざる草薙護堂の器うつわでは、とうてい理解しがたいほどに。

ダメだ。とても御ぎよせるものではない。

せっかくの力が宝の持ち腐れになるのか……。そのときだった。

「護堂さん。どうか私の方を見てください。大丈夫です」

また祐理の声にうながされて、あらためてハッとした。

媛巫女が正面から護堂の目をのぞき込んでいた。可か憐れんな美び貌ぼうがひどく近い。まるで、いつも神の知識を授かるときのように。

護堂はその近さにどぎまぎして、おかげですっかり我に返ることができた。

そして、祐理のささやきを聞いて、驚きよう愕がくした。

「星のはじまりと終わりを具現する鋼……天地を開闢する暗黒の刃。女神の叡智。黒き神刀を灼く焔……私にも視みえています」

祐理はおごそかに言った。霊視を得たのだ。

そんな媛巫女を、仲間の女子たちは驚嘆のまなざしで見つめている。また、祐理の目はいつのまにか玻は璃り色に変わっていた。

ここで護堂は気づいた。

玻璃色の目。亜麻色に輝く髪。それは幽かく世りよにいる玻璃の媛ひめが有するもの。

今の祐理のたたずまいは、あの幽世の貴人を彷ほう彿ふつとさせた。そういえば、祐理の髪は大やまと和なで撫子しことしてはやや茶色味が強い。

理由もなく護堂は想像した。仮に玻璃の媛が媛巫女の血のルーツだとしたら。

遠祖の血と霊能が最も色濃く現れた媛——それこそが万里谷祐理なのではないかと。

「かの女神が護堂さんのなかに遺した秘法。おそらく扉が開かれたことで、私の目にも視えたのだと思います。……鍛えましょう」

　決然と祐理に訴えられて、護堂は目をみはった。

「鍛えましょう、はじまりと終わりの剣を。私があなたを導きます」

5

　入り江の洋上では、ついに『猪いのしし』の実体化が終わろうとしていた。

　逞たくましい黒猪の頭部、胸、前まえ肢あし、胴、腰、後ろ肢までが顕けん現げんし、巨きよ鯨げいのごとく海に浮かんでいる。焔ほのおにつつまれているのはもう尾だけだ。

「今のうちに試ためしてみるか」

　ぼそりとリリアナが言って、銀の聖せい弓きゆうを引きしぼった。

　殲せん滅めつの特権をこめて、光の矢を射放つ。

　彼女のいる波打ち際から海上の『猪』まで、およそ二〇〇メートル。しかし、聖騎士パラデイーノの武具である矢はこれだけの距離をものともせずに飛ぶ。

　狙ねらいは『猪』の眼球。しかし、みごとに射抜く寸前。

　見えない壁でもあったかのように、光の矢ははじき飛ばされた。

　ォォォォォォォォォォ……。

　低いうなり声には微妙に勝ち誇るようなニュアンスがあった。

「やはり、この程度の攻撃は通じないようだな」

「これは完全に言いがかりなのだけど……。護ご堂どうの化け身しんを奪われたというより、あの『猪』に裏切られた気がするわね、なぜか」

リリアナがうなずく横で、エリカが眉まゆをひそめて言う。

ふたりの役割は可能なかぎり、時間を稼かせぐこと。護堂と祐ゆ理り、そして恵那と天あまの叢むら雲くもの劍つるぎが必要な準備を終えるまで。

そのために砂浜でそなえる騎士たちの前で、ついに敵が動きだした。

オオオオオオオオォォォォォォォンンンンンッ！

騎士たちも聞きなれた咆ほう哮こうがとどろく。

黒き『猪』は完全に実体化を終えていた。浜に迷いこんだ巨鯨のごとき魁かい偉いな肉体は体長二〇メートル前後。これが陸をめざして突っこんでくる！

さながら水上を走る快速艇のような、すばらしいスピードと勢いだった。

「リリィ。最初の一撃に集中していきましょう！」

「どうしてだ!?」

「姿や大きさだけじゃなくて、性格も前と同じかもしれないでしょう？」

「なるほど。お調子者の暴れん坊には相応の戦法がある、か！」

短い作戦会議。つき合いの長い彼女たちにはこれで十分なのだ。

直後、リリアナの武器が形を変えた。

今まで弓矢として使っていた聖なる殲滅の特権。その形があらたまる。サーベルの刀身に槍やりの長い柄えを付けた武具、薙なぎ刀なたに。

そして、来た——。

ルオオオオォォォォンンンンンッ!!

怪獣らしからぬ速度で砂浜に到達した『猪』は、まず上陸するなり吠ほえた。

　それから、凶きよう猛もうな目をぎらつかせて、周囲を睥へい睨げいする。獲え物もの——火の女神が標的とする神殺し・草くさ薙なぎ護ご堂どうを捜しているのだ。

　彼の眼中にはふたりの聖騎士などない。そこでリリアナが飛んだ。

「アルテミスの翼よ！」

　天あま翔かけるのも殲滅者の能力。しかも、彼女は飛翔を得意とする魔女でもある。

　青き光につつまれながら、エリカよりもなめらかな軌道を描いてリリアナは飛び、『猪』の上空をめざして天翔ける。

　途中、すれちがいざま『猪』の背に一刀をたたきつけた。

　しかし、刃やいばは届かない。その瞬間、黒き巨獣の体から不可視の衝撃波が短く放たれ、聖なる刃とリリアナを吹き飛ばしたのである。

「く!?」

　飛行の途中で衝撃波を浴びて、リリアナはバランスを崩した。

　だが、巧たくみに体勢を立てなおして飛翔を続ける。数秒後、上空から『猪』の魁偉な背中を見おろすポジションに陣取り、そのまま空中で静止する。

　一方、『猪』は島の内部をめざし、そしらぬ顔でズンズンと歩きはじめた。

　飛翔するリリアナを小鳥程度にしか認識していないのだろう。

「さっき矢をはじいたのはこれか……」

　リリアナは地上に目を向ける。そちらではエリカが突撃の準備を終えていた。

　紅あかき光につつまれて、逆さか棘とげ状じようのランスと楯たてをかまえている。

リリアナはフッと微笑した。今の一刀はいきがけの駄だ賃ちんのようなもの。旧友兼ライバルが言った『最初の一撃』はこれからなのだ。

そして、空中と地上で騎士たちは同時に言こと霊だまを唱えた。

「聖者マヌエルよ。天上の雅が楽がくを奏かなで、天使の翼を我が腕に！」

「大天使ガブリエルよ。獅し子しの覇は道どうを庇ひ護ごし、祝福し給たまえ！」

リリアナとエリカの武器に宿る、聖なる殲滅の特権。

これを一時的に増幅させるため祝福の言霊をつむぎ、大量の呪力を注ぎこむ。同じほどの威力で打ち込むことはもうできなくなるが、それでいい。

倒すのではなく『引きつける』のが目的。あとのことは『王』にまかせればいい！

「「いやあああああああっ！」」

ふたりはかけ声と共に『猪』へ突撃をはじめた。

エリカも地を蹴り、正面から黒き神獣の顔めがけて飛翔する。

リリアナほどの巧たくみさで旋回や静止などの空中機動は行えない。だが、まっすぐ一直線に飛ぶスピードは紅あかき聖騎士の方が明らかに上だった。



　彼女が突き出すランスの穂先は『猪』の顔面——右の眼球めざしてのびる！

　そして、リリアナは弧こを描くように上空から急降下し、やはり同じく右眼球に薙刀の刃で斬きりつける！

　——フンッ。『猪』は鼻息を荒くして、全身から衝撃波を放った。

　これは聖なる武具ふたつと聖騎士ふたりを吹っ飛ばすはずだった。しかし、殲滅者の特権を増幅していたエリカとリリアナは持ちこたえてみせた。

　そろって渾こん身しんの一撃をたたきこむ！

　クオオオオオオオオオオォォォォォォォォンン！

　苦く悶もんの咆ほう哮こうが『猪』の大口からほとばしり、空と大気を震わせる。

　エリカの穂先が深々と抉えぐり、リリアナの刃が鋭く切り裂いた。

　単に眼球を破壊しただけではない。ふたりは神につらなる者すら殺さつ戮りくする霊れい威いを、目に突きいれた武具から『猪』の頭ず蓋がいの奥、脳に相当する部分へ注ぎこんだのだ。

　神獣といえども、致命傷になりうるダメージのはず——。

　しかし、『猪』は残った左目をぎろりと動かした。

　目の前ならぬ目の横にいる騎士二名を見すえ、憤ふん怒ぬの念をあらわにする。

　そして、この直後。激烈な咆哮を発した。

　オオ
オォォォォォォォォォンンンンンンンンンンンッ!!

　今度はもう堪こらえられなかった。

　エリカもリリアナも咆哮にともなう衝撃波で吹き飛ばされ、墜落した。

　砂浜にたたきつけられ、何度も転がる。殲滅者の特権に守られていなければ、全身がバラバラになっていたかもしれない。

「やっぱりお調子者だわ。わたしたちなんか眼中にないから、目もく論ろ見みどおり最初の一撃をきれいに受けてくれたけど——」

「あれで倒せないのだから、ふつうの神獣のレベルを超えているな！」

「たぶん、護堂が直じかに操るときに近い強さよ。きっとあの女神から力を送りこまれているにちがいないわ！」

　どうにか立ちあがりながら、エリカとリリアナはうなずき合う。

　見れば、『猪』は残された独眼に憤ふん怒ぬと憎悪をたぎらせながら、ふたりを険けわしくにらみ、高みから見おろしている。致命傷にならずとも、十分な痛打ではあったのだ。

　黒き神獣に本来の標的を忘れさせるくらいには。

「期待どおり、こちらに意識を向けてくれたな。さすがお調子者だ」

「あとはわたしたちで彼を引きつけましょう。護堂と天あまの叢むら雲くもの劍つるぎが来てくれるまでね。蝶ちようのように舞いながら——よ、リリィ」

「蜂はちのように刺せるかは、かなり期待薄だと思うが……来るぞ！」

　オオオオオオオオオオォォォォンンンンンッ！

　轟とどろく咆哮と共に、ついに『猪』が駆けだした。

　いつも巨大建築物を破壊するときと同じ激しさで、エリカおよびリリアナを粉砕すべく一直線に突っこんでくる。

　その吠ほえ声は衝撃波となって海を揺らし、地を震わせていく。

ふたりの役目は『王』のために時間を稼かせぐこと。最初に痛打を浴びせたのは、調子に乗りやすい『猪』の気性に期待したのである。彼が本来狙うべき相手・草薙護堂のことを忘れさせ、自分たちを襲わせようと。

それは上う手まくいった。だが、問題もひとつあった。

調子に乗るほど勢いも増すのが〝お調子者〟の特徴だろう。そして、『猪』には明らかにその傾向があった。

怒りと気合いでいつも以上の獰どう猛もうさを見せる、黒き神獣。

彼を蝶のように迎え撃つべく、決死の戦いに身を投じるエリカとリリアナだった。

一方、この間に太た刀ちの媛ひめ巫み女こは――。

無二の相棒・天あまの叢むら雲くもの劍つるぎを大地に突き刺していた。

「頼むよ、天叢雲……。あめつちの御霊を吸って、王様のために新しい力を！」

祈りと共に、恵那は呼びかける。

これ以上の戦闘は不可能な彼女だが、まだ神刀の管理役ならできる。砂浜の奥に引っこみ、紅と青の騎士たちが『猪』と奮戦するのを見守りつつも、このつとめを果たしていた。

美しき純白の砂浜に雄々しく屹きつ立りつする、漆しつ黒こくの鋼はがね――。

天叢雲劍は今、吸収しているのだ。

この島の水と大地に宿る霊気を。命はぐくむ大だい地ち母ぼ神しんの恵みを。

さらに、もうひとつ。

「この際だから、イギリスの王子さまがかけた権けん能のうも吸いとっちゃえ！」

　英国のカンピオーネがこの地に遺のこしたらしい大迷宮の魔力をも。

　牛頭にして大地の神であるミノスに由来する権能。これは今、天叢雲剣に求められているのと同質の神力であった。

　ならば見すごす手はないと、恵那は気を利きかせたのだ。

　仲間たちの尽じん力りよくで、天叢雲剣の準備はととのいつつあった。

　護堂は作業に集中する恵那の背中を見つめ、そして遠くで『猪』と戦うエリカとリリアナを見守りながら、かたわらに立つ媛巫女へ訊たずねた。

「じゃあ万ま里り谷や、教えてくれ。次はどうすればいい？」

「私が視た天てん地ち開かい闢びやくの法――その内容を精神感応の力で護堂さんにお伝えします。あとは、それを天叢雲の御み劔つるぎに使っていただければ」

　怜れい悧りな口調で祐理は語った。

「ただし、あくまで私の霊感で読みとれた範囲のことしかお教えできません。さまざまな不都合が生じるはずです。それを覚悟の上でお臨のぞみください」

「……不完全にしか使えないって意味か？」

「それどころか、すさまじい危険をともなう呪術となるでしょう。やはり、アテナが救世の神刀を参考に創つくりあげた術ですから……」

　人の身にはあまる呪法だと祐理は言いたいのだろう。

　だが、それでもやる必要はあった。現状のまま戦いを続ければ、おそらく最終的に自分たちは敗れる。ここは乾けん坤こん一いつ擲

てきの賭けに出るべきなのだ。

　謎なぞめいた火の女神を退しりぞかせ、全員で島から出ていくために。

　見れば、エリカとリリアナは『猪』に追われて浜辺を西に東にと駆けまわっていた。倒すためではなく、黒い神獣の注意を護堂たちから引きはなすために。

　だが、『猪』はただ大きいだけの怪獣ではない。

　すさまじいパワーに加えて、スピードと突進力もすさまじい。

　一〇〇メートルの距離があっても一瞬にして距離を詰め、地上の人間を踏みつぶそうと前肢を振りおろす。さらに衝撃波という飛び道具を広範囲にまき散らしたりもする。

　こんなバケモノを、せまい浜辺のなかに足止め――。

　土台、無理な話なのだ。エリカとリリアナの足が止まった瞬間、『猪』はあっさりと彼女たちの命を奪うだろう。

「よし、やろう。……でも、この島にいるのがみんな身内でよかったよ。さすがによそじゃできない無茶だもんなあ」

「はい。これが東京都内だったら、私もさすがにお手伝いできかねます……」

　しみじみと言えば、同じ調子のあいづちが返ってきた。

　こういう感覚、おそらくエリカや恵那とは共有できないものだ。たぶん同じことを考えたのだろう。護堂と祐理は同時に微苦笑を浮かべた。

　だが、すぐに顔を引きしめて、ふたりはあらためて向かい合った。

「じゃあ万里谷。頼む、やってくれ！」

「は、はい、護堂さんっ。で、では、いたしましょう！」

「「…………」」

　ここに来て生じた意思の齟そ齬ごに、ふたりは思わず見つめ合う。

　精神感応をかけてくれという意味の『やってくれ』。しかし、祐理は『いっしょにしましょう』的な返し。あの霊力は媛巫女の方から護堂にかけるものでは？

「ほら。斉せい天てん大たい聖せいのとき、やってくれただろ？　万里谷、あの感じで」

「あ、あのときは私、護堂さんの加護で能力がずいぶんと上がってましたから……。ふつうの状態でカンピオーネである方に力を使っても、効き目はないかと……」

「「…………」」

　今度の見つめ合いは、意思が共有できたからであった。

　いつもの儀式をしなければいけない。みんなが向こうで奮戦しているというのに。でも、今なら誰もこちらを見ていない。しかも、これはどうしても必要な手順で――。

「こ、ここでためらってたら、やられるしかないもんな……」

「は、はい……。私はいつでも大丈夫です……」

　護堂がささやけば、祐理はすこしだけ唇くちびるを上向きにする。

　ふたりの顔が自然と距離を縮めて、スムーズに合わさる。護堂からの口づけを受けて、祐理は幸せそうに表情をゆるませ、唇を開き気味にして迎えいれてくれた。

　貝かい殻がらの上下が合わさるように、ふたりの唇同士もぴったりと合わさる。

　護堂が思わず舌を差し入れてしまうと、すこしだけ躊ちゆう躇ちよしたあと祐理の舌も出てきた。

　ふたりはそのまま弦楽器の弓と弦をこすり合わせるように、舌をからませた。そして、おもむろに呪術の儀式をはじめるのであった。

　はじめに顕あらわれたのは、ゴルフボールほどの黒い球体であった。

　戦場となった砂浜がある入り江。その上空の一点に、染しみのように顕けん現げんしたのである。

　それはごく小さな暗黒星であったが、ほんの十数秒で直径数十メートルほどの球体へと膨ぼう張ちようし、すさまじい存在感を天空に表した。

『黒き滅びの星……？』

　怪け訝げんそうなささやき声は、火の女神のものだった。

　空にかかる虹のごとく、悠然と砂浜を見おろしていた女神。常に余裕ぶった物言いをしてきた彼女が、初めてとまどいを露あらわにしていた。

　一方、地上では――。

　恵那が大地に突き刺した天あまの叢むら雲くもの劍つるぎ。その刃やいばに変化が現れていた。

　ゆるく反そりの入った黒くろ金がねの刀身は蒼あお黒ぐろい焔ほのおにつつまれ、静かに燃焼をはじめたのである。この蒼き火は、まったく熱さのない世にも稀まれなる焔だった。熱気の代わりに極寒の冷気をまわりにまき散らすのだ。

「ついにはじまったんだ……！」

　相棒たる鋼はがねに生じた変化を目撃して、恵那が叫んだ。

　いつものように振りまわすことはもうできまい。目の前で燃える黒金を手にできるのは、世界にひとりしかいないはずだった。

　だが、唯ゆい一いつの使い手のもとへ向かう前に、せめて一太刀だけでも――。

「天叢雲！　おねがい、あのふたりをちょっとだけ助けてあげて！」

　黑金の意思に呼びかける。直後、燃える神刀はひとりでに動き出した。

　宙に浮かびあがったのだ。その切っ先は今まで刺していた砂浜をはなれ、遠くで戦う紅と青の騎士たちの方へと向く。

　エリカとリリアナは今も『猪』を相手に持ち堪こたえていた。

「「黒き十字の徴しるしにかけて！　我われら神の子より血を賜たまわり、聖せい痕こんを世に示さん！」」

　ランスと薙なぎ刀なたをとっさに交こう叉さささせる二騎士。

　ふたつの武器で十字の形を作ったのだ。ここから十字架型の白い光が放たれ、『猪』の真正面へ飛んでいく。

　聖なる十字の光は『猪』の頭部と同じほど巨大だった。

　ルオオオオオオオオンンンンンッ！

　光のまぶしさに苦しんで、『猪』が大きく顔をのけぞらせたとき。

　天あまの叢むら雲くもの劍つるぎがヒュンと飛来してきた。黒き神獣の顔面とすれちがいざま、ひとつだけ残されていた左の眼球を切り裂き、またべつの方向へ飛んでいく。

　クオオオォォォォォンンンンンッ！

　今度は苦痛を訴える吠ほえ声だった。『猪』は怒りと痛みにまかせて暴れはじめた。

　激しく巨体を振り、衝撃波の咆哮を放ち、地じ団だん駄だを踏んで憤怒の意思を表している。だが、両目がなくなったおかげだろう。

　騎士たちとは見当はずれの方向へ進んでいく。おかげでふたりは一息つけた。

「護堂と祐理、アテナが遺のこしたという秘術を発動させたのね……！」

「エリカ。これ以上ここにとどまるのは……かなりまずい。わたしの霊視が警告している」

　嘆たん声せいをあげるエリカに、リリアナが呼びかける。

　ふたりは即座にうなずき合った。このとき、彼女たちを救った黒き神刀は数百メートルはなれた砂浜の一角に到着していた。

　そこにいるのは当然、草薙護堂と万ま里り谷や祐理の両名だった。

　蒼黒く燃える天叢雲劍を護堂の右手がつかむ。聖なる黒金はついに使い手のもとへたどり着き、『はじまりと終わりの剣』になるときを迎えたのであった。

　護堂の手に天叢雲劍が収まった。

　その瞬間、上空に現れた巨大な暗黒星が回転をはじめる。

　さながら惑星が自転するかのように。はじめはゆっくりと一回転、二回転。徐々に回転速度は上がっていき、やがてすさまじい高速回転にいたる。

　ぎゅうん。ぎゅうん。独特のうなりが頭上の暗黒星より放たれるようになった。

　その星の真下で、護堂は高々と天叢雲劍を天にかかげる。

「王よ。黒の剱を以もつて地上と幽界に終わりとはじまりをもたらしたとき、御おん身みは真に女神の叡えい智ちを掌しよう握あくしたといえましょう……」

　護堂のそばに伴はん侶りよのごとく寄りそいながら、祐理がささやく。

　その瞳はうつろで、口調も厳げん粛しゆくだった。霊視の啓示が強すぎて、催眠トランス状態に陥おちいっているのだ。祐理が視ているイメージはそのまま精神感応によって護堂の心に伝えられ、この暗黒星を〝まわす〟力の礎いしずえとなっている。

――月と暗黒。母なる大地。地球の緑の丘。無む慈じ悲ひなる夜の女王。

――遥はるかなる星の彼方かなた。深遠なる海底の底の底。凍いてつく地底に広がる冥めい府ふの風。

――黒き鋼。燃える黒金。剣。劍。釼。吸引。吸収。圧縮。圧壊。粉砕。放出。

――星はまわる。円を描く。回転。竜巻。颶ぐ風ふう。嵐。嵐。嵐。

そう、嵐を呼ぶ剣。冷たき剣。竜の剣。夜明けの剣。破滅を呼ぶ剣。

それこそが黒くろの釼つるぎ。しかし、その滅びは新生のはじまりであり、はじまりと終わりを諸もろ共ともに内包している。ゆえに、この鋼は天地を開闢する――！

不可思議で支し離り滅めつ裂れつなイメージが、護堂のなかを無節操に駆けめぐっている。

「嵐を呼ぶものたち……。千の竜と千の蛇よ。今こそ集まり、釼と成れ！」

言霊が護堂の口から出た瞬間、すさまじい暴風が吹き荒れはじめた。

それは〝吹き飛ばす〟ための風ではなかった。〝吸いこむ〟ための風だった。護堂の頭上で回転する暗黒星がまわりの全てを吸引しはじめたのだ！

地球の重力にひかれて、物体が落下していくように。

見えざる力が暗黒星のもとへと、万物を吸引していく。海の水が、浜辺の砂が、土が、木々が、石と岩が、川の水が、島の大地が――。

暗黒星のなかへ天地万物を吸引しようとする不可視の重力。

この力は風となり、竜巻となり、重力の嵐となって、魔境の島をめちゃくちゃに吹き荒らしていく。地上にあった諸もろ々もろはこ

とごとく暗黒星の内部に呑のまれていった。

　唯ゆいーいつ、重力嵐に吸引されないのは天叢雲劍をかかげる護堂と祐理のふたりだけ。



　ふたりの周囲だけ嵐が凪ないでいて、今まで同様に立ちつづけることができた。そして、護堂は支し離り滅めつ裂れつな精神状態ながら、あることを忘れていなかった。

　敵の存在。さんざん自分と連れの少女たちを悩ませてきた、火の女神――。

　あいつも吸いよせて、暗黒星の檻おりに引きこまなくては。

　重力嵐の向こうに見える女神のシルエットへ意識を向けた。あの彼方にいる謎の女神――その気配を捉とらえ、引きよせにかかる！

『!?　なんですって――!?』

　遠方にいるからと、女神は油断していたのだろう。狼ろう狽ばいの声が天にとどろく。

　護堂は天あまの叢むら雲くもの剣つるぎと暗黒星に念じた。引きよせろ。吸いこめ。押しつぶしてしまえ！

『くっ、なんという権能！　草薙さま、ここはおいとまさせていただきますわ。我が領地をこのような形で崩壊させるとは――おそろしい御方！』

　火の女神が畏い怖ふと共にささやく声を遠くに聞いた。

　護堂と祐理のまわりではあいかわらず重力嵐が轟ごう々ごうと吹き荒れ、頭上の暗黒星へと地上の万物を運びつづけている。しかし、ここで護堂にも限界が来た。

　アテナの遺のこした天地開闢の法、よほど脳と精神に負担がかかるのか。

　電池が切れたかのように、護堂は意識を失ってしまった。

　嵐を呼び、天地にはじまりと終わりをもたらす黒の剱。いまだ封印を解かれたのみ。真に草薙護堂の武器として昇しよう華かしたわけではないのだった。

一方、いち早く危険を察知していた少女たちは——。

重力嵐がはじまった直後、リリアナが飛翔術を使っていた。

銀髪の女騎士はエリカをともなって飛び立ち、直後になんとか恵那も拾って、魔境の島から迅じん速そくに離脱していった。

嵐の中心にいるであろう草薙護堂と万ま里り谷や祐理は、その姿すら確認できなかった。

リリアナは「くっ！」とうめいたが、即座に救出をあきらめる。青き光につつまれながらエリカ・恵那と共に、コタキナバル市をめざして飛翔していった。

そして、重力嵐はその後も順調に猛威を振るう。

荒れ狂っていた時間は数十分ほどだろうか。この間に女神と神獣が住すみ処かとしていた魔境の島はきれいに吹き飛び、海上から消え去った。

草薙護堂とアテナの秘術、天叢雲劍が起こした嵐は島をひとつ消滅させたのだ。

尚、これまで島があった海域には、わずかな岩がん礁しようとエメラルドブルーの海だけが残った。そして、張本人である護堂と補佐役だった祐理の姿はどこにもなかった。

また、重力嵐がようやく収まったのと同時刻。

フランスはブルターニュ地方のとある森。その奥深くにある湖みずうみのほとりで、銀髪の少女が空を見あげていた。闇やみ色いろの瞳で冬の星座を眺めつつ、じっくり耳をそばだてる。

なぜかはわからないのだが。

遠く海を隔へだてた場所で起きた『嵐』の気配、奇妙にも感じ取れたのだ。

「ふっ。いずれまみえる我が逆ぎやく縁えん……。その運命さだめは嵐を呼ぶ、か」

　この言葉を美酒のごとく舌先に乗せながら。

　いずれ起こるであろう戦いの予感、彼女はじっくりと愉たのしんでいた。

第６章　流されてふたり……？

１

　新年明けて、一月二日の午後四時頃。

　草くさ薙なぎ護ご堂どうの前には、エメラルドブルーの南洋が大きく広がっていた。

　そして、白い砂浜の片隅にある木陰で唯ゆい一いつの連れ・万ま里り谷や祐ゆ理りと向き合っている。

　ふたりとも水着姿だった。護堂はその上にパーカ、祐理はウインドブレーカーという格好である。傍はた目めには、海水浴中の東洋人カップルに見えるだろう。

　しかし、そうではない。ふたりが『黒の剣つるぎ』を鍛きたえ、凶悪な重力嵐で魔境の島を消滅させてから、まだ数時間しか経たっていなかった。

　あのあと。ふたりは気づけば、この浜辺の波打ち際ぎわに倒れていたのだ。

　やたらと疲れ、呪じゅ力りょくをだいぶ消しよう耗もうしていたこと以外は、ふたりとも体に異状はなく、どうにか無事といえる状況をよろこび合った（護堂が元気なのは、儀式のときに祐理が治療の術をついでにかけてくれたおかげもあった）。

　しかし、何ど処ことも知れぬ海辺にいたのも事実。

　ふたりはあわてて、この場所について調べにかかったのだが。

「きちんと人が住んでるマレーシア領ってのは、いい報しらせだよな。空港がないどころか、船便も三日に一本しかない離島だってのはあれだけど……」

　護堂はしみじみとつぶやいた。

　遠くにサーフィンを楽しむ白人男性がひとりだけ見える。ほかに人影はない。気軽に海水浴を楽しみに来る観光地ではないのだ。何しろアクセスが悪い。

　経験豊富なサーファーやダイバーが穴場として知っている程度だという。

　ここは南シナ海に浮かぶ小さな離島。人口はきっと一〇〇〇人に届かないだろう。

「マレーシアでしたら、両替しておいたお金も使えますしね」

　祐理がうなずく。ふたりは着きの身み着きのままで流されてきたのだ。

　しかし、不幸中の幸いといおうか。祐理が海ではおっていたウインドブレーカーは、山歩きしているときも風よけに使っていたもの。ポケットに小銭入れがあった。

　硬貨だけでなく紙幣も、さらに何かと重ちよう宝ほうしそうな米ドルと日本円まで入っていた。

「ただ、あまりたくさんはないので、無駄遣づかいはできません……」

「ボルネオにもどるなら、その分の旅費も残しておかなきゃいけないもんなあ」

　三日に一本の定期便。今日の午前中に出たばかりだという。

　次の便が来るのは、つまり三日後。すくない現金をやりくりして暮らす必要があった。

　関係者に連絡できればよかったのだが、ふたりの携帯はここにない。つまり電話帳がない状態なので、誰の番号もわからなかった。

「すいません、私が実家や馨かおるさんの番号を覚えてさえいれば……」

「俺だって役に立つ連絡先を覚えてないんだ。気にするなよ。まあ、なんとかなるさ」

　しゅんとする祐理を、護堂はなぐさめた。

　機械音おん痴ちの彼女、家の電話も避けがちだったという。その手の数字に自然とうとくなったのだろう。護堂は自宅の番号なら覚えていたが、今の状況を母に伝えるわけにもいかない。

「エリカたちなら、俺たちの居場所を探り出してくれるかもしれないし」

　黒の剣を振るっていたときの記憶はおぼろげだ。

　しかし、飛翔術の青い光が飛び立つところはなんとか覚えていた。リリアナだけでなく、エリカと恵え那なもいっしょだった。三人とも無事なはずなのだ。

「けど、まさか島ごと吹き飛ばす威力になるとはな……」

「申し訳ありません。やっぱり女神でもない私の導みちびきでは、鞘さやから抜くだけで精一杯……とても制御まではできかねるようです……」

　数時間前の惨状を思い出して、ふたりはそろってうなだれた。

　また、護堂はあのとき火の女神に攻撃を仕掛けたが、こちらにも逃げられている。やはり武器として有効活用するのは、現状ではむずかしいようだ。

「ま、とにかくさ。しばらく万里谷のお世話になるけど、よろしく頼むよ」

　護堂は頭を下げた。現金を持たぬ身としては、当然の行動である。

　ふたりだけでの暮らしがいつまでになるかはわからない。だが、その間のスポンサーは祐理なのだ。もちろん、かかった費用分、あとで折せつ半ぱんして返すつもりではいたが。

　すると、祐理はきりっと表情を引きしめ、凛りん然ぜんと言った。

「とんでもありません。こういう非常事態になった以上、今ここにあるお金は私たちふたりのものです。お世話になるなんて、おっしゃらないでください」

「いや、こういうのはきっちりしといた方が」

「逆に私の方から申し上げます。護堂さん、このとおりのふつつか者ですが、しばらくごいっしょにいてくださるよう、お願いいたします」

　砂の上にわざわざ正座までして、今度は祐理が頭を下げてくれる。

　媛ひめ巫み女この凛りゝりしさ、まじめさに護堂は恐縮した。それから頭を上げた彼女と目が合うと、ふたりして同時にくすっと吹き出してしまった。

　自分たちのかしこまった行動が、我われながら滑こつ稽けいに思えたのだ。

　その後、護堂と祐理は海岸近くにあった小さな雑貨屋で買い物をした。

　Ｔシャツなどの衣類。とりあえず必要そうな日用品。遅い昼食代わりのやたらと甘い菓子パン。そしてミネラルウォーター。

　ある意味で、プレイ開始まもないＲＰＧのような状況である。

　装備品がととのったので、次は今夜の宿を探す。こちらは選択肢がひとつしかなかった。

　観光地でもない離島。きちんとしたホテルなどなく、海辺に建つ小さなコテージが唯ゆい一いつの宿泊施設なのだという。

　多少の問題はあったがここを宿と決め、ふたりは食事に出かけた。

　こちらも選択肢がすくなかった。コテージの近くで外食できる店は一軒、定食屋風の食堂のみというシンプルさ。迷うことなく、そこに向かった。

　祐理はエスニック風味の炒飯チヤーハン、ナシ・ゴレン。

　護堂の方はサワラらしき白身魚を頭ごと煮こんだカレーを選択。オクラやナスも入っていて、魚のダシがよく出ていた。

　特別おいしくはなかったが、口に合わないという不幸もない。

　たがいの料理を味見し合ったりしながら、ふたりはつつがなく食事を終えた。しかし、会計をしようと祐理が財布を出したとき、ちょっとした問題が起きた。

　お金の勘かん定じようをしながら、店員のおばさんが英語で朗ほがらかに言ったのだ。

「夫婦ふたりでわざわざこんな島に来るなんて、あんたたち変わってんのねェ！」

　食事するふたりを見ていて、勝手にそう思ったらしい。

　たしかに男女のカップルが好んで観光しにくる島とは思えなかったが。この問題発言に護堂は絶句し、祐理はうつむいてごにょごにょと答えた。

「い、いえ。私たちはそういう関係ではなくてですね、あくまで、その、学生同士ですし、健全……と言い切れる関係かはあれなのですが……とにかく……」

　ただし、日本語なうえに尻しりすぼみになっていく。

　いきなり誤解されて、混乱したようだ。その後ふたりは店を出て、仮の宿であるコテージに帰っていった。道中、護堂も祐理もずっと無言だった。

　だが仕方ない。今の誤解発言で、宿についての問題がまた浮き彫りになったからだ。

　海辺に建つ、こぢんまりとしたコテージ。

一応シャワーもついている。宿泊料金の安さを考えると、上等すぎるくらいにはきれいだった。観光地でないため、汚していく利用者がすくないおかげだろうか。

そして、このコテージの問題点——。

それはワンルーム形式で仕切りなどもなく、護堂と祐理はひとつ屋根の下で宿泊しなければいけないという一点だった。

コテージは何棟かあったので、いっそひとり一棟ずつ借りる手はある。

しかし、そうしようかと検討する護堂を、祐理が「それは浪ろう費ひというものです」と賢けん妻さいのごとくいさめたのだ。結局、いっしょに泊まることにした。

開放的な造りのコテージは風通しもよく、南国情じよう緒ちよにあふれている。

とはいえ、その気になれば不法侵入もたやすい建物。こんなところに女子をひとりで泊まらせるのも不安だったからだ。

2

コテージに帰ると、ふたりは交代でシャワーを浴びた。

シャワーのお湯がすぐ水になるという問題はあったが、南国の離島である。暑さのおかげで、このトラブルも耐えがたく感じずにすんだ。

また、祐ゆ理りも護ご堂どうも無人島で二夜をすごしたあとである。

その間、お湯で濡らしたタオルで体を拭ふいたり、水場で水浴びをしたりはしていたが、風ふ呂ろどころかシャワーとも縁がなかった。なので、制限事項の多い入浴でも十分以上に満足することができた。

　むしろ、問題はここからであった。

　静かな夜。開放的な島のコテージでふたりきり。はずまない会話。微妙な空気。

「て、テレビとかあれば、よかったのになっ」

「そ、そうですねっ」

　このように会話は単発で終わってしまう。あとが続かない。

　代わりに、護堂はチラッと祐理を見てしまう。その視線を受けて祐理がうつむく。

　しかし、見られているのが不快という雰ふん囲い気きはない。祐理の心など読めるはずないのだが、不思議と護堂はそう確信できた。

　さらに、こんな妄もう想そうがむくむくと頭のなかでわき起こる――。

　たとえば、護堂が彼女に手をのばしたとする。すると、祐理はそれを当たり前のように受けいれてくれるのではないか、などと……。

　ここで護堂はハッとした。自分は何を考えているのだ!?

　気づいて、ぶんぶんと頭を振る。その気配で祐理が顔を上げた。

「どうかされたのですか、護堂さん？　むずかしいお顔をされて？」

「い、いや。なんでもないんだ、本当に……」

　この返事をいぶかしんだのだろう。祐理がこちらに近づいてくる。すぐそばから護堂の顔をのぞき込もうとする。顔がひどく近い。

　護堂はドキリとした。そして、祐理の方もハッとして、ふたたびうつむいた。

　また、ふたりそろって無言の時間。

　しかし、さっきよりも距離が近い。体同士の距離もだが、たぶん心と心の距離も――。

　護堂も祐理もたがいを必要以上に意識していた。しかし、仕方ないのかもしれない。なんといっても、今まで幾度か只ただならぬ行為におよんできた両名なのである。

　また護堂としては、祐理のＴシャツにショートパンツという格好も問題だった。

　私服はスカートが多いお嬢さまのラフな服装も新鮮だし、ひとつの部屋で向き合っているのもまずい。薄着ゆえによくわかる祐理のスタイルのよさ、むきだしの手足、まぶしい素肌がどうしても目に入ってくる……。

　今までも同じ空間で夜をすごしたことはあった。

　だが、これまでとまったく異なるシチュエーション。護堂は胸が勝手にどきどきしだすのを感じた。やましい心などない。よからぬ行為をするつもりなど、断じてないのに！

「き、今日はもう寝よう！　ま、万ま里り谷やも疲れただろ!?」

「は、はいっ。寝る子は育つといいますしね！」

　脈みやく絡らくのない返答が媛ひめ巫み女この動揺を物語っていたが、それを指摘する余裕はない。

　護堂はさっそく明かりを消し、ふたつあるベッドの片方にもぐり込んだ。もう片方のベッドに祐理も横たわる。その直後だった。

「きゃあ！」

「どうした、万里谷!?」

　祐理が悲鳴をあげたので、護堂はとっさに跳ね起きた。

「な、何か冷たいものがベッドのなかに!?」

　護堂は明かりをつけ、祐理とふたりで彼女の寝床をのぞき込み――

「って、トカゲか」

「まあ……いつのまに」

　見れば、ベッドの上を小さなトカゲがもぞもぞ這はいまわっていた。人間たちの視線にも動じず、逃げる気配も見せない。鈍にぶいのか人に慣れているのか、どちらだろう？

　毒のあるサソリやヒルでなくてよかった——。

　拍ひよう子し抜ぬけする護堂の横で、闖ちん入にゆう者しやの正体を知った祐理はくすりと微笑ほほえんだ。気を取りなおしたらしい。そしてトカゲを両手でつつみこむと、自みずから窓へ運び、外へ放してしまう。

「万里谷は爬は虫ちゆう類るいとか大丈夫な人だったんだな……」

　お嬢さまらしからぬキャッチ＆リリースのなめらかさに護堂は感心した。

　物おじしない幼なじみの明あ日す香かなどは、逆に虫・蜘く蛛も・爬虫類・両生類などをことごとく苦手とし、大声をあげて逃げまわったりする。

　一方、当の祐理はといえば、なぜ護堂が感心するのか、わからない体ていだった。

「あ、はい。とても小さかったですし、私の力でも問題なく運べました」

　ややずれた回答をする。好奇心を刺激されて、護堂は訊たずねてみた。

「何か苦手な生き物とか、万里谷にはあったりするのか？　見るだけでイヤとか、さわるのなんか絶対にダメ、みたいな。昆虫とか蜘蛛とかカエルとか蛾がとか」

「急には思いあたりませんね……。媛巫女の修行であちこちの御山や神社をまわっていると、そのあたりの生き物とはよく接する機会がありましたし」

「そうなのか？」

「はい。子供の頃から恵え那なさんといっしょだったせいか、それはもうかなり頻ひん繁ぱんに」

　なるほど。護堂は納得した。

　聖域とされるような霊山はもちろん、多くの神社に鎮ちん守じゅの森がある。そんなところへ自然児と共に出入りしていたのなら、当然の帰結かもしれない。

「あ。ただゴ……のつく黒い虫だけはべつですっ。あれだけは見たくもありませんっ」

「まあ、あいつを好きな地球人類はかなり少数派だろうしなあ」

　暑いうえに湿度も高い島の海辺。たぶん、このコテージにもひそんでいる。

　が、護堂はわざわざ指摘したりせず、代わりに祐理の意外な一面を微笑ましく思った。こういう発見ができたのは、やはり長くいっしょにいたからか。

　そして気づいた。今のどたばたで、さっきまでの気まずさがきれいに消えていた。

　祐理も同じ発見をしたようだ。護堂の顔を見て、はにかむように笑う。ふたりの間の空気がいつもと変わらぬ自然なものになった。

　護堂が自分のベッドであぐらをかくと、もう片方のベッドに祐理も腰をおろす。

　あらためて向き合う格好になったが気まずくはならない。明かりは消さず、ふたりはなんとなくおしゃべりをはじめた。さっきの昔話が呼び水になったのか、子供の頃の四よ方も山やま話ばなしや中学時代の話題が中心になる。

　たまに会話が途切れることもあった。

　テレビもないコテージ。当然、無音となる。しかし、それも気にならない。

　そういうとき、ふたりは黙って南国の海辺に打ちよせる波の音に聞き入って、なんともいえない居心地のよさを噛かみしめるので

あった。

　翌日、護堂はひとりで朝から出かけていった。

　数は多くないが漁船やボートの係けい留りゅうされた桟さん橋ばし、海岸などを歩きまわる。

　島の漁師など船のオーナーに直接当たって、自分たちをボルネオ島に送ってもらえないかと交渉してみるためだった。しかし、いい返事は得られなかった。

「まあ、送ってくれるって船があっても、信用できる相手かはわからないしな……」

　護堂はぶつぶつとつぶやいた。

　やはり、定期便が来るのを待つしかなさそうだ。おとなしくコテージへ帰ることにする。その道すがら、ふと気づいた。

　右腕に宿る天あまの叢むら雲くもの劍つるぎ。昨日から使用不能だった神刀がめざめた。

　アテナの秘術を託す依より代しろとなって、重力嵐を巻きおこす。あの荒技がかなりの負担になったのだろう。呼べども応こたえない休眠状態に陥おちいっていたのだ。

「……もういけるのか？」

　訊たずねたら、『うむ』とだけ返答された。続報はなし。応えるのが億おっ劫くうらしい。

　消耗から回復しきってないのだろう。この不作法、護堂は見逃すことにした。自分たちがここまで無事に流れつけた理由、まちがいなく天叢雲劍の加護だからだ。

　横おう柄へいだし、戦闘以外の全てを億劫がる問題児だが、面倒見はいい刀なのだ。

　その後コテージの前まで帰ってくると、昼近くになっていた。チキンスープのいい匂においがする。自分たちの棟に入ると、ちょう

ど祐理が食事の支度をしていた。

「お帰りなさい。船の方はどうでしたか？」

「ダメだった。やっぱり、定期便を待つしかないみたいだな」

　報告すると、祐理は「まあ」と言いながら持っていた土ど鍋なべをテーブルに置いた。

　このコテージ、長期滞在するバックパッカーやダイバーなどを当てこんだ宿なので、せまいながらも台所と調理用具がそなえつけてあったのだ。

　だったら自じ炊すいした方が倹けん約やくになる。

　護堂が船を探している間、祐理には食材の買い出しと料理を担当してもらった。

　ちょうどいいときに帰ってきたようで、さっそく昼食となった。

　祐理が土鍋のふたを取ると、チキンスープのいい匂いが立ちのぼる。だが、鍋の中身はごはんだった。水ではなくスープで米を炊いたのだと、祐理は教えてくれた。細かく刻んだチキンのハムや椎しい茸たけなども入っている。

「昨日のお店で見かけたお料理を、見よう見まねで作ってみました」

　まず一口。中華風の味つけで文句なくおいしい。

　思いがけず祐理の料理を味わうことができて、護堂はちょっと感動した。ここ何日かインスタントな食事が続いたので、ひときわおいしく思える。

「こういう飯がきちんと食えるのって、幸せでいいことだよなあ」

　魔境の無人島生活。女神との戦い。さらには自分たちで起こした重力嵐。揉めごと続きだった数日間を振りかえりつつ、護堂は素直な感想を口にした。

「ふふ。こんなものでよろしければ、毎日でも作って差しあげますよ」

「本当か？　それはいいな。楽しみだよ」

「「…………」」

　何の気もなしに会話していたのだが、ふたりは急に黙りこんだ。

　今のやりとり、もうすぐ結婚するカップルか新婚夫婦のような……。そう気づいてしまったからだ。現在のデリケートな状況下では、ちょっと不適切ではないか？

　しかし、昨日から似たような危機を何度も乗り越えている。

　護堂がちらりと目くばせする。祐理もかすかなうなずきで応える。今の会話、なかったことにしようと暗黙の了解が成立した。以心伝心。

　祐理はすぐにこほんとせき払いして、新たに発言する。

「ご、護堂さん。ご希望があれば、何でもお作りしますよっ」

「ほ、本当か？　それはうれしいな」

「ふふっ。好き嫌いがあれば教えてください。参考にします。やっぱり毎日いっしょなんですから、お口に合わないものを作るわけにもいきませんし」

「そんなの考えなくていいよ。たぶん万里谷の作るものなら、何でも満足すると思うし」

「そういうことをおっしゃると、すぐ手抜きするかもしれませんよ？」

「手抜きしてたって、万里谷のなら十分おいしんじゃないか？
どっかの店でごちそう食べるより、適当でも万里谷に作ってもらう方が満足できそうな気が――」

　護堂が思いつくまま語っていると、祐理は照れつつもうれしそうにしていた。

　そして、またもふたりは気づく。

　今のやりとり、やっぱり同どう棲せいをはじめた直後のカップル

のような。

　そもそも共同生活なら、公平に食事当番は交代制とすべきだろう。なのに祐理は当たり前のように『毎日作る』といい、護堂もそれをふつうに受けとめて——。

「「…………」」

　そのようなことをしつつ昼食は終わり、かたづけもすませた。

　ここからは特にやることもない。船の定期便が来る日まで、本当に待つしかないのだ。

　ないない尽くしで暇ひまを確認した護堂と祐理。結局、昨日の浜辺に行って軽く泳いだり、島を散歩したりして漫まん然ぜんとすごした。

　ただ時間を浪費するだけの、まったりとした南国の午後だった。

「こんな生活をしばらく続けたら、日本で毎朝高校へ行くのがイヤになるかもな……」

「わ、わかります。私、日本にいたら今日も七なな雄おのお社やしろで巫み女このお勤めをしていたはずですのに、こんなことをしていてよいのでしょうか……？」

　などと言いながら、だらっとした時の流れにひたるふたりだった。

　ともあれ年が明けて三日目、一月三日の午後。

　みごとな夕焼けが海と砂浜をオレンジ色に染めあげる頃、ふたりはコテージに帰ってきた。

　さっそく祐理が夕食作りをはじめた。

　手伝おうかと護堂は言ったのだが、「お台所もせまいですし」と断られる。結果、甲か斐い甲が斐いしくはたらくお嬢さまの背中をただ見守ることになった。

　連ればかりがいそがしい状況である。だが、不思議なほど心苦しさはない。

　島時間をまったり満まん喫きつしているせいか。それとも相手のひかえめな性格のおかげか？

　むしろ、祐理とこういう時間を共有できていることが逆にうれしい。

　祐理の方もずっと機嫌がよく、鼻歌を口ずさみつつ手て際ぎわよく炒飯チヤーハンを作ってくれた。

　ありあわせのもので適当にでっちあげた夕食。しかし十分に美お味いしく、十分以上に満ち足りることができる。例によって、ちらりと『……みたいだなあ』と思ったりもしたが。

「まあ、べつにいいか」

「ふふ。護堂さん、なんだか楽しそうですね」

「そうか？」

「ええ、そうですよ」

　実にたわいないやりとり。ふたりだけの時間。だが、それがよかった。こうして南国の夜をまったりのんきにすごしていたとき――。

　護堂と祐理はその音を聞いた。

　ぎぃ……ぎぃ……。金属の軋きしむ音が外から聞こえてくる。程ほどなくコテージの入り口に人影が現れた。ぎぃぎぃと不審な金属音を発しつつ歩いてきた人物は、常夏の島だというのにぶあつい長衣をまとっていた。

「ふふふふ。ここにいらっしゃいましたのね、神殺しの君よ」

　長衣の色は濃紺。フードまでついていて、これを深くかぶっている。

　おかげで相手の顔は見えないのだが、声ですぐにわかった。昨日、魔境の島で対決した火の女神にまちがいなかった。

3

　女神の分身は一応、人型であるらしい。

　だが、だぼっとした長衣の袖そでは異様に長く、手足も見えない。肌にあたる部分はどこも露出していなかった。南国情じよう緒ちよあふれるコテージには、不似合いな衣装だ。

　護ご堂どうは気づいた。神と対たい峙じしたときの昴たかぶりがない。

　つまり、この長衣をまとう人型も、やはり女神の本体ではないのだ。

「いいかげん、生なま身みのあんたと対面してみたいものだけどな」

「であれば、此こ度たびこそ我わが招待をお受けあそばしませ、草くさ薙なぎさま」

　祐ゆ理りをうしろに庇かばいつつ護堂が言うと、女神の分身らしき人型は答えた。

「あなたさまの権けん能のうによって、我が版はん図とは消え去りましたが……。以前に寝しん殿でんとしておりました『島』がございます。そちらへご案内いたしましょう」

　また島か。護堂は眉まゆをひそめた。この女神、島にこだわりでもあるのだろうか？

「ふふ。幾十年でもおとどまりいただけるよう、あちらに屋敷でも造りましょうか」

「そんなのは要いらないよ。また島ごと吹き飛ばしたっていいんだぞ？」

　すさまじい破壊力を示した黒の剣つるぎ。

　あそこまで制御できないのなら、武器としての有用性は低い。実際、火の女神を傷つけることもかなわなかった。だが、脅おどしに

使うことはできる。

　あの威力を目撃した女神が相手。プレッシャーをかけられるのでは――？

　しかし、女神のくすくす笑いが護堂の期待を打ち砕いた。

「あの剣、たしかに空恐ろしい威力でしたわ。ですが、あれは女の叡えい智ちを以もつて御ぎよすべき、竜の骸むくろを鍛きたえし刃やいば……。あなたさまにその心得はないものとお見受けいたします」

　黄金の光がふたつ、フードの奥で輝いた。まるで魔女の双そう眸ぼうがあやしく光るように。

「次にあの剣とまみえたときは、火の女神たる魔女の叡智を注ぎこんでみましょうか。わたくしの言うことをよく聞いてくれそうに思えますわ」

　まさか『女神が振るうべき武具』という要よう諦ていを見抜かれているとは。

　護堂は眉まゆをひそめた。火の女神のハッタリかもしれない。だが、そうでなかった場合、一気に最悪の結末だ。

「さ。このように無ぶ粋すいな話はやめにいたしましょう。わたくしどもの褥しとねとなるべき島に、もうまもなく到着するのですから」

「何言ってんだよ。俺はあんたの招待なんか受けるつもりは――」

　うんざりして答える護堂のＴシャツ。その裾すそをうしろから引っぱられた。こんなことをするのは祐理しかいない。背後からささやく媛ひめ巫み女この声も聞いた。

「……護堂さん、外をご覧くださいっ」

　なに？　言われて、ちらりと窓を見やり――仰ぎよう天てんした。

　窓の外には夜の大海原が広がっている。そして気づいた。足もとが揺れている。まるで波に揺らされる不安定な船底のように……。

護堂は祐理と顔を見合わせ、ふたりであわてて窓へ駆け寄った。

——海の上だった。さっきまで祐理とふたりだけで生活する場所だったコテージは、今、真っ暗な大おお海うな原ばらの上を小舟のごとくただよっている！

見あげれば、満天の夜空が輝いていた。

探せばきっと、古来より船乗りを導みちびいてきた北極星も見つけられるだろう。

だが、もちろんそんな真ま似ねはせず、護堂は火の女神——その分身をにらみつけた。

「草薙さまのご意思にかなう形でご招待するのはむずかしそうなので……。不意打ちをさせていただきましたわ。ふふ、我が『島』までの船旅、ゆるりとおくつろぎくださいませ」

「く、くつろげるわけないだろ……」

船ですらない小さなコテージで、南シナ海を航海する羽目になるとは。

いつかアテナと地ち中ちゅう海かいを渡ったときよりもひどい。護堂は舌打ちした。女神の登場で注意を奪われている間にやられたのだろう。コテージを海まで運び、舟の代わりにしてしまう魔術をかけられたのだ。

ことごとく先手を打たれてしまう。あいかわらずの難敵ぶりだった。

舟となったコテージはある方角をめざして航行中だ。

意外と速度が出ているらしく、遥はるか後方にはあの離島の明かりが小さく見える。すでにだいぶはなれているようだ。護堂はため息をついて、どかっとイスに腰をおろした。

こうなったら、おとなしく連行されるしかない。

心配そうな祐理に目くばせする。媛巫女はすぐに隣へ来てくれた。

「わかったよ。もう一度、あんたの島とやらにいってやる。でも、この女の子には妙な真ま似ねするなよ。したら……俺はもう一度、あの黒い剣を使う」

「ふふふ。それはかなわぬと先ほども――」

「言ってたけど、どこまで本当かはわからないしな」

　火の女神の方が上う手まく剱を使えるというのは、ありそうな話だった。

　しかし、あれはまつろわぬアテナが草薙護堂のために遺のこした呪法。女神だからといって、そのコントロールを全て奪えるものだろうか。

　隣で祐理がうなずきかけてくれた。今の疑念を裏づける何かが視みえたようだ。

　おかげで、自信を持って護堂は女神をにらむことができた。使用権を半分奪われたとしても、こちらも残った半分で悪あがきしてやると。

「まあ、おそろしい。でも、よろしいですわ。あなたさまのごとき勇士に下女がかしずくのは世の習い。その程度のことはわたくしも承知していましてよ？」

「下女とか、かしずくとか言うなよ。この娘は……万ま里り谷やは俺の仲間だ」

　同じ空間にいながら、媛巫女を神殺しの持ち物としか認識していない。

　神々特有の傲ごう慢まんさに眉まゆをひそめながら、護堂は言った。

「俺の行くところにはどこだって連れていくし、ずっといっしょだ。この娘に何かあったら、絶対にあんたを八つ裂きにしてやる。この世の果てまで追いかけてでもな」

　めったに口にしない恫どう喝かつの文句。しかし、護堂は本気だった。

　さんざん危ない場所に連れまわし、迷惑をかけ続けている身で『必ず守る』などと世よ迷まい言ごとは口が裂けても言えない。だが、代わりに復ふく讐しゆうを誓うことはできる。

　祐理に何かあったら、己おのれの全てを懸かけてでも報復を果たす。

　それが自分なりのけじめだと護堂は思い、きっぱりと断言した。我われながら、ひどいことを言う男だなと内心であきれつつではあったが——。

「護堂さん……」

　祐理が感動の視線めいたものを向けてきたので、肩身が尚なお更さらせまくなった。

　このお嬢さま、そろそろ草薙護堂のような不ふ逞ていの輩やからを見捨ててもいいのでは？　我が事ながら、心から思う護堂だった。一方、この恫喝に女神は妙な反応を見せた。

「つまり草薙さま……その娘はあなたの伴はん侶りよであると？」

「は、伴侶!?」

「今のおっしゃりよう、それ以外の何に当たるというのですか」

　冷たく平板な物言いだった。今までの過か剰じような姫君らしさがうすれている。

　しかし、護堂は動転してしまい、それどころではなかった。

「え、いや。だから仲間だって。ずっといっしょで、どこにでも連れてくし……あれ？」

　たしかに伴侶と言いかえても問題ない？

　愕がく然ぜんとする護堂の前で、女神の分身は『ぎ……っ』と体を軋きしませ、右腕をあげた。

　だぼっとした長衣の筒つつ袖そでから手が出てきた。それは黄金で造られた人形の手だった。その人差し指がまっすぐ祐理を指さす！

「我が愛の成じよう就じゆをさまたげる下人には……相応の罰ばつがあって然しかるべきもの」

　このとき女神の指先からは、恐るべき何かが放射される寸前だったはずだ。

　護堂はそれが何か確認もしないまま、とっさに反応した。

「天あまの叢むら雲くも！」

　今朝、一応はめざめていた相棒に呼びかける。

　護堂の右腕から漆しつ黒こくの神刀はすぐに出てきて、女神の分身に飛んでいく。

　黄金の指先から何か出る前に、長衣をまとう胴体に突き刺さる。

　がしゃんと音を立てて、分身はコテージの床に倒れた。

　長衣がはだけ、中身の人形が露あらわになる。黄金製で女性の形をかたどっていた。これが今まで生きた人間のように動き、女神の代わりにしゃべっていたのだ。

「大丈夫か、万里谷!?」

「はいっ。護堂さんのおかげで何も——きゃあっ」

　祐理が短く悲鳴をあげた。いきなりコテージの床に衝撃が加わったのだ。

　だが、それ以後は微動だにしない。今まで南シナ海の波間をただよい、ゆらゆらと船板のように頼りなく揺れていたくせに。

　外を見て、護堂は驚いた。コテージはいつのまにか浜辺に流れついていたのだ。

『我が夢ゆめ殿どのたる聖域へようこそ、草薙さま』

　夜空に火の女神の冷たい声がひびきわたる。

『この島の奥までお進みあそばしませ。わたくしは歓かん待たいの用意をして、あなたさまをお待ち申し上げますわ。ただし、我が愛を受ける代だい償しようとして、その娘——草薙さまの伴侶たる娘

を引き渡してほしゅうございます！　新たな愛を得るため、古き妻を捨てる。それが男女の間での作法というもの！』

「な、なんてことを言いやがるんだ、あの神様は……」

　バカげた交換条件を出されて、護堂はあきれはてた。

　真冬の犬いぬ吠ぼう埼さきからはじまった今回の事件、予想外の展開で佳か境きようを迎えつつあった。

4

　今度こそ本当に、どことも知れぬ無人の孤島だった。

　一応はまだ南シナ海のどこかだと思われる。しかし、どこの国の領海かは判然としない。まだマレーシアか、あるいはフィリピンやインドネシアあたりなのか。

　精神感応の霊力で、祐ゆ理りが島の様子を探ってくれた。

　魔境の島ほど大きくないという。それこそ東京都でいえば、代よ々よ木ぎ公園などと同じくらいの面積ではないかと。

　緑もすくなく、背の低い灌かん木ぼくがまばらに生えている程度で岩場が目立つとか。

　そして、島の中央部には神の霊気がすさまじい濃さで横おう溢いつしているらしい。

「感応の触手をのばしても、はじかれてしまいます。まちがいなく女神はそちらに……」

「島のなかに水場もないなら、長くいられる場所じゃないな」

　祐理の報告を聞いて、護ご堂どうはつぶやいた。

　見あげれば、晴れわたった南海の夜空である。熱帯のこんな小島でスコールにでも降られたら、たまったものではない。すみやかに逃げ出すべきだろう。

　だが、それを邪じや魔まするはずの女神がすぐ近くにいる。

　神がいなければ、祐理の精神感応力や呪術で何か工夫できるかもしれないが——。

　護堂はすこしの間だけ考え、すぐに決断した。

「万ま里り谷や。俺はあの女神さまと決着をつけにいってくる」

「え？　今からですか!?」

「ああ。早い方がいいと思う。ここでもたついても、たぶんいいことはない」

　真水の確保すらむずかしい場所。体力があるうちに勝負を仕掛けるべきだった。

　すると、祐理は草くさ薙なぎ護堂の身を案じる顔でこう言った。

「護堂さん。女神がおっしゃったように、私をひきわたすという選択肢しも……」

「ないよ。そんなバカげたこと、二度と言うなよ」

　最後まで言わせないよう、あえて護堂はぴしゃりとさえぎった。

　すると祐理はうれしそうに微笑ほほえんで、「はい」と即答してくれた。そして、すぐに顔をひきしめ、真剣な声こわ音ねで言った。

「でしたら、私もお供させてください。護堂さんといっしょにあちらへ参り、女神の御名と来歴を必ず視みてみせます」

「けど、今までも視えなかったんだろう？」

　訊きいてから気づいた。いつもひかえめな媛ひめ巫み女この『必ず』という宣言。まさか！

「まさか万里谷、あれをやるつもりか!?」

「はい。以前、斉せい天てん大たい聖せいさまの来歴を視みたときの法。幽かく世りよより神々の知識を引き出し、この目で視る……。あの術を使えば、必ず女神の真ま名なも見えるはずです」

「バカ言うな。あれで前は死にかけたじゃないか！」

「でも、護堂さんが助けてくださいました」

　冷静に祐理に返されて、護堂は言葉に詰まった。

　ウルスラグナ第六の化身『少年』。英雄・救世主としての力。草薙護堂のために命を懸かけた者を癒いやし、加護を授けることができる。だが、助けられるからといって、危険を冒おかさせたいとは思わない。護堂はさらに制止の言葉を考えたのだが。

　媛巫女は不意に、ふっと表情を和やわらげた。

「私、どこまでも護堂さんについていきたいですし、ずっとごいっしょしたいです。でも、それは死の危険といつも隣り合わせだという意味でもあります」

　いつのまにか、祐理の口もとにはやわらかな微笑が浮かんでいた。

「恵え那なさん、エリカさん、リリアナさん……ほかの方々はそのことを承知して、護堂さんのために命がけで戦っています。ただ私は弱くて、そういうときは無力で……。でも、護堂さんに力のかぎり戦って、勝っていただきたい。その気持ちは同じなんです」

　切々と訴えられて、護堂はうなだれた。

　このけなげな覚悟を否定する資格、ろくでなしの自分にはない気がしたのだ。

「私、あなたの力になりたいと思います。そのためにできることをさせてください」

　そう。自分がいなければ、彼女はこんなことを言わなくていいはずなのだから。

　ため息をつく。しばらく迷ったあげく、こうとしか答えられなかった。

「……俺みたいなのがバカやるのにつきあわせて、本当に悪いなあ」

「いいんです。護堂さんが仕方のない人だって、ずっと前から承知していますから」

　あやまる以外の言葉を持たない自分が本当に情けなく。

　そして、明るく微笑みながら献身してくれる祐理が本当に愛いとおしく。

　せめて『勝つ』くらいのことはしてみせなくては——護堂は決然と顔を上げた。

「万里谷。おまえが手伝ってくれたら、俺はあの迷惑な女神さまを絶対におとなしくさせてみせる。力を貸してくれるか？」

　実は護堂、ずっと祐理を『おまえ』とぞんざいに呼べないままでいる。

　心身共にずぶといエリカやリリアナ、恵那などは「まあ、男と同じあつかいでいいか」と気軽におまえ呼ばわりしているのだが、祐理にだけはそれができない。

　何しろ、身近な女子のなかでは格段におしとやかで、女らしい少女なのだ。

　そこがまぶしく、ちょっとだけ気き後おくれして、微妙に特別あつかいするときが多いのだが。

　このときは自然な感じで、呼びかけることができた。

「はい。もちろんです！」

　その内心を知ってか知らずか、祐理は躊ちゆう躇ちよなく答えてくれた。そして、ちょっと言いにくそうにしながら、おずおずと付け加える。

「あの——でも護堂さん。自みずからの意思で幽かくせりよの知識をのぞく法ですが……やはり危険ですので、最後の最後まで試ためすのはやめておこうと思います。御名を視たあと、すぐ護堂さんにお伝えできないのも困りますし……」

　この申告に、護堂はうなずいた。妥だ当とうな判断だと思ったからだ。

「実はもうひとつ、試してみたい方法があるんです。先ほど護堂さんと女神がお話ししているとき、なんとなく思い浮かんだことがありまして……」

　只ただならぬ霊視力者の〝なんとなく〟は軽視すべきでない。それを護堂は知っている。

　一体どんな秘策なのか。好奇心と期待感を刺激された。

　祐理を連れて浜辺から歩くこと二〇分ほど。

　ついに護堂は目的地へ到達した。祐理の感応力でも立ち入ることができなかった、島の中央部である。そこには白い大理石の石いし畳だたみが敷しかれていた。

　かつては、この上に石造りの建築物でもあったのかもしれない。

　だが、現在は石畳のみ。そして、ここに一頭の猛獣がいた。雌めすのライオンである。

「あら……。意外とお早いご到着でしたのね」

「時間をかけても、いいことはなさそうだったからな」

　雌めす獅じ子しの口から女神の声が発せられても、護堂は驚かなかった。

　それより重要なのは、全身に力がみなぎってきたことだ。心も自然と昂たかぶる。ついにこの状態となった。ライオンが『まつろわぬ神』だと護堂は見抜いた。

　雌獅子は女神が化け身しんしたもの。操り人形などではない。

「娘も伴ともなっておりますわね。さ、草薙さま。わたくしにその下女を賜たまわりくださいませ」

　今の要求、わざと聞きながす。代わりに言う。

「なあ。あんた、俺と同類のガスコインを前の島に閉じこめようとしただろ？」

護堂はあえて決めつけた。かまをかけるためだ。

あの男と女神の関係、そろそろはっきりさせておきたかった。

「ふふ、もちろんですわ。アレクサンドル殿も神殺しであり当代きっての勇士。女神の愛を受けるにふさわしい殿方ですもの。あの方がわたくしを解放したときに見そめたのですわ」

「解放した、だって？」

「ええ。長き眠りについていたわたくしを、あの方がめざめさせたのです。我われと共に、流る浪ろうの英雄殿を見つけ出さないかと」

英雄。聞き捨てならないフレーズが出てきた。

あの男、やっぱりこの辺で探たん索さく行こう……というより〝悪さ〟をしていたか。どうせグィネヴィアの関係であれこれやっていたときだろう。護堂はうなずいた。

「かの島をふたりで創つくりあげ、しばらく愛の時間を愉たのしんでいたのですが……あの方ときたら、島での暮らしに飽あきて出ていったのですわ。迷宮の権けん能のうを以もつて島に鍵かぎまでかけ、わたくしをあそこに閉じこめたまま！」

「って、あれは侵入者を惑まどわすためじゃなかったのかよ……」

バカバカしくも意外な真実に護堂はぼやいた。

この女神の気質、あの男の性格を考えれば、もうおおまかな事情は想像が付く。

前に聞いた『愛の証あかしとして神具を贈った』云うんぬん。うそくさい。どうせ下心があってアレクは女神に近づき、予想以上に厄やつ介かいな相手だったため、途中で逃げたのだろう。

「迷いの魔力を見きわめ、解きほぐすまで四日もかかりました。その間に足の速いあの方はとっくに姿をくらませて……。本当は迷宮となった島も打ち壊そうかと考えましたが、一度は愛した殿方の忘れ形見。ふふ、かの島にそのまま住まいをかまえたのですわ」

思わぬ女神の告白に、護堂は自分でも不思議な気持ちになった。

　この女、意外とかわいいところもあるんだなと、すこしだけ同情したのだ。そんないわくのある男が遺のこしたもの、わざわざ維持して暮らさなくてもと。

　しかし、すぐにそんな気分は吹き飛んだ。

「あれから幾いく年とせもひとり島にとどまり、新たな愛にふさわしき相手を探しつづけ……ついに草薙さまを見み出いだしたのです」

　女神が化身した雌獅子の体たい躯くに神力がみなぎってきた。

　ここからがいよいよ正念場らしい。護堂は気をひきしめた。

「さあ草薙さま。わたくしとの愛のため、その下女をこちらへ。ふふ、豚か山や羊ぎにでも変えて、ふたりの屋敷で飼い慣らしてあげましょう！」

「誰がそんなことをさせるか！」

　あまりにあまりな暴言が出たため、護堂はとっさに手をのばした。

　女神との対話を心配そうに見守ってくれていた祐理。その華きゃ奢しゃな体をぐいと引きよせたのである。彼女によからぬ術をかけられても、カンピオーネの体でかばえるように。

「ご、護堂さん⁉」

　祐理がとまどっていたが、彼女を抱いたまま女神に鋭い視線を向ける。

　さっきの同情はウソではない。しかし、ここまで神経を逆なでされる敵は初めてだった。

　祐理はかすかに震えている。無理もない。人間など石ころ程度にしか認識しないはずの『まつろわぬ神』に、ここまで執しゆう着ちやくされたのだ。おびえもするだろう。

　だが、祐理はここで凛りん然ぜんと顔を上げ、護堂といっしょに女神を見すえた。

そして、ひしと護堂の体に強く抱きつき、言い放つ。

「もうおわかりでしょう!?　ご覧のとおりです。この方は決して、私を手放したりはしませんっ。わ、私という妻をあ——愛しているからです！」

なに!?　とんでもない仰ぎよう天てん発言だった。護堂は思わずのけぞった。

「そ、それにいくらあなたが女神でも、奇跡を起こす力があるとしても、護堂さんを私から奪うことだけはできないはずですっ」

なんと祐理は護堂に抱きつきながら、潤うるむ瞳ひとみで見あげてきた。

何かを求め、訴えている。ついその目め力ぢからにほだされて、護堂はすこし体をかがめ、顔を彼女に近づけてしまった。

すると、祐理はおずおずと護堂の頬ほおに頬をよせ、さらに頬へキスまでしてくれた。

それはエリカの気やすくも情熱的なスキンシップとくらべれば、ずいぶんとぎこちない情愛の表現であった。

だが護堂は頭が沸ふつ騰とうしそうになった。まさか、彼女がこんなことを——。

「だって、あなたはこの人にちっとも姿を見せようとしませんし、こうして抱き合うこともしませんし……」

これもすこしぎこちないものの、なんと挑発の文句だった。

ふたりの抱ほう擁ようを不快そうに眺めていた女神。その雌獅子の双そう眸ぼうがすっと細くなった。まるで祐理に核心を突かれでもしたかのように。

護堂は理解した。祐理が語っていた『試してみたいこと』がこれかと。

どんな策か訊いても、顔を真っ赤にして教えてくれなかったのだ。

　エリカあたりがやりそうな芝居と挑発。霊視で得たイメージを必死に実じつ践せんしている。必死にしがみつく媛巫女をいじましく思い、抱きしめる腕に力を込めた。

　祐理も護堂の胸に顔をうずめる。その耳元にささやいた。

「万里谷……」

「たまには私のことも下の名前で呼んで欲しいです……。エリカさんやリリアナさんばかり、不公平だと思います。この間、恵那さんも残念がってましたよ……」

　ささやき声ではあったが、おっとりした性格の祐理が珍しく拗ねている。

　あの連中は外国人で、妙に長くて呼びにくい姓だから——。

　などと本音で言いわけせず、護堂が「ゆ、祐理……」と耳元で呼べば、「はい……」と満足そうな小声が返ってくる。もはや芝居とは言いがたい雰ふん囲い気きであった。

　が、祐理はまた顔を上げ、女神へ告げた。

「こ、この人と愛し合うと何度もおっしゃっていましたが……ほ、本当は無理なのではありませんか？　私の霊感が感じています。魔女の神である御おん身みはたしかに神じん通つう広こう大だい……でも、その肉体の方は決して——」

「お黙りなさい」

　護堂と祐理はハッとして、表情をひきしめた。

　女神の雰囲気が変わっていた。数時間前、コテージで示した冷たくも平板な声。それだけではない。今までよりも遥はるかに威厳に満ちていた。

　女王の威い。冒おかしがたい姫の気品。神としての権威——。

　恋に耽たん溺できする乙女おとめの浮わつきはもうない。あるいは、これこそが彼女の本性なのか。

　祐理の挑発が、女神のなかで何らかのスイッチを押したようだっ

た。

「暁あかつきの女神に重ねがさねの非礼、なかなかに腹立たしい……。とはいえ、死すべき種族の乙女にしては勇ゆう敢かんな振る舞い……。ふふ。恋を追い、愛を求める性さがのわたくしです。情愛ゆえに命を賭とすそなたへ、祝福のひとつでも授さずけてやりたい気持ちも出てきましたわ」

　落ち着きのある声だった。

　そして、雌獅子の体が割れた。背骨のラインに沿って、まっぷたつに。

　この割れ目から黒い影がわき出てくる。代わりに雌獅子の体は砂となって崩れ去った。そして、影は女性のシルエットをかたどるようになり——数秒後。

　護堂と祐理が見守る前で、影は実体へと成り代わった。

　糸杉のごとくほっそりとした美少女だった。

　歳としの頃は人間でいえば一五、六か。輝く銀色の巻き毛がみごとであった。夢見る乙女のように長いまつげ、薔ば薇ら色いろの頬、さくらんぼのごとき唇くちびるの可か憐れんさ。一目見ただけでも忘れられない少女の美が彼女に集結していた。

　道ですれちがえば、その夜、夢に出てきてもまったくおかしくはない。

　だが——彼女の両腕と、腰から下の全てが真しん鍮ちゆうで造られていた。

　真鍮造りの義手・義足・義体。これは甲かつ冑ちゆうでも聖衣でもない。彼女の負った、癒いえない傷なのだと護堂は直感した。

　カンピオーネの戦士としての勘かんが告げていた。目の前の女神は半分死んだ体だ。

　癒えない傷を負いながらも地上に在ありつづける、半死半生の女神——！

「暁の女神……まつろわぬ、キルケー！」

　そして、ついに祐理が息を呑のみ、神の真名をささやくのであった。



第７章　魔女よさらば

1

「ふ……我わが素顔を殿との方がたの目にさらすのは、いつ以来のことでしょう？」

　朗ろう々ろうと女神キルケーは訴える。

　素顔をさらした彼女には、なんともいえない華があった。

　ただ美しいだけではない。その一いつ挙きょ手しゅ一いつ投とう足そくをつい目で追いかけてしまう。わずかな表情の変化、視線の動き。そうしたものにさえ気を取られてしまう。

　あらゆる人を惹ひきつけ、夢中にさせる美少女の魅力を見み出いだすことができた。

「そして、我が砕かれた体を露あらわにするのも——」

　キルケーが身につける真しん鍮ちゆう造づくりの義手・義足・義体。

　それらが『ぎ……』と軋きしみをあげつつ動いた。すばやくもないし、なめらかでもない動きで女神の体はくるりと踊るように一回転する。

　だが、その無む邪じや気きな少女めいた身のこなしについ注目してしまう。

　単なる外見の美を越えて、人を魅み了りようする。女神キルケーの魔性を護ご堂どうはかいま見た。

「あんたの体、そんな風にしたのは……やっぱりガスコインか？」

「あの方ともの別れする際、多少のいさかいが生じたのです。その結果ですわ。……ふふ、わたくしは不死であるべき暁あかつきの女神。その身をここまで追いこむのですから、さすが神を殺あやめし勇士というべきでしょう」

　太陽もまた不死性をそなえる神格。護堂はその話を思い出した。

　それにしても、アレクに恨うらみ言ごとを吐はくでもなく、微笑ほほえんで賞賛すら口にする。なんとも女神らしい余裕と剛ごう毅きさだった。

　だが、義体を用いた動きはどうにも鈍にぶく、重そうでもあった。

　恵え那なに斬きられて以来、接近遭遇を警戒していたのはこのためか。しかし、なぜだろう？　護堂は奇妙な確信を得ていた。

　この死にかけた機き敏びんならざる女神、なぜか『弱い』とは思えないのだ。

「草くさ薙なぎさま。この素顔を見せたのは、あなたをわたくしの虜とりこにするため。砕けた体で罷まかり出たのは、この冷たき腕であなたを抱きしめるため」

　女神の瞳ひとみはあざやかなスミレ色だった。

　その美しいまなざしで見すえられて、護堂の背筋がぞくりと震えた。恐怖ではなく、キルケーのあやしい魅力に引きこまれたがゆえに。

「ふふ。今一度、申しましょう。その娘を捨てて、どうかわたくしをお選びくださいませ。そのご決断に見合うだけの愛とよろこび、あなたに捧ささげてみせますわよ！」

　女神からの求愛。前回とちがい、なんと悩ましい状況か。

　キルケーが振りまく逆らいがたい魅力に一瞬、引きこまれそうになった。

　暁の女神にくらべれば、今この腕で抱く祐ゆ理りでさえ所しよ詮

せんは只の人間。美と可か憐れんさでは、ずいぶんと色あせて見える……。

　しかし、護堂は眉まゆをひそめて踏みとどまった。

「あれが女神キルケーの真の姿なのですね……」

　祐理がささやく。護堂に抱かれたままキルケーの姿を見つめ、不安そうに。

　そのぬくもりを感じるだけで、自然と闘志が昂たかぶってきた。彼女を自分から遠ざけようとする女神の奸かん計けい、とにかく腹立たしく感じられたのだ。

　それに、こんな形でこちらの牙きばを抜こうとする思おも惑わくも気に入らない。

「我わが素顔の輝きは、わたくしにとって武器のひとつともいえるのですが……。さすが神殺しの君。その荒ぶる心を鎮しずめることはかないませぬか」

　キルケーは涼やかに言う。超越の女神にふさわしい優ゆう婉えんさだった。

　求愛を拒絶されながら、この余裕。今までと明らかに雰ふん囲い気きがちがう。

「ならば当初の予定どおり、手足をもいで我が愛蔵品とするまで。ふふ、手こずらせてくれたた分、より念入りに愛してあげましょう。四し肢しの全てをもぎ取り、目をつぶし、喉のどを灼やいて差しあげます。地虫のごとく這はいずりながら、女神の愛をお受けあそばしませ！」

　可か憐れんな唇くちびるが悪趣味な宣言をするのと同時に——。

　護堂はさっとそよ風が吹くのを感じた。これをあらかじめ警戒していたおかげか、かすかにイヤな予感がした。

「護堂さん！　ウルスラグナの化身を奪った魔術です！」

　祐理も警告してくれた。彼女も注意していたのだろう。

　護堂はとっさに呪力を高め、さらに息を止めた。風を吸いこまないようにしつつ、魔術を打ち破ろうとする。直後、異変が起きた。

　風のなかから白く透きとおった裸体の乙女おとめが抜け出てきたのだ！

「ハルピュイアの娘よ。草薙さまに女神の呪じゆ言ごんを吹き入れなさい！」

　気体のごとく宙に浮く半透明の乙女へ、キルケーが指示を出す。

　これに応こたえて、〝娘〟とやらは軽やかに空中で身をひねらせた。その唇を護堂の顔へと近づけてくる。口づけで魔術を吹きこむつもりなのだろう。

　祐理をかばったまま護堂が反応しようとしたとき、救いの手がさしのべられた。

「御み巫かんなぎの八はつ神しんよ。和合の鎮めに応えて、静せい謐ひつを顕あらわし給たまえ……！」

　祐理の言こと霊だまだった。媛ひめ巫み女こ の体から白い光が放たれる。

　精神感応力を最大限に高めて、媛巫女の和にぎ魂みたまを放射する術。この間、犬いぬ吠ぼう埼さきでも見た『御み霊たま鎮しずめの法』だった。

　聖なる光を浴びて風の娘は白く染まり、消滅していく。

　倒されたというより、祐理が放った光に同化したように見えた。

「助かった、万ま里り谷や！」

「い、いえ。私のことは気にせず、お好きなように戦ってください……」

　護堂の礼に答える媛巫女。しかし、彼女はハァハァと息を荒らげていた。

　今の『御霊鎮め』ですくなからず消しよう耗もうしたようだ。

　風の精――神の眷けん属ぞくを鎮めるほどの強度で使うのは、やはり相当な負担なのだろう。この様子だと、あと一、二度使えば体力と呪力をほとんど使いはたしそうにも見える。

　そして、媛巫女が見せた切り札に思わぬ反応があった。

「我が婢はし女ためを鎮めてみせましたか……。その娘、よき巫かんなぎであったようですね。ふふ、巫女であれば神の役に立つことこそが本道。すこし使わせていただきましょう」

　女神キルケーは胡う乱ろんなことをつぶやいてから。

『ぎ……っ』という音と共に左の義手を上げ、祐理を指さす。

　そして飛んだ。真しん鍮ちゆう造づくりの人差し指が媛巫女の喉のど笛ぶえめがけて。手から離れて、矢のように飛んでいく。刺されば当然のこと、命はない――！

　護堂はとっさに動いた。

　矢となった指先の前に自分の背中をさらし、祐理を隠す。

　結果、護堂の肩けん甲こう骨こつのあたりに真鍮の指先がぐさっと突き刺さる。だが、やたら頑丈で生命力過か剰じようなのがカンピオーネの体。これで死ねるほど、やわではない――はずなのに。

　すさまじい激痛を背中から感じた。

　サルバトーレ・ドニの魔剣で斬きられたときと同じほどの痛みだった。

「な……んだ？」

　さらに寒い。体中が冷え切り、凍とう傷しようになったかのように寒かった。

　それでいて、頭だけはおそろしく熱い。脳にすさまじい負荷がかかり、熱暴走でも起こしたように。全身から力が抜けていく。

「ご、護堂さん⁉　しっかりなさってください⁉」

　そういえば――前にアテナから『死』を吹きこまれたときと似て

いる。

　過去の戦いを思い出して、護堂は愕がく然ぜんとした。まさか!?

「鴆ちん毒どくの呪じゅ詛そ……わたくしの細腕では、古き戦士たる神殺しの君に打ち込むこともかないますまい。その巫女めを使わせていただきましたわ」

　そうか。祐理を撃ったのは、こちらがかばうことを狙ねらってか。

　護堂は納得した。さすが魔女の神、やることが悪あつ辣らつだ。堂々たる軍神、神王たちとはまったく異なる戦法の数々。なんともやりづらい。

「お、女を敵にまわすと、こんなに厄やつ介かいだったんだな……」

　つい護堂はつぶやいた。

　今まで縁のあった全ての女性・女神から猛烈に抗議されそうな感想だ。しかし、それほどにキルケーという『女』は厄介だった。

　くそ。のぼせた頭で毒づいてから、護堂は歯を食いしばる。

　冷えた体で力を振りしぼり、痛みを無視しようと必死になった。だが、膝ひざから力が抜けるのを阻そ止しできない。しかし、祐理が受けとめてくれた。

　彼女も疲れているはず。なのに、護堂をとっさに抱き止めてくれたのだ。

　さっきまで祐理を抱きしめていたのは護堂の方。だが、今度は祐理に抱かれる番だった。

「……私のせいで申し訳ありません。でも、もうすこしだけお待ちください」

　護堂を支える媛巫女は、凛りん然ぜんたる決意の表情だった。

「すぐにあなたを——護堂さんを万全の態勢で戦わせてみせます。必ず体を治して、女神を切り裂く『剣』も用意して差しあげま

す！」

「ま、万里谷……」

「畏おそれながら、暁の女神に奏そう上じようさせていただきます。たしかに御おん身みは女の叡えい智ち、陰いん陽ようの陰いんたる女性の性さがを体現する神格でしょう。ですが」

　媛の名にふさわしい高貴さで、祐理は女神をにらみつけた。

「これからしばらくの間、私がこの人を守ってみせます。御身がどのような術を差しむけようと、必ず退けてみせます。護堂さんを傷つけることは許しません！」

2

「ふふ、可愛かわいい声で啼なく娘ですね。……ああ、よいことを思いつきました。そなたを小鳥に変え、籠かごで飼って愛めでてあげましょう」

　祐ゆ理りの宣言を受けて、キルケーはのんきに微笑ほほえむ。

　だが当たり前だ。巫み女こと女神の間にある力の差は、天と地ほど隔へだたっているのだ。

「さあ。死を迎える日まで、わたくしの目と耳を楽しませなさい」

　歌うようにささやかれた言こと霊だまは、木こ洩もれ日びのような燦きらめきとなった。

　これが風に乗って、きらきらと飛んでくる。その先にはもちろん、力尽きた護ご堂どうを支える祐理がいた。

　しかし、媛ひめ巫み女こから聖なる光がふたたび放たれた。『御み霊たま鎮しずめの法』だ。

　人の身を小鳥に変えるという呪じゅ詛そは、白き光にはばまれて祐理の体にとどかない。女神キルケーの魔術をどうにか防いでいる

のだ。

　だが、さっきと異なり、女神の術を消滅させることはできない。

　木洩れ日のような燦めきは祐理と護堂のまわりをぐるりと取りかこみ、じっくり押しつぶそうと迫ってくる。これをはばむための防壁は、祐理の『御霊鎮め』しかない。

　しかし、白き光はどんどん輝きを減らしていく。土台、神の魔術を防ぐなど人間には無理な話なのだ。おそらく、あと十数秒で祐理は呪力を使いはたし、鎮めの光は全て消えうせるだろう。しかし——。

　毒に体を蝕むしばまれながらも、護堂はあせらなかった。

　怜れい悧りな瞳ひとみで祐理が見つめてくれているからだ。十数秒の時間稼かせぎができれば十分と、彼女は最初から割り切っていたはずだ。

　その証拠に媛巫女は落ちついて、もう次の行動に移っていた。

　弱った護堂の顔を両手でやさしくはさみこみ、ひきよせ、キスしてくれたのだ。

「護堂さん……女神キルケーの全てを、私が視みた全てをお伝えします。英雄オデュッセウスの愛人であり、彼を虜とりこにした魔女——。暁あかつきの女神を切り裂く『剣』に変えてください！」

　ひしと抱きつき、唇くちびるを押しつけながらのささやき。

　護堂の心に媛巫女が視たイメージがあざやかに伝わりはじめ、膨ぼう大だいな知識と言葉が頭のなかを駆けめぐっていく。

「ほう……何やら胡う乱ろんな真ま似ねを！」

　キルケーが真しん鍮ちゆうの左腕をかざし、祐理と護堂に向けた。

　今度は指でなく、その肘ひじから先が撃ち出された。さっきと同じく猛毒、あるいはより凶悪な攻撃を秘めて、真鍮の腕が飛んでくる！

祐理にはこれを打ち落とす術すべがない。護堂がハッとしたときだった。

「そして、あなたの力を私にも……。あなたを守るための力を分けてください！　私、もっと強くなってみせます！」

祐理に強く唇を吸われた。

すこし不器用で、しかし、その分ひたむきな愛情を強く感じる口づけだった。

さらに媛巫女の舌が差しこまれ、いつにない激しさで護堂の舌をまさぐり、からめとりにかかる。その瞬間だった。

ほとんど消えかけていた『御霊鎮め』の輝き。祐理がまとう白き光。

これが一気に輝きを増し、周囲を燦さん々さんと照らし、純白に染めあげていく。最初に使ったときより数倍以上も強い光だった。

そして、この純白の輝きは女神が放った真鍮の腕を消滅させた。

祐理と護堂に禍まが々まがしい災さい厄やくをもたらす前、命中寸前にかき消してしまったのだ。

護堂は目をみはった。『御霊鎮め』が術や権能だけでなく、神による物理的な攻撃まで鎮静化させられるとは！

こんな荒技、もちろん祐理だけの力でかなうはずない。

今、彼女はいじましいほどの必死さで護堂の口を吸い、舌を吸っている。そうすることで新たな術をかけ、護堂から吸収しているのだ。

魔王カンピオーネと神々だけが体内に宿しうる、莫ばく大だいな呪力を——。

祐理による呪力吸収。それはすでに危険なほどのレベルに達していた。媛巫女筆頭といえども、こんな量の呪力を体内に貯ためこめば即座に体調不良を起こす。

否いな、命に支し障しようを来きたすほどの高熱に見舞われ、悶

もだえ苦しむはずの量だった。

　だが、彼女は吸いとる端から『御霊鎮めの法』を強化・維持するためにカンピオーネの呪力を転用し、どうにかしのいでいる。

　だとしても、体には大きな負担がかかるはずなのに……。

　しかし、その恩恵はすさまじかった。

「暁の車よ。今このときは天より降り、魔王どもを焼きはらいなさい！」

　灼しやく熱ねつの劫ごう火かがいきなり燃え広がり、女神の遺い跡せきを呑のみこむ。

　祐理を好きにさせては問題が生じると察したか、キルケーが術を放ったのだ。魔性の姫神はそのまま宙に浮かび上がり、空中から炎上する遺跡を見おろす。

　しかし、焔ほのおのうずまくなかでも——。

　護堂たちのまわりだけは、白き光に守られて静せい謐ひつそのものだった。

　祐理がハァハァと息を荒らげ、それでも必死に護堂の唇を何度も何度も『くちゅっ』とついばむ音がよく聞こえるほどだ。

　かなり苦しいのだろう。祐理はぐっしょりと汗をかき、朦もう朧ろうとした目つきだった。

　だが、それでも休まず、草薙護堂のために献けん身しんを続けてくれて——。

　むずかしい術をいくつも並行して重ねて使う祐理。気力・体力・集中力の全てにおいて限界を超えているはずだ。その証拠にキスの仕方が変わっていた。

　さっきまでは気持ちの昂たかぶりにまかせて、情熱的な口づけを繰りかえしていた。

　だが今、祐理からの接せつ吻ぷんはくちゅっ、くちゅっとゆっくり護堂の唇に吸いつくものになっていた。しかし、勢いは弱まって

も丹念に、そして丁てい寧ねいにキスを重ねてくれる。

　愛情深く、真心と誠意を込めて護堂の唇をついばみ、舌をのばし続けてくれた。

「護堂さん……私にはこんなことしかできませんけど……でも、その全部をあなたのために使わせてください。だから——だから……」

　潤うるむ瞳ひとみで護堂を見あげ、唇を捧ささげながらのささやきだった。

　もう立っているのもむずかしいらしく、ついにフラッと倒れこむ。これを支えるのは、今度は護堂の番だった。



　毒の効き目はすでに消えていた。祐理が癒いやしの術もかけてくれたおかげだ。

　そして、護堂のなかで『剣』が研とぎすまされ、いつでも抜き放てるようになっていた。まわりではあいかわらず焔が燃えさかっている。だというのに熱くもなく、火の粉がひとつも飛んでくることなく……。

　全て祐理がしてくれたことだった。護堂はぎゅっと彼女の細い体を抱きしめた。

「万ま里り……祐理。俺はもう大丈夫だから、すこし休め」

　抱きしめながら、耳元でささやく。

　今まで何度も休めと言いたくて、しかし言えなかった。

　護堂を今の状態にするため、祐理は限界に挑んでくれたのだ。そして、自分はそのためにこんなかぼそい女の子をここまで追いこみ、その献身を享きよう受じゆするだけだったのだ。

　自分のろくでなしぶりを自己嫌悪しながら、祐理を抱く手に力を込める。

「ふふ……いいんですよ。私が好きでしたことですから」

　まるで護堂の思いを感じ取ったかのように、祐理がささやいてくれた。

　しかも、幸せそうに微笑ほほえみながら。その笑顔で火がついた。すぐさま護堂はウルスラグナ最後の化け身しん『戦士』となり、言こと霊だまを唱となえる。

「我われは最強にして、全ての敵を打ち破る者なり！」

　護堂と祐理のまわりに光の球体——『剣の言霊』が続々と顕あらわれる。

　幾十、幾百、幾千の輝きが中空を満たし、燦めく星雲のごとく広がっていく。この光が現れたことで、劫ごう火かは一瞬にして消えうせた。

　これをキルケーは空に浮かんだまま見とどけ、呆ぼう然ぜんとつぶやいた。

「神しん力りきを切り裂かれた……」

　そして、すぐに鋭い顔つきとなり、地上へ降りてくる。

　夢見る少女の美び貌ぼうには不似合いな険けわしさ。魔術を最大の武器とする女神にとって、ひどく厄やつ介かいな『剣』が出現したことを悟ったのだ。

　英雄オデュッセウスと深い縁を持つ、古代ギリシアの魔女神キルケー。

　顕れた光の全てが彼女を切り裂くための刃であると――。

　一方、護堂はもう立つ力もない祐理を地面にすわらせた。

　うなずきかける。媛巫女は疲れきっているくせにとびきりの笑顔で応こたえた。けなげなほど自分を支えてくれる女の子に、護堂は叫ぶ。

「おまえのおかげで俺はここまで来れた。絶対に勝ってくるから、すこし待っててくれ！」

「はい！」

　めったにしない勝利の約束。礼を言うのもあやまるのも、体を支えてやるのも全ては勝利してからだった。護堂は『剣』を一〇〇ほど祐理のそばに配して防御陣としてから、キルケーをにらみつけた。

「灼しやく熱ねつの雷火よ、女神の矛ほことなるのです！」

　女神が手より稲妻を放つ。しかし、その行く手に『剣』の光球がひとつ飛び込み、一瞬にして消滅させた。

　キルケーは眉をひそめ、空に充みち満みちた星雲のごとき光球群をにらむ。

「木馬の策略でトロヤの都を陥おとしたあと、一〇年も放浪した英雄オデュッセウス……。彼は旅の途中、太陽神の娘キルケーの島に

たどり着く。彼女はやってくる人間に魔術をかけて、獣けものに変えてしまう恐ろしい魔女だった！」

　護堂が唱える言霊によって、『剣』たちの乱舞がはじまった。

　星雲のように燦めく黄金の光球たち。幾千もの輝きはヒュンヒュンと宙を駆け、キルケーのまわりを飛びまわり、標的を切り裂く準備をととのえる。

　この剣陣を前にして、キルケーは新たな魔術を負けじとつむぐ。

「緑なす棘とげの者どもよ！」

　茨いばらのツタとそこに咲く紅べに薔ば薇らの花が次々と大地から這はい出てくる。

　あっというまにキルケーのまわりを取りまく小さな薔薇園となり、そして即席の防護壁となった。しかし、これでもウルスラグナの『剣』は止めることはできまい。

　護堂はかまわず、言霊の詠えい唱しようを続けた。

「キルケーはもちろんオデュッセウスにも魔術を使い、獣に変えようとする。でも、神の加護に助けられた英雄に術はかからない。逆にキルケーは彼に惚ほれこんで、その愛人となってしまうんだ！」

『剣』たちは茨の壁と薔薇とキルケーめがけて、いっせいに加速する。

　あらゆる方向から標的めがけて殺到し、女神を守護すべき茨と薔薇をずたずたに切り裂いていく。『剣の言霊』は敵とする神の神格と神力を断ち切る刃やいば。守護の力や魔術であっても切り破ってしまうのだ。

「魔術の子らよ、我が兵団となり天あま翔かけよ！」

　茨が通じないと見て、キルケーはさらに新しい術を行使。

　切り裂かれ、宙を舞い飛ぶ茨の茎やツタ、薔薇の花びらが次々と変身をはじめた。細切れにされた植物から、槍やりと鎧よろい兜かぶとで武装した真鍮造りの小さな人形へと。

　真鍮の兵士たちは、ちょうど護堂の『剣』たちと同じほどのサイズだった。

　彼らは空をヒュンと飛んでいき、やはり空中で乱舞する『剣』たちへ襲いかかる。

　——しかし。

「オデュッセウスは結局、キルケーの美しさに夢中になって、彼女の島に長居を続けてしまう。故郷へ帰るのも忘れて、一年間も延々と。——魔力と美貌で英雄を陥おとしいれ、彼らの力を削そぎ、その目的を妨害する。それが魔女の神キルケーの性質なんだ！」

　ウルスラグナの『剣』は小兵士たちをことごとく切り裂き、粉砕してしまう。

　逆に『剣』を撃破できる真鍮人形は一兵もなし。

　かつて護堂と戦った神々がさまざまに工夫したように、ただ権けん能のうを振るうだけでは『剣』は防げないのだ。だが、それは女神の方も承知していたらしい。

　やにわにキルケーの体から強大な呪力がほとばしる。

　今までその身にまとっていた量とくらべれば、倍近い呪力が一気にふくれあがった。どうやら、これをため込むための時間稼ぎとして、茨や真鍮人形たちを呼んでいたらしい。

　そして、キルケーはこの膨大な力を言霊に注ぎこんだ。

「東方の軍神が現うつ身しみとした獣よ。呪術の絆きずなを以もつて、今こそ呼びましょう！」

　やはり使ってきた。こちらから奪った『化身』という切り札を。

　次の瞬間、キルケーの背後で地面が爆発した。巨大な何かが遺跡の石いし畳だたみを吹き飛ばしながら、地中から出てきたのだ。

　護堂にとっては見なれた生き物——『猪』だった。

　体長二〇メートルの黒い神獣。召喚するのに時間がかかるため、前もって地中にひそませていたのだろう。

　キルケーはまた宙に浮かび上がり、ふわりと『猪』の頭部に着地する。

　厄介な状況であることを悟って、護堂は眉をひそめた。

　暁の女神を切り裂く『剣』では、ウルスラグナの化身を切ることはできないのだ！

3

「さあ、聖なる軍神の御み子こよ。荒ぶる魂たましいを示すのです！」

　キルケーの指示に応こたえて、『猪いのしし』が口を大きく開く。

　そして、おなじみの咆ほう哮こうがとどろいた。

　オオオオオオオオオオォォォォォォォォォンンンンンンンンッ！

　衝撃波をともなう、いつもの吠ほえ声。すると、これまで空を乱舞していた光球たち数十ほど吹き飛ばされた。

　しかも、吠え声に宿る聖なる力のせいか。飛ばされるだけではない。

　これを喰くらった『剣』の三割ほどがシャボン玉のようにパリンパリンと割れて、次々と消滅していく！

「――言こと霊だまの技たちよ、我わが剣として義を顕あらわせ！」

　キルケーめがけて殺到せよと、『剣』たちへ念じる。

　これに応こたえて、上空で燦きらめく黄金の星々がふたたび加速し、乱舞をはじめたが。

　オオオオオオオォォォォォォンンンンンンッ！

　また『猪』の咆哮がとどろいて、蜘く蛛もの子を散らすように『剣』たちを吹き飛ばした。そのうちの三割ほどが消滅するのもさっきと同じだった。

　しかし、護ご堂どうはいぶかしんだ。

　キルケーを頭上に戴いただく『猪』は、まったく動こうとしない。

　いつもの調子で猛然と突っこんでくるものと思ったのだが——意外に思いつつ、『剣』の一部をキルケーめがけて加速させる。

　燦めく数十の光が流星雨のように美び貌ぼうの魔女へ迫る。しかし、そのとき。

　オオオオオオォォォォォォンンンンンッ！

　またも『猪』が吠え、女主人に飛来する『剣』たちを吹き飛ばしてしまった。そして、言霊の一部がまた消滅——。

　そうか。護堂は理解した。『猪』はいわば、キルケーの城なのだ。

　言霊の剣陣から身を守るための城壁。あの咆哮がある以上、容易に攻略できないうえにいずれ全ての『剣』を消滅させられるかもしれない。

　そして、キルケーは防御に専念させるため、あえて『猪』を動かさないのだ。

「だったら、こっちもじっくり城を攻略して——」

　狙ねらいすました一撃で『猪』の城門をかいくぐるべく、護堂が『剣』に意識を向けたときだった。キルケーが唱えた。

「義なる者よ、我に正しき路と光こう明みようを示し給たまえ！」

　直後、護堂の頭上に黒くろ山や羊ぎが忽こつ然ぜんと顕あらわれた。サイズはふつうだが悠然と空を舞っている。

　そして、その体からは稲妻が放たれ、眼下の人間を強烈に打ちのめした！

「ああああああああっ！」

　苦く悶もんの絶叫。護堂の口から出たものだ。

　カンピオーネの頑強さと神力への抵抗力すら突き破る威力。数日前、魔境の島で味わったのと同じもの。また『山羊』の化け身しんを使われたのだ！

　あのときと同じく、黒山羊は電撃の放出で力を使いはたし、
すーっと消えていった。

「ふたついっしょに化身を使えるのか……」

　前に自分も試こころみた、ふたつの化身を同時に使いこなす技。

　あれを使われたと悟って、護堂は愕がく然ぜんとうめいた。体の表面に目立つ傷はない。だが、しびれと痛みが全身を苛さいなんでいる。

　前回よりも効いた気がするのは『駱らく駝だ』を使ってないからだろう。

　しかも、キルケーはさらに詠えい唱しようする。

「邪じや悪あくなる者よ、羽持てる我われを恐れよ……汝なんじらに呪じゆ詛その報むくいをあたえん！」

　ダメでもともとだと護堂は『剣』を動かし、その化身を攻撃しようとしたのだが。

　間に合わなかった。何かが電光のような速さで飛来してくるのは漠ばく然ぜんと察したのだが、避けることも『剣』で行く手をさえぎることもできなかった。

　視認できないほど速い――。

　気づけば、護堂の左肩は鋭い刃物のような何かで切り裂かれていた。

　鮮血がほとばしる。あとから痛みも襲ってきた。

「く……っ!?」

痛みを堪こらえつつ上空を見あげれば、鷲わしとも鷹たかともつかない猛もう禽きんが『剣』の光球で埋めつくされた空を威い風ふう堂どう々どうと飛んでいた。

そして、猛禽の姿に気づいた瞬間、この鳥は消えていた。

稲妻じみた速さの衝撃波が降下してくる気配。直後、護堂から三メートルほどずれた遺い跡せきの石いし畳だたみにいきなり裂け目が発生する。鋭い何かで抉えぐったような痕あとだった。

——神しん速そくか！

ふたたび空に猛禽が顕れたのを見て、気づいた。『鳳おおとり』の化身なのだ。

鋭い猛禽の嘴くちばしか爪つめで左肩は切り裂かれたようだ。だが、かつての護堂と同じだ。速すぎるスピードを制御できず、持てあましている。上う手まく攻撃を当てられないのだろう。

キルケーもそれに気づいたか、新たな言こと霊だまを唱えた。

「不死の太陽よ、暁あかつきの馬車を遣つかわし給たまえ！」

空を滑かつ空くうする猛禽は天あま翔かける悍かん馬ばに変化していく。

その毛並みは純白。そして、黄金の焔ほのおにつつまれていた。今度は『白馬』だ。

しかも、この間にも——。

オオオオオォォォォォンンンンンッ！　オオオオオォォォォォンンンンンッ！

オオオオオォォォォォンンンンンッ！　オオオオオォォォォォンンンンンッ！

牙きば持つ黒き神獣がさかんに衝撃波の咆哮を吐きつづけ、空から言霊を一掃しようと励んでいた。これでは『剣』の全滅も時間の問題だろう。

そして、空に顕れた『白馬』。

　前に見たときよりも、その身を燃やす黄金の焔ほのおが遥はるかに激しい。

　ここで全ての火種を燃やして、草くさ薙なぎ護堂ごと我が身を灼やき尽くす覚悟のようだ。

　首筋の毛も総毛立つ。カンピオーネの直感が焔の威力を警告していた。あれを受けたら、今度こそ死ぬかもしれないと——。

　今の護堂は『駱駝』の化身ではない。前回ほどのタフさ、今はないのだ。

　どうする⁉　どうやって切り抜ける⁉

　難問に立ち向かうべく、護堂が歯は噛がみした瞬間だった。

『護堂さんっ。ウルスラグナの化身は切れずとも、女神との絆きずなは断ち切れます！』

　いきなりの助言。それは精神感応の念波だった。

　その使い手の方を一瞬だけ見る。護堂が残した『剣』にかこまれ、疲れのためにへたりこみながらも、遠くから祐理は大きくうなずいている。

　霊視を得た媛巫女は、それにもとづく助言を急いで伝えてくれたのだ。

　そして、護堂もこの武器——『剣の言霊』を何度も振るいつづけてきた。祐理のアドバイスを活いかすにはどうすればいいか、なんとなくわかる。

　護堂はあえて目をつぶった。

　立てつづけに吠えまくって『剣』を次々と消滅させる『猪』も、上空からこちらへ突っこんでくる直前だった『白馬』も見ない。

　この連中よりも護堂が捉とらえなくてはいけないもの。

　それは、化身たちを我が物としているキルケーの魔術そのものだった。

いつもの草薙護堂なら、そんな曖あい昧まい模も糊こたる気配など知覚できない。エリカなどがさんざん言うように、魔術の才能はゼロの男なのだ。だが。

ウルスラグナの化身でも『戦士』と『山や羊ぎ』を使っているときはべつだ。

これらの使用中は言霊や雷撃を操るため、いかなる大魔術師をもしのぐ魔導力が護堂にも宿る。だから必ず見える——。

力の波動。女神キルケーがつむいだ神力。火の属性を秘めた権能が動く気配。

「これか！」

見切った瞬間、護堂は大きく目を見ひらいた。

頭上に『白馬』が墜つい落らく・炎上する隕いん石せきのごとく落下してきていたが、それでも微動だにせず、代わりに攻撃の意思を発する。

空から『剣』の光が二筋、べつべつの方向に天あま翔かけた。

ひとつは護堂へ突っこんでくる『白馬』の頭上へ。もうひとつはキルケーを乗せた『猪』の背中へと飛んでいく。

ふたつの『剣』は、護堂が見切ったものをあざやかに断ち切った。

女神が魔術でつむいだ化身たちとの絆を、である。これと同時に護堂の体と『白馬』は正面衝突。しかし、何のダメージもない。

草薙護堂の体に『白馬』はふたたび吸収されたのだ。

そして、さんざん吠えまくっていた『猪』も忽こつ然ぜんと姿を消した。こちらも護堂のなかにもどってきていた。

黒き神獣の頭に乗っていたキルケーは、乗騎が消滅して空に投げ出される。

落ちる魔女の体めがけて、護堂は五つの『剣』を流星雨のごとく飛ばした。キルケーが維い持じする『英雄拘束』の魔術。ウルスラ

グナの化身を奪った秘法。これを斬きるためだった。

　――斬ざん。手て応ごたえあり。

　五つの『剣』は次々とキルケーを貫つらぬき、そのたび護堂は取りもどした。『強風』『雄牛』『鳳』『雄羊』『山羊』の化身を――。

　どうしても必要な力、ではない。だが、それでも死線を共にしてきた連中だ。

　取りもどした七つの化身の感触に、護堂は一回だけ大きくうなずいた。

「くっ！　ならば暁の車輪よ！」

　しかし、キルケーはウルスラグナの化身を失いながらも、空中に踏みとどまった。さらに東の空を指さし、言霊を唱える。

「我が槍やりとなり地上を貫つらぬき、灼き尽くしなさい！」

　星々が散りばめられる南海の夜空。

　その東の方位に時ならぬ太陽が昇ってきた。ウルスラグナの『白馬』と同じく、最強の焔をキルケーは撃ち放つつもりなのだろう。

　暁の曙しよ光こうが南シナ海と無人島を薔ば薇ら色いろに染めあげる。

　この太陽から黄金色のフレアが地上の護堂めがけて飛んできた。しかし、空中に残っていた『剣』に指示して、迎え撃たせる。

　幾百もの光球が黄金のフレアを次々と切り裂いて、地上へ届く前に消滅させた。

　最強の光である太陽を用いた攻撃でも、キルケーの権能である以上は『剣』で切ることができるのだ。とはいえ、言霊の刃やいばは使えば使うほど数を減らす。

　生み出した『剣』たちは、太陽光の迎撃でほとんど失われてしまった。

　残りはもう一〇〇ほどしかない。さっき祐理を守れと指示し、防御陣を作らせた『剣』たちだった。護堂はそちらを見て、祐理とうなずき合った。

　今は残った武器で攻撃に転じるべき。ふたりは同じことを考えたのだ。

「邪悪なる者よ、我を恐れよ！　障しよう碍がいよ、我が前より退け！」

　健在だった『剣』たちを全て加速させて、護堂はキルケーへと飛翔させる。

　そして、空中に立ち尽くす彼女を存分に切り刻んだ。

「きゃあああああっ⁉」

　悲鳴をあげて、キルケーは地上に墜落する。

　真しん鍮ちゆうがつぶれる『ぐしゃっ』という音がした。とはいえ、敵は神。この落下によるダメージ自体はたいしたことないだろう。

　しかし、護堂は『剣』による斬ざん撃げきでたしかな手応えを感じていた。

　キルケーの神格、その深い部分まで切り裂くことができた。もとが半分死んだような『砕けた』体でもある。このまま力尽きてもおかしくないはず。

　だというのに——。

「ぐ……っ」

　女神はその魔力で、自みずからの体をふたたび浮かびあがらせた。

　キルケーの左義手は攻撃のために失われた。さらに護堂の『剣』によるダメージで、左の義足も大きくねじれ、腰のあたりに大きな亀き裂れつが入っていた。

　ハァハァと激しく息を荒らげ、もはや夢見る美少女の優美さもな

い。

　まさに満まん身しん創そう痍い。しかし、それでもキルケーは中空に浮きあがっていき、己おのれをここまで追いこんだ神殺しへ傲ごう然ぜんたる視線を投げかける。

　その眼光は鋭く、美貌は烈はげしい気力で冴さえわたっていた。

　まだ戦う意思があるのだ。そして、どうにかして護堂を打ち倒し、宣言したように玩がん具ぐまがいの愛蔵品とするつもりなのだ。

　しかし、闘争に関してはどこまでも動物的なカンピオーネの本能ゆえか。

　護堂はキルケーから、死にかけている者の匂においを漠ばく然ぜんとかぎ取った。あれはもう倒れる寸前、あと一撃か二撃加えれば勝てる——。その確信があった。

　だが敗北を目前にして、キルケーは微笑ほほえむ。

「ふふふふ。やはり、この体では全てをつつがなく進めることはかないませぬか。となれば、わたくしの持てる全てを賭とす以外に策はないようですわね」

　宙に浮かぶ彼女の背後に、青い人影が顕あらわれた。

　ぼんやりとして、輪りん郭かくのはっきりしない人型のシルエットだった。

　鎧よろい兜かぶとでもまとっているのか、ところどころ妙に角張っている。背せ丈たけは五メートルほどもあり、巨人といって差しつかえない。

　そして、鉄てつ弓きゆうと鉄てつ箭せん——。見覚えのある武器を持っていた。

　以前、キルケーが〝弓の御み霊たま〟と呼んだ存在。護堂はその正体を見抜いた。『戦士』には標的の神を深く理解する能力があるのだ。

「そいつはオデュッセウスから奪った力なんだろう？」

　人影とキルケーを見あげながら、護堂は言った。

『美び貌ぼうと魔術で英雄の力を削そぎ取る』権能。こんな力を持つ女神が最も縁深い英雄こそ、オデュッセウスなのだ。

　彼の属性の一部を使し役えきできても、たしかに不思議ではない。だが。

「神獣とかよりは強いみたいだけど、俺たちの相手をできるほどには見えないぞ」

　弓持つ人影を『戦士』の目で見ながら、護堂は言った。

　もとがどうであれ、〝弓の御霊〟はオデュッセウスの似姿にすぎない。神獣と同程度の自我しか持たず、人がましい知恵も心もない存在だ。

　この窮きゅう状じようでキルケーの切り札になるとは、とても思えないが——。

「ええ、そのとおりですわ。追いつめられた女の浅知恵とお笑いください。わたくしはこれより、最さい期ごの魔術を行うつもりなのです」

　最期の？　物騒な言葉に護堂が眉まゆをひそめたときだった。

　キルケーはやにわに、まだ健在だった右の義手を己の左乳ち房ぶさに突き立てた。鋭い真鍮の指先が白い柔やわ肌はだを抉えぐり、鮮血がほとばしる！

　護堂は瞠どう目もくし、遠くにいる祐理も「!?」と息を呑のむ。

　美しき女神の指先は、人体でいえば心臓でも抉ったのか。血が噴水のように出た。だが、すぐに出血は止まる。なんとも奇怪な一撃であった。

「我が紅あかき血と天地にかけて、誓います。これより試こころみる魔術で草薙さまを討うつことがかなわなくば、わたくしは不死であるべき命を自みずから断ちましょう！」

　なに!?　護堂は絶句した。キルケーの宣言には言霊がこもっていたからだ。

　これは呪じゅ詛そだ。女神が自分自身にかけた強制の呪いなのだ。もし実行できなければ、そのとおりに行動しなければいけないという――。

　なんとバカげた呪詛なのか？

　しかし、次の瞬間、キルケーが放つ呪力は数倍にふくれ上がった！

　かつての大敵・斉せい天てん大たい聖せいが猪ちよ剛ごう鬣りよう・深じん沙しや神しんを呼んだときと同じほどの強大さ。ここで護堂は思い出した。美しき義姉・羅ら翠すい蓮れんから教わったことを。

　神々の強さはその自じ我が、妄もう執しゆう、アイデンティティの強さに正比例する！

「そうか……。最後にひとつだけ使う魔法で俺を倒すと誓って、しかも呪いで自分を呪じゅ縛ばくまでして――『俺を倒す』っていうモチベーションを限界以上に高めたのか！」

　麗うるわしき敵の奇策に、護堂は戦せん慄りつした。

　そして、戦う前に感じた不安の正体をはっきりと理解した。死にかけた女神をなぜ『弱い』と感じなかったのか。あたりまえだ。手負いだから怖いのだ。

　死が身近であるがゆえに、キルケーは命を惜おしまない。

　己の命すら武器に変え、全身全霊で草薙護堂を倒しにかかってくる。その一事を唯ゆい一いつ最大のアイデンティティとしてまで！

　……暁の女神キルケーは声高に謡うたいはじめた。

　不死の命を代だい償しようにして得た呪力で、最期の魔術を解きはなつために。

「ムーサよ、かの男の物語を謡い給え。トロヤを陥かん落らくせしめたあと、流る浪ろうの旅に明けくれた機き略りやく縦じゆう横おうなる男の長き旅路を！」

　キルケーが使う術の正体に、護堂は気づいた。この詩はたしか！

「その知略ゆえ世にあまねく知られ、天にも届く彼の名は――」



　オデュッセウス！

　女神が唱え、護堂がうなずいた瞬間。

　弓持つ人影――曖あい昧まいたるシルエットしか持っていなかった〝弓の御霊〟がやにわに実体を得た。それは青銅色の鎧兜、鉄弓、鉄箭で完全武装した戦士だった。

　身の丈五メートルほど。その左肩にキルケーはふわりと腰をおろす。

「従じゆう属ぞく神しんってやつか……」

『英雄オデュッセウスと女神キルケーの縁は、決して主従関係ではありませんから……むしろ同盟神と呼ぶべきかもしれませんね……』

　精神感応を使って、祐理が耳元でささやいてくれる。

　そして、ついにズシンと地響きを立てて、オデュッセウスは大地に降り立った。

　左肩にキルケーを乗せ、右手には『汎はんユーラシア的英雄』の武具である鉄弓を持つ。兜の面めん頬ぽおは深く下ろしていて、素顔はよく見えない。

　だが、カンピオーネである草薙護堂をぶしつけに眺めていることはまちがいなかった。

「あいつは最強の鋼はがねってヤツなのか？　この世の最後に顕あらわれる？」

『――いいえ。やはり英雄オデュッセウスに《鋼の軍神》としての相はないようです。ただ、あの弓から只ただならぬ力を感じます。気をつけてください、護堂さん！』

　青き弓使いの強大さを霊視したのか、祐理の声は震え気味であった。

　とはいえ《鋼》でないなら、あの連中の厄介な特技『不死身』を持つ可能性は低い。まずはそのことを護堂はよろこび、あらためて

流浪の英雄をにらみつけた。

4

『大神ゼウスの裔すえ、不ふ撓とう不ふ屈くつの勇士オデュッセウス推すい参さんなり！　神々よ、照しよう覧らんあれ。ひさびさに地上へ降こう臨りんいたしした我わが知ち勇ゆう、とくとご覧ろうじよ！』

　青せい銅どうの兜かぶとより、重々しい声で口こう上じようが言い放たれる。

　旺おう盛せいな自じ己こ顕けん示じ欲よくと饒じよう舌ぜつさをうかがわせる口ぶり。だが、うなずける話だった。

　オデュッセウス。有名な『トロヤの木馬』の考案者。武勇だけでなく智ち慧えにも弁舌にも長たけた流る浪ろうの英雄。そんな男がひかえめな性格とは考えづらい。

　しかし、饒舌なる青銅の巨兵に対して、召喚者たるキルケーは告げた。

「オデュッセウスの殿よ。御おん身みとの再会、まことよろこばしゅうございます。……が、ここはわたくしの戦いくさ場ばゆえ、暫しばしおひかえくださいませ！」

　どうやら、この宣告がオデュッセウスの声帯に鍵かぎをかけたらしい。

　次の瞬間から青銅の兜から人語は洩もれず、うなり声が発せられるだけとなった。

　Ｇｏｏｏｏｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｇ！

　あまり英雄らしからぬ、怪物めいた吠ほえ声。オデュッセウスの左肩に乗るキルケーはそれを満足そうに聞き、微笑と共にうなずく。

　英雄としての武勇さえあれば、知略や弁舌は要いらないと判断したのだろう。

「まあ、男なんて女の前じゃあんなものかもな……」

　思わず本音を洩もらしつつ、護ご堂どうはちょっとだけ英雄に親近感を覚えた。

　だが、もちろん警戒したままだ。オデュッセウスの全身から放たれる殺気の強烈さはすさまじく、油断などできる余地は皆かい無むなのだから。

「殿よ、御身の弓にて草薙さまを討とう滅めつあそばしませ！」

　Ｇｏｏｏｏｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｇ！

　キルケーの号令に応えて、オデュッセウスが射撃をはじめた。

　鉄てつ弓きゅうに鉄てつ箭せんをつがえ、ぎりぎりと弦つるをひく。しかし、この箭やの鏃やじりが狙ねらうのは護堂ではなく、南海の星空であった。

　ひょう！　弓ゆん弦づるの音と共に鉄箭は放たれ、夜空の闇やみに吸いこまれていく。

　天より箭の雨が降ってきたのは、その直後だった！

　無数の青白い光の箭が、さながら流星雨のごとく島の大地に降りそそいできたのである。おそらく、箭の数は数万以上であったろう。

　膨ぼう大だいな数の箭が、小さな島の隅から隅にまで降りそそぐのである。

　文字どおり『箭の雨』だった。逃げ場はどこにもない。無策で立っていれば、一瞬後には数十本の箭で串刺しにされる――。

「くそ！」

　毒づきながら、護堂は『鳳おおとり』の化身を使った。

　高速攻撃にさらされたときだけ使用できる、神しん速そくの能

力。降りそそぐ箭の雨のスピードもスローモーション同然となり、護堂の方は稲妻の速さで動ける。

　箭の雨をことごとくかわすには、唯ゆい一いつこの化身を使うしか策がなかったのだ。

　護堂は神速で駆け、唖あ然ぜんとして天を見あげていた祐ゆ理りの体を抱えこむなり、落ちてくる光の箭を一本一本丁てい寧ねいに避けつづけた。

　自分だけでなく、祐理も守り切るために。

　どうにか箭の雨を全てしのぎきったところで、神速をオフにする。

「ご、護堂さん、ありがとうございます！」

「まだ来るぞ。しばらく振りまわすことになるけど、がまんしてくれ！」

　祐理が「はいっ」と答えた直後、オデュッセウスは次の射撃に移った。

　今度、鉄弓から放たれたのは箭ではなかった。青白い光線だった。護堂はふたたび神速をオンに。レーザーのごとく自分めがけて飛んでくる光線を、横に跳んでかわす。

　しかし、光線の照射は終わらない。

　青き英雄は鉄弓から放たれる光線を、長なが槍やりのごとく横へ振りまわす。

　オデュッセウスが雄叫おたけびをあげた。Ｇｏｏｏｏｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｇ！

「だったら上だ！」

　横よこ薙なぎに振りまわされた光の長槍を、護堂は上に跳んでかわした。

『鳳』使用時の異様な身軽さのおかげだった。抱えている荷物の重さも感じないので、祐理をかかえたままでも光線をかわせた。

しかし、オデュッセウスは鉄弓を上空の護堂たちに向ける。

光の長槍が上へと跳ねあがってきた！

跳躍から自由落下に移っていた護堂たち。あとは落ちることしかできないので、この槍をかわす術すべはない。だが、護堂は落下速度を〝減速〟させた。

ゆっくり、ゆっくり。一秒間にほんの一ミリ程度の落下。

ほとんど空中で停止しているのも同然の落下速度。『鳳』は加速するだけでなく、このように非常識な減速まで駆使できるのだ。

その間に、眼がん下かを光の長槍が駆け抜けていく。

やりすごせたところで、護堂は再加速。祐理といっしょに地上へ着地。

護堂は神速をオフにして、大きく息を吐き出した。さすが弓使いの英雄。これからも楽にしのげそうな箭はひとつもなさそうだった。神速で回避運動できるといっても、いずれは当たってしまう気がする。

それに『鳳』を長く使うと心臓に激痛が走り、やがて金かな縛しばりがはじまる。

護堂と祐理には、すでに制限時間が発生しているのだ。

「結局、こっちから勝負に出るしかないんだよな……」

護堂は無意識に口もとをゆがめた。獰どう猛もうな形ではあったが、微笑である。

『鳳』を使う前に「くそ！」と毒づいたのは、この展開を予測したからなのだ。この化身を使いながら、オデュッセウスとキルケーをまとめて倒せる攻撃。

選択肢はひとつしなかった。だが、それには連れの協力が必要で――

「私に異存はありません、護堂さん」

　護堂に抱きかかえられながら、祐理が言ってくれた。

「察しがいいな。霊視の力とかで視みえたのか？」

「いいえ。でも、護堂さんのお顔を見たらピンと来ました。幸い、この島なら誰の迷惑にもなりませんし、またお手伝いさせていただきます！」

　ふたたび制御不能の『黒の剱つるぎ』を抜く——。

　無む謀ぼうな思いつきに、媛ひめ巫み女こは凛り々りしい表情で賛同してくれた。

『おまえにすごい迷惑がかかるじゃないか』

　護堂はその言葉を呑のみ込み、代わりに抱きかかえていた祐理の体をおろす。

「下へ手たやって、この島まで吹き飛ばしたら、ふたりで船もないまま海を漂流することになるけど、ついてきてくれよ！」

「はい。私たちもオデュッセウスのように、必ず故郷まで帰りつきましょう！」

　お嬢さまらしからぬ逞たくましい答えと、力強いうなずきが頼もしい。

　祐理の支持を受けて、護堂は天あまの叢むら雲くもの劍つるぎを呼び出した。

　右手に三尺三寸五分の黒き豪刀が忽こつ然ぜんと顕あらわれる。この相棒、前に『黒の剱』の依より代しろとしてから、〝ぴりっ〟としない状態が続いていた。それだけ消しよう耗もうが激しかったのだ。

　そこで護堂は、すこし前から神刀に呪力を送りこんでいた。

　このときにそなえて、戦闘がはじまる前から。そうして一時的にでも活性化させるつもりだった。そろそろよさそうなので、右腕から取り出したのだが——

『待て、王よ。あの面倒な呪法を試ためすにしろ、ほかの手を選ぶ

にせよ、今すこし待つ方が事は上う手まく運ぶぞ』

　いきなり神刀から忠告されて、護堂は驚いた。

　だが、すぐに意味はわかった。隣では祐理が歓喜の表情で夜空を見あげている。島の外から飛んでくる青き光——それはまちがいなく、リリアナの飛翔術だった。

　数秒後、護堂たちの前にリリアナ、エリカ、恵え那なの三人組がついに降り立ったのだ。

「どうやら、いちばんの見せ場には間に合ったようね！」

　軽やかに言い放ったのは、もちろんエリカだった。

　彼女たちがこのタイミングで合流できた理由。護堂はそれを察して、にやりと笑いかけてくる恵那にうなずきかけた。

「すこし前から天叢雲が元気になってきたのを感じてさ。ようやく気配をたどれるようになったから、恵那の言う方角を探してってリリアナさんに頼んだんだ」

「船を出してもらって、割と近くの海域で捜索中だったのも幸いしました」

　リリアナが言う。いつもどおりの生き真ま面じ目めさがなつかしくもうれしい。さらに銀髪の女騎士は目をすがめ、弓持つ青銅の射手と魔女を見やった。

「英雄オデュッセウスと……麗うるわしき髪のキルケー？　あれが例の女神の正体ですか！」

　霊視を得て、リリアナも神名をつぶやいた。

　エリカも恵那も顔を引きしめる。駆けつけたばかりの三人。だが、すでに戦闘へ臨のぞむ気構えをととのえている。さすがの察しのよさだった。

　……いや。草くさ薙なぎ護堂とのつきあいで鍛きたえられたという線もありそうな話だったが。

　しかし、この援軍は何よりうれしい。仲間たちが来てくれたのな

ら、漂流のリスクをかかえて危険すぎる挑戦をせずとも――。

　護堂は一瞬だけ視線を落とし、自らの心臓を気にした。

『鳳』使用にともなう痛みはまだない。神速で行動できる時間が以前よりも明らかに長くなっている。不本意だが、これもカンピオーネとして成長した証あかしだろう。

　そして、『鳳』についての新たな確信が込みあげてきた。

　今の段階で化身を切りかえれば、あの痛みと硬直をキャンセルできるはず――！

　護堂は祐理にうなずきかけ、剱の呪法を急きゅう遽きょ取りやめた。

「みんな、すこしの間オデュッセウスの相手やを頼んでいいか!?　一分だけでもいいっ。俺はその間に、あの女神さまを狙ねらう！」

　天あまの叢むら雲くもの剣つるぎを地面に突き刺して、護堂は言う。

　すかさず恵那がその神刀を引き抜き、相棒の刀身を一ひと撫なでした。紅あかと青の騎士たちも、すぐさま愛用の魔剣を呼び出す。

　準備は万端らしい。護堂は心おきなく言こと霊だまを唱えた。

「我わがもとに来きたれ、勝利のために。不死の太陽よ、輝ける駿しゅん馬めを遣つかわし給たまえ！」

　この間はキルケーによって防がれ、さんざん利用された『白馬』の化身。

　だが、今の女神は魔力に余裕がないうえ満まん身しん創そう痍い。前回とはちがう！

「霊妙なる馬よ、汝なんじの主あるじたる光輪を疾とく運べ！」

「く……オデュッセウスの殿よ、わたくしに御加護を！」

　ふたたび東の空に太陽が昇る。

　今回、暁あかつきの焔ほのおを武器とするのは護堂の方。白きフ

レアの槍やりが降こう臨りんする。

　狙うはキルケー、青せい銅どう鎧よろいをまとう射手の左肩に乗る瀕ひん死しの女神。だが、前のように『白馬』を吸収するため、光の渦うずが顕れることはない。

　英雄召喚の代償として、キルケーはもう術を使えないからだ。

　代わりに、魔弾の射手オデュッセウスが鉄弓で迫りくる『白馬』を迎え撃った。

　Ｇｏｏｏｏｈｈｈｈｈｈｈｈｈｇ！

　左ゆん手でに持つ鉄てつ弓きゆうを楯たてのように目の前へ突き出し、『白馬』への贄にえとして差し出したのである。

　太陽を運ぶ天馬と、英雄の鉄弓が正面衝突――。

　護堂は『白馬』に持てる呪力を注ぎこみ、押し切りにかかる。オデュッセウスは左腕と鉄弓に呪力を集めて、しのぎにかかる。

　だが、この正面衝突。護堂は勝てると直感した。

　オデュッセウスは英雄神であって、キルケーとちがって太陽神ではない。鉄の武器も青銅の鎧も太陽の超高熱の前にどろどろと融解をはじめていた。

　このまま『白馬』を維持すれば勝てる。だが、弓の英雄はべつの手を打ってきた。

　Ｇｏｏｏｏｈｈｈｈｈｈｈｈｈｇ！

　オデュッセウスは空いていた右め手てを護堂に向けた。

　すると、五指の先から長大な鉄てつ箭せんが一本ずつ――計五本がいっせいに放たれた。まるで指先の銃口から弾丸を撃ち出したかのように。

　五本の鉄箭。ふつうであれば、護堂の体に五つの穴を開けたはずだったが。

「ヨシュアは告げたり。主はこのジェリコを汝なんじらに賜たまわ

れりと！」

「主しゅのモーセに命じ給たまえるがごとく、彼の者らミデアンの邑むらを攻め撃ちけり！」

　聖絶の言霊を使った紅と青の騎士ふたりがガードに入る。

　エリカは逆さか棘とげ状じようのランス、リリアナは薙なぎ刀なたの形にした殲せん滅めつの聖剣を『Ｘ』の形に交こう叉さ させて、魔力の障壁を護堂と仲間たちの前に展開した。ふたりの聖なる殲滅者を守護する力が、今は五人全員を守るための結界となる！

　オデュッセウスが放った箭や五本は、この障壁がかろうじてはじき飛ばした。

　みごとな聖騎士たちの手並み。しかし、英雄の右手から射出される箭は終わらない。

　さながら機関銃のごとく、五つの指先は鉄箭を吐き出しつづける。

　まさに弾だん雨うならぬ、ふたたびの『箭の雨』。騎士たちが守りきれなくなる前に、キルケーを倒さなくては——。

　護堂が『白馬』に意識を向けようとしたときだった。

　恵那が天あまの叢むら雲くもの劍つるぎと共にさっと駆け出した。重心を低くして、狼おおかみのごとくオデュッセウスめがけて。エリカとリリアナが展開した魔力の壁を抜け出て！

「恵那たちにまかせて、王様！」

　太た刀ちの媛ひめ巫み女こが駆けながら叫ぶ。そして、相棒・天叢雲劍の思念も届く。

　神刀とその担にない手が何をするつもりか知らされたときには、恵那はもう箭の雨が降りそそぐ下を飛ぶような速さで走っていた。

　……ついの何日か前、彼女は神がかりで限界まで心身を酷こく使ししている。

　今まで休息して力を蓄たくわえていたとしても、まだ全力で戦え

る時間は短いはず。だが、その不利を埋める策が〝相棒たち〟にあることを護堂は知った。

そして、オデュッセウスの鉄箭に無数の穴を穿うがたれる寸前――。

恵那は高らかに呼ばわった。

「我が背せの君きみ、草薙護堂の名をお呼び奉たてまつる！　われらが秘刀に風の呼び声を導き、我を御おん身みの劔つるぎとなさしめ給え！」

危機に瀕ひんした者から名を呼ばれる。

これはウルスラグナ第一の化身『強風』の使用条件。草薙護堂は名を呼んだ者のそばへ飛んでいけるようになる。

そして今、恵那と天あまの叢むら雲くもの劍つるぎがこの化身を呼びこもうとしている。

しかし、まだ『白馬』をやめるわけにはいかない。護堂は斉せい天てん大たい聖せいとの戦い以来、ひさしぶりに化身をふたつ同時使用する状態になった。

太陽のフレアでキルケーとオデュッセウスを苦しめつつ、もうひとつ化身を行使する。

恵那のもとへ飛ぶのではなく、『強風』の化身を天叢雲劍に吸収させるために！

「く――！」

強烈な頭痛に見舞われて、護堂は歯を食いしばった。

だが、前ほどは苦しくない。これもカンピオーネとしての成長の現れ。ウルスラグナの権能も少しずつ掌しよう握あくが進み、力を増しているのだ。

そして『強風』の力を得て、天叢雲劍と恵那は劍と人の形をした暴風になった。

轟ごう！

うずまく風をその身にまとい、降りそそぐ鉄箭に射抜かれる前に駆け抜ける。

次の瞬間には、『白馬』と格闘するオデュッセウスのもとへ到達していた。

その速さ、まさしく風——。もはや瞬間移動と呼ぶべき早駆けだった。

そして、恵那は天叢雲剣を二度振るった。

箭の雨を連射していたオデュッセウスの右腕が肘ひじの先から断たれ、どろどろに溶けながら『白馬』を押しとどめていた左腕も肩の付け根から断ち切ってみせる。

恵那はそのまま止まることなく、オデュッセウスの横を走り抜けていった。

足を止めたら、自分まで『白馬』に呑のまれてしまうからだ。

護堂はうなずいた。『強風』を吸収した天叢雲剣は、その使い手たる恵那に風の速さと颶ぐ風ふうの破壊力をあたえるのだ。

太刀の媛巫女が切り札・神がかりすら越える『風の剣』を得た瞬間だった。

そして、両腕を失ったオデュッセウスは——

為なす術すべなく『白馬』に左肩を撃ち抜かれてしまった。大きく吹っ飛ばされる。

そして、その肩に乗っていたキルケーは絶叫した。

「きゃあああああああっ!?」

ついに暁の女神も『白馬』の直撃を受けたのだ。

　流る浪ろうの英雄オデュッセウス。

　祐ゆ理りが喝かつ破ぱしたように、彼は不死身の《鋼はがね》ではないはず。

　だが、たしかに自称どおり『不ふ撓とう不ふ屈くつ』であったのだろう。両腕を失い、左肩まで抉えぐり取られながら、尚も立ちあがろうと懸けん命めいに身を起こすのだから。

　しかし、その動きも途中で止まる。

　青せい銅どう鎧よろいの雄姿はゆっくりとうすれ、ついに透明となり、消えうせてしまった。

　死を得たのではない。彼を召喚した者の呪力も気力も尽きて、その肉体を地上につなぎとめておけなくなったのである。

　だが、これはむしろ驚くべきことかもしれない。

　息も絶え絶えではあったが、キルケーはまだかろうじて生きていたのだから。

「悪いな……。俺の勝ちってことでいいか？」

　瀕ひん死しの女神を間近で見おろしながら、護ご堂どうは言った。

　勝ち誇る気もないので、なるべくおだやかな声を出すよう意識した。

　キルケーが使っていた真しん鍮ちゆう造づくりの義体はもう原型をとどめぬほどにひしゃげ、真っ黒に焦こげつき、無惨なありさまだった。

　ただキルケー自身の肉体はいまだに白く、美しいままだった。

　地面に横たわりながら、ハァハァと息を荒らげている。その夢見るような美び貌ぼうに玉の汗を浮かべて、悶もだえ苦しんでいた。それは敗死する寸前というより、病やまいを得て世を身み罷まかる薄はつ幸こうの美少女に喩たとうべき衰すい弱じやくぶりだった。

　最さい期ごの時を迎えて、己おのれに最もふさわしい形の美を示

す。

　なんとも魔女らしい神秘と奇跡に、護堂は舌を巻いた。もしかしたら、とどめが『白馬』だったのも影響したのかもしれない。やはり、太陽の女神に対して太陽を運ぶ馬の一撃は今ひとつ効果がうすかったのかも、と。

　だが、女神が完全なる死を迎えるのに十分すぎるダメージではあったはず。

「護ご堂どう。こういうときに介かい錯しやくして差しあげるのも情けというものよ」

　うしろで見守っていたエリカが声をかけてきた。

　祐ゆ理り、リリアナ、恵え那なと共にすこし距離を置いて、戦いの決着を見守っているのだ。

　今の発言、いつものように『神を倒して力を得よ』というニュアンスではなく、戦場で生と死を追う騎士の矜きよう恃じゆえの発言に思えた。それほど神妙な顔つきだったのだ。

　その理屈、わからないでもない——。

　だがキルケーという女神、やはりアテナやランスロットのような旧きゆう敵てきたちとはちがう。また、こうなった原因の一端はイギリスの無法者にもありそうな気も……。

　護堂は女神に声をかけた。

「なあ。あんたたち神様は幽かく世りよとかいうところで隠居することもできるんだろ？　まだ息があるうちにそっちへ行ったらどうだ？」

　神と神殺しの戦いに決着をつけるなら、最も穏おん便びんそうな解決策。

　しかし、キルケーは儚はかなく、そして美しく微笑ほほえんでみせた。

「ふふ……。草くさ薙なぎさまはお甘いのですわね。神殺しの君でありながら、破った神にそのおっしゃりよう。ひとりの殿方として

は好ましくも思えますが、一箇の戦士としては先が思いやられますこと……」

　死にかけの女神に心配されて、護堂は頭をかいた。さらにキルケーは言う。

「それにお忘れですか？　わたくしはあなたさまへ挑むにあたって、魔術の誓いを立てたのです。勝利がかなわなくば我われは死す、と……」

「おぼえてるよ。でも、大霊界みたいなところに行けば、ごまかせるかもしれないだろ？」

「まあ、その際に肉体を捨て去り、純粋に霊のみの存在となれば、あるいは――。ただ、そのような真ま似ねをしてまで幽界に居を求めても、致し方ありますまい……。わたくしは女神たるの矜きよう恃じにしたがい、我わが生と死をまっとうするのみでございますわ」

　魔女の神は死に瀕ひんして、悟ったようなことを言う。

　この境地にもっと早く達してくれていたら、こんな形で向き合わずにすんだのに。

　護堂はため息をついた。戦う前は腹も立てた。祐理にしようとしたことはまだ許していない。だが、それ以外のことにはもう目をつぶる気になっていたのだ。

　まあ、こっちもこっちでだいぶ無茶やったよな、と。

「俺としては痛み分けというか、おたがいさまってことでもう十分なんだけどな……」

「さすが神殺しの君らしい破は天てん荒こうさですわ。惜おしむらくはわたくしの神としての命、半分は数年前アレクサンドル殿に奪われていること……。我が半身のみが贄にえでは、あの戯たわけた魔女もおそらく『簒さん奪だつの円えん環かん』をまわすことはかないますまい……」

「？　何を言ってるんだ？」

　キルケーの言葉がうわごとのようになってきた。

　護堂の問いかけに返事はなく、女神はおもむろに瞑めい目もくする。

「ああ、でも。草薙さまはあの剱つるぎをお持ちでいらっしゃる……。であれば、我が砕かれた体を捧ささげることにも意味はある……。聞いているのでしょう――よ。妙な斟しん酌しやくはせず、このキルケーの半身に遺のこされし命、必ず草薙さまにおつなぎして……」

　目は閉ざされていたが語りは続く。しかし、その内容は判然としない。

「黒の剱つるぎ……白き――。いずれあなたさまが手にすべき十字を成す武具……ふふ。わたくしにも視みえましてよ、草薙さま……」

「おい、大丈夫か!?」

　いよいよ最期の時かと危ぶみ、護堂は強めに声をかけた。

　するとキルケーは麗うるわしいスミレ色の目をゆっくりと開き、細く息を吐き出す。

「申し訳ございません、草薙さま……。旧知の者に声をかけておりました。わたくしの命を一度は愛した殿方の糧かてとするため、念を押しておこうと……」

「愛したやつだって？」

「もちろん、あなたさまでございますわ。草薙さま」

「いやっ。俺たち、絶対にそういう関係じゃないから！」

　最期の最期で恋に溺おぼれる少女らしさを取りもどした女神へ、護堂は声高に訴えた。

　ここで恋人ごっこをしてやれるほど粋すい人じんではないのだ、あいにくと。

「ふふふふ。その純じゆん朴ぼくさ、わたくしのような女にはなかなか可愛かわいらしく思えましてよ？」

　あわてる護堂を見て、キルケーの方こそ可愛らしく微笑ほほえむ。

　はじめからこういう面を見せる女神さまなら、こんな場面を迎えずにすんだのだが——。あらためて、護堂はため息をついた。

「ああ、最期に薄情なアレクサンドル殿への意い趣しゆ返しをいたしましょう。あの方が探していらした英雄殿。その真ま名なをお求めならば、アルゴー号の系けい譜ふにこそ着目し、探索すべきなのですわ。草薙さまにだけ、ないしょで教えて差しあげます！」

　これを伝える女神キルケーは、なんとも可か憐れんな笑顔のままであった。

　直後、彼女の体から『ぶつっ』と異音が聞こえる。自らかけた呪じゆ詛そによって、おそらく心臓がつぶれた音であった。

　次の瞬間には、キルケーの体は砂となって崩れていった。

「アルゴー号ですって？」

「勇士イアソンがひきいる英雄たちの船……金きん羊ようの毛皮を求める、あの船か？」

　女神が遺した言葉に、エリカとリリアナがささやき合う。

　一方、護堂はなんとも言えない気分を噛かみしめた。あの女神さま、アレクサンドル・ガスコインが求める謎の答えを承知していながら、あの男といっしょにいる間中、ずっと口をつぐんでいたのだ。「女は怖いなあ……」と、しみじみ思う。

　ただ口には出さない。まわりにいる女子たちの耳をはばかったのである。

　実際、ちょうど祐理がそばにやってきたところだった。

「護堂さん、おつかれさまです。なんとか、みなさんと無事に再会できましたね」

「ああ。万ま里り谷やには今回、たくさん世話になった。ありがとうな」

　おだやかな微笑でねぎらってくれる媛ひめ巫み女こへ、護堂は心から礼を言った。

　すると、意外な反応をされた。祐理は物言いたげにじっとこちらを見つめるのである。

「ま、万里谷？」

「…………」

　まだ無言。何かを求めるような視線。ここで護堂はハッとした。

　さっきまでは無む我が夢む中ちゅうで戦っていたせいか、自然に〝あの呼び方〟ができた。だが、今はいつもどおりに呼んでしまっている。彼女の要求とはつまり。

　事情を察して、護堂は「ゆ——」と言いかけた。

　だが、言い切れない。気やすく名前で呼ぶのがなんとも気恥ずかしい。口ごもっていると、彼女は切なげにうつむき、視線を下げてしまった。

　護堂はあわてて言い直そうとした。しかし、これが意外とむずかしい。

　口ごもりつつムニャムニャやっていたら、祐理はくすりと吹き出してしまった。

「当分、今までどおりで大丈夫ですよ。呼びやすいようにお呼びください」

　慈じ悲ひ深ぶかく恩情をかけられて、護堂は「万里谷……」とうなだれた。

　こんなところでまで気を遣われるとは、なんとも情けない。

「でも、いつまで待っても変えてくださらないときは、たぶん怒りますから。覚悟しておいてくださいね？」

　ごもっともな仰おおせに護堂は只ただうなずくことしかできない。そのときだった。

　不意に感じた。一瞬だけ背中に重みが加わったのを。

「護堂さん、今のは女神キルケーの——」

　祐理が目をみはっている。今、護堂の体に何が宿ったのか視えたのだろう。

「力……みたいなものが入ったみたいだ。ただ、俺の新しい権能に……なるのかな？」

「と、おっしゃいますと？」

「あの女神さま、半分くらい死にかけていて、完かん璧ぺきな状態じゃなかっただろ。そういうのって、どうなるんだろうな？」

　首をかしげつつも、護堂は言うほど気にはしていなかった。

　平和主義者としては、妙な力がこれ以上増えても使いどころに困るのである。権能が増えないのなら、それも気楽でいい。

　そういえば、ランスロットを倒してから結構経たっている。

　権能の増える気配がまったくしないのはなぜだろう？　首をかしげたときだった。

　エリカ、リリアナ、恵那。ほかの三人もこちらへやってきた。護堂と祐理を見つつ、妙な話題で盛りあがりながら。

「ほんとだ。ふたりだけで独特の雰ふん囲い気きっていうのかな。たしかに、何かできあがってる感じがする。エリカさんの言うとおり、やっぱり確認した方がいいみたい」

　何かを心配する顔になりながら、恵那が言った。

　これに憂うれえるような口調で答えるのはリリアナだった。

「いっしょに漂流した相手が万里谷祐理だったから、割と楽観していたんだが……。やはり何日もふたりきりで、しかも吊つり橋効果まで加わっていた状況、見すごすわけにはいかないようだな……」

「言ったでしょう、祐理は意外と流されやすい子だって。それに意外と激情家でもあるわ。わたしたち全員の現在位置を相互確認する

うえで、審しん問もん会は避けて通れないイベントよ」

「し、審問会？」

　エリカが物騒なイベント名を口にしたので、護堂は眉まゆをひそめた。

　話を聞いて、祐理もあたふたしつつ口をはさむ。

「あ、あの！　みなさんのお話を聞いた感じですと、私と――護堂さんの間で何か問題が生じているように聞こえるのですが⁉」

「いや、万里谷祐理。問題かどうかを判断するのはあなたじゃない。わたしたちだ」

「ふたりきりだった間、どういうことがあったのか、起きたのかを細さい大だいもらさず報告して欲しいのよ。その情報をもとにみんなで審問するわ」

　リリアナが厳げん粛しゆくな面おも持もちで告げれば、珍しくエリカも優雅さのすくない口調で言う。

　さらに恵那まで、しみじみと夜空を見あげつつ言った。

「この間、誰の家に王様を呼ぼうかって話してるときは、祐理のひとり勝ちになるなんて思ってなかったよ……。こういうのが無欲の勝利なんだねえ」

「え、恵那さんっ。せっかく無事に再会できたんですから、勝ちとか負けとか変なことをおっしゃらないでください！」

「そ、そのとおりだぞ。大体、『何かあった』前提で話しするの、おかしいだろ⁉」

「黙りなさい、護堂。こういうときのあなたって、たしかに去勢された馬並みに無害な存在だわ。まあ、基本的にはね」

　エリカは言った。反逆者を糾きゆう弾だんする女王のごとき威い厳げんと冷徹さであった。

「でも、ときどき予想外の爆発力を見せるでしょう？　今回も基本どおりだったのか、例外ケースだったのかを確認したいの。おとな

しく審問を受けなさい」

　ついに五人の仲間が再集結し、無事に再会できた夜。

　空には満天の星々。この小さな孤島はエメラルドブルーの南洋でかこまれている。なんとも開放的でドラマチックなロケーション。そして、逃げ場はどこにもない。

　冷静に考えると、やましいことは何もなかったように思える。

　だが、ふたりきりだった二日間のことを訊かれるのはまずい気がして、なぜかあたふたとする護堂と祐理であった――。

終章

　新たな年がはじまって間もない頃。

　アレクサンドル・ガスコインはポルトガルの古都コインブラにいた。

　このところ取り組んでいた探たん索さく、『ある異端の修道士がマダガスカル島の各地で行った邪じや悪あくかつ涜とく神しん的てきな布教活動。その詳細を記しるした大航海時代の宣教日誌』入手のためだった。

　いくつかの事案を考えながら、閑かん静せいな古都の夜道を歩く。

　このとき携帯に電話がかかってきた。液晶を見れば旧知の——そして、一ひと月つきほど前にも顔を合わせた魔女からだった。

「今度はわざわざ電話か、ルクレチア。それだけでろくでもない話だと察しはつく。手短に用件を言ってくれ」

『ふふふ。ごあいさつだな、王子殿』

　アレクの言葉に答えるのは、ルクレチア・ゾラの声だった。

『だが、そう言われては世間話もしにくい。いきなり本題に入らせてもらおうか。実は例の件を気にした姫が極東方面から新たな情報を仕入れてきてな』

　例の件。『最後の王』がらみのことか。アレクはうなずいた。

『数年前、王子殿と只ならぬ仲であったという女神キルケーが草くさ薙なぎ護ご堂どうの手で討うたれた。女神は最さい期ごの力で英雄オデュッセウスを顕けん現げんさせ、あの少年を追いつめたそう

だが……一歩およばず、ついに死を得たという』

「……ほう」

「この戦いで、オデュッセウスは『最後の王』にあらずと明らかになったそうだ」

　数年前の記憶がアレクの脳内でまざまざとよみがえる。

　オデュッセウス。つい先日、『三五％の確率を持つ』と言った英雄神。

　彼をくわしく調べようとしていた頃、アレクは〝眠れる女神〟を発見したのだ。

　流浪の英雄を一年も捕らえた魔女の神キルケー。もう数百年も休眠していたらしい『まつろわぬ神』を。

「察するに、黒王子殿は英雄オデュッセウスの真実を見きわめるため、キルケーを甦よみがえらせたのではないか？　彼の情報を聞き出すために。ふふ、案外『俺といっしょにオデュッセウスを見つけ出さないか？』くらいの申し出をしていても不思議ではなさそうだな」

　見てきたように真実を当てられて、アレクは眉まゆをひそめた。

　わざわざ南シナ海に運んで復活させたのは、もちろん探索の一環だった。

　かつて『最後の王』の足跡を見み出いだした土地で、オデュッセウスと縁深い女神を甦らせる。魔王殲せん滅めつの英雄が何者かを解きあかす旅も新たな局面に移るのではと——。

　しかし、この〝実験〟は予想外の結果となった。

　甦った女神は、隠れていたアレクをめざとく見つけたのだ。しかも、なぜかうるさくつきまとい、あげく妄もう想そう気質の乙女おとめめいた妄もう言げんを吐きながら、アレクを軟なん禁きんしようと魔術まで使いはじめて……。

　はじめは適当にあしらっていたアレクだが、すぐに音ねを上げた。

たしか四日間も『愛している』と言いながら手足をもごうとする女神から全力で逃げまわったのだったか。逃走はやがて闘争に推移し、最後はキルケーといっしょに『造った』島で迷宮の権能を使い、彼女を幽ゆう閉へいして事なきを得た——。

苦い記憶を噛かみしめて、アレクは自然と仏ぶつ頂ちよう面づらになった。

『浮いた話のひとつも聞かない王子殿に、こんな色っぽい武ぶ勇ゆう伝でんがあったとはな』

「そうか？　どのあたりに色つやがあるのか、俺には見当もつかないのだが」

『……そこでそういう返しが出るか。さすが王子殿だ。その方面ではあいかわらず、イタリアの小学生男子の方が優秀そうだな……』

魔女のコメントに皮肉の棘とげはなく、むしろ慨がい嘆たん風ふうだった。

アレクは舌打ちし、不機嫌に話題を変えた。

「それより、オデュッセウスは『最後の王』ではなかったか。だとしたら……」

『ほう。何か思いついたのなら、情報料代わりにご教示願えるとありがたい。知ってのとおり、私も一度はかの王の探索に従事した身だ。なかなかに興味深いからな』

「なに、たいした思いつきじゃない」

ルクレチアに請こわれて、アレクは肩をすくめた。

「各地を流浪し、時に弓ゆみ箭やで武勇を示す汎はんユーラシア的な英雄像……。しかし、その典型といえるオデュッセウスは決して《鋼はがね》の特徴を持つ神格ではない。だが、だとしたら、こういう可能性も成り立ちそうだと思っただけだ」

実は以前より疑っていた可能性のひとつを、アレクはさらりと口にした。

「汎ユーラシア的英雄の《流浪》という属性と《鋼》の属性を併あ

わせもつ——そうした混淆種ハイブリッドこそが『最後の王』ではないかとな」

『なるほど、純血種の逆ということか。だとしたら……』

「ああ。英雄オデュッセウスの系譜——その前か後、どちらかを丹念にたどっていけば、いずれ『最後の王』にぶつかる可能性はすくなくない。俺はそう考える」

　これはもちろん、只の推論であった。

　だが口に出してみて、思っていた以上の説得力を感じるアレクだった。


ありがとう
ございました!!
しこる

著者紹介

丈月　城（たけづき　じょう）

埼玉県出身。

２００８年スーパーダッシュ文庫「カンピオーネ！」にてデビュー。

同作は好評を博し、シリーズ化され代表作となっている。

シコルスキー

ライトノベルの挿絵を中心に活動中のイラストレーター。

集英社ｅスーパーダッシュ文庫

カンピオーネ！

XIII 南洋の姫神

著者　丈月　城

２０１２年12月12日発行

この電子書籍は、集英社スーパーダッシュ文庫「カンピオーネ！

XIII 南洋の姫神」

２０１２年９月24日発行の第２刷を底本としています。

発行者　鈴木晴彦

発行所　株式会社　集英社

東京都千代田区一ツ橋２丁目５番10号
〒１０１－８０５０
［電話］
０３－３２３０－６０９５（編集部）
０３－３２３０－６３９３（販売部）
０３－３２３０－６０８０（読者係）
制作所　有限会社ワイズネット